

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第39集

天崎遺跡

—四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う発掘調査報告書—

1999.3

(財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター

天崎遺跡

1993

(財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター



天崎遺跡全景



天崎遺跡全景



銅矛出土状況



銅矛出土状況



天崎遺跡出土銅矛（左から1号、2号、3号、4号）

序

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、伊野町と須崎市を結ぶ四国横断自動車道路の建設工事に伴い、平成7年度より日本道路公団の委託を受けて、事前の発掘調査に取りかかり、現在も居徳等において調査が行われております。これまでに、八田神母谷、居徳遺跡などで貴重な発見が相次いでおります。

平成9年度より調査の始まった天崎遺跡でも仁淀川に沿った地域の歴史を明らかにするうえで貴重な成果をあげることができました。

本調査では、地域の歴史を明らかにするうえで貴重な遺物の発見がありました。中でも重要な資料として、中世の水路跡の埋土の中から埋納状態で発見された銅矛4本があります。

本県は銅矛、銅剣などが多く出土するところではありますが、これまでには神社などの伝世品や、工事中などに偶然発見されることが多く、発掘調査中に、埋納された当時のままの状態で発見されたのは大変珍しいケースです。しかも弥生時代に埋納されたものが再び、中世に再埋納されたと推測されることから、天崎近辺がそのような一種宗教的な行事の行われる地域の核となるようなところであったのではないかとも思われます。

四国横断自動車道(伊野～須崎)計画地の沿線では、まだいくつかの遺跡が調査中であります。これら、一連の調査を通して高知県の歴史が豊に復元されることと思います。また本書が斯学の向上と埋蔵文化財への一層の理解を深めて頂ける一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査を実施するにあたり、ご援助ご協力を頂いた関係者の皆様及び地元の方々に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

所長 古谷碩志

例　言

1.本書は、高知県埋蔵文化財センターが平成9年度に実施した四国横断自動車道建設に伴う天崎遺

跡の発掘調査報告書である。

2.天崎遺跡は、高知県土佐市高岡乙に所在する。

3.発掘調査は、道路公団の委託を高知県教育委員会が受け、調査は高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。天崎遺跡の試掘調査は、平成8年2月19日から3月18日まで実施した。本調査は平成9年5月26日から平成10年3月26日まで実施した。出土遺物の整理作業及び報告書作成の業務は平成11年3月31日まで行った。

4.調査面積

(1) 調査対象面積 8,000m²

(2) 調査面積 3,435m²

5.調査体制

(1) 調査員

山本哲也（高知県埋蔵文化財センター　　調査第1班班長）

田坂京子（同　　専門調査員）

山本雄介（同　　主任調査員）

下村　裕（同　　調査員）

曾我貴行（同　　調査員）

松村信博（同　　主任調査員）

久家隆芳（同　　調査員）

(2) 各調査区担当

主に、試掘を久家隆芳が、1・2・3区を田坂、下村、山本雄介、曾我貴行が、4区と5区拡張区を松村信博が、5区を山本哲也、山本雄介が担当した。測量については1・2・3区は、大野加代子、佐竹寛の、4区は山本純代、出原恵三、江戸秀輝の協力を得た。

(3) 総務担当

吉岡利一、大原裕幸（高知県埋蔵文化財センター　主幹）

6.本書の編集は、松村が行い執筆については以下のように分担した。

第Ⅰ章　遺跡周辺の地理的・歴史的環境（山本雄介）

第Ⅱ章　試掘調査（久家隆芳）

第Ⅲ章　調査に至る経緯と経過（山本哲也）

第Ⅳ章　調査の成果

1・2・3区（田坂、下村、山本哲也） 4区と5区拡張区（松村） 5区（山本雄介）

第Ⅴ章　考察（山本哲也、下村、田坂）

7. 発掘現場作業員は下記の方々である。天候不順、足場の悪さなどを厭わず、作業に従事してくれた皆様に対して記して敬意を表したい。

測量補助員 岩原明美

作業員 松岡克明、坂本義晴、田村志津、桜木百合子、北岡久子、吉良松美、浜田禎一郎、岡林千代亜、石元美代子、国沢英子、松本明美、国沢数代、近沢洋子、岡田晃、藤岡京子、中村巍、西村里津子、中岡きよ、国沢節子、尾崎定富、尾崎定子、杉本直介、徳平真也、森沢健次郎、田代勝、楠瀬正人、光内幸

8. 重機による表土剥ぎ、排土運搬、埋め戻しについては国沢工業の藤原利行、国沢清二、土居修、国沢智の便宜助力を得た。

9. 遺物整理、報告書作成作業は下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

小松経子、中西純子、尾崎富貴、山本由里、宮本幸子、矢野雅、岩貞泰代、高橋千代、川久保香、岩本寿美子、松木富子、山本純代、大原喜子

10. 発掘調査の実施にあたっては、日本道路公団高松建設局高知工事事務所、土佐市教育委員会、地元関係者の皆様の全面的な協力を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

11. 本報告書を作成するにあたって下記の方々の御教示と協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

岡本桂典（高知県立歴史民俗資料館）林広裕（国分寺長老・前住職）橋本久和（高槻市埋蔵文化財センター）嶋谷和彦（堺市埋蔵文化財センター）宇治田和生（枚方市文化財研究会）肥塚隆保（奈良国立文化財研究所）並びに（財）高知県埋蔵文化財センターの森田尚宏、出原恵三、廣田佳久、松田直則、前田光雄、吉成承三、池澤俊幸、筒井三菜、浜田恵子はじめ諸学兄（敬称略）

12. 遺構、遺物の測量及び写真撮影は各調査員が行ったが、銅矛出土時のデジタル写真はアジア航空測量株式会社に委託した。1・2区終了時の測量基準点設置及び航空写真撮影は、アジア航空測量株式会社に、4区終了時の産業用ヘリコプターを使用した空中写真撮影は（株）アイシーに委託した。さらに出土遺物の中で銅矛の保存処理は京都科学株式会社に、木製品の保存処理は東都文化財研究所に委託した。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	山本哲也
第1節 調査の経緯	
第2節 調査の経過	
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	山本雄介
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第Ⅲ章 試掘調査	久家隆芳
第1節 調査の概要	
第2節 出土遺物	
第Ⅳ章 調査の成果	
第1節 1・2区の成果	
(1) 調査の方法	田坂京子
(2) 基本層序	"
(3) 遺構と遺物	
1.SK1・銅矛の出土状況	山本哲也
2.SD1・2・3	田坂京子
3.SD4・5・6	"
4.SD7	"
5. 包含層	"
第2節 3区の成果	下村 裕
(1) 3区の概要	
(2) 検出遺構	
(3) 出土遺物	
第3節 4区の成果	松村信博
(1) 調査の経過と試掘調査の概要	
(2) 調査の方法	
(3) 4区本発掘調査の成果	
1.4-1区・4-2区	
2.4-3区	
3.4-4区	
第4節 5区の成果	山本雄介
(1) 調査の方法	
(2) 基本層序	
1.5-1区	
2.5-2区	
(3) 遺構と遺物	
1.5-1区	
2.5-2区	
第5節 5-2区SR下層及び5-1区拡張区の成果	松村信博
(1) 5-2区SR下層	
(2) 5-1区拡張区	
第Ⅴ章 小結	
第1節 1・2・3区	田坂・下村
第2節 4・5区	松村・山本雄介
第Ⅵ章 考察	
第1節 天崎遺跡出土銅矛とその意義	山本哲也
第2節 天崎遺跡1・2・3区出土の土師器について	下村 裕
第3節 天崎遺跡1・2区出土遺物(土師器以外)	田坂京子
付編 高知県天崎遺跡から出土した木製品の樹種	

挿図目次

Fig.1 天崎遺跡位置図	1
Fig.2 天崎遺跡調査区位置図	2
Fig.3 周辺の遺跡分布図	5
Fig.4 試掘トレンチ位置図	8
Fig.5 試掘調査(平成8年度出土遺物(S=1/4)	9
Fig.6 1・2区基本層序	12
Fig.7 SK-1位置図	16
Fig.8 銅矛出土状況	17
Fig.9 SK-1 SD-4土層断面図	18
Fig.10 銅矛実測図(1)	19
Fig.11 銅矛実測図(2)	20
Fig.12 高知県下出土銅矛と天崎遺跡出土銅矛計測表	21
Fig.13 1区SD1・2・3平面・エレベーション図(S=1/40)	22
Fig.14 1・2区SD4・5・6平面・セクション図(S=1/240)	23
Fig.15 2区SD4・5杭列ポイント図	25
Fig.16 1区SD4・5・6流木出土状況平面図(東端(上)西端(下))	26
Fig.17 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器)	27
Fig.18 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器)	28
Fig.19 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器)	29
Fig.20 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器)	30
Fig.21 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器)	31
Fig.22 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器・弥生土器)	32
Fig.23 1・2区SD4・5・6出土遺物(須恵器・黒色土器・緑釉陶器)	33
Fig.24 1・2区SD4・5・6出土遺物(瓦器)	34
Fig.25 1・2区SD4・5・6出土遺物(瓦器・貿易陶磁器)	35
Fig.26 1・2区SD4・5・6出土遺物(東播系須恵器・備前・石器・土錐)	36
Fig.27 1・2区SD4・5・6出土遺物(木製品)	37
Fig.28 1・2区SD4・5・6出土遺物(木製品)	38
Fig.29 SD7出土遺物(土師器・青磁)	39
Fig.30 SD7配置図	39
Fig.31 遺構外出土遺物(土師器)	41
Fig.32 遺構外出土遺物(須恵器・瓦器・緑釉陶器・貿易陶磁器・東播系須恵器・備前)	42
Fig.33 遺構外出土遺物(瓦質土器・陶器・煙管・石器・木製品)	43
Fig.34 3区検出遺構平面図	57
Fig.35 3区基本層序	58
Fig.36 3区遺構外出土遺物	59
Fig.37 4区試掘トレンチ位置図及びグリッド図	60
Fig.38 4区試掘調査出土遺物(S=1/4)	61
Fig.39 4-12区全体図(S=1/250)	63

Fig.404-区東壁・北壁セクション(S=1/80).....	64
Fig.414-区南端セクション(S=1/80).....	65
Fig.424-12区出土遺物(S=1/4).....	65
Fig.434-区SD-1平面・エレベーション図(S=1/40).....	67
Fig.444-区SX-1平面・エレベーション図(S=1/30).....	67
Fig.454-区遺構平面全体図.....	69
Fig.464-区北壁・南壁セクション(S=1/80).....	70
Fig.474-区SK-1 SX-2遺構平面図・セクション図(S=1/40)出土遺物(S=1/4).....	71
Fig.484-区西端遺構配置図及びVI層遺物集中地点(S=1/80).....	72
Fig.49ST-遺構平面図・セクション図(S=1/40)出土遺物(石器S=1/3、土器S=1/4).....	73
Fig.504-区包含層(II・III層及びIV・V層)出土遺物(S=1/4).....	75
Fig.514-区包含層(VI層)出土遺物(S=1/4).....	76
Fig.524-区西壁セクション(S=1/80).....	77
Fig.534-区1面目遺構平面及びエレベーション図(S=1/100).....	78
Fig.544-区2面目遺構平面及びエレベーション図(S=1/100).....	79
Fig.554-区出土遺物(S=1/4).....	80
Fig.565-区調査区位置図.....	83
Fig.575-区西壁セクション(S=1/80).....	84
Fig.585-区北壁セクション(S=1/80).....	85
Fig.595-区SD-1東壁セクション(S=1/40).....	86
Fig.605-区及び5-区拡張区調査区全体図及び遺構平面図(S=1/200).....	87
Fig.615-区SD-1木製品出土状況(S=1/40).....	88
Fig.625-区包含層(II層出土遺物(1)(S=1/4).....	90
Fig.635-区包含層(II層出土遺物(2)(S=1/4).....	91
Fig.645-区包含層(III・IV層出土遺物(1)(S=1/4).....	92
Fig.655-区包含層(III・IV層出土遺物(2)(S=1/4).....	93
Fig.665-区包含層出土遺物(S=1/4).....	94
Fig.675-区調査区及びSR-1平面・エレベーション図(S=1/100).....	95
Fig.685-区SR-1出土遺物(S=1/4).....	96
Fig.695-区SR-1木製品出土状況平面図・エレベーション図(S=1/30)及び出土遺物(S=1/4).....	101
Fig.705-区SR-1木製品(1)(S=1/6).....	102
Fig.715-区SR-1木製品(2)(S=1/6).....	103
Fig.725-区東拡張区SF-遺物出土状況(S=1/30)及び出土遺物(S=1/4).....	105
Fig.735-区東拡張区包含層出土遺物(S=1/4).....	106
Fig.745-区西拡張区包含層出土遺物(S=1/4).....	106
Fig.75仁淀川流域の青銅器出土地・弥生集落.....	115

表 目 次

Tab.1	周辺の遺跡地名表	4
Tab.2	試掘トレンチの概要	7
Tab.3	1・2区 SD45・6・7出土遺物観察表(1)土師器	44
Tab.4	1・2区 SD45・6・7出土遺物観察表(2)土師器	45
Tab.5	1・2区 SD45・6・7出土遺物観察表(3)土師器	46
Tab.6	1・2区 SD45・6・7出土遺物観察表(4)土師器	47
Tab.7	1・2区 SD45・6・7出土遺物観察表(5)土師器	48
Tab.8	1・2区 SD45・6出土遺物観察表(6)須恵器・黒色土器・緑釉	49
Tab.9	1・2区 SD45・6出土遺物観察表(7)瓦器	50
Tab.10	1・2区 SD45・6出土遺物観察表(8)瓦器・東播系須恵器・土錐	51
Tab.11	1・2区 SD45・6出土遺物観察表(9)貿易陶磁器	52
Tab.12	1・2区 遺構外出土遺物観察表(1)土師器	53
Tab.13	1・2区 遺構外出土遺物観察表(2)貿易陶磁器	54
Tab.14	1・2区 遺構外出土遺物観察表(3)須恵器・瓦器・その他	55
Tab.15	1・2区 出土遺物観察表(石器)	56
Tab.16	1・2区 出土遺物観察表(木製品)	56
Tab.17	4区ピット計測表	72
Tab.18	4区出土遺物観察表(1)	81
Tab.19	4区出土遺物観察表(2)	82
Tab.20	5-区 II層出土遺物観察表(1)	97
Tab.21	5-区 II層出土遺物観察表(2)	98
Tab.22	5-区 III～IV層出土遺物観察表	99
Tab.23	5-区 IX～X層出土遺物観察表	100
Tab.24	5-区下層及び5-区拡張区出土遺物観察表(1)	101
Tab.25	5-区下層及び5-区拡張区出土遺物観察表(2)	108
Tab.26	高知県の瓦器出土遺跡(1)(2)	129
Tab.27	天崎出土土器消長表	135

図版目次

- P L .1 1・2・3区調査前全景(南東から)、同上(北東から)
- P L .2 1区西壁セクション、同上
- P L .3 1区流木出土状況、同上
- P L .4 1区SD1・2・3検出状況、1区SD1・2・3完掘状況
- P L .5 1区SD4・5・6検出状況、1区SD4・5・6完掘状況
- P L .6 2区SD4・5・6検出状況、2区SD4・5・6完掘状況
- P L .7 3区SR1・2・3検出状況、3区SR1・2・3完掘状況
- P L .8 2区銅矛出土状況、同上
- P L .9 2区銅矛取上げ風景、同上
- P L .10 1区流木出土状況、2区矢板出土状況
- P L .11 1区杭列出土状況、2区杭列出土状況
- P L .12 1・2区遺物出土状況(土師器・木製品)
- P L .13 1・2区遺物出土状況(須恵器・瓦器)
- P L .14 1・2区遺物出土状況(木製品・白磁・須恵器)
- P L .15 4区調査前風景、4区調査終了時天崎遺跡遠景
- P L .16 4-1・2区完掘状況(西から)、4-1・2区完掘状況(東から)
- P L .17 4-2区遺構完掘状況、4-2区SX-1 磁・小杭検出状況
- P L .18 4-3区遺構完掘状況、4-3区北壁セクション
- P L .19 4-3区ST-1、4-3区ST-1及び南壁セクション
- P L .20 4-4区遺構面(1面目)完掘状況(北から)、4-4区畝状遺構
- P L .21 4-4区遺構面(2面目)完掘状況(北から)、4-4区遺構完掘状況(南から)
- P L .22 4区調査風景
- P L .23 4区・5区遺物出土状況
- P L .24 5-1区調査前全景(西から)、5-2区調査前全景(南から)
- P L .25 5-1区遺物出土状況、同上
- P L .26 5-1区SD1木製品出土状況、作業風景
- P L .27 5-2区遺物出土状況、同上
- P L .28 5-1区東壁セクション検出状況、5-2区北壁セクション検出状況
- P L .29 5-1区完掘状況(西から)、5-2区包含層完掘状況(南から)
- P L .30 5-2区・SR-1木製品出土状況、同上
- P L .31 5-1区東拡張区SF-1遺物出土状況、同上
- P L .32 1号銅矛、2号銅矛
- P L .33 3号銅矛、4号銅矛
- P L .34 銅矛レントゲン写真(1号銅矛)
- P L .35 銅矛レントゲン写真(2号銅矛)
- P L .36 銅矛レントゲン写真(3号銅矛)
- P L .37 銅矛レントゲン写真(4号銅矛)
- P L .38 1・2区出土遺物(土師器)、同上
- P L .39 1・2区出土遺物(土師器)

- P L .40 1・2区出土遺物(土師器)
- P L .41 1・2区出土遺物(土師器)
- P L .42 1・2区出土遺物(須恵器椀)外面、同上 内面
- P L .43 1・2区出土遺物(瓦器椀)外面、同上 内面
- P L .44 1・2区出土遺物(白磁)外面、同上 内面
- P L .45 1・2区出土遺物(青磁)外面、同上 内面
- P L .46 1・2区遺構外出土遺物(須恵器・瓦器・貿易陶磁器・瓦質土器・備前擂鉢)外面、同上
- P L .47 1・2区出土遺物(備前壺・東播系捏ね鉢)
- P L .48 1・2区出土遺物(須恵器・瓦器)
- P L .49 1・2区出土遺物(瓦器・貿易陶磁器)及び試掘調査出土遺物(3・7・8・11・13)
- P L .50 1・2区出土遺物(綠釉・石器・土錘・木製卒塔婆梵字)
- P L .51 4区出土遺物(1)
- P L .52 4区出土遺物(2)
- P L .53 4区出土遺物(3)
- P L .54 5-1拡張区及び5-2区SR1出土遺物
- P L .55 5-1東拡張区SF1出土遺物(高杯)
- P L .56 5-1東拡張区SF1出土遺物
- P L .57 5区出土遺物(1)
- P L .58 5区出土遺物(2)
- P L .59 5区出土遺物(3)
- P L .60 1・2区出土遺物(木製品)
- P L .61 5区出土遺物(木製品)

第一章 調査に至る経過

第1節 調査の経緯

四国横断自動車道・伊野～須崎間（延長23.7km・平成7年11月着工、同14年度完成予定・総事業費約1,000億円）建設計画に伴い、高知県教育委員会（文化財保護室）においては道路公団四国支社高知工事事務所と協議を進め、平成4～6年度にかけて工事計画区域の現地踏査を行うとともに、遺跡の立地に適し所在の可能性が濃厚な場所の選定作業を行なった。その結果仁淀川右岸の工事対象範囲の中では、今回の調査対象地である天崎遺跡を始め人麻呂様城跡・居徳遺跡群などが選定され、事前の試掘調査対象地となった。

天崎遺跡については、現地の表面踏査の段階では明確な遺物の散布は確認されなかつたが、中世城跡である人麻呂様城跡の北側丘陵裾に隣接した仁淀川右岸の開析地であることや、対岸の仁淀川左岸では獅子ヶ鼻遺跡・天神溝田遺跡などの弥生時代青銅器出土地が知見されていることなどから、低湿地遺跡等の所在が予見される場所であった。

道路公団との協議を経て高知県教育委員会の調査依頼を受け、平成8年度に埋蔵文化財センターが公団から発掘調査事業を受託し、試掘調査を行うことになった。

第2節 調査の経過

試掘調査は、平成9年2月19～3月18日の間に実施され（376m²）。その結果、15ヶ所のトレンチ調査のうち9ヶ所のトレンチで弥生・古代・中世～近世の遺物が確認され、溝状の遺構が検出されたことから、8,000m²の範囲内について本発掘調査が必要であると判断された。

本発掘調査は、平成9年5月26日から着手し、平成10年3月26日まで実施した。なお、調査の工程上、着手可能な調査区から順番に調査を実施したため、調査対象範囲を地形に即して5つの小区を設定、東から西へ1区～5区と呼称する。各区の位置はFig.2の通りである。



Fig.1 天崎遺跡位置図

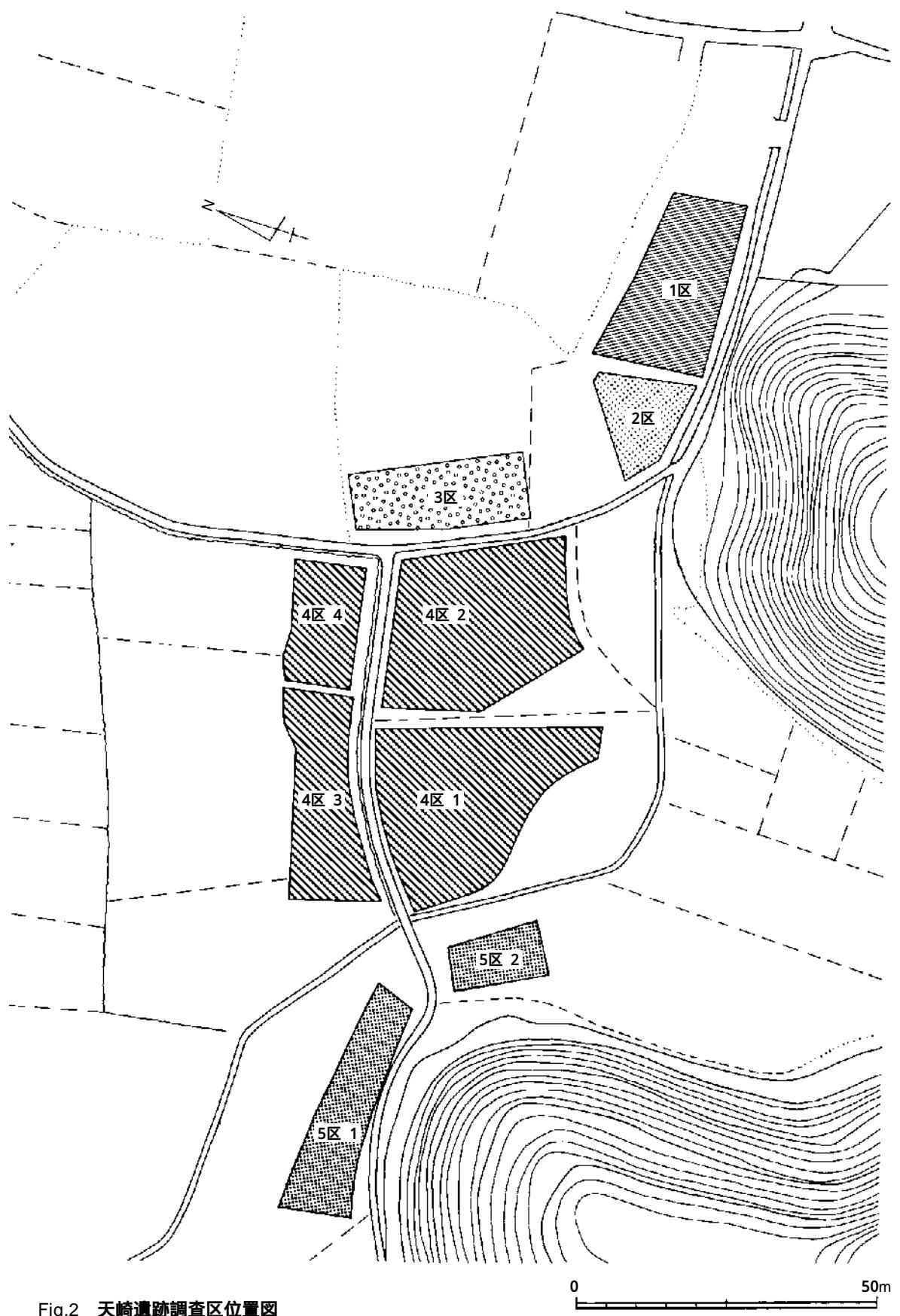


Fig.2 天崎遺跡調査区位置図

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

天崎遺跡は、高知県土佐市高岡町乙に所在する。所在する土佐市は、高知県のほぼ中央、仁淀川下流右岸に位置する。東は、仁淀川を隔てて吾川郡春野町、北から東にかけて同郡伊野町、高岡郡日高村、佐川町、西南から南は須崎市に接し、東南隅は土佐湾に臨む。その土佐市のなかに、仁淀川とその支流波介川の形成する扇状地性低地の高岡平野がある。その平野には、農村地帯が広がり東西に国道56号が貫通しているが、その国道沿いの東部に市街地を形成する高岡町がある。

高岡町は、もともと長宗我部氏支配下の時代に生まれた所であるが、近世になって、野中兼山の開発事業が行われ、承応3年（1654）から、仁淀川に堰を設け、水を鎌田井筋（井溝）に導き、仁淀川右岸に500町の米麦二毛作田が成立した。同時に、用水路及び集落を守るための堤防も設けられ、高岡町吹越（ふくごえ）から延々4km中島村突端にまで及ぶ、画期的な灌漑施設等により、長年の水不足の解消と、水害を防ぎながら、商品経済の拠点として、繁栄したところである。特に水害は大変なもので、中でも寛文6年（1666）の仁淀川の洪水は破壊的であった。仁淀川沿いの集落では、この洪水を機に集落が山麗裾に移転し、更にその他の諸事情等も重なり、社会は変貌したことである。その後、近世末まで洪水や氾濫滞水は、克服されることなく高岡町の人々を苦しめ続けたという経緯がある。

その高岡町の北東端、仁淀川右岸、南北に形成される、標高8～10mの自然堤防沿いに、天崎遺跡はある。天崎（小字）という地域は、承和8年（841年）に吾川郡から分離独立した、「和名妙」所載の高岡郡4郷のうちの高岡郷（高岡村）18小村の一つである。位置は、北緯33度31分11秒、東経133度25分53秒である。

地形的には、現在では、天崎の東側にある仁淀川（一級河川）の自然堤防が、標高16mまで整備されている。この堤防は、仁淀川の流れが直接つき当るところで、決壊すれば高岡町全体が大きな被害を受けるということで、近年の度重なる長期の改修工事によってようやく完成されたものである。しかし、過去には幾度となく、満ち潮時の大雨による仁淀川の増水逆流氾濫があったり、また、西南北向の丘陵に囲まれた立地条件も重なり、その土砂により埋積谷となつたところである。全体的には、砂壤土で高燥であるが、仁淀川の伏流水や西側の谷の奥の湧水地から、流れ出る水によって滞水し、水掛けの悪い低湿地な部分も比較的形成されている。現在では、表土の標高は約10mで、遺跡周辺には、ビニルハウスや畑、水田が広がっており、集落はその北側の丘陵地の部分に建てられている。

気候的には、年平均気温16.6度、年間降水量2,600ミリを越す。温暖で、比較的降水量の多い地域である。特に降水量は、梅雨期と台風期にかけて多く集中する傾向にある。この様な南海式の温暖性地域での植生は、常緑広葉樹林又は、照葉樹林とよばれる林を構成するシイ・カシ・タブ類などが、優先種になっている傾向が強い。

第2節 歴史的環境

天崎遺跡の所在する土佐市高岡町は、仁淀川下流右岸の沖積平野にある。土佐湾にそそぐ土佐第1の河川流域には、今までに確認された遺跡が多くあり、特に下流域の両岸に集中している。しかし多いとはいっても、縄文遺跡の発見数は少ない。その中で右岸の方に、土佐市戸波徳安遺跡や居徳遺跡群がある。この徳安遺跡では、縄文時代草創期の尖頭器が発見されている。他にも土佐市周辺には、若干の縄文遺跡はあるものの、丁度、この時代に起きた海進・海退現象、更には九州の火山の大爆発等で、土佐市高岡平野においては、その当時縄文人が住める環境化ではなかったと推測されており遺構の発見は乏しいとされる。

弥生時代にもなると、北九州から稻作技術が伝わり、土佐の各地で水稻栽培が行われるようになり、より安定した生活が営まれるようになった。仁淀川流域にも、稻作が行われていた遺跡が数カ所あるが、その中で特に注目したいのが、仁淀川左岸の遺跡から分村してきたとされている野田遺跡である。道路工事の際に、弥生前期末の大篠式土器が出土している。ここは自然堤防上に集落があり、周辺の湧水を利用して、稻作を行っていたらしい。しかし、当時の激しい洪水により、野田遺跡は壊滅し、北部自然堤防上の吹越に移り住んだとされる。工事の際に、吹越からは中期中葉の石皿が出土している。又、仁淀川河口などが一望できる用石甫木山遺跡では、中期末の高地性集落遺跡が確認されている。波介万法寺遺跡からは、弥生後期の銅矛2本（中広型銅矛Ⅱ型と広型銅矛Ⅰ型）が出土している。その近くには、同時期の縄文・弥生の集落跡である倉岡遺跡がある。仁淀川左岸にも弥生時代の遺跡として、銅矛が出土した春野町西畠フケ遺跡、伊野町天神溝田遺跡からは、中細銅剣・中広形銅矛と後期末のヒビノキⅡ式土器が数多く出土している。同町八田岩瀧ノ鼻遺跡からは、中期の細形銅剣が出土、古墳時代にはなるが、鉄斧と馬場末式甕型土器、近くの新田から丸木舟と須恵器が出土している。以上のように、仁淀川下流域には銅剣や銅矛の埋納遺跡が多くあるので、これらを祭器とした共同体に、当地の人々が属していたのではないかと推測されている。

Tab.1 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	天崎遺跡	古墳～中世	11	八田城跡	中世	21	古市遺跡	中世
2	八幡光本遺跡	古代	12	新田遺跡	古墳	22	八幡宮西ノ城跡	中世
3	御太子宮遺跡	中世	13	観音ノ鼻遺跡	古墳	23	奥谷遺跡	弥生
4	人麻呂様城跡	中世	14	観音ノ平遺跡	古墳	24	光永・岡ノ下遺跡	古墳～中世
5	八幡遺跡	古墳	15	岩滝ノ鼻遺跡B	古墳	25	犬ノ場窯跡	古代
6	曾我山城跡	中世	16	岩滝ノ鼻遺跡A	弥生	26	明官寺遺跡	古墳
7	清滝愛宕山遺跡	弥生	17	八田神母谷遺跡	縄文～近世	27	天神三島遺跡	弥生～中世
8	東灘冲屋敷遺跡	古墳・中世	18	八田栎谷遺跡	弥生～近世	28	天神遺跡	弥生・中世
9	居徳遺跡群	縄文～中世	19	八田奈呂遺跡	弥生～近世	29	林口遺跡	縄文～中世
10	野田遺跡	縄文～近世	20	巖島遺跡	古代～中世	30	林口城跡	中世

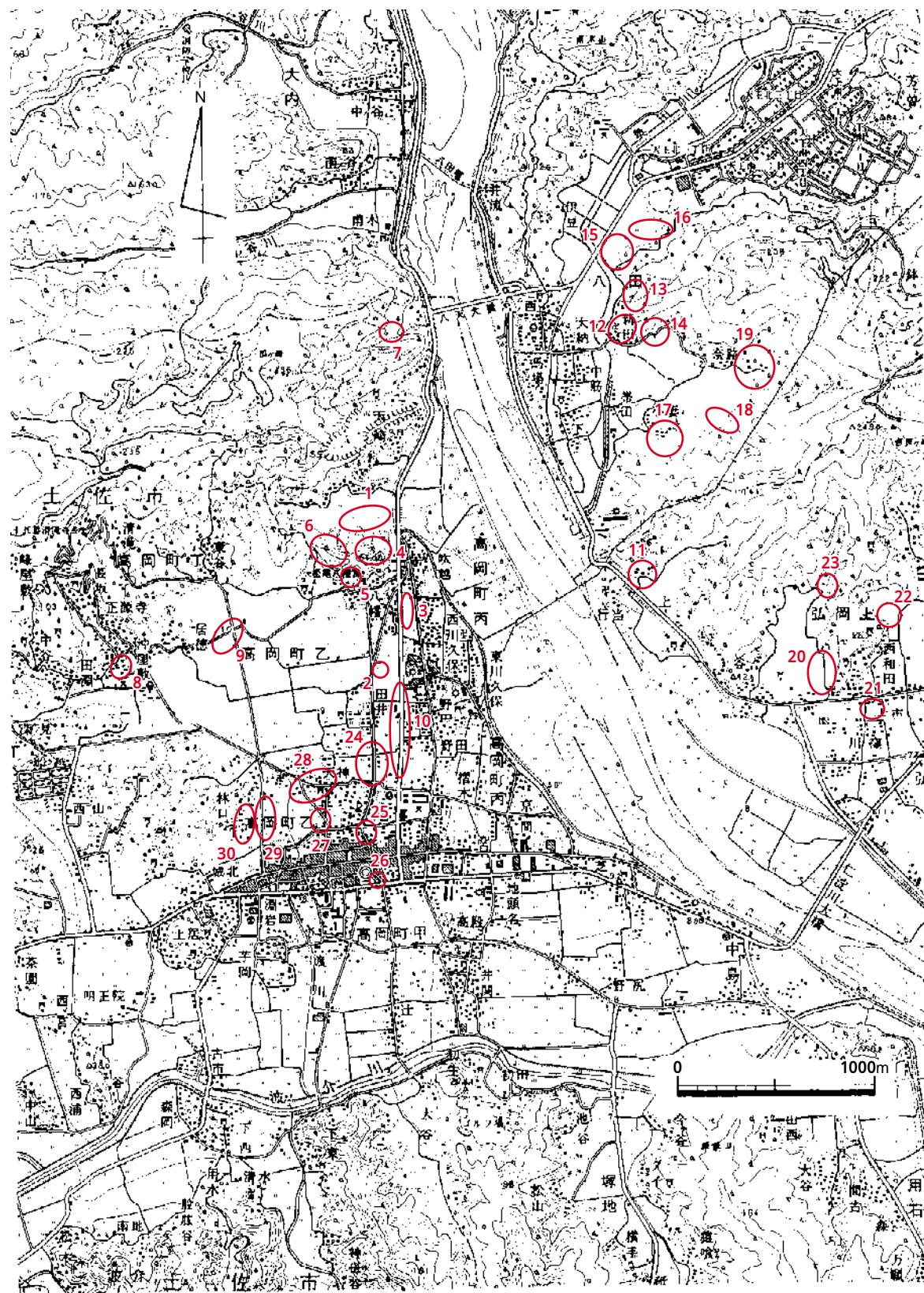


Fig.3 周辺の遺跡分布図

古墳時代ともなると、弥生時代以降に住み続けている野田遺跡から、初頭のヒビノキⅢ式土器（古式土師器）や7世紀前半頃のもので、須恵器のcが出土している。土佐市高岡町周辺の遺跡の中では、野田遺跡が中心的な存在であったと考えられている。又、甲原船戸遺跡では、馬場末式の壠・甕・高杯形土器が出土し、祭祀用とみられる小型丸底壺（土師器）・粗製小型土器1個が出土している。古墳時代中期の集落関係遺跡とみられている。また、高岡町内の明官寺遺跡からは、同時期の祭祀用の子持勾玉が出土している。その他にも、高岡町八幡神社付近の八幡遺跡、高岡町犬ノ場遺跡等がある。

又、天崎遺跡を仁淀川沿いに北へ3kmさかのぼると波川遺跡がある。多量の甕・壺・高杯型土師器と須恵器（甕）・木片、更に粗製小型土器も2個ほど出土している。又、1本の中広形銅矛Ⅱ型も出土しており近くの神社に寄進されている（日高村、小村神社）。しかし、これらの地域における縄文・弥生から古墳時代の遺物は、道路工事や、河川改修工事の際に採集されたものがほとんどで、本格的な発掘調査によるものではなく、今後の調査に期待がかかっている。

古墳時代以降は、大平氏、長宗我部氏、山内氏等の支配の基に、より安定した生活が営まれ肥沃な高岡平野の生産力を背景に、高岡町周辺は急速に発展した。特に近世の野中兼山の開発事業によるところが大きい。仁淀川の豊かな水を得ることによって手漉和紙業も盛んとなり、現在まで続けてきた。高岡町の発展に大きく貢献してきた産業である。農業を基盤としながら、施設園芸にも力を入れ、その間、高岡井筋を完全にコンクリート化するなどの改修工事を実施しながら、産業の整備を計り、土佐市高岡町の課題の一つである水防問題に取り組んできた。土佐市高岡町の人々は、古今を問わず、水害に対して創意と工夫で乗り越え、今の繁栄を築いてきたと言っても過言ではあるまい。

- 参考文献 『土佐市史』 1978年 土佐市
『高知県の考古学』 1966年 吉川弘文館
『高知の研究1』 1988年 清文堂
『高知県の地名』 日本歴史地名大系 1983年 平凡社
『角川日本地名大辞典39高知県』 1986年 角川書店

第Ⅲ章 試掘調査

第1節 調査の概要

工事予定地内に5×5mを基本としてテストピットを任意に15ヶ所設定し、第1次の試掘調査を実施した。(Fig.4) 調査の結果、TP5を中心とする範囲およびTP11を中心とする範囲、TP14・15を中心とする範囲では遺物の出土量も多く遺構も検出されたため本格的な発掘調査が必要であると考えられた。TP14では自然流路を2条以上確認した。TP15では16世紀の遺物を含む層を確認し、無遺物層を挟んだ下層からはTP14から続く自然流路を検出した。(Tab.2) なお、TP-1~4、6、8、9は湿地状の地形を呈していたと考えられる。

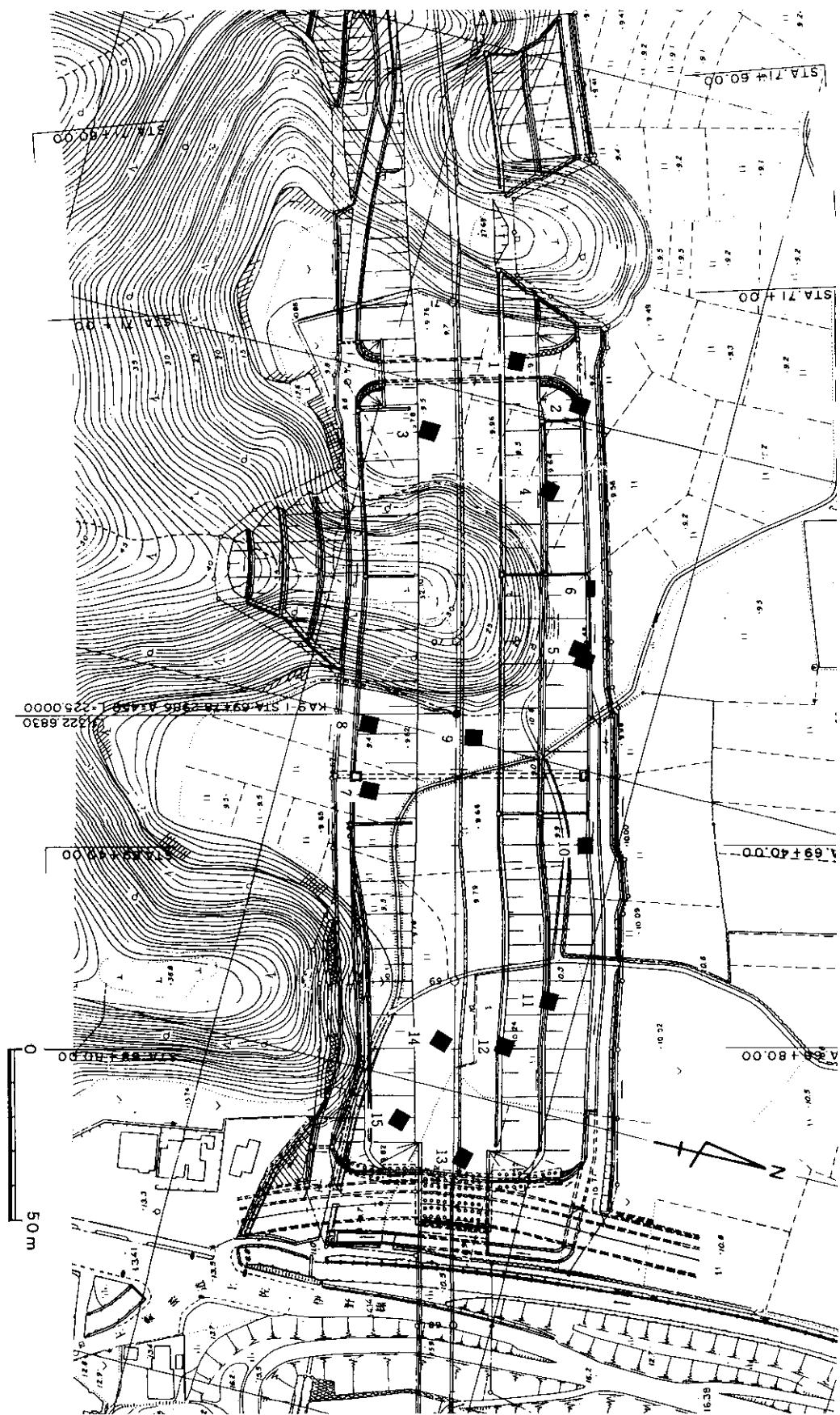
第2節 出土遺物(Fig.5)

Tab.2 試掘トレーンチの概要

1・2は叩き石である。3はミニチュア土器である。体部は球形を呈し、外反した口縁部がつく。甕の形態を模写し丁寧につくられる。以上、1~3はTP5からの出土である。4は土師器の羽釜である。5は土師器壺ⅡB類である。6は瓦器椀である。7は須恵器椀である。内外面とも上半部を中心に炭素の吸着がみられ黒色を呈する。8は龍泉窯系の青磁碗である。森田分類I-2にあたる。9は土師器の羽釜である。10は土師器甕ⅠA類である。以上、4~10はTP14の自然流路出土遺物である。11は包含層出土の蓮弁文の青磁碗である。小野分類のC類である。12は11と同一層から出土した擂り鉢である。13はTP14から続くと考えられる自然流路からの出土である。須恵質の器台である。脚部と柱部は別に作られ接合する。脚部は屈曲し大き

	出 土 遺 物		検出遺構
TP1	なし		なし
TP2	なし		なし
TP3	なし		なし
TP4	なし		なし
TP5	古墳時代 中 世	土師器高杯1点 土師器壺1点 土師器甕1点 ミニチュア土器1点 叩き石1点 器片10点	ピット1基 土坑1基
TP6	土器片2点 叩き石1点		なし
TP7	なし		なし
TP8	なし		なし
TP9	古代 須恵器壺1点 須恵器片1点		なし
TP10	陶磁器片1点		なし
TP11	土器片40点		なし
TP12	土器片4点		なし
TP13	土器片7点		なし
TP14	古墳時代 古 代 中 世	土師器甕1点 須恵器片2点 羽釜2点 白磁1点 青磁1点 瓦器椀1点 土師質土器類4点 土器片17点	自然流路2条
TP15	中世 青磁1点 擂鉢1点 土器片1点		自然流路2条 土坑1基

Fig. 4 試掘トレンチ位置図



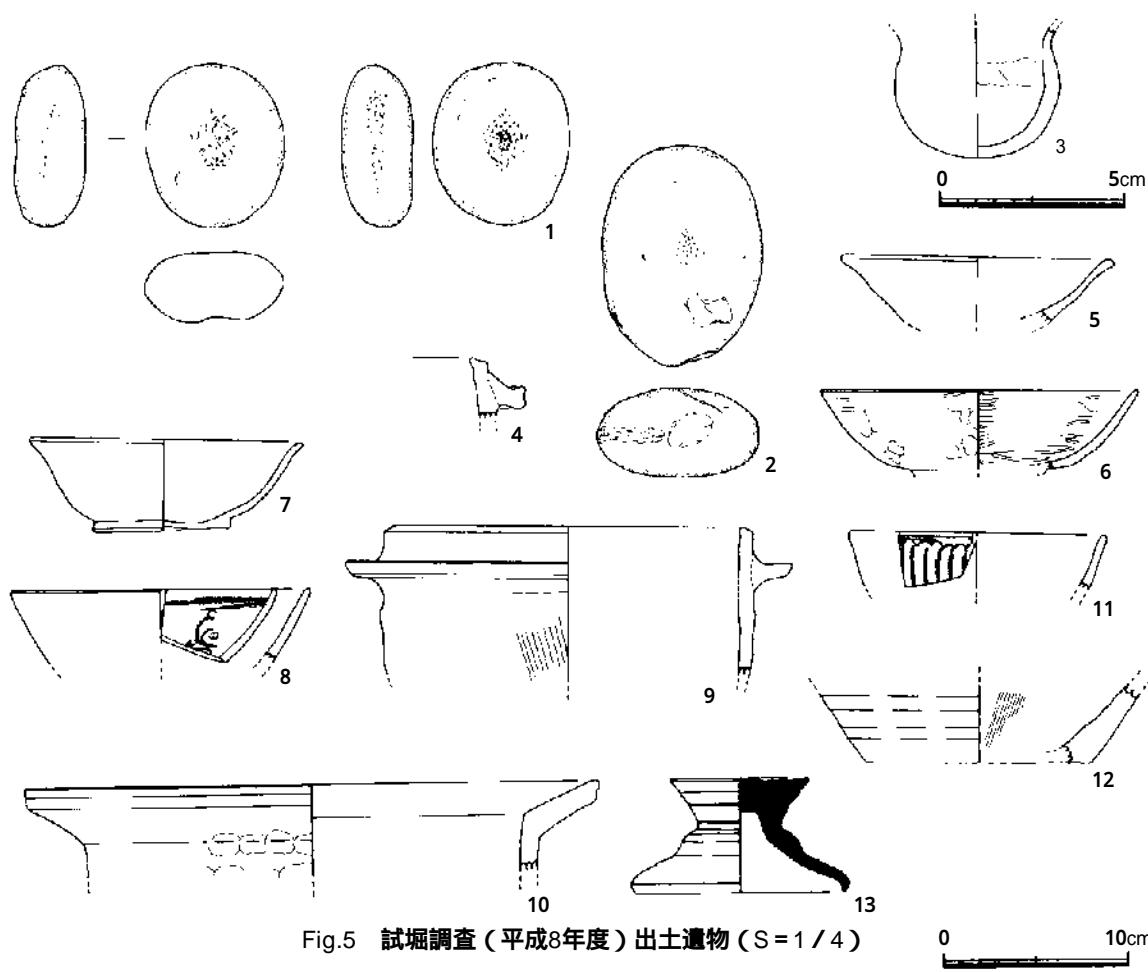


Fig.5 試堀調査(平成8年度)出土遺物(S=1/4)

0 10cm

くひらく。柱部は中実であり、頂部は摩耗が激しいが糸切り痕をかすかに確認することができる。
柱部の上部に何らかが接合する可能性がある。以上、11～13はTP15から出土したものである。



発掘調査風景



現地説明会風景

平成9年9月28日
(日)に行われた
現地説明会では、
天崎遺跡から出
出土した銅矛を見
るために多数の
見学者が訪れた。

第Ⅳ章 調査の成果

第1節 1・2区の成果

(1) 調査の方法

調査予定地は、人麻呂様城跡の丘陵地に沿って東西に長い調査地であり、真ん中にあった未買収地を二次調査区とし、東側と西側の二つが一次調査区となった。さらに東側は排土処理用の工事用道路を要したため、それをはさんで南北二つに分かれることになった。

そのうち、人麻呂様城跡に添った南側部分は平成9年度2月に行われた試掘調査によって、同一のものと思われる溝跡が東西に各ひとつずつ検出されていた。本来はひとつの区として調査される物であるが、地下1~1.5mに有ると思われる暗渠を残して欲しいという住民の要望によってバンクを設定せざるを得ず、1区、2区に分かれた。そのため、後述の章に於ては、遺構、遺物とも1・2区をまとめて取り扱っている。残った部分を3区、二次調査区を4区、西側は5区とした。1~3区は5月より田坂、山本雄介、下村、4区は12月より松村、5区は10月より山本哲也、山本雄介の各調査員が担当した。

標高は3級水準点水11-6より引き、測量基準点は航空撮影によって設置した。包含層遺物の取り上げ、遺構の実測については座標に基づき、調査区全体に4m方眼をかけ、東西方向にA、B、C、南北方向に1、2、3とし、記録した。

平面図、及びセクション図は、20分の1を基本とし、適時任意の縮尺を用いた。溝状遺構などは数ヵ所ずつ土層を観察図化し写真撮影を行った。1・2区の調査修了時には航空写真撮影をおこなった。

掘削については、平成9年度に行われた試掘調査によって包含層並びに遺構、遺構検出面等のおおよその位置が確認されていたところはその資料を参考にした。1・2区は溝検出面が確認されていたので、表土の耕作土と床土、だけ層を除いた後もV層近くまでは、包含層も重機で少しづつ堀り、様子を見て適時手堀りに切り替えていった。

調査終了時に、航空写真撮影を行った。

(2) 基本層序

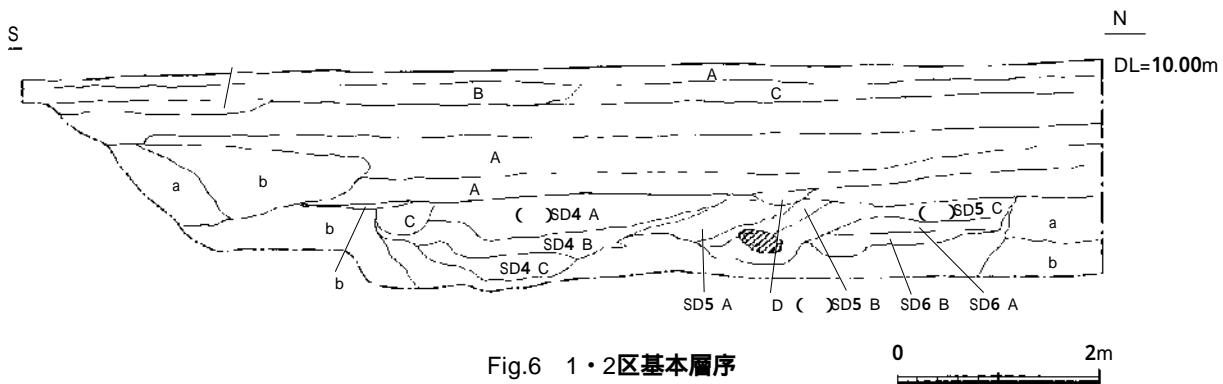
1・2区は地下を走る暗渠を避けるため便宜上、中間にバンクを設定して分けただけであり、本来は隣り合ったひとつの調査区であるため、2区に近い側の1区の西壁で基本層序を観察した。

I層.....耕作土

II層.....客土。径1.5cm以下の黄橙色の角礫層で、調査区南端の東西方向の壁に沿って幅約3m、厚さ、約8~16cmにわたって部分的に堆積する。

III層.....暗オリーブ色粘土層。シルト質で西壁全体に30cm内外の厚さで安定した堆積を示している。近世の遺物を包含している。

IVa層.....黄褐色粘土層。シルト質でほぼ西壁全体にわたっておよそ20~40cmの厚さで安定して堆積する。北に行くに従って、層厚が減っていく。旧耕作土の可能性もある。近世の遺物を包含している。



IVb層.....灰黄褐色礫層で径3cm以下の円、角礫を含む。調査区南壁の南側の一部に堆積する。岩盤流出層か？

V層.....灰黄褐色粘土層。層厚はおよそ16~26cmを測り、安定した堆積を示している。南側の一部下層に、径5cm以下の亜角礫を含む緑灰色砂礫層が存在し中世の遺物を包含している。

VC層.....オリーブ黒質砂礫層。南壁に沿って東西方向に幅50~60cmで続く。計3cm以下の角礫を含み、小流路SD7の埋土である。

VI層.....灰白色粘土層。調査区のほぼ北側半分に堆積する。層厚は約10~30cmを測り、V層同様に中世の遺物を包含する。中世の水田を区画した小溝ではないかと思われるSD1、2、3を検出している。

VII層.....SD4、5、6が検出されるまでVII層として遺物を取上げるのに便宜的に名づけたものでVI層下層とSD4、5、6上層が混在する、実際には存在しない層である。

VIII層.....緑灰色粘土層。粒子が密で均質であり沖積層である。三つのSDの基盤となる層であり、杭の基盤面である。

IX層.....明黄褐色粘土層。下層に行くにつれ、浅黄色を呈し、径3cm以下の角礫が混じる。IXa層とb層の境界ははっきりしない。

X層.....緑灰色粘礫層。岩盤流出礫かと思われる径3~10cm以下の角礫が混じる沖積層である。a層からb層に下がるに連れて、角礫が大きくなる。

遺構埋土

SD4

A層 砂粘土、径3cm以下の亜角礫や粗い砂がまじる

B層 暗灰黄色砂粘土、計2cm以下の亜角礫や粗い砂が混じる、杭基盤面

C層 オリーブ黒、粘砂礫粗い砂が混じる

SD5

A層 灰色、砂礫粘土、径2cm以下の亜角礫が混じる、下面に木片有り

B層 灰色、粘土、一部に粗い砂が混じる。

C層 灰色、粘土、上部に径40cmの亜角礫が1点含まれる

SD6

A層 暗赤褐色、有機質粘土、木片や木の葉が多数混じる

B層 黒褐色、粘砂、微細な砂粒や有機物を少量を含む

(3) 遺構と遺物

1・2区では、溝7条と土坑1基が検出された。

1. SK1・銅矛の出土状況

① 経過

II区で検出されたSD4の堆積状況の確認と土層断面図（東壁）の作成のために、南北方向の調査用バンクが残されていた。このバンクの除去作業を行っていた平成9年8月27日に、銅矛とみられる青銅器4本が出土した。調査現場からの連絡を受けた埋文センターでは、現地確認を行うと共に県教委文化財保護室・道路公団高知工事事務所等に連絡を図り、出土遺物の記録作業・取り上げについて早急に対応することになった。8月27・28日の夜間には現地で調査員が常駐し、実測及び写真撮影等の一連の作業終了後、8月29日に銅矛を取り上げ、埋文センターに搬送した。

出土銅矛については4本とも中広形銅矛であり、そのうち1本（1号銅矛）については、遺物に付着した泥を落とす過程のなかで不鮮明ながらも研ぎ分けが観察され、また4本とも表面に赤色及び黒色の微小な有機物が付着していることが留意された。銅矛はSD4の堆積土中ではあるが一括出土であり、2本1組みで峰と袋部を交互に置いていることなどから、土中に埋納されたことが明白である。出土地点の観察により、不整形土坑が検出され、遺構の下層から土師質土器・瓦器の細片が出土したことから、中世の水路跡に再埋納された銅矛であることが判明した。

検出遺構と遺物についての資料整理の後、9月4日に銅矛出土についての記者発表を行い、9月28日に現地説明会を開催して一般に公開した。なお、銅矛の表面に付着した有機物については、発見時には水銀朱や黒漆の可能性も考慮されたが、保存処理に際してのその後の分析等により、鋸化による銅矛表面上の化学変化によるものであることが明らかとなつた。⁽¹⁾

② SK1

銅矛は、SD4の堆積土中に掘りこまれた不整形土坑（SK1）から検出された。この不整形土坑は、SD4の調査当初では所在が確認されておらず、銅矛の検出時に行われた精査と土層断面観察によって明らかになつたものである。SK1は、上端の幅0.5～0.85m前後・深さ15～20cmを測り、SD4の堆積土である暗灰褐色粘質土と下層の灰色粘礫土を掘り込んで形成されている。埋土は淡茶色粘質土で、東側の一部に緑灰色粘質土の堆積が認められる。SK1の北辺では、SD4の水路肩である灰色粘質土と下層の淡青灰色砂礫土を掘り込んでおり、SD4の堆積土である暗灰褐色粘質土・灰色粘礫土は認められない。また、灰色粘礫土中には細かい木片を含み、土師質土器・瓦器の細片が出土した。なお、SK1の東側に該当するSD4の底面には、周辺より一段低い橢円状の落ち込みがみられ、現在でも湧水が著しくSD4の湧水部であった可能性がもたれる。銅矛再埋納地の選定背景に関連することも考えられる。⁽²⁾

③ 銅矛の出土状況

SK1のやや東寄りに、長軸方向に沿って4本の中広形銅矛が埋納されていた。銅矛の出土順に1号～4号銅矛と呼称すれば、1・2号銅矛は袋部を南に耳を上にして重ね、3・4号銅矛は反対に矛先を南にして重ね置かれていた。2本1組で峰と袋部を交互に重ねており、全体としては、東にかけて傾きをもつものの刃先を上向きに起こした状態であることが観察された。また、銅矛はSK1の長軸方向において水平には置かれず、SK1の北側に比べて約20cm前後南側を高くして据え置かれていた。出土銅矛の北側部分は標高7.75m前後を測り、

南側部分は標高7.95m前後である。銅矛の埋納に伴う木製容器・織物・蓆等の存在は認められない。水路の堆積土中に掘削された素穴に刃先を上向きに起こしてやや南側を高く傾け置かれたものと復元される。

銅矛の埋納されたSK1は、SD4の堆積土上部ではあるが、西側からのある程度の水流が予想される場所である。その流れは、SK1を破壊し埋納された銅矛を分散させるほどの水量ではなかったとみられるが、緩やかな水の流れにしても銅矛の埋納地点に継続的な影響を与えていたことが推測される。SK1において、銅矛の東側への傾きはその影響下によるものであると考えることが許されるならば、本来4本の銅矛は刃先を上にして並び置かれていたことが推察される。

SK1の形成と銅矛の埋納時期については、SK1の下層からの出土土器類やⅡ区東側のSD4上層出土土器類からみて、SD4の埋没時期下限である鎌倉時代中頃（13c中葉）以降に位置づけられるものと考えられる。

青銅器（銅矛）

Ⅱ区SD4の堆積土中に掘削された不整形土坑・SK1から、4本の中広形銅矛が出土した。銅矛は、2本1組で袋部と鋒を交互にして重ねていた。SD4は中世の水路跡であり、出土銅矛は中世（鎌倉時代中頃・13c中葉）以降に再埋納されたものである。銅矛については、出土順に従い1号～4号銅矛とする。

1号銅矛

全長79.7cm（残存長）、穂部最大幅6.9cm、関部最大幅9.2cm、袋部下端最大幅5.0cm、耳の最小幅6.48cmを測り、重さは1622.0gである。表面の色調は5Y・6/3・オリーブ黄で鋒先端と刃部の一部を欠損している。耳の形式は扁平式で孔はない。周囲には甲張り転用突線がめぐる。節帯幅4.0cmで耳との位置関係は、耳の中央と節帯の段とが対応する。やや不鮮明ではあるも、刃部に綾杉状の研ぎ分けが認められ、その幅1.6～1.8cm。袋部に真土が残る。

2号銅矛

全長78.9cmで、刃部の一部を欠損するがほぼ完形。穂部最大幅7.245cm、関部最大幅8.08cm、袋部下端最大幅4.9cm、耳の最小幅5.82cmで、重さ1620.0gを量る。色調は7.5Y・6/2・灰オリーブ。耳は扁平式で孔はない。耳の周囲に甲張り転用突線がめぐる。節帯幅3.1cmで耳の中央と節帯の段とが対応する。袋部に真土が残る。

3号銅矛

全長81.4cmで、刃部の一部を欠損するがほぼ完形。穂部最大幅6.860cm以上、関部最大幅8.850cm、袋部下端最大幅4.9cm、耳の最小幅6.1cmを測り、重さは1710.0g。色調は、7.5Y・5/3・灰オリーブ。耳には甲張り転用突線がめぐり扁平式。節帯幅3.5cmで耳の中央と節帯の段とが対応。袋部に真土が残る。

4号銅矛

全長77.45cm。刃部の一部を欠損するがほぼ完形。穂部最大幅6.90cm以上、関部最大幅7.880cm、袋部下端最大幅4.80cm、耳の最小幅5.70cmで、重さは1481.0g。色調は、5Y・4/4・暗オリーブ。耳の周囲に甲張り転用突線。耳の形式は扁平式で孔はない。節帯幅3.1cmで耳の中央と節帯の段とが対応。袋部に真土が残る。4本

の銅矛のなかでは細形。⁽³⁾

1~4号銅矛は、全体の形状・計測数値・節帯や耳の特徴などから中広形銅矛のなかでも中広形b類に属するものとみられる。Fig12は、高知県下出土銅矛のうち全長と関幅の計測が可能で、数値が判明している28例（天崎遺跡出土資料を含む）を集計したものである。この表でも明らかのように、関幅10.8cm以上・全長78.0cm以上の広形銅矛類の一群や関幅7.0cm~8.0cm・全長68~75cmの中広形a類の一群に比較して、1~4号銅矛は中広形b類の範疇に属するものであることが理解されよう。さらに細別すれば、矛形祭器の岩永編年による中広形b2類に該当するものと考えられる。⁽⁴⁾

高知県下では、これまで48本（戦前28・戦後20）の銅矛が発見されている。今回の資料を加えて52本となり、出土地の明確な遺跡数は15遺跡となる。

なお、1号銅矛にみられる研ぎ分けをもつ中広形銅矛の存在は注目される。九州北部の諸遺跡や島根県・神庭荒神谷遺跡などで確認されている類例に比較すれば、1号銅矛の研ぎ分けはやや不鮮明で判然とはしていない。しかし、刃部に彩杉状に交互に研ぎ分けを行っていることは注意深く観察すれば分かることで、銅矛表層の鋸びの進行状況を考慮すれば、もとは視覚上の効果を充分に有していた銅矛であったとみられる。研ぎ分けをもつ銅矛は本県では初見であり、四国太平洋岸における有文銅矛例として扱うことができる。生産地である九州北部の地域から搬入された銅矛ではあるが、形状・規格・研ぎ分けの手法・単位・特徴などの諸点から、将来出土例が増加すれば同例の確認も可能であり、生産地や配布地、搬入元の地域の特定作業などが期待される。

註

- （1）奈良国立文化財研究所 肥塚隆保氏の御教示による。
- （2）伊野町八田地区では、水路の開削にあたって取水口を谷部の湧水地に選定している。湧水地は地元では特に大事に取り扱われている。
SD4の埋没後も、旧湧水部としての認識が存続していたとすれば、SK1の場所選定に関連する事かもしれない。水靈信仰などとの関わりで意図的に選ばれた可能性もある。
- （3）峰の全体を穂部と呼称することにする。なお、色調表現については『標準土色帖』による。
- （4）岡本健児「高知県発見の銅矛について」『高知の研究』1 昭和58年 清文堂
引用した計測数値・観察表記については上記文献を参照。
- （5）岩永省三 「矛形祭器」『弥生文化の研究』6 道具と技術II 昭和61年 雄山閣

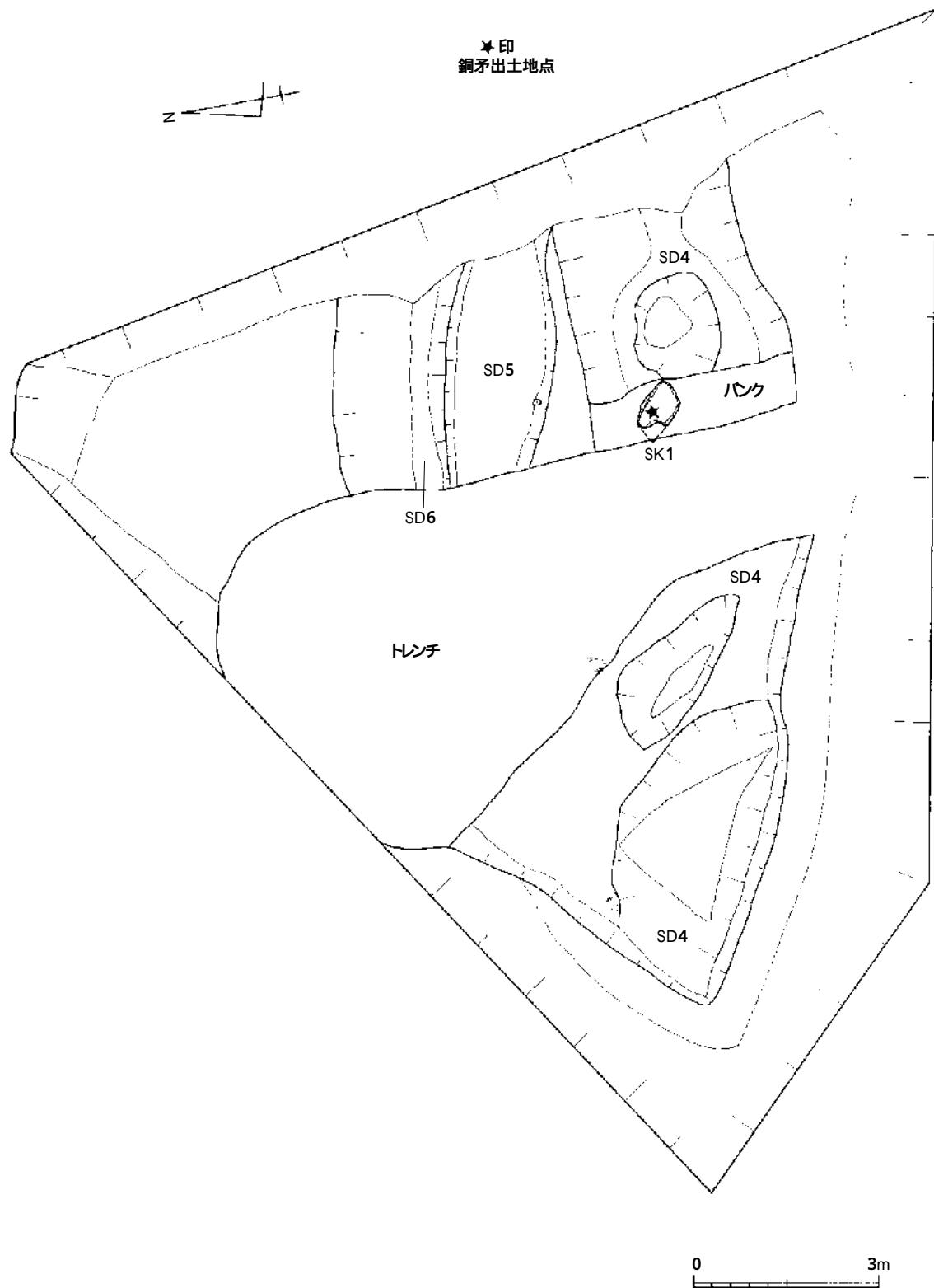


Fig.7 SK-1位置図

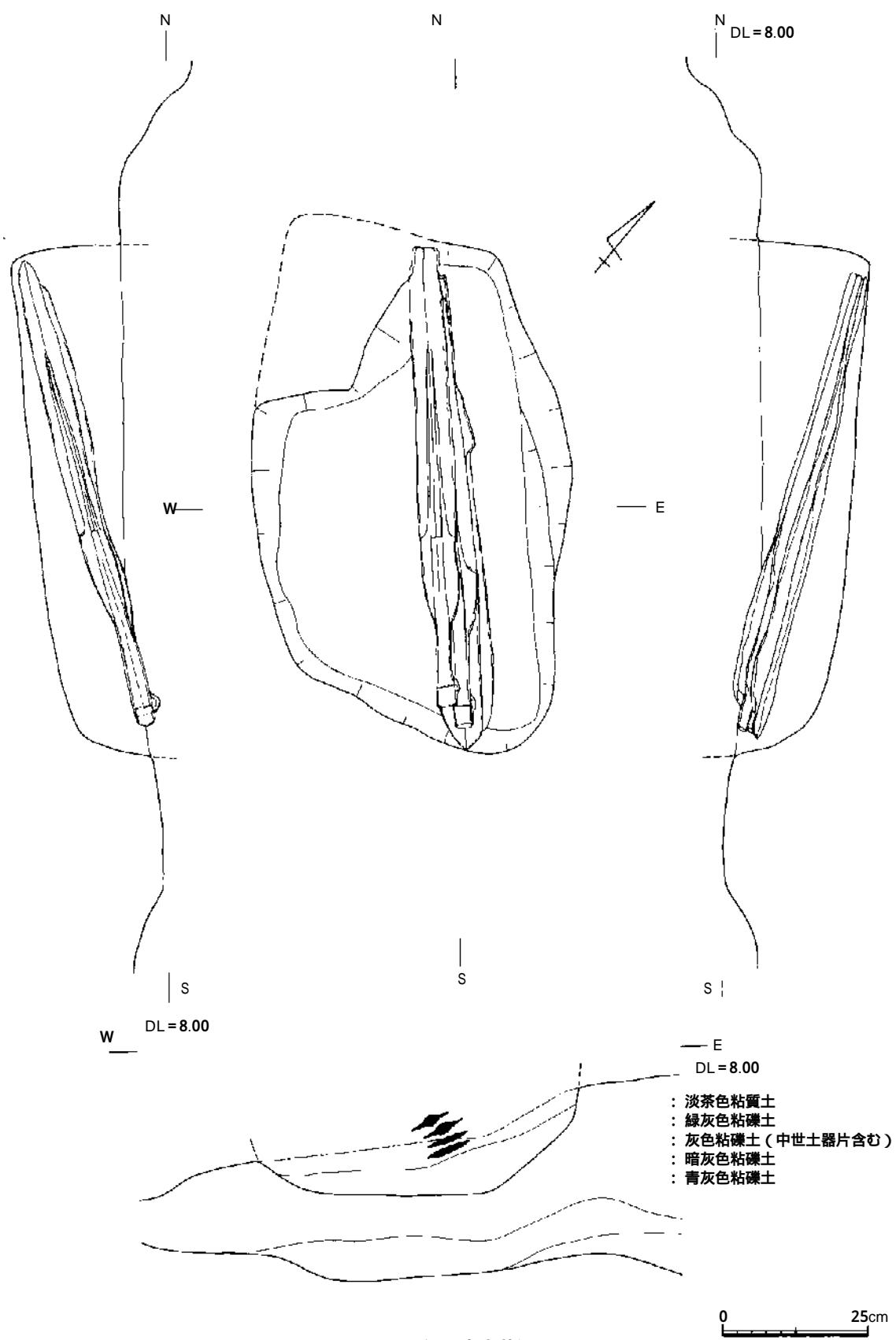


Fig.8 銅矛出土状況

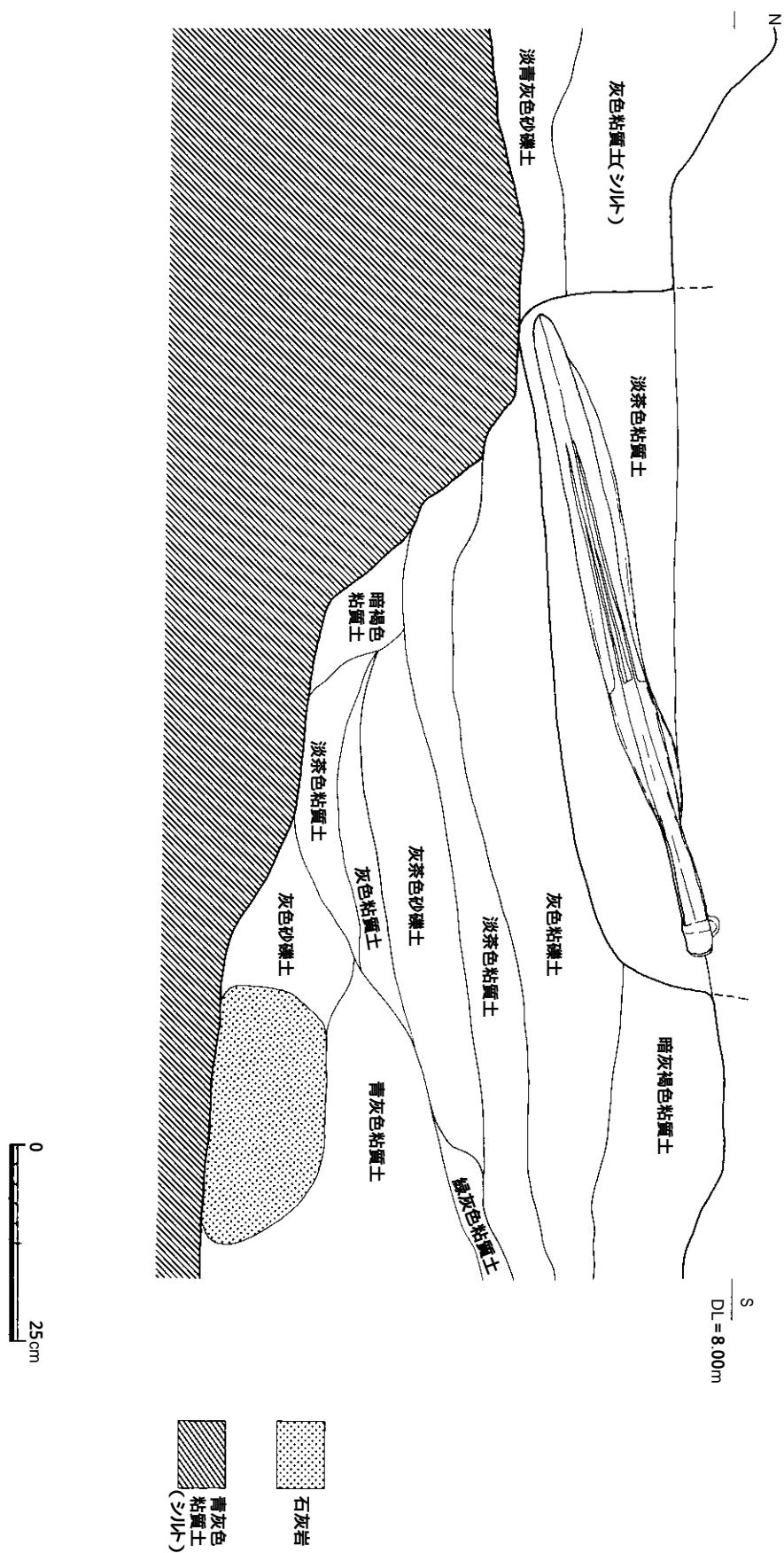


Fig.9 SK-1 • SD-4 土層断面図

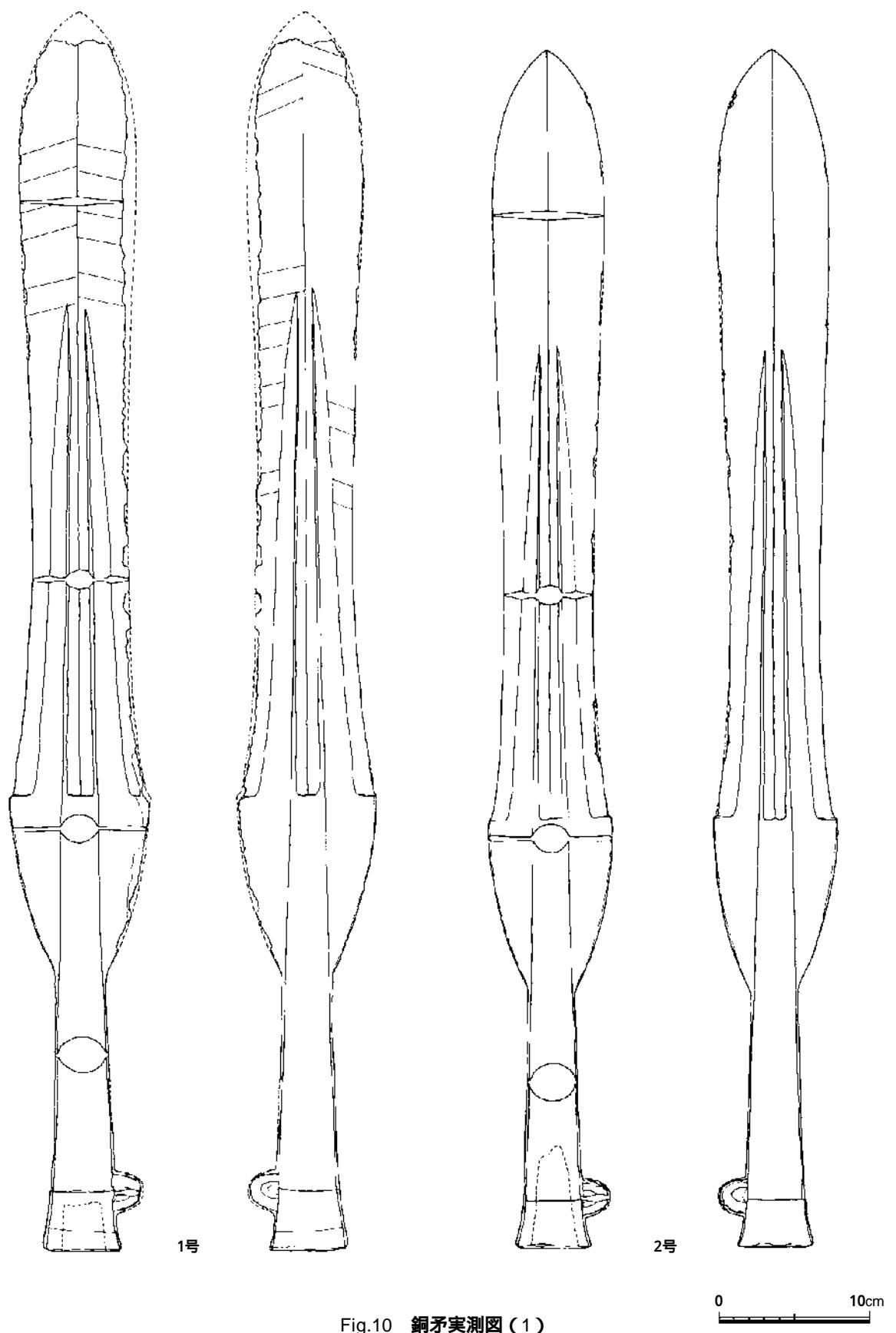


Fig.10 銅矛実測図(1)

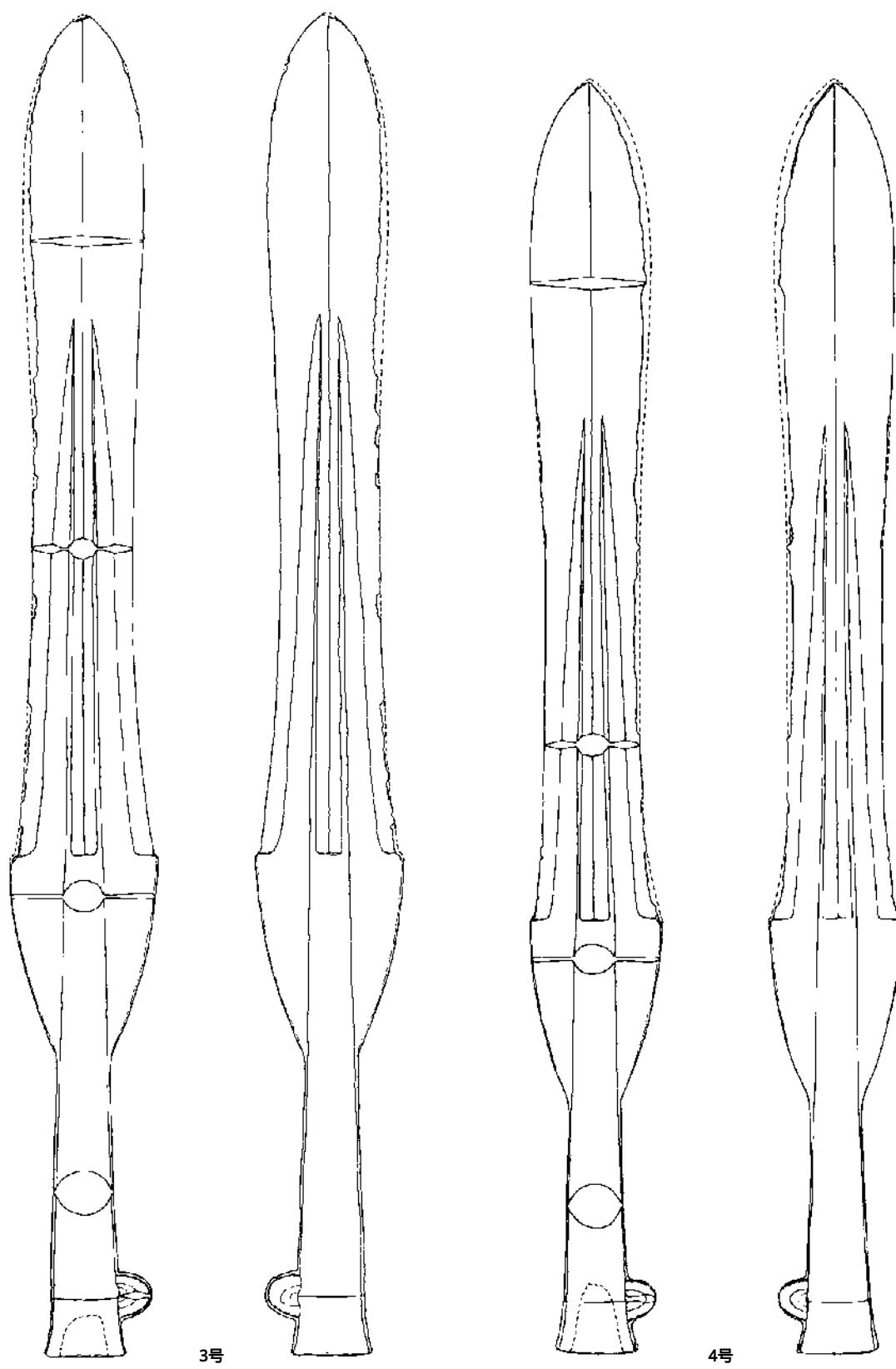


Fig.11 銅矛実測図(2)

0 10cm

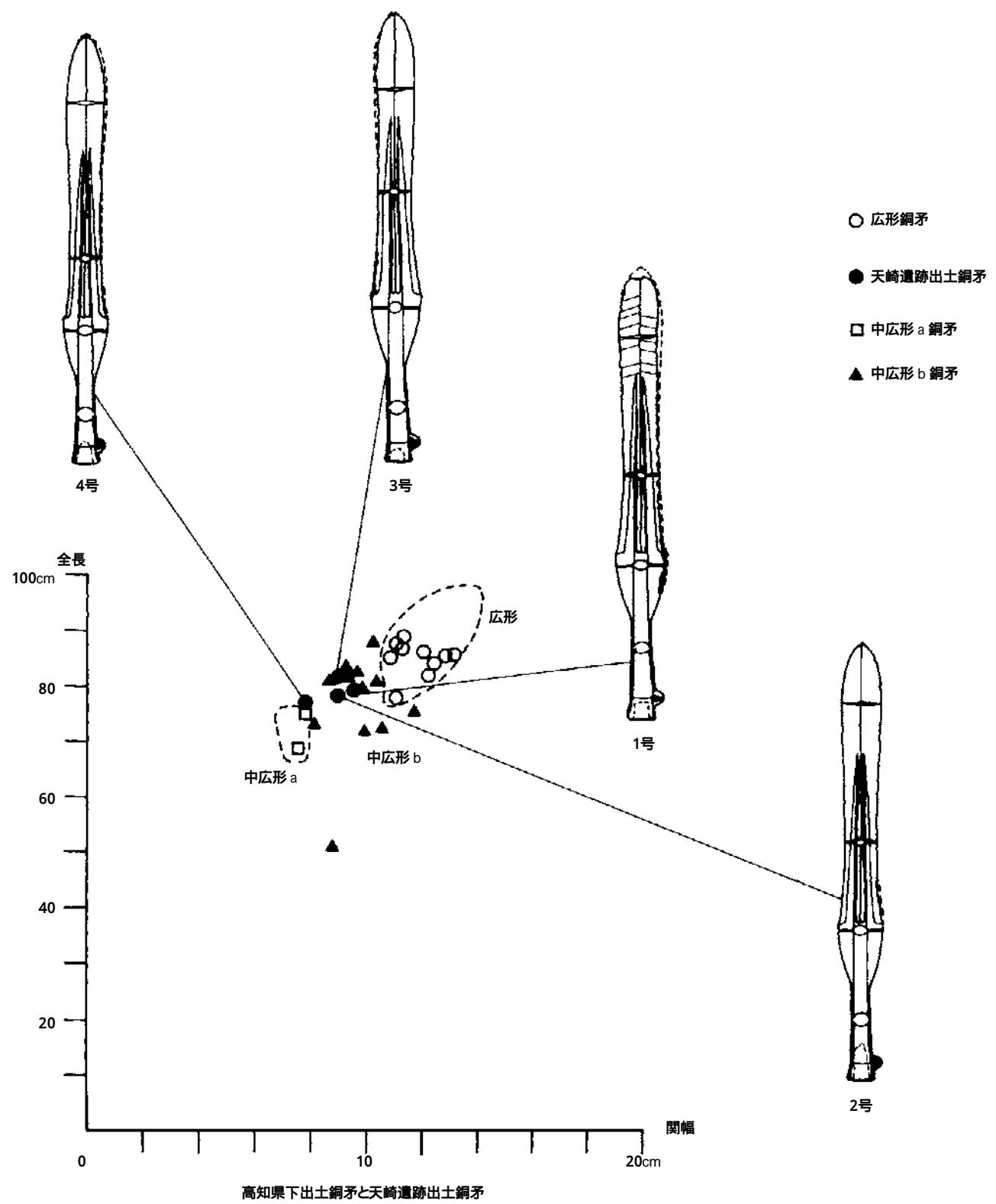
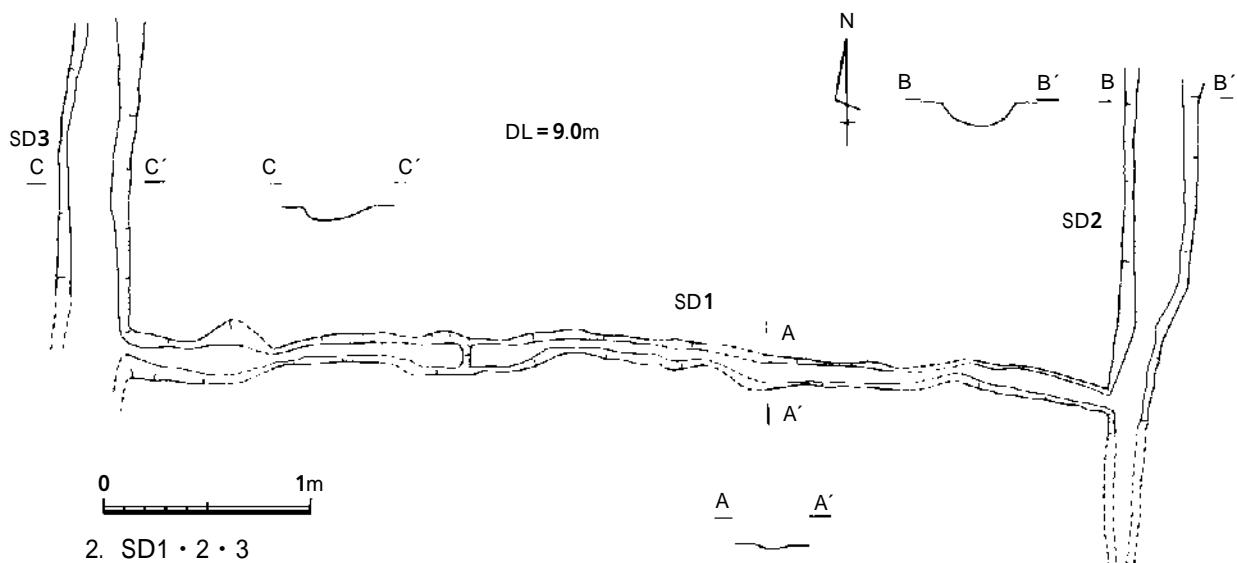


Fig.12 高知県下出土銅矛と天崎遺跡出土銅矛計測表



2. SD1・2・3

1区の西北部に位置する溝状遺構である。VI層上面で、東西方向に1条(SD1)、南北方向に2条(SD2・3)検出される。形状や大きさから見て当時の水田を区画するものであった可能性も考えられる。検出時に既に上面を削平されており、幅、深さとも、本来は図面上の数値よりも大きかったと思われる。出土遺物は、SD2からの器種器形とも不明の土器細片1個のみであり、遺構の時期特定はできない。しかしながら、V層、VI層からの出土遺物に、瓦器、白磁、青磁、中世の土師器等があることから中世の遺構であると思われる。

SD1

ほぼ東西方向に走る溝状遺構である。確認長4.7m、幅10~32cm、検出面からの深さ12cmであり、断面形はU字形を呈する。北端は途中、SD2に切られるが、調査区の北壁まで達しており、まだ続くものと思われる。

SD2

ほぼ南北方向にSD3と平行する溝状遺構である。確認長4.90m、幅12~40cm内外、検出面からの深さ11cmであり、断面形はU字形を呈する。西端はトレンチに切られており東端は消失する。

SD3

SD2と平行する溝状遺構である。確認長1.88m、幅約30cm内外、検出面からの深さ10cmであり、断面形、その他はSD2と同様である。

Fig.13 1区SD1・2・3平面・エレベーション図 (S=1/40)

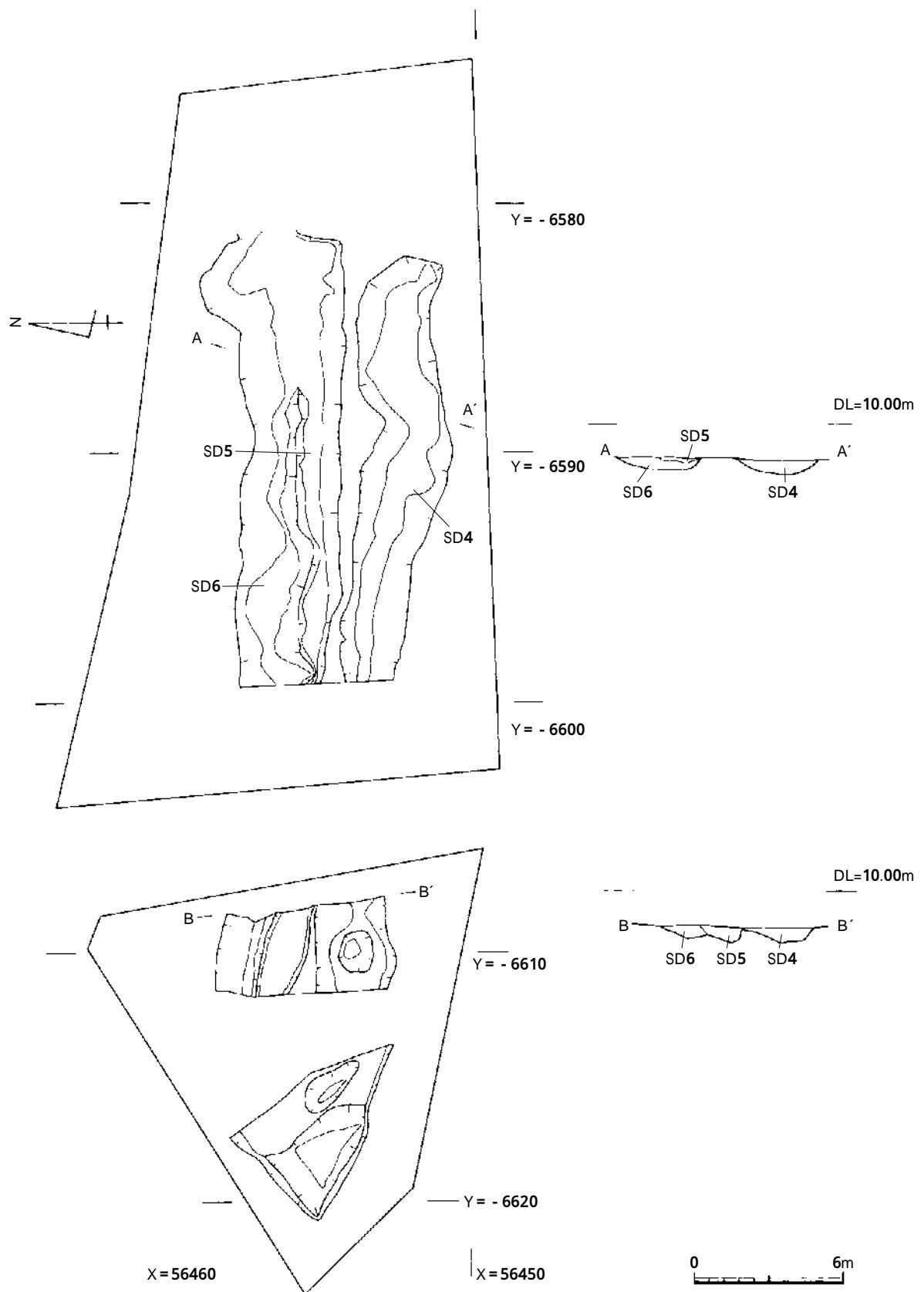


Fig.14 1・2区SD4・5・6平面・セクション図 (S=1 / 240)

3. SD4・5・6

調査区のほぼ中央に位置し、西に行くに連れてやや北よりに曲がりながら東西方向に平行して流れる3条の溝である。西壁セクションの土層の重なりをみても、最終的にはSD4が他の二つの溝を覆う形で地表面を流れていたと思われる。最終時の溝の地表面からの確認長は1区の東端から2区の西端までおよそ38.4m、幅は6~8m、深さは概ね70~80cmを測る。2区では北寄りに方向を変え、北壁に突き当たって終わっており、その後、遅れて調査に着手した4・5区で検出が期待されたが、4-2区南端で検出された4区SD1以外に類似する溝は認められない。4区SD1は、埋土と出土遺物から1・2区SD6に連続する溝だと思われる。

断面形はSD4と5の間に溝基盤層となる緑灰色粘土層が比較的高い位置まで隆起し、両溝の境界の様相を呈している。またSD5と6の間にもわずかではあるが、基盤層が隆起し、境を成している。SD4、5、6とも新しい溝に切られる前は多少いびつではあってもU字形を呈していたと思われる。

SD4は、三つの溝の中で一番上面に位置し、幅2.98~3.16m、深さ68~80cmを測る。埋土は灰色粘土から下層に行くに従い、木片や砂礫が混じり、粘質土となる。上2層がSD5の南側を切っており、比較的安定した堆積状況を呈している。遺物の出土量は一番少ない。

SD5は幅2.90~4.10m、深さ42~64cmを測る。埋土は灰色粘土層で砂礫が混じる。最下層のC層はSD6の上面の北半分までは平坦に堆積しているが、南半分からはSD6を切りA、B、C三層とも急激に落ち込んだ形状で堆積しており、洪水などにより、一気に堆積したものと思われる。遺物の出土量はSD4よりは多いがSD6よりは格段に少ない。

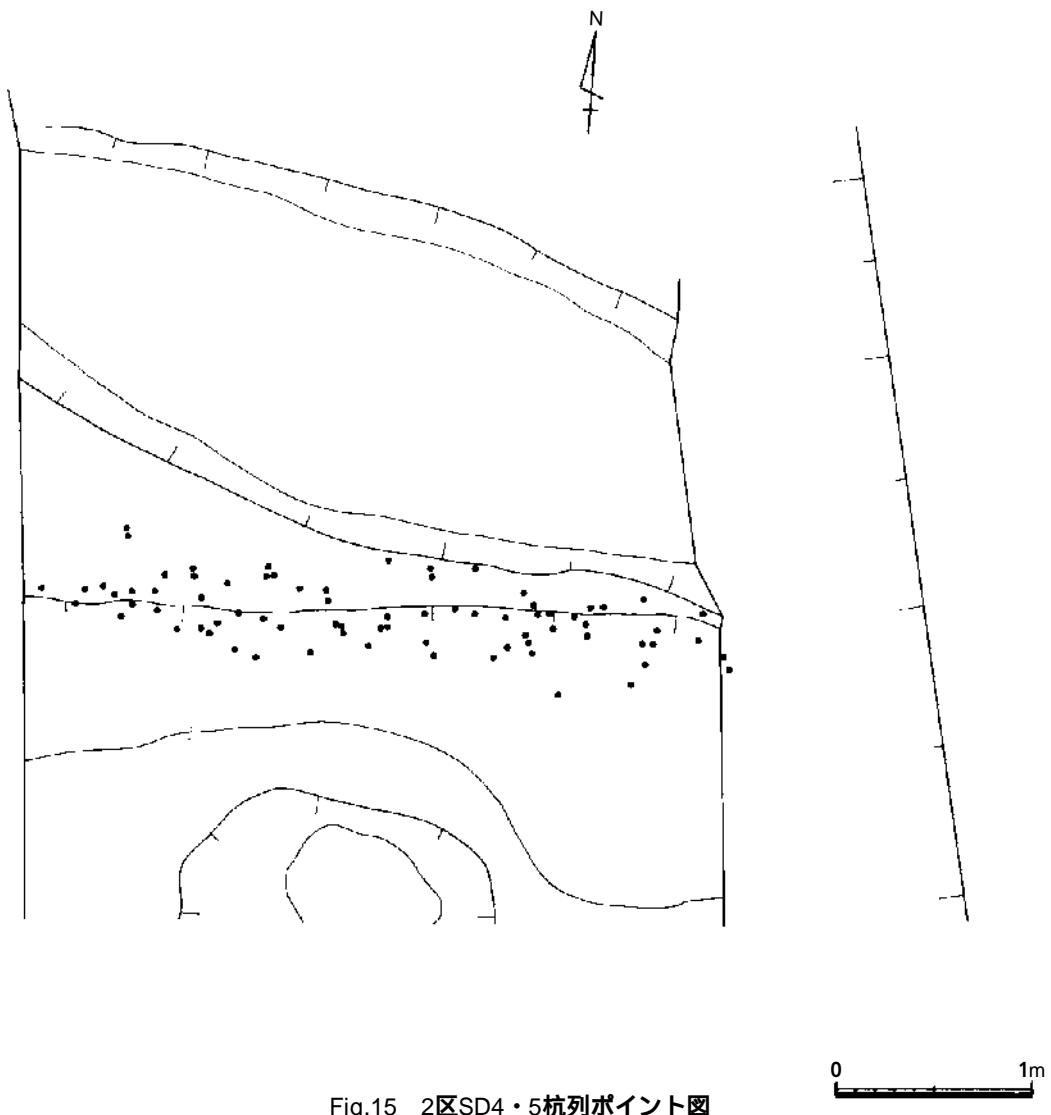
SD6は、三つの溝の中で一番下層にある溝であり、幅1.92~3.10m、深さ22~36cmを測る。南側半分近くをSD5によって切られており、層厚も薄くSD5の下に基盤層に沿って平坦に堆積している。平坦で薄い溝でありながら、遺物の量は他の二つの溝よりも格段に多く、埋土も木片や木の葉など有機物を多く含み、暗赤褐色から黒褐色を呈す粘土から粘砂質の層で、埋土、遺物量、堆積状況とも他の二つの溝とは違った様相を呈している。

三条の溝からの出土遺物は、図示できないものも含めて中世前期のものが主流であるが、溝遺構であるため、縄文土器、弥生土器から中世後期のものまで混入遺物が存在する。

図示し得たものとしては、土師器壺(14~57、99~167、344~357)、土師器椀(58、59、169~182、358~363)、土師器皿(60~66、184、364~365)、土師器小皿(67~81、185)、土師器甕(82~96、337~340)、土師器羽釜(97、98、342)、土師器器種不明(186)、土師器高壺(187~190)、土師器鍋(340)、弥生土器(191~193)、土錘(367)、須恵器壺蓋(194、195)、須恵器壺(196、197)、須恵器甕(199)、壺様の器種不明須恵器(198、200)、須恵器椀(201~227)、黒色土器椀(228)、綠釉皿(229、230)、瓦器椀(231~271)、瓦器皿(272、273)、東播系捏ね鉢(298~305)、備前壺(306)、白磁椀(274~284)、白磁皿(285、286)、器種不明白磁(287)、青磁碗(288~295)、青磁皿(296、297)、楔形石器(307)、有孔円盤(308)、砥石(309、310)、円礫(311)、木製卒塔婆(314)、矢板(316、317)、部材(318)、杭(319~333)、土錘(312、313)の320点である。その他に溝から出土したものとして、大量の流木群がある。Fig15と16にあるように、主に1区の東端と西端のSD6の上面層

で、大小様々の流木がふき溜まった状態で出土した。SD5を埋没させた洪水のときに流れてき、流れが蛇行する地点で留まつたものであろう。

またFig15にあるようにSD4と5の間に、基本層序のⅢ層に当たる緑灰色粘土層をベースとして杭列が打ち込まれている。いずれも径、長さ共に大きく、深く土中に打ち込まれた状態であった。それに比べて、SD7並びにSD5・6内に打ち込まれた杭列は、径、長さ共に小さく、打ち込みようも浅い状態で出土している。溝のできた順は、図で読み取れるとおり、6、5、4、7と順に新しくなるが、最後のSD7は幅も水深も浅く、小さな杭列を伴いながら最も丘陵寄りに作られている。おそらく水害で埋没する度に杭を打つなりして手を加えながら順に、南寄りに新しい溝を作つていったのである。遺物で見る限り三つの溝だけでなく、その上のⅥ層の出土遺物も器種構成並びに時期に差はほとんどなく、ほぼ同時代のものである。V層以降は中世後期から近世の遺物が混じるようになる。



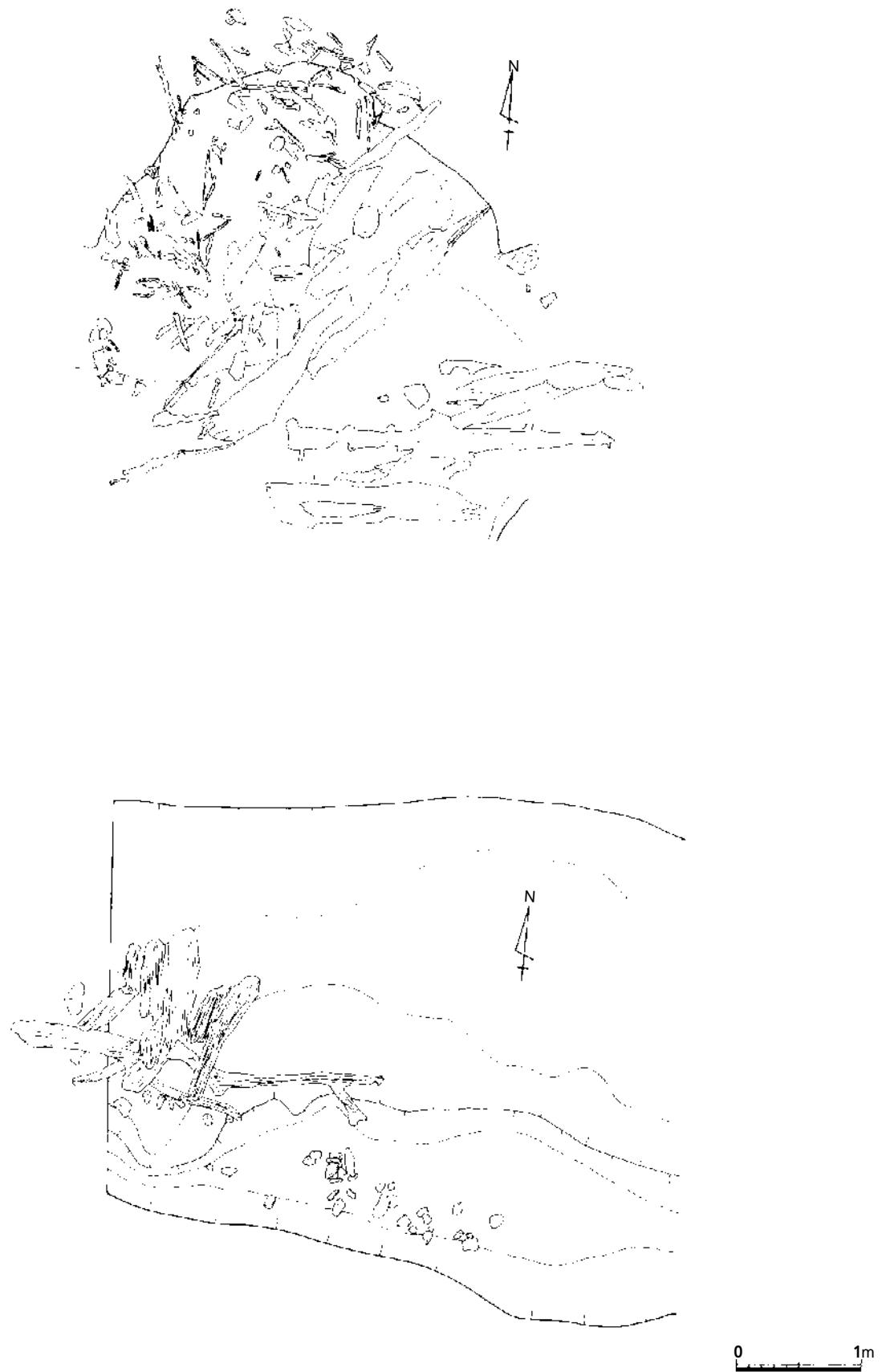


Fig.16 1区SD4・5・6流木出土状況平面図・東端(上) 西端(下)

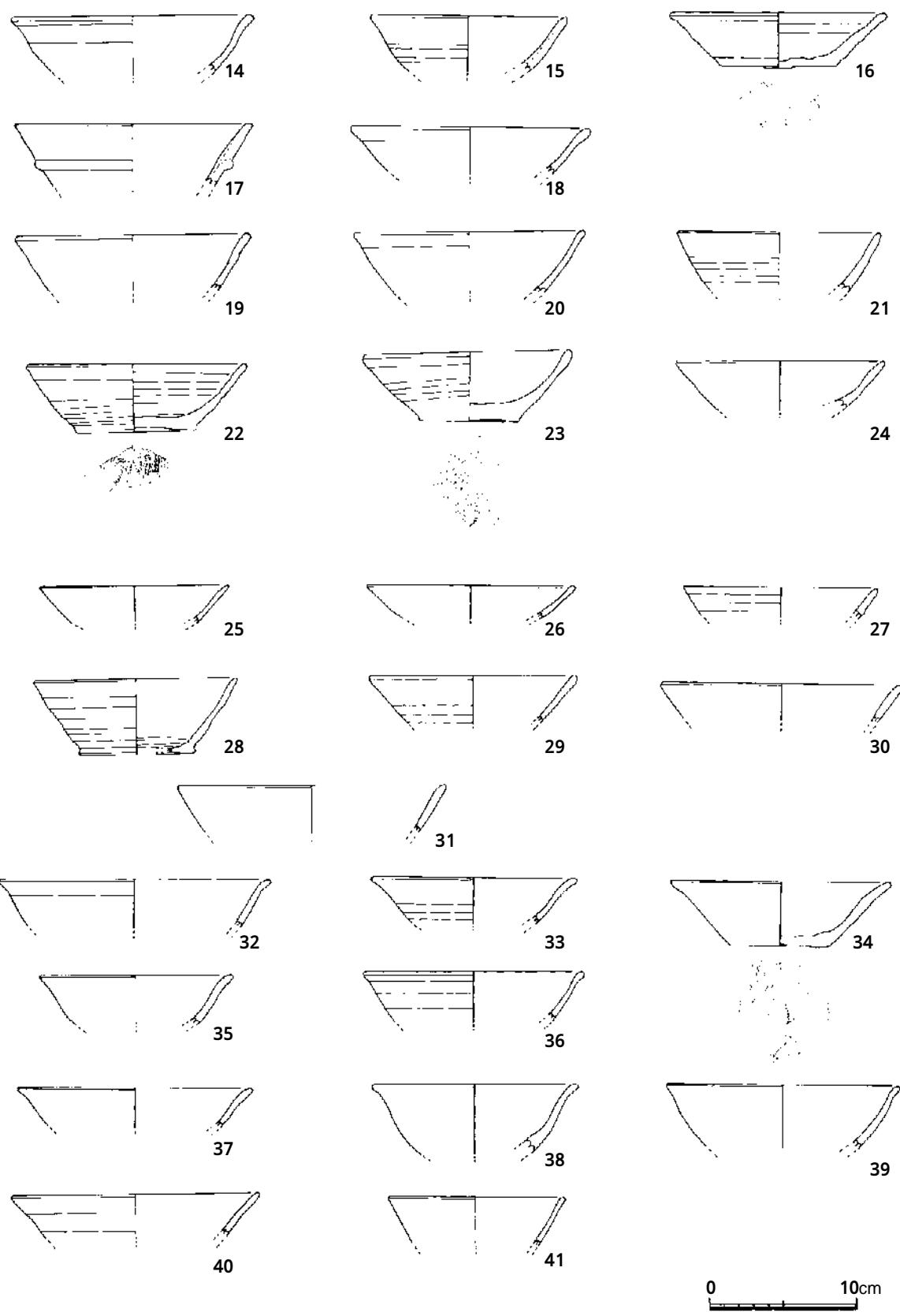


Fig.17 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器)

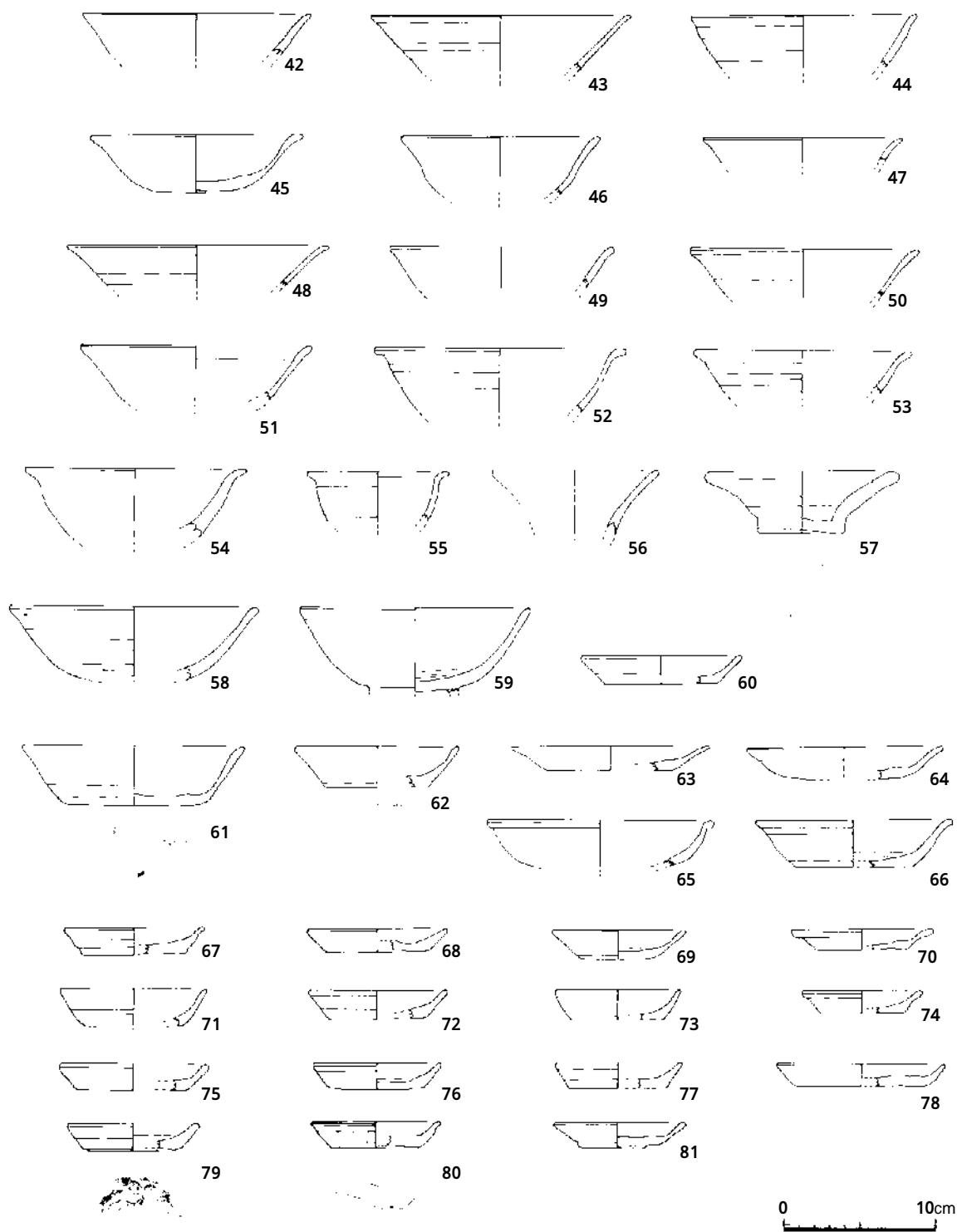


Fig.18 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器)

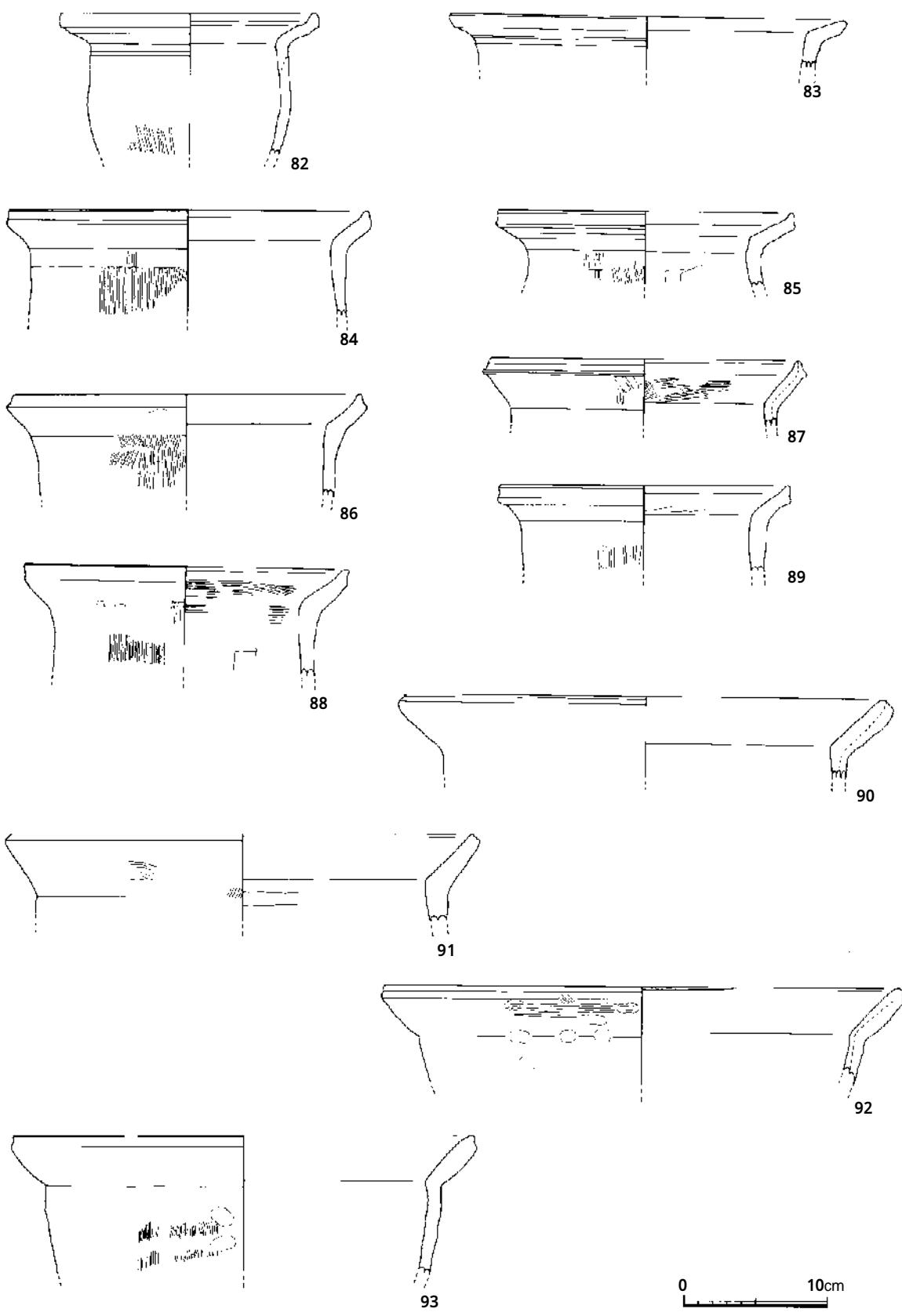


Fig.19 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器)

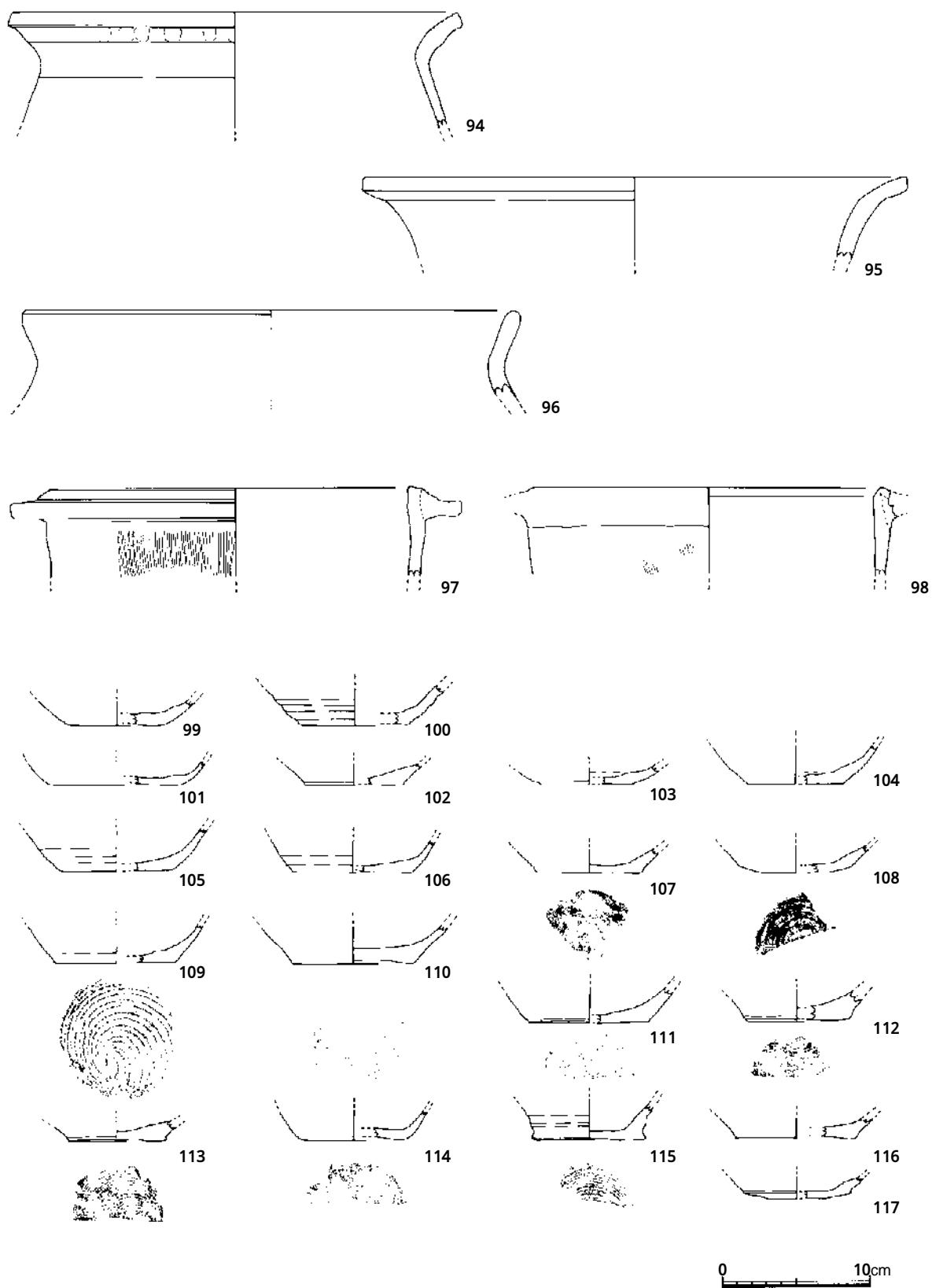


Fig.20 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器)

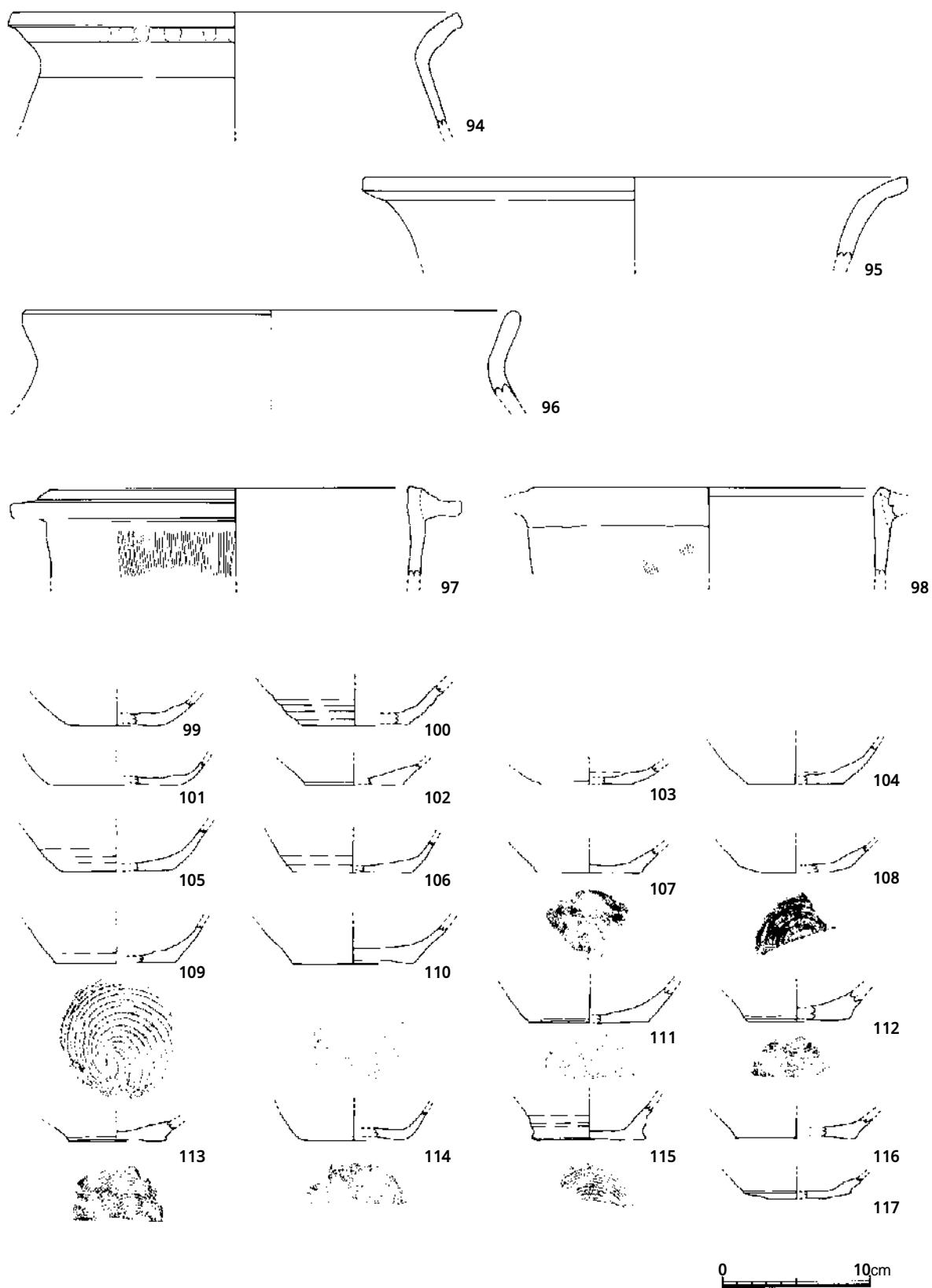


Fig.20 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器)

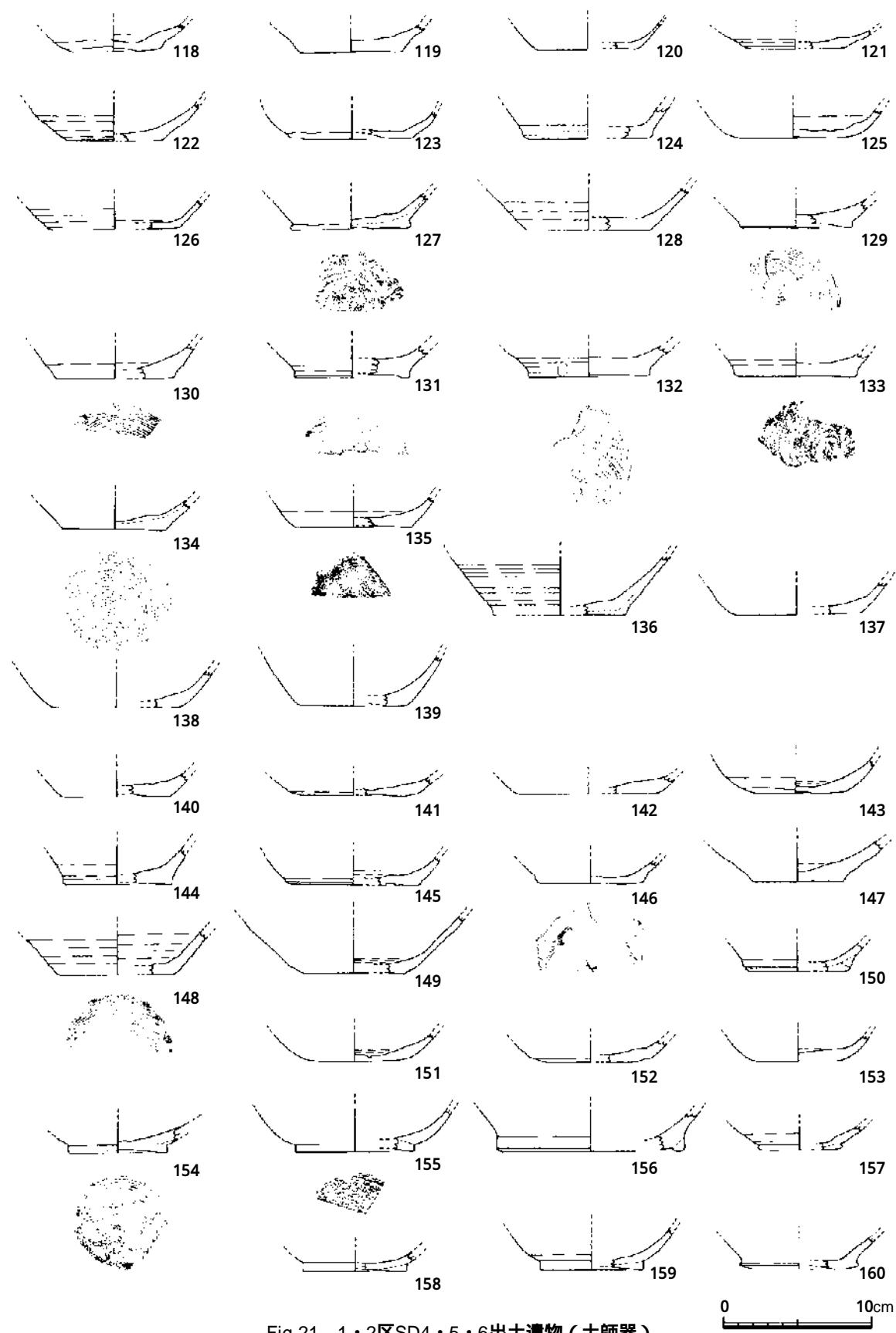
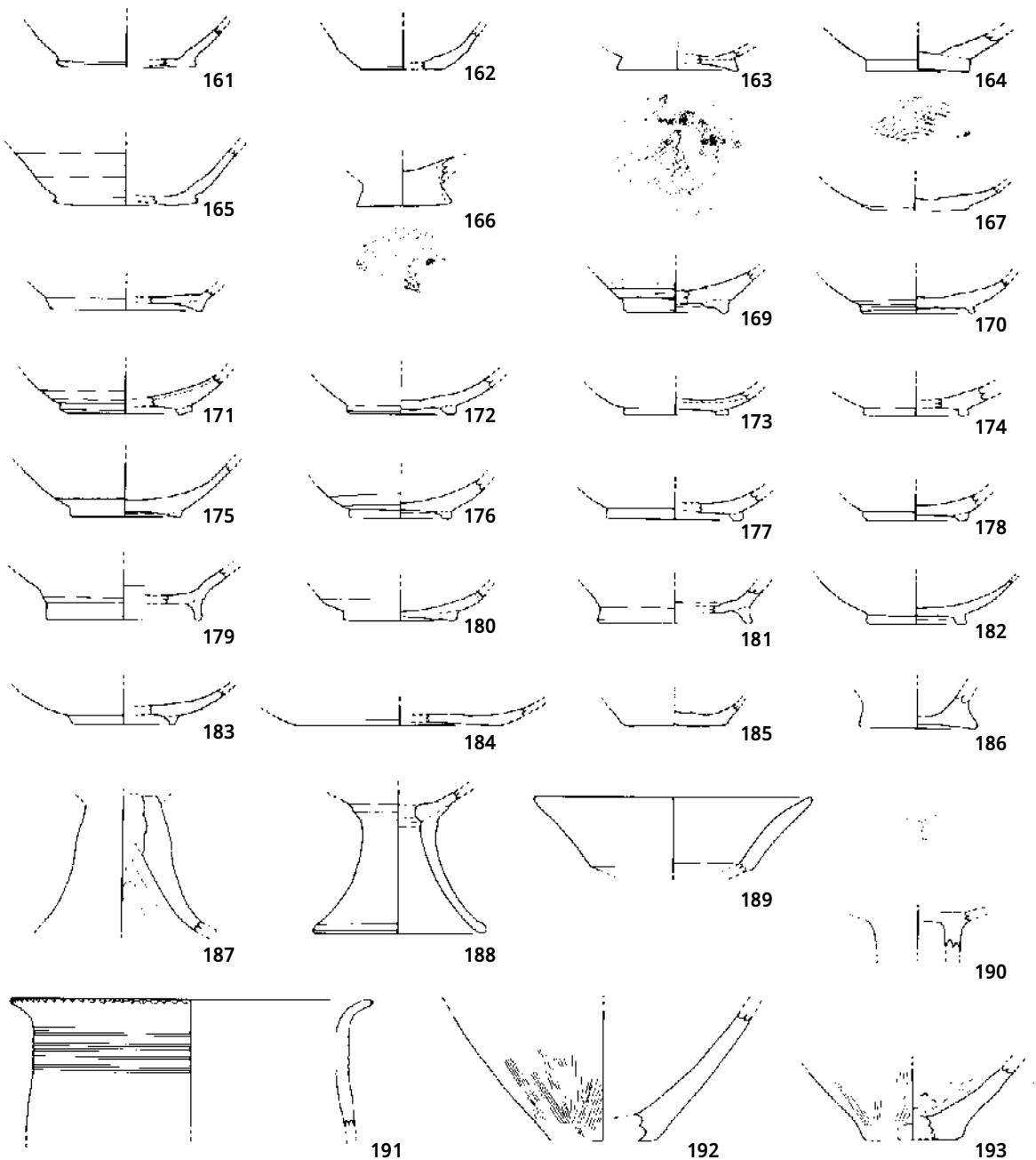


Fig.21 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器)



0 10cm

Fig.22 1・2区SD4・5・6出土遺物(土師器・弥生土器)

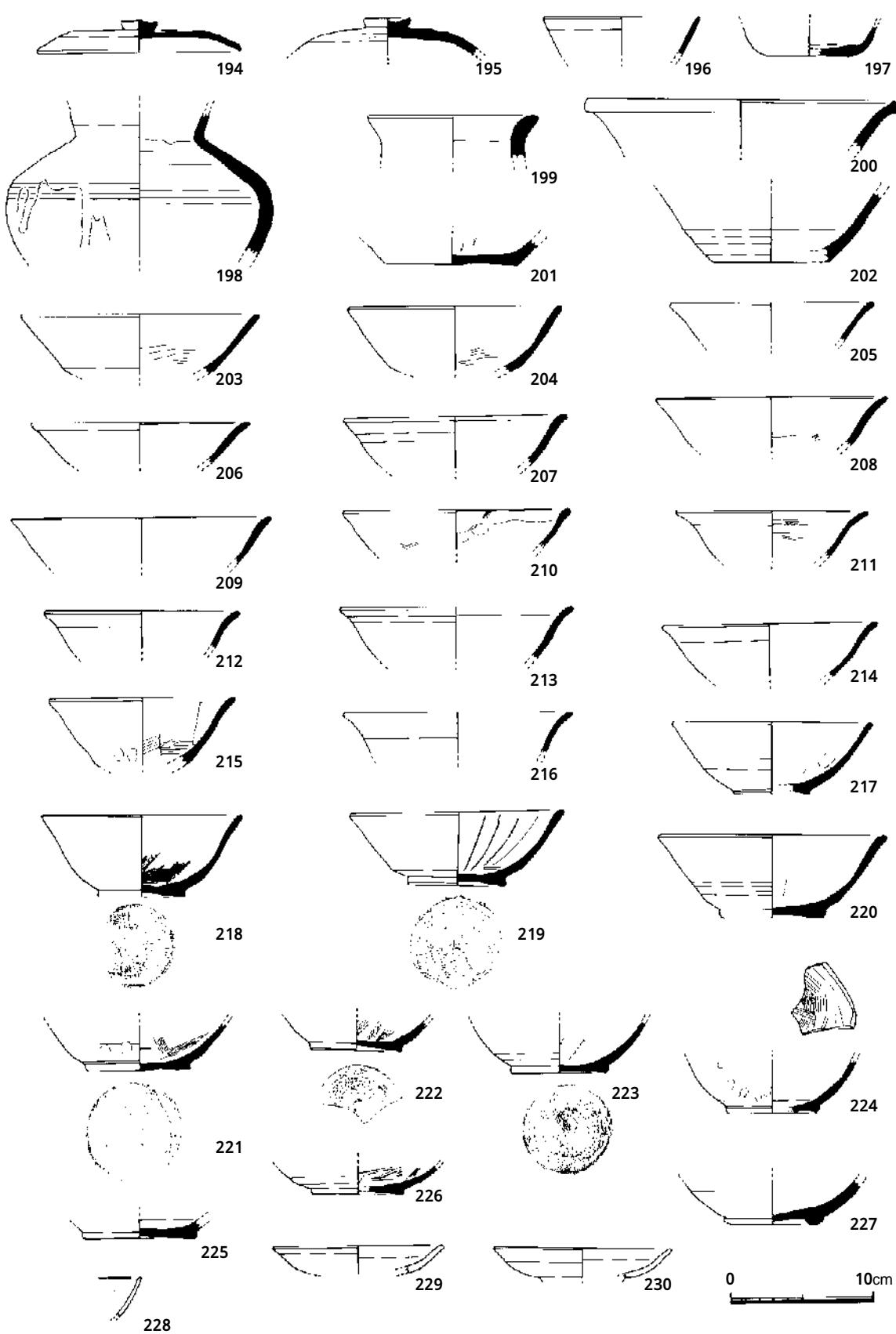


Fig.23 1・2区SD4・5・6出土遺物(須恵器・黒色土器・緑釉陶器)

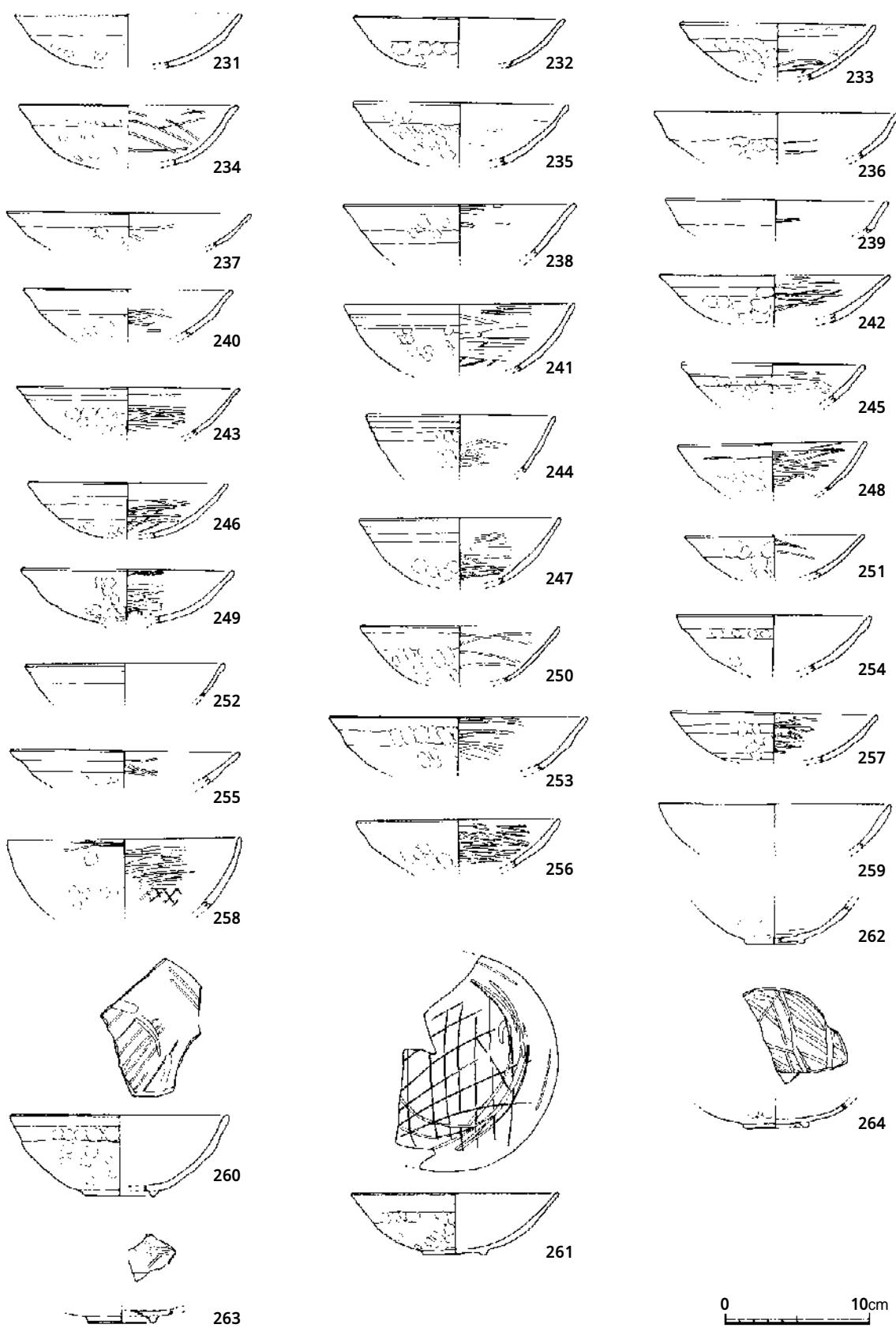
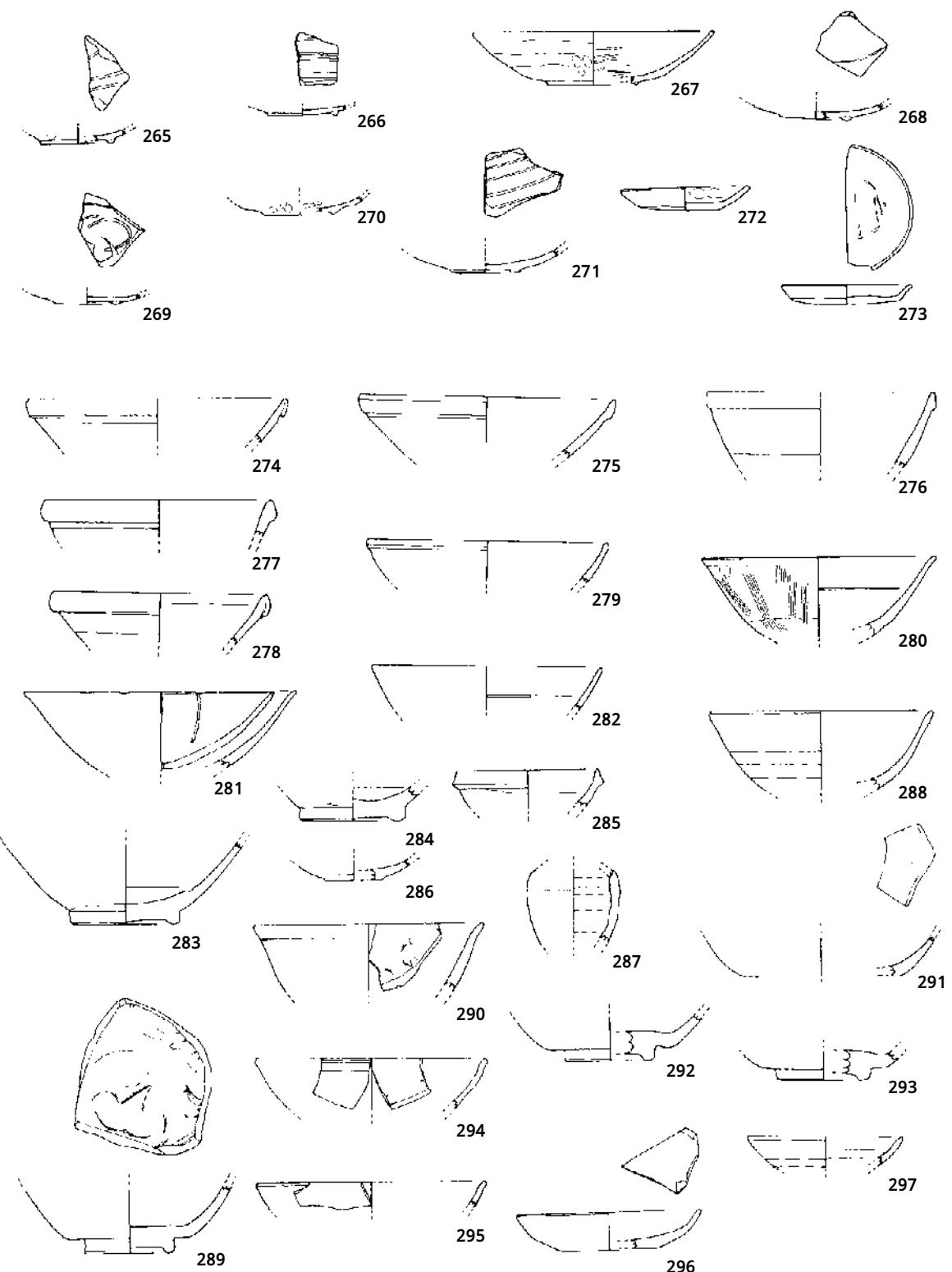


Fig.24 1・2区SD4・5・6出土遺物(瓦器)

0 10cm



0 10cm

Fig.25 1・2区SD4・5・6出土遺物(瓦器・貿易陶磁器)

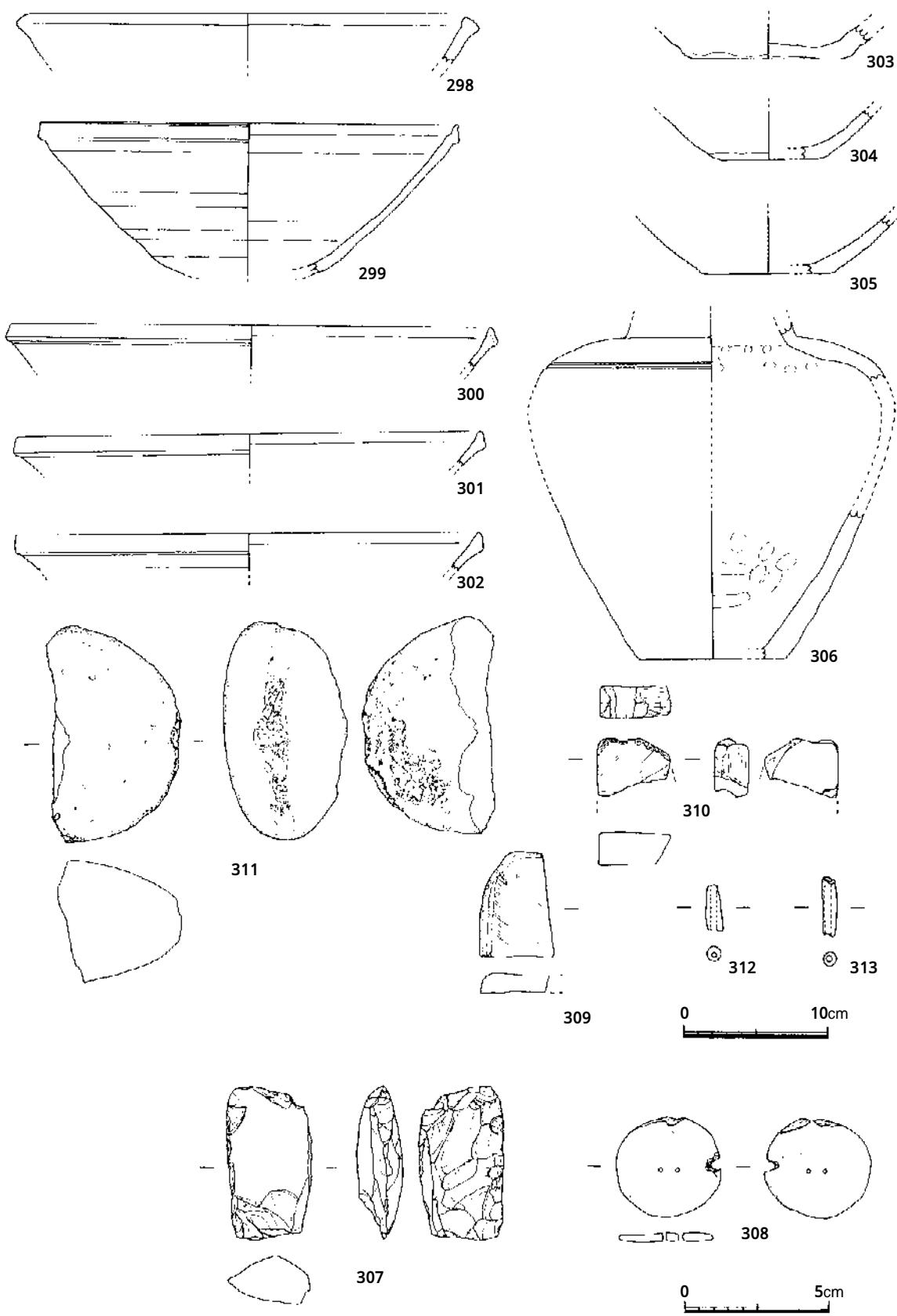


Fig.26 1・2区SD4・5・6出土遺物(東播系須恵器・備前・石器・土錐)

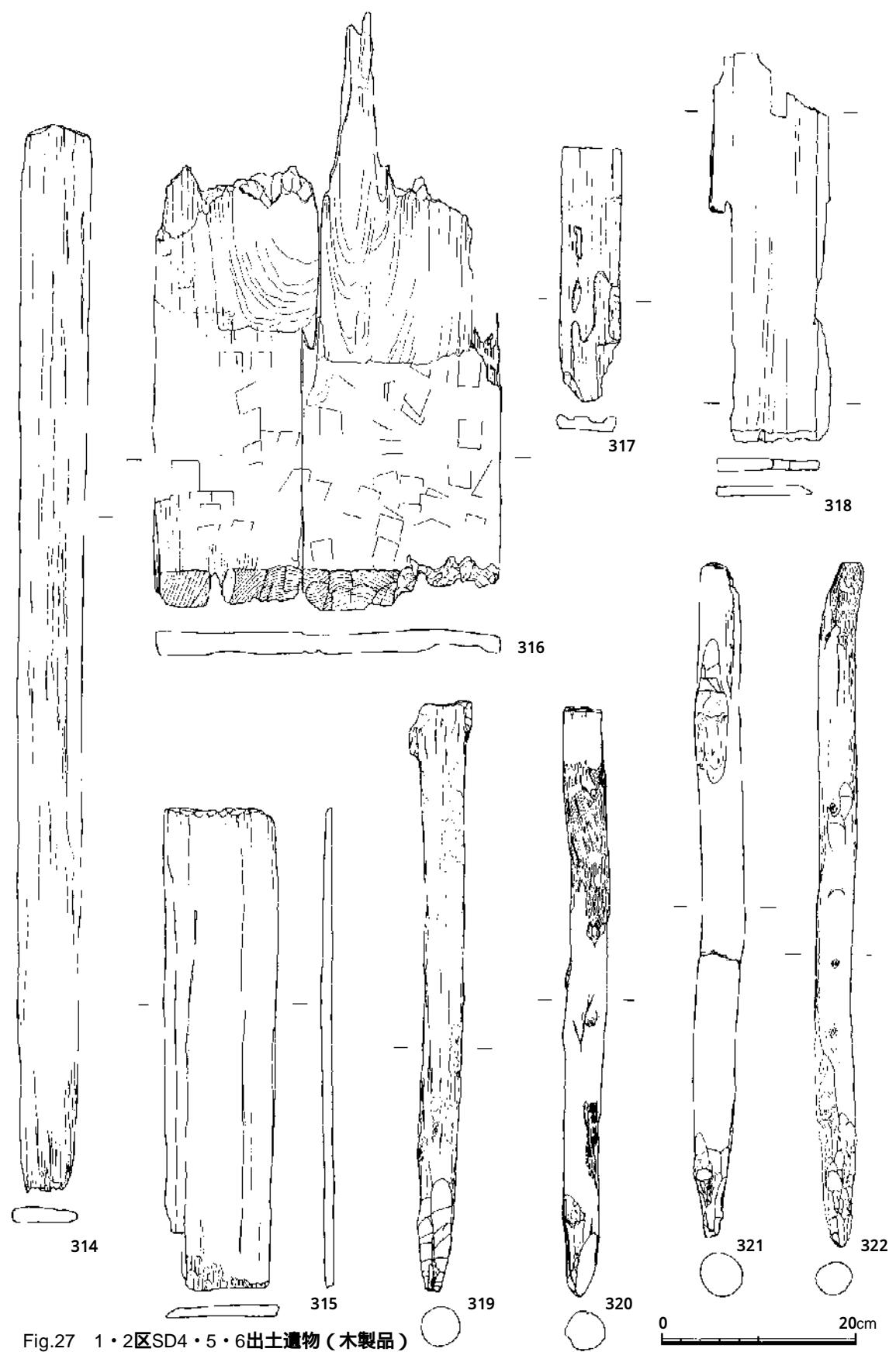


Fig.27 1・2区SD4・5・6出土遺物(木製品)

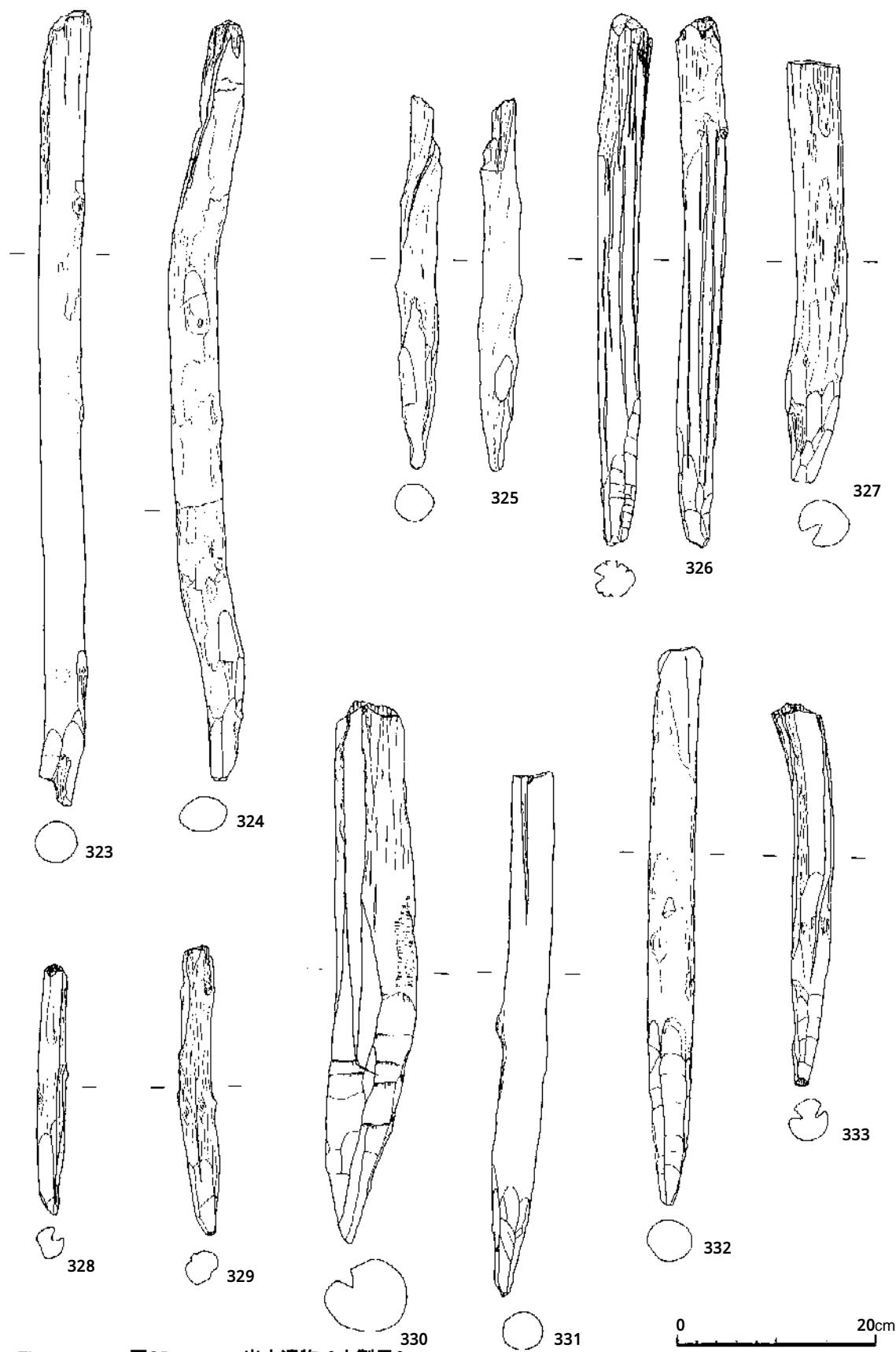


Fig.28 1・2区SD4・5・6出土遺物(木製品)

4. SD7

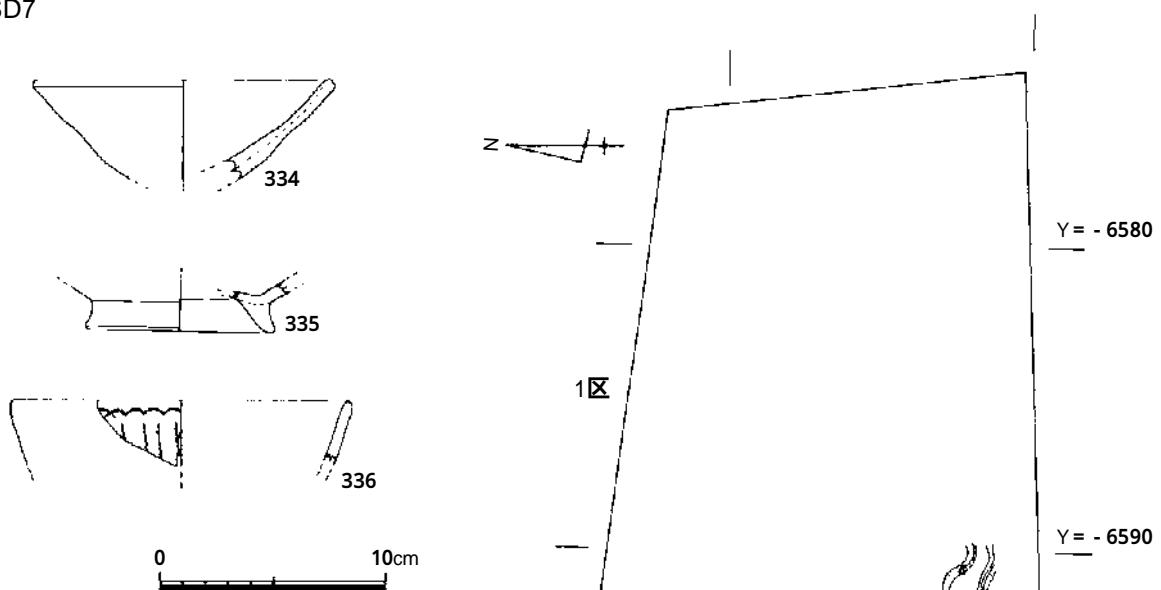


Fig.29 SD7出土遺物(土師器・青磁)

1、2区を通して、調査区の南壁に沿つて東西方向に流れる小溝である。一部違うところもあるが、おおむねSD4の南側の上2層を切って流れしており、2区で方向をやや北寄りに変える。東端は1区の南壁に、西端は2区の北壁に突き当たり終わっている。確認長は、途中消えている部分も入れてつなぐと30.4mとなる。幅は一部削平を受けて非常に狭いところもあるがおおむね50~70cm、深さ約20cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、埋土は灰黄色粘質土を主として、一部砂礫や砂が混じる。

遺物は、須恵器、土師器、青磁、白磁、瓦器などの細片が出土しているが、図示できるものとしては、土師器高杯(334)、土師器壊(335)、青磁碗(336)の3点のみである。

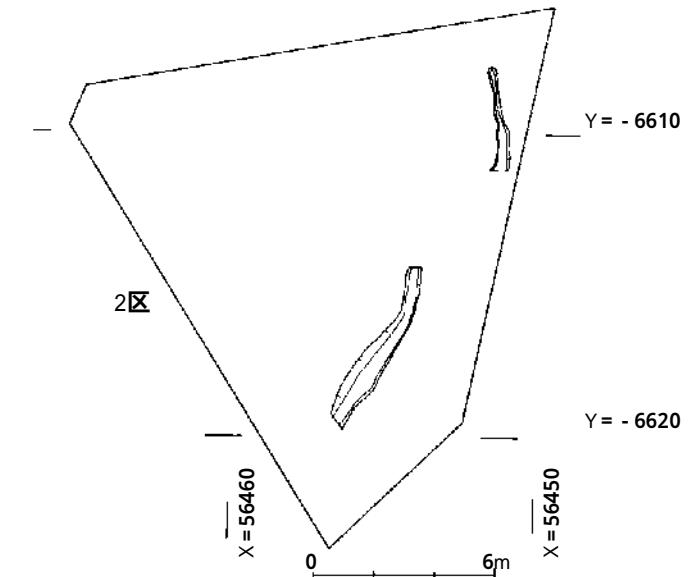


Fig.30 SD7配置図

5. 包含層

Ⅲ層からⅦ層にかけて遺物が包含されている。Ⅵ層からⅠ層に至る現代まで平坦で安定した堆積状況を呈していること、調査区近辺は16世紀の長宗我部地検帳にも水田としての記録が残っていること、Ⅵ層から水田の区画割のような溝遺構が検出されていることなどから、先述のSD4、5、6、7の溝埋没後は、Ⅵ層上面からⅠ層に至るまで耕作地として利用されていた可能性も考えられる。出土遺物は細片も含めると、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、貿易陶磁器、瓦質土器、備前、東播系須恵器、近世陶磁器、石器等多種にわたっている。

そのうち、図示し得たものとしては、土師器壺（344～351）、土師器椀（358～362）、土師器皿（364、365）、土師器甕（337、338、340）、土師器羽釜（342）、土師器鍋（341）、土錘（367）、須恵器椀（370）、瓦器椀（371～373、375～377）、瓦器皿（378、379）、緑釉供膳具（380）、白磁椀（381～386）、白磁皿（390）、青磁碗（388、389）、染付け（391）、東播系須恵器（392、393）、備前擂鉢（394～396）、瓦質羽釜（397、398）、近世陶器（399）、近世キセルのらう（400）、石鎌（401、402）、砥石（403）、田下駄（404）、糸巻き具（405）の62点である。

出土遺物を層別にみてみるとⅤ層までは近世の遺物が含まれるが、Ⅵ層からは大溝とほぼ同様の器種が出土し、中世までのもので占められている。

表採遺物

土師器甕（339）、土師器壺（352～357）、土師器椀（353）、須恵器壺（368）、須恵器椀（369）、瓦器椀（374）、白磁椀（387）、東播系捏ね鉢（392）の12点が廃土中から出土している。

註 Ⅶ層は基本層序のところで述べたように、SD4のA層並びにSD5A・B・C層上面とⅥ層下層土が混在している層である。

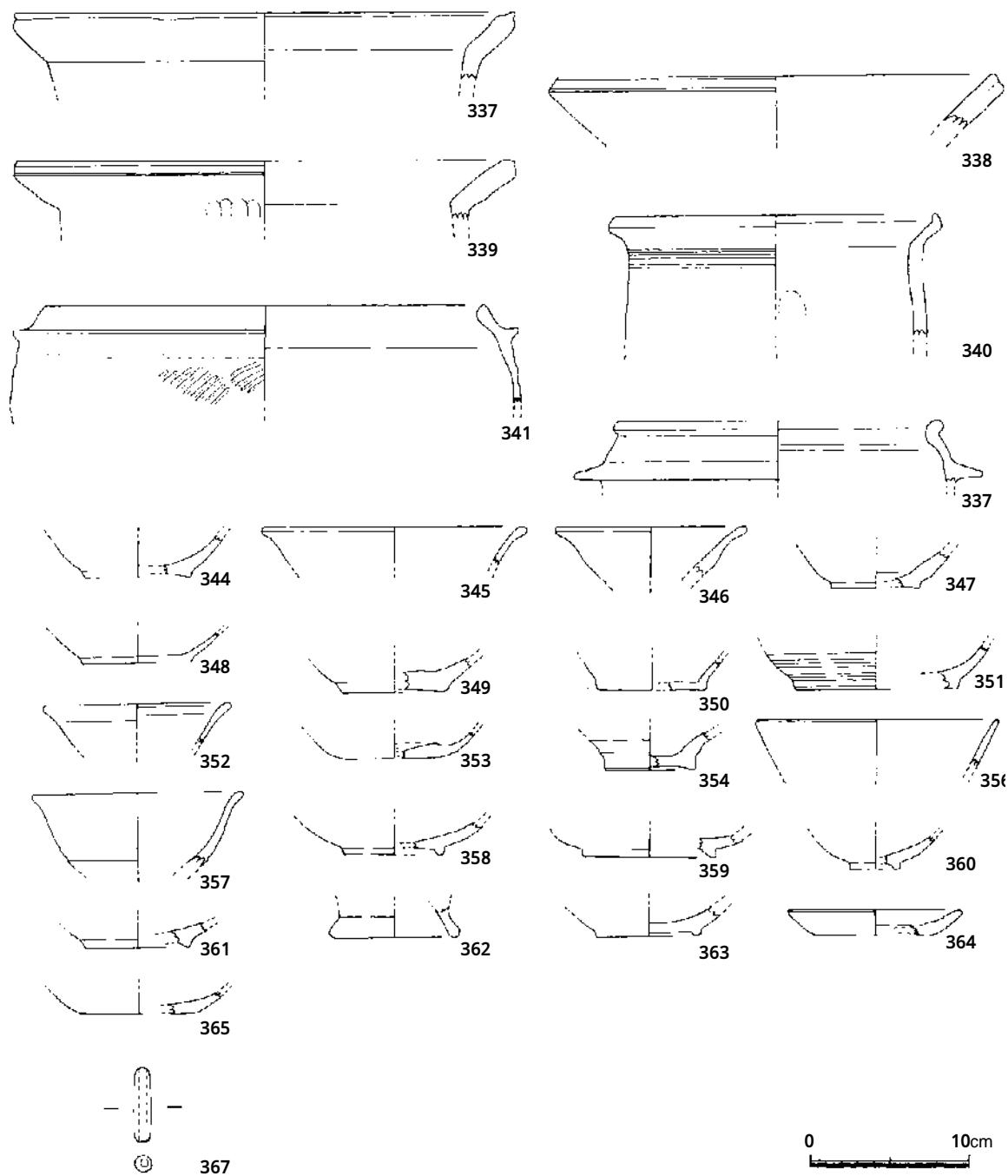


Fig.31 遺構外出土遺物(土師器)

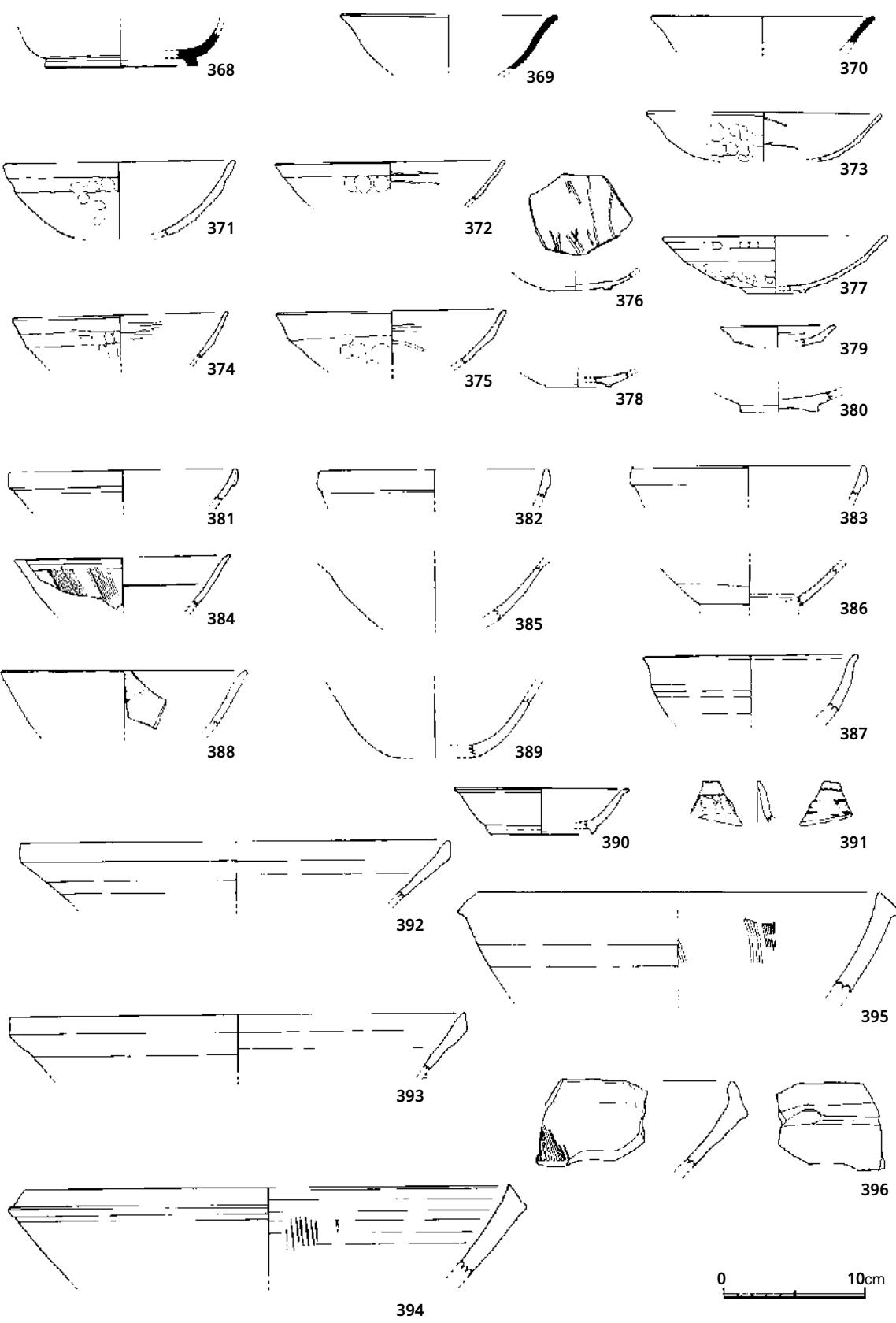


Fig.32 遺構外出土遺物（須恵器・瓦器・綠釉陶器・貿易陶磁器・東播系須恵器・備前）

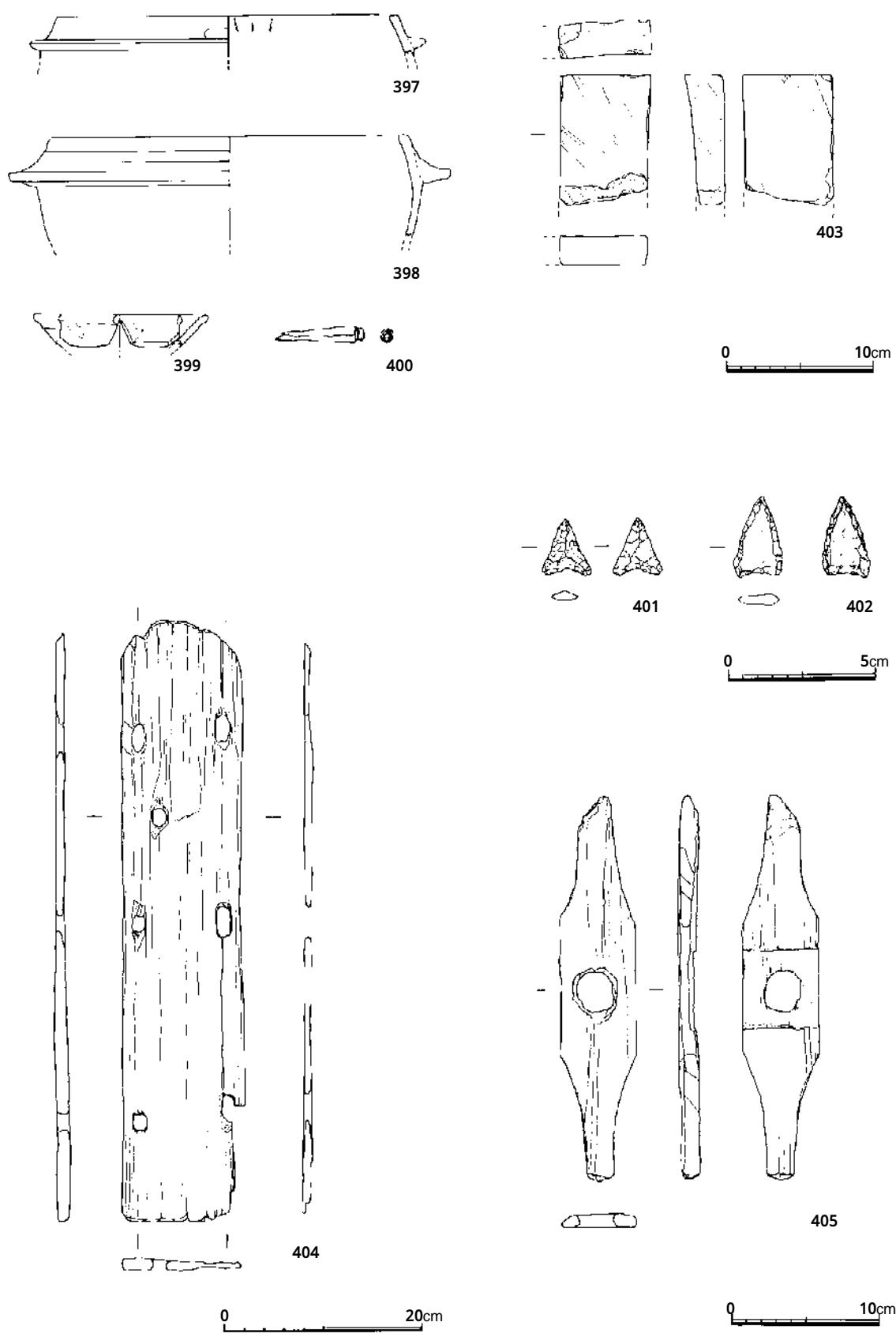


Fig.33 遺構外出土遺物（瓦質土器・陶器・煙管・石器・木製品）

Tab.3 1・2区 SD4・5・6・7出土遺物観察表(1)土師器

Fig No.	挿図 番号	出土地点 層位	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
17	14	SD7	壺	16.0(1.1)				粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。体部なかほどに段を有し、口縁はやや外反する。	壺I類
17	15	SD4A層	壺	12.2(3.7)				粘土巻き上げ成形後、ナデ調整。体部は内湾して立ち上がる	壺I類
17	16	SD5C層	壺	14.3 3.8		8.0		低い円盤状高台で糸切り。粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。体部が直線的に立ちあがっている。	壺I類
17	17	SD6B層	壺	10.6(4.3)				粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。体部は直線的に立ち上がり、中央付近に突窓が付く。	壺I類
17	18	SD6B層	壺	16.0(3.2)				内外面ナデ調整。口縁部はやや外反する。	壺I類
17	19	SD6A層	壺	15.8(3.8)				体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。内外面ともナデ調整。	壺I類
17	20	SD6A層	壺	15.5(4.2)				体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。内外面ともナデ調整。	壺I類
17	21	SD6A層	壺	13.6(4.0)				粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。体部は直線的に立ちあがっている。	壺I類
17	22	SD6B層	壺	14.6 4.6	8.2			粘土紐巻き上げ成形で、内外面とも横ナデ調整。体部は直線的に立ち上がり口縁部でやや外反する。底部糸切り。	壺I類
17	23	SD6B層	壺	14.0 4.9	6.8			粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。	壺I類
17	24	SD6A層	壺	14.0(3.4)				体部は直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く收めている。内外面ナデ調整。	壺I類
17	25	SD4C層	壺	12.8(2.5)				体部は直線的に立ち上がり、内外面ナデ調整。畿内産の可能性あり。	壺IIA類
17	26	SD6A層	壺	14.0(2.3)				体部は直線的に立ち上がる。内外面ナデ調整。	壺IIA類
17	27	SD6B層	壺	13.0(2.0)				体部から口縁にかけて直線的に立ち上がる。粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。	壺IIA類
17	28	SD6B層	壺	14.7 5.1	8.1			円盤状高台でヘラ切り。粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。	壺IIA類
17	29	SD6B層	壺	14.0(3.2)				体部は直線的に立ち上がっている。内外面ナデ調整。幅3mm程の箇状工具で削った痕あり。	壺IIA類
17	30	SD6A層	壺	16.0(2.5)				体部は直線的に立ち上がっている。内外面ナデ調整。	壺IIA類
17	31	SD6A層	壺	18.0(3.3)				体部は直線的に立ち上がる。内外面摩耗が著しく、調整不明。外面に煤が付着。	壺IIA類
17	32	SD6A層	壺	18.4(3.2)				体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。	壺IIB類
17	33	SD4D層	壺	13.6(3.1)				体部は直線的に立ち上がり、口縁部は肥大し外反する。粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。	壺IIB類
17	34	SD5C層	壺	15.0(4.4)				底部粘土巻きで、底部ヘラ切り。内外面横ナデ調整。	壺IIB類
17	35	SD5C層	壺	13.0(3.4)				体部は内湾して立ち上がり、口縁はやや外反する。内外面ともナデ調整。	壺IIB類
17	36	SD5C層	壺	14.8(3.4)				粘土巻き上げ成形後、横ナデ調整。体部は内湾して立ち上がり、口縁はやや外反する。	壺IIB類
17	37	SD5C層	壺	15.8(2.6)				口縁部はやや外反する。内外面ともナデ調整。	壺IIB類
17	38	SD5C層	壺	13.6(4.7)				体部は内湾しながら立ち上がり、口縁は外反する。口縁端部は丸く收める。体部外面に2条の沈線。内外面ナデ調整。	壺IIB類
17	39	SD6A層	壺	15.6(4.3)				体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。内外面ナデ調整。	壺IIB類
17	40	SD5C層	壺	16.8(2.9)				内面は横ナデ調整。外面は摩耗が著しく観察不可能。外面に炭化物の付着物有り。	壺IIB類
17	41	SD6B層	壺	11.8(3.2)				体部から口縁にかけて直線的に立ち上がる。口縁端部はやや外反する。内外面ナデ調整。	壺IIB類
18	42	SD6	壺	14.9(2.8)				体部は直線的に立ち上がり、口縁部は弱く外反する。内外面ナデ調整。	壺IIB類
18	43	SD6B層	壺	17.0(3.9)				体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がっている。口縁部はわずかに外反している。粘土紐巻き上げ成形後、横ナデ調整。	壺IIB類
18	44	SD6B層	壺	14.6(3.6)				体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。粘土紐巻き上げ成形の後、内外面ナデ調整。	壺IIB類
18	45	SD6	壺	13.8 3.8	3.6			粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	壺IIB類
18	46	SD6A層	壺	13.0(3.9)				体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。内外面ナデ調整。	壺IIB類
18	47	SD6A層	壺	13.0(1.7)				口縁部はやや外反する。内外面ともナデ調整。	壺IIB類
18	48	SD6A層	壺	16.2(2.8)				体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。内外面ともナデ調整。	壺IIB類
18	49	SD6A層	壺	14.6(2.7)				体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。内外面ともナデ調整。	壺IIB類
18	50	SD6	壺	14.7(3.1)				体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともナデ調整。	壺IIB類
18	51	SD6A層	壺	15.0(3.7)				体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。内外面ナデ調整。	壺IIB類

Tab.4 1・2区 SD4・5・6・7出土遺物観察表(2)土師器

Fig No.	挿図 番号	出土地点 層位	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
18	52	SD6A層	壺	16.3(4.3)				粘土巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。外面に煤付着。	壺II C類
18	53	SD6A層	壺	14.0(2.9)				体部は直線的に立ち上がり、口縁は肥大し外反している。粘土巻き上げ成形で、外面ナデ調整。内面は摩耗が著しく調整不明。	壺II C類
18	54	SD6A層	壺	14.4(4.5)				体部は少し内湾しながら立ち上がり、口縁端部は大きく外反する。摩耗が著しく調整不明。	壺II C類
18	55	SD6A層	壺	9.2(3.4)				体部は内湾して立ち上がり、粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。外面に煤が付着している。	壺II C類
18	56	SD6A層	壺	10.5(4.2)				ゆるやかに外反しながら立ち上がっていく。摩耗が著しく調整不明。	壺III類
18	57	SD6B層	壺	12.0	4.1		5.4	しっかりと円盤状高台。体部から口縁にかけてやや外反しながら立ち上がる。粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。	壺III類
18	58	SD5C層	椀	16.2(4.8)				粘土紐巻き上げ成形後、横ナデ調整。体部は内湾してたちあがり口縁はやや外反する。	椀
18	59	SD6	椀	15.0(5.6)				粘土紐巻き上げ成形で、内外面ともナデ調整。後から輪高台を張り付ける。	椀
18	60	SD6B層	皿	10.4	1.9		8.2	体部は直線的に立ち上がる。粘土巻き上げ成形後、横ナデ調整。底部は平底でヘラ切り。	皿
18	61	SD6B層	皿	14.6	3.9		9.0	平底でヘラ切り。内外面ともナデ調整。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	皿
18	62	SD6A層	皿	10.8	2.7		6.6	平底で底部糸切り。内外面ナデ調整。	皿
18	63	SD4	皿	12.8	1.6		8.0	底部ヘラ切り。内外面ナデ調整。	皿
18	64	SD4C層	皿	12.8				粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。口縁部は外反する。	皿
18	65	SD5C層	皿	14.5(2.0)				底部はヘラ切りで、体部は丸みをあびており、口縁端部は玉縁状になっている。ナデ調整。	皿
18	66	SD6B層	皿	13.0	3.1		7.8	体部は直線的に立ち上がり、中ほどに段を有す。口縁はやや外反し、端部を外方向に折曲げている。粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。	皿
18	67	SD4B層	小皿	9.0	1.8		6.6	粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。	小皿
18	68	SD5C層	小皿	9.2	1.5		6.8	底部ヘラ切り。摩耗が著しいため内外面観察不能。	小皿
18	69	SD5C層	小皿	8.6	1.9		5.2	底部ヘラ切り。内外面ともナデ調整。体部は直線的に立ち上がる。	小皿
18	70	SD5C層	小皿	9.0	1.4		5.6	粘土巻き上げ成形後、横ナデ調整。底部は糸切り。体部は斜め上方にたちあがり、口縁部は外反する。	小皿
18	71	SD6B層	小皿	9.6(2.5)				体部は直線的に立ち上がる。粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。	小皿
18	72	SD6	小皿	9.0	2.0		6.0	底部ヘラ切り。粘土巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。	小皿
18	73	SD6B層	小皿	8.4	2.0		6.0	底部は摩耗がいちじるしく、調整不明。内外面はナデ調整。	小皿
18	74	SD6B層	小皿	8.0	1.5		5.4	底部平底で糸切り。内外面ナデ調整。口縁部は外反する。	小皿
18	75	SD6A層	小皿	9.6	1.8		7.4	粘土巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。	小皿
18	76	SD6C層	小皿	8.4	1.8		6.5	底部は摩耗が著しく調整不明。内外面はナデ調整。	小皿
18	77	SD6A層	小皿	8.1	1.7		6.4	平底で底部はヘラ切り。粘土巻き上げ成形後、ナデ調整。	小皿
18	78	SD6A層	皿	11.0	1.5		8.0	底部糸切り。内外面ナデ調整。体部は直線的に立ち上がり口縁端部を丸く收める。	皿
18	79	SD6A層	小皿	8.6	1.8		6.4	粘土紐をくみあげて、横ナデ調整。底部は平底でヘラ切り。	小皿
18	80	SD6A層	小皿	8.6	1.7		5.8	平底でヘラ切り。口縁端部がやや外反している。横ナデ調整。灯明皿に使われた可能性がある。	小皿
18	81	SD6A層	小皿	8.3	1.7		5.4	底部平底でヘラ切り。内外面ナデ調整。体部は直線的に立ち上がっている。	小皿
19	82	SD6C層	甕	17.5(9.9)				内外面ナデ調整。体部下方に叩き目。	甕I類
19	83	SD6A層	甕	27.3(3.6)				口縁部は「く」字状に外反させており、端部を尖らせている。内外面ナデ調整。外面は丁寧に仕上げている。	甕I類
19	84	SD6B層	甕	25.0(7.4)				口縁部外面に横ナデ調整。内面は横方向のハケ調整後、横ナデ調整。体部外面には縦目のハケ調整。口縁部は「く」字状に外反している。	甕II A類
19	85	SD6B層	甕	20.4(5.1)				口縁部は「く」字状に外反している。内外面ナデ調整。	甕II A類
19	86	SD6B層	甕	24.0(7.2)				口縁部外面とも横方向のハケ調整後、横ナデ調整。体部外面は縦方向のハケ目。内面はナデ調整。口縁部は「く」字状に外反している。	甕II A類
19	87	SD6	甕	21.3(4.6)				口縁部外面は横ナデ調整と少し縦方向のハケ目。内面は横方向のハケ調整の後、横ナデ調整。口縁部は「く」字状に外反し、端部をつ	甕II A類
19	88	SD6B層	甕	22.4(7.5)				口縁部外面に横ナデ調整。内面は横方向のハケ調整後、横ナデ調整。体部外面には縦方向のハケ調整。口縁部は「く」字状に外反している。	甕II A類
19	89	SD7	甕	20.0(6.0)				口縁部内面は横方向のハケ調整後、横ナデ調整。外面はナデ調整。体部外面に縦方向のハケ調整。口縁部は「く」字状に外反している。	甕II A類

Tab.5 1・2区 SD4・5・6・7出土遺物観察表(3)土師器

Fig No.	挿図 番号	出土地点 層位	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
19	90	SD6A層	甕	33.2(5.6)				口縁部は「く」字状に外反しており、肥大している。内面はナデ調整。外面は口縁にヘラ削りがみられる。	甕II B類
19	91	SD6B層	甕	32.0(6.1)				口縁部が「く」字状に外反する。内面はナデ調整。外面は荒いハケ調整。	甕II B類
19	92	SD5C層	甕	36.0(6.7)				口縁部が「く」字状に外反する。内外面ともハケ調整の後、ナデ調整。雲母などを含む。	甕II B類
19	93	SD6C層	甕	32.1(9.7)				口縁部は「く」字状に外反しており、口縁部外面は横方向のハケ調整。体部外面は縦方向のハケ目。指頭圧痕あり。内面はナデだと思われる。	甕II B類
20	94	SD4C層	甕	30.0(7.8)				口縁部は「く」字状に外反する。内外面ともナデ調整。口縁部は肥大している。	甕III A類
20	95	SD5C層	甕	36.6(5.6)				口縁部が「く」字状に外反する。内外面ともナデ調整。	甕III B類
20	96	SD5C層	甕	32.0(6.2)				口縁部が「く」字状に外反する。内外面ともナデ調整。	甕III B類
20	97	SD6B層	羽釜	23.2(6.0)				鍔は水平に突出しており、鍔と口縁端部はほぼ同じ高さである。体部外面に縦方向のハケ調整。その他は内外面ナデ調整。	羽釜
20	98	SD5	羽釜	23.0(5.9)				体部外面に縦方向のハケ調整がみられる。口縁端部にそのままついでいた鍔が割れていると思われる。	羽釜
20	99	SD4	坏	(1.7)	6.2	粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。			
20	100	SD4	坏	(2.7)	7.2	底部糸切り。粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。			
20	101	SD5C層	坏	(1.7)	9.0	内外面も摩耗が著しいため観察不能。体部は内湾して立ち上がる。			
20	102	SD5C層	坏	(1.5)	6.6	粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。			
20	103	SD5C層	坏	(1.3)	6.0	平底だが、外面は摩耗が著しく、調整不明。内面は横ナデ調整。			
20	104	SD6B層	坏	(2.6)	6.4	粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。体部は内湾しながら立ち上がっている。			
20	105	SD5	坏	(2.8)	7.4	平底でヘラ切りか。粘土紐巻き上げ成形だと思われる。内外面横ナデ調整。			
20	106	SD5C層	坏	(2.3)	8.0	平底でヘラ切りか。粘土巻き上げ成形後、内外面ともナデ調整。体部は直線的に立ち上がる。			
20	107	SD5C層	坏	(1.7)	7.0	底部はヘラ切りで、粘土紐巻き上げの後、ロクロで横ナデ成形。平底。			
20	108	SD5C層	坏	(1.9)	7.6	底部は摩耗が著しく、観察不可能。内外面とも横ナデ調整。			
20	109	SD5C層	坏	(2.7)	8.0	平底で底部糸切り。体部は直線的に立ち上がり、内外面ともナデ調整。内面に煤が付着している。			
20	110	SD5C層	坏	(3.6)	8.2	底部糸切り。内外面ナデ調整。			
20	111	SD5C層	坏	(2.4)	8.0	底部は平底で糸切り。粘土紐巻き上げ成形で内面横ナデ調整。外面は摩耗が著しいため、調整不明。			
20	112	SD5C層	坏	(2.1)	7.1	底部糸切りで、粘土巻き上げ成形。外面ナデ調整。内面は摩耗が著しいが横ナデか。			
20	113	SD5C層	坏	(1.4)	6.7	低い円盤状高台で糸切り。内外面ナデ調整。			
20	114	SD5C層	坏	(2.2)	6.8	平底で底部糸切り。外面は摩耗が著しいため、調整不明瞭。内面は横ナデ調整。			
20	115	SD6B層	坏	(2.7)	7.6	平底でヘラ切り。粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。体部は底から直線的に立ち上がっている。			
20	116	SD6B層	坏	(1.5)	7.8	平底で底部糸切り。内外面とも摩耗が著しく、観察不可能。			
20	117	SD5C層	坏	(1.5)	7.3	底部は摩耗が著しく、観察不可能。内外面はナデ調整。			
21	118	SD6B層	坏	(1.9)	6.6	底部ヘラ切り。内外面ナデ調整。粘土紐巻き上げ成形。体部は直線的に立ち上がる。			
21	119	SD6B層	坏	(1.8)	3.5	底部平底でヘラ切り。体部は直線的に立ち上がっている。全体的に摩耗が著しく、調整不明。			
21	120	SD6B層	坏	(1.8)	6.6	底部ヘラ切り。内外面ナデ調整。			
21	121	SD6	坏	(1.4)	7.1	底部平底でヘラ切り。ヘラ切り痕は消してある。粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。			
21	122	SD5C層	坏	(2.7)	6.0	平底でヘラ切り。内外面ナデ調整。体部はやや内湾して立ち上がり、中ほどで段を有する。外面に煤付着。			
21	123	SD6B層	坏	(2.0)	8.4	底部平底でヘラ切り。内外面ナデ調整。			
21	124	SD6B層	坏	(2.1)	8.8	底部ヘラ切り。粘土巻き上げ成形後、外面ナデ調整。内面もナデ調整か。			
21	125	SD6B層	坏	(2.0)	7.4	底部平底でヘラ切り。体部は直線的に立ち上がる。内外面に煤が付着。			
21	126	SD6C層	坏	(1.9)	8.8	粘土巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。底部ヘラ切り。内外面に煤付着。			
21	127	SD5	坏	(2.3)	8.0	低い円盤状高台で、底部ヘラ切り。内外面ナデ調整。内面は摩耗が著しいため、観察不可能。			

Tab.6 1・2区 SD4・5・6・7出土遺物観察表(4)土師器

Fig No.	挿図 番号	出土地点 層位	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
21	128	SD6A層	壺	(4.0)	8.2	底部平底で糸切り。粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。内面全面に煤が付着している。			
21	129	SD6B層	壺	(2.0)	7.4	円盤状高台で底部糸切り。内外面ともナデ調整。			
21	130	SD5C層	壺	(2.2)	8.0	底部糸切り。粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。			
21	131	SD6C層	壺	(2.3)	7.6	円盤状高台で底部糸切り。内外面ともナデ調整。体部は直線的に立ち上がっている。			
21	132	SD4C層	壺	(2.0)	8.0	円盤状高台で、糸切り。粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。			
21	133	SD5C層	壺	(1.5)	8.0	体部は直線的に立ち上がる。粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。底部平底で糸切り。			
21	134	SD5C層	壺	(2.1)	7.0	平底で糸切り。内面ナデ調整後、ハケ調整か。外面は摩耗が著しく調整は不明。体部は直線的に立ち上がる。			
21	135	SD6B層	壺	(2.0)	7.8	底部平底で粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。			
21	136	SD5	壺	(4.0)	8.9	円盤状高台。底部は摩耗が著しいため、観察不能。粘土巻き上げ成形の後、内外面ナデ調整。			
21	137	SD4	壺	(2.1)	8.6	平底。内外面とも摩耗が著しく、調整不明。体部はやや内湾している。			
21	138	SD4	壺	(2.6)	9.0	底部は摩耗が著しく、調整不明。外面ナデ調整で、内面もナデか。体部は内湾して立ち上がる。			
21	139	SD5C層	壺	(3.5)	7.0	底部平底。内外面ナデ調整。体部は直線的に立ち上がっている。			
21	140	SD5C層	壺	(1.8)	7.3	体部は直線的に立ち上がる。内外面ナデ調整。			
21	141	SD5C層	壺	(1.3)	7.4	内外面ナデ調整。内面に煤が付着。			
21	142	SD6B層	壺	(1.2)	9.4	内外面とも摩耗が著しく、調整不明。			
21	143	SD5	壺	(2.5)	6.6	粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。体部は内湾して立ち上がる。			
21	144	SD5C層	壺	(2.7)	7.2	円盤状高台でヘラ切り。粘土巻き上げ成形後、ナデ調整。			
21	145	SD5C層	壺	(2.1)	9.2	平底でヘラ切り。内外面ナデ調整。外面に煤が付着している。			
21	146	SD5C層	壺	(1.6)	7.0	平底。内外面ナデ調整。			
21	147	SD5C層	壺	(2.7)	6.2	しっかりとした円盤状高台で糸切り痕をナデで消してある。粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。体部は直線的に立ち上がる。			
21	148	SD5C層	壺	(3.0)	7.6	粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。底部は平底で糸切り。体部は直線的に立ち上がっている。			
21	149	SD5C層	壺	(3.8)	7.0	粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。体部は直線的に立ち上がっている。			
21	150	SD5C層	壺	(2.0)	7.2	円盤状高台。底部は摩耗が著しいため、調整不明。内外面はナデ調整。			
21	151	SD5C層	壺	(1.9)	6.0	粘土紐巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。体部は底部から内湾しながら立ち上がっている。			
21	152	SD5C層	壺	(1.5)	7.0	内外面とも摩耗が著しいため、調整不明。			
21	153	SD6B層	壺	(1.2)	6.0	底部は摩耗が著しく、調整不明。内外面はナデ調整か。			
21	154	SD6B層	椀	(2.1)	6.6	円盤状高台で底部糸切り。粘土巻き上げ内面ナデ調整。外面は摩耗が著しいため、調整不明。			
21	155	SD5C層	椀	(2.9)	8.0	円盤状高台。内面ナデ調整。外面は摩耗が著しく調整不明。			
21	156	SD6B層	椀	(2.8)	12.6	後から張り付けたしっかりとした輪高台をもつ。全体的に摩耗が著しいため調整不明。			
21	157	SD6B層	壺	(1.6)	5.6	低い円盤状高台。粘土紐巻き上げで、内外面ナデ調整。体部は直線的に立ち上がる。			
21	158	SD6B層	椀	(1.4)	7.0	円盤状高台で底部ヘラ切り。内外面ナデ調整か。			
21	159	SD6	椀	(2.9)	7.0	円盤状高台で底部ヘラ切り。粘土巻き上げ成形後、ナデ調整。			
21	160	SD5C層	壺	(2.3)	8.0	体部は直線的に立ち上がる。内外面ナデ調整。底部平底でヘラ切り。			
22	161	SD6B層	壺	(2.5)	8.0	円盤状高台で底部ヘラ切り。内外面ともナデ調整。			
22	162	SD6B層	壺	(2.3)	5.0	内外面とも摩耗が著しく、調整不明。			
22	163	SD6B層	椀	(1.2)	7.0	円盤状高台で糸切り。高台を張り付けたあと、籠状工具で削っている。内外面ナデ調整。			
22	164	SD6C層	椀	(2.2)	6.0	しっかりとした円盤状高台で、底部糸切り。内面は摩耗が著しく調整不明。外面はナデか。			
22	165	SD5	壺	(3.4)	8.4	低い円盤状高台。粘土紐巻き上げ成形で横ナデ調整。体部は直線的に立ち上がっている。			

Tab.7 1・2区 SD4・5・6・7出土遺物観察表(5)土師器

Fig No.	挿図 番号	出土地点 層位	器形	法量(cm)				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
22	166	SD6B層	不明	(2.8)	5.5	柱状高台で底部糸切り。摩耗が著しく調整は不明確。			
22	167	SD6A層	坏	(1.5)	6.0	内外面ともナデ調整。底部は摩耗が著しく、調整不明。			
22	168	SD4D層	椀	(1.3)	8.8	輪高台。外面に煤が付着。全体的に摩耗が著しく調整不明。			
22	169	SD5C層	椀	(2.5)	6.1	輪高台。外面ナデ調整。内面は摩耗が著しいため、調整不明。灯明皿だと思われ、内外面とも煤が付着。体部はやや内湾して立ち上がる。			
22	170	SD5C層	椀	(2.2)	6.5	底部ヘラ切りの後、輪高台を張り付ける。底部と体部の間に段(稜)を有する。内外面ナデ調整。			
22	171	SD5	椀	(2.4)	7.0	底部は輪高台。体部は内湾して立ち上がり、外面は横ナデ調整。内面もナデだと思われる。内面に煤が付着している。			
22	172	SD5C層	椀	(2.3)	6.1	輪高台。内外面とも摩耗が著しく、調整不明。			
22	173	SD6B層	椀	(1.4)	8.0	しっかりとした輪高台を張り付けている。内外面ナデ調整。体部は内湾して立ち上がっている。			
22	174	SD6A層	椀	(2.3)	6.2	輪高台。内外面ナデ調整。			
22	175	SD6A層	椀	(2.2)	6.4	輪高台。内外面ともナデ調整。			
22	176	SD6B層	椀	(2.3)	6.0	輪高台。体部は内湾して立ち上がり、内外面ナデ調整。体部下部に稜を有している。			
22	177	SD6B層	椀	(1.7)	7.8	しっかりとした輪高台が付く。内外面ともナデ調整。体部は内湾して立ち上がっている。			
22	178	SD6	椀	(1.6)	6.0	輪高台。全体的に摩耗が著しく調整不明。			
22	179	SD6B層	坏	(3.0)	8.8	高台の坏。内外面ナデ調整。			
22	180	SD6A層	椀	(1.8)	6.6	円盤状高台。ヘラ切りか。外面ナデ調整。内面ハケ調整とナデ調整。			
22	181	SD6	坏	(2.0)	8.5	高台の坏。内外面ナデ調整。			
22	182	SD6B層	椀	(2.6)	5.8	粘土巻き上げ成形後、内外面ナデ調整。粘土を選んでいる。土師器にしては焼きが固く、搬入品か。			
22	183	SD6B層	椀	(2.1)	6.0	輪高台。外面摩耗が著しく、調整不明。内面ナデ調整。			
22	184	SD6C層	皿	(1.2)	12.0	内外面ともナデ調整。きわめてキレイに仕上げている。			
22	185	SD6C層	小皿	(1.3)	6.1	内外面ナデ調整。			
22	186	SD6A層	不明	(2.3)	6.6	高台部分糸切り。内面底部は細い籠でかきとつて成形している。外ナデ調整。			
22	187	SD5C層	高坏	(7.5)		摩耗が著しく調整不明。1mm 大の礫が多く混入している。			
22	188	SD6B層	高坏	(8.3)	9.8	高坏の脚部分。内外面とも丁寧なナデ調整。底部からゆるやかに内反しながら立ち上がる。			
22	189	SD6B層	高坏	16.0(4.3)		高坏の坏部分だと思われる。内外面ナデ調整。坏部たちあがりにしっかりとした段を有す。			
22	190	SD4	皿	(2.3)		高高台の皿か。全体的に摩耗が著しく、調整不明。			
22	191	SD6B層	甕	21.0(7.4)		弥生前中期の甕。大篠式。口縁部は大きく外反しており、端部に刻み目をほどこす。体部上方には7条の沈線をほどこしている。内外			
22	192	SD6B層	甕	(7.5)	6.0	田村IV期(弥生前期)の甕。底部外面に縦ハケ調整。その後ナデ調整。内面ナデ調整。大篠式。			
22	193	SD6B層	壺	(4.3)	5.7	田村IV期(弥生前期)の壺。底部外面縦ハケ調整後、ナデ調整。内面ナデ調整。底部中央部がくぼむ。内面につめ痕、指頭圧痕。大篠式。			

Tab.8 1・2区 SD4・5・6出土遺物観察表(6)須恵器・黒色土器・綠釉

Fig No.	挿図 番号	出土 地点	器種 器形	法量(cm)			時期	特徴	備考
				口径	器高	底径			
23	194	SD6C層	須恵器 杯蓋	14.2(2.3)			8C後半	天井部に僅かな膨らみを持つ一般的な杯蓋。両端部を下に大きく曲げており、天井部の1/3に回転ヘラ削り調整。他はいずれも回転ナデ調整を施す。中央部に扁平な宝珠形つまみ(疑似宝珠形つまみ)貼付。	IV期後半
23	195	SD6B層	須恵器 杯蓋		(2.6)		8C	つまみ付きの杯蓋。つまみの径は3.2mmでつまみ中央が凹むタイプ。蓋縁の部分が欠けており直径は不明。天井部内面に断続ナデの痕。天井部外面には右回りの回転ヘラ削り。	IV期
23	196	SD6A層	須恵器 杯	11.0(3.3)			9C	杯の口縁部分と思われる。外外面に横ナデを施し、器面は滑らかに調整されている。	V期
23	197	SD4A層	須恵器 杯		(2.1)	6.0	8C頃	小型。底部内面に顯著な回転ナデ痕。外外面底部から体部にかけて立ち上がるところにヘラ削りを施す。底部ヘラ切。	IV期頃
23	198	SD6C層	須恵器 壺?		(10.1)	胴径 18.5	不明	口縁、底部とも欠如し、器形については断定できない。広口壺の体部か?肩部から胴部にかけて厚い自然釉が一面にかかり、内面にも頸部と体部の境目付近までかかる。胴部に浅いV字溝二条を施す。	
23	199	SD6A層	須恵器 甕	11.8(3.0)			不明	外外面口縁下に多量の煤付着し煮炊き具を使ったと思われる。外外面ともヘラ削りの後横ナデを施す。	
23	200	SD6	須恵器 壺?	11.4(3.5)			不明	断定はできないが形状からみて、壺のような貯蔵具の口縁部のように思われる。内外面とも幅1cm程度の板状工具による回転ナデ調整がみられる。口縁直下の部分は特に強いナデを施す。	
23	201	SD6B層	須恵器 椀		1.9	9.0	10C頃	平底 底部へら切り。	在地
23	202	SD6A層	須恵器 椀		4.8	8.0	10C頃	体部外縁へら状工具による調整痕。体部内面2段にわたり、横ナデ痕が残る。器壁は厚く焼成は良好で外縁に炭素付着。	在地
23	203	SD5C層	須恵器 椀	16.6(4.3)			10C頃	胎土はやや粗。器壁は太めで体部下半でさらに肥厚する。器面も粗く、外縁と体部下半に横ナデ。内面にてて痕らしきものがみられる。	在地
23	204	SD6A層	須恵器 椀	14.8(4.6)			10C頃	胎土は粗。器壁は厚く外上方に直線的に伸び、口縁端部を丸くおさめる。口縁部内外とも横ナデ。	在地
23	205	SD6B層	須恵器 椀	14.0(2.8)			10C頃	胎土は精良。口縁端部内外とも横ナデ。	在地
23	206	SD6A層	須恵器 椀	15.0(2.9)			10C頃	胎土は精良。低火度焼成。口縁部下で、縁に屈曲し、外反する。口縁下内面に横ナデ。	在地
23	207	SD6A層	須恵器 椀	15.4(3.6)			10C頃	口縁端部ならびにその下の2段にわたって横方向の刷毛目。口縁端部外縁をヘラ削り。	在地
23	208	SD6A層	須恵器 椀	13.0(4.0)			10C頃	口縁端部横ナデ。内面に刷毛目痕。	在地
23	209	SD6A層	須恵器 椀	18.0(3.3)			10C頃	焼成は軟質。口縁端部の肥厚が目立つ。	在地
23	210	SD6B層	須恵器 椀	15.6(2.8)			10C頃	胎土精良。焼成は並で外縁に炭素が付着する。口縁端部横ナデ。内面に指頭圧痕とタテ方向の刷毛目がかすかに残る。	在地
23	211	SD6A層	須恵器 椀	13.2(3.3)			10C頃	胎土精良。器壁は比較的の薄い。	在地
23	212	SD6A層	須恵器 椀	13.4(2.7)			10C頃	焼成は甘く、口縁端部を丸くおさめる。口縁端部下に横方向の刷毛目。	在地
23	213	SD6A層	須恵器 椀	16.0(3.7)			10C頃	外面に広い範囲で横ナデ調整を施す。口縁端部下外縁に横ナデ。低火度焼成で断面部をみると外縁近くは完全燃焼で白色を呈すが内部は生焼け部分と燃焼部分が白黒のまだら状を呈す。	在地
23	214	SD6A層	須恵器 椀	14.9(3.8)			10C頃	胎土は非常に精良。焼成も良好。体部外縁と口縁下に横ナデ。	在地
23	215	SD6A層	須恵器 椀	12.8(4.8)			10C頃	胎土精良。焼成は堅く焼き縮り、外縁の一部に炭素付着の痕。内面表面が銀化するなど瓦器的特徴を強く備える。内面見込近くにてて痕。底部近くで明瞭に屈曲する。	在地
23	216	SD5C層	須恵器 椀	15.8(2.9)			10C頃	胎土、焼成とも良好で、堅く焼き縮っている。叩くと金属的な音がする。器壁は薄く、外縁とも丁寧な横ナデを施し、炭素が付着する。	在地
23	217	SD5C層	須恵器 椀	13.8	5.0	5.2	10C頃	胎土はやや粗。底部貼付の痕。外縁にてて痕。	在地
23	218	SD6	須恵器 椀	13.8	5.7	6.0	10C頃	胎土は精良で焼成も良好。内面に不定方向に刷毛目による調整痕がみられる。口縁部から口縁下部に横ナデ。高台底部に板状の圧痕が残る。癒着した炭素が所々剥離する。円盤状高台。	在地
23	219	SD6B層	須恵器 椀	14.8		6.6	10C頃	焼成は瓦器状。円盤状高台碗で、底部ヘラ切り。口縁端部横ナデ。内面に明瞭にてて痕が残る。	在地
23	220	SD6B層	須恵器 椀	15.6	5.8	7.0	10C頃	胎土精良。焼成は良好。円盤状高台。底部ヘラ切り。内面見込に渦巻状の粘土紐の痕。体部外縁にも粘土紐の単位がみられる。	在地
23	221	SD5C層	須恵器 椀		(3.2)	7.0	10C頃	胎土精良。焼成良好。円盤状高台。底部ヘラ切り。内面にハケ調整の痕。外縁底部近くに指頭圧痕が残る。	在地
23	222	SD6A層	須恵器 椀		(2.2)	6.2	10C頃	堅く焼き縮り炭素の付着もしれない。内面見込に粘土紐巻き上げ痕が残る。底部にてて痕。	在地
23	223	SD6B層	須恵器 椀		(3.5)	6.6	10C頃	胎土は精良。内面見込に粘土紐の単位が渦巻状に残る。円盤状高台底部へら切りにてて痕。	在地
23	224	SD5B層	須恵器 椀		(3.8)	6.2	10C頃	胎土、焼成とも並。見込とその近くにハケ調整の痕が明瞭に残るが、見込の方に单位が細かい。ヘラミガキの暗文らしきものもみられるがはつきりしない。	在地
23	225	SD6	須恵器 椀		(1.4)	8.0	10C頃	底部円盤状高台貼付痕。底部ヘラ切り。底部と内面見込に炭素の付着が多くみられる。	在地
23	226	SD5C層	須恵器 椀		2.0	6.1	10C頃	円盤状高台碗。外縁部と断面に粘土帯の接合痕。見込附近にてて調整痕。器壁はよく焼成は良好。底部切り離しは摩耗のため糸切かへら切りか不明。	在地
23	227	SD6A層	須恵器 椀		(3.2)	5.9	10C頃	胎土精良。体部外縁にててによる調整痕がみられる。また炭素が付着する。厚い貼付輪高台を持ち、粘土紐の単位がみられる。一見瓦器的な様相を呈す。	在地
23	228	SD6B層	黒色土 器椀				10~11C 前後	当遺跡唯一の黒色土器。内黒タイプ。胎土焼成とも並。器壁は薄く口縁内面に一条の沈線があるが摘葉ではないといわれた。胎土に雲母片。	搬入
23	229	SD6B層	綠釉皿	11.8	(2.0)		10C頃	色調は暗緑色で口縁下や外縁に体部を横ナデ。プロボーションは明確な稜線はない。なだらかに内湾気味に上方へのび口縁付近で僅かに外反する。	搬入
23	230	SD6	綠釉皿	12.4	(2.1)		10C頃	上記に同じ。	搬入

Tab.9 1・2区 SD4・5・6出土遺物観察表(7)瓦器

Fig No.	挿図 番号	出土 地点	器種 器形	法量(cm)			時期	特 徵	備考
				口径	器高	底径			
24	231	SD6	瓦器椀	15.6(3.7)			11C後半 ~13C前半	焼成は甘く、胎土は精製度が低い。口縁端部の広い範囲を比較的強く横ナデし、体部に指頭圧痕が多数残る。底部から口縁にかけて緩に内湾しつつ、外上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。内面は摩耗のため、暗文の有無ははつきりしない。	和泉型
24	232	SD6	瓦器椀	14.6(3.4)			11C後半 ~13C前半	炭素の吸着もよい。器壁は比較的薄く、口縁下の横ナデの幅が広い。体部外面上に多数の指頭圧痕が残る。内面の暗文は摩耗のため、はつきりしない。	和泉型
24	233	SD6C層	瓦器椀	13.6(3.9)			11C後半 ~13C前半	胎土は比較的粗い。口縁部横ナデの幅は狭く、その後連続して指頭圧痕を施す。内面には口縁端部間際まで幅2mm程度の圓線状の暗文を施す。見込部分には平行線状の暗文が僅かに残る。	和泉型
24	234	SD5	瓦器椀	15.0(4.3)			11C後半 ~13C前半	口縁端部下に広く強い横ナデを施す。体部下半にはいくつかの指頭圧痕が明瞭に残る。体部から緩やかに内湾し、口縁部で外反する。端部はやや肉厚で丸くおさめる。胎土はやや精良。	和泉型
24	235	SD6A層	瓦器椀	14.8(4.3)			11C後半 ~13C前半	胎土は大きめの長石や砂粒がところどろにみられる。口縁部に幅広で強い横ナデを施す。口縁下から体部下半まで指頭圧痕が多く残る。見込部と口縁下にも暗文が残る。	和泉型
24	236	SD4C層	瓦器椀	16.8(3.2)			11C後半 ~13C前半	胎土は並。口縁端部を幅広く横ナデし、内面には端部をヘラ状のもので調整したような痕がみられる。また摩耗のため、不明瞭ではあるが細い暗文が数条残る。	和泉型
24	237	SD4A層	瓦器椀	16.9(2.3)			11C後半 ~13C前半	胎土は精良で、大きな鉱物はほとんど混じていない。器壁は薄く口縁部の横ナデによる屈曲も緩やかである。内面には摩耗のため、不明瞭ではあるが、幅3mmほどの比較的大い暗文が2条残る。	和泉型
24	238	SD6B層	瓦器椀	16.0(3.7)			11C後半 ~13C前半	胎土は精良。大粒の鉱石はほとんどみられない。口縁端部の横ナデが2段にわたりて施されているため、横ナデの範囲が広い。摩耗のため不明瞭ではあるが口縁端部の端まで細い暗文が施され、端部をまるくおさめている。	和泉型
24	239	SD6	瓦器椀	15.4(2.2)			11C後半 ~13C前半	胎土は精良で、焼成は内外面共に銀化している。口縁外面の横ナデの幅が広く、屈曲部の棱線が明瞭である。内面には口縁近くに幅1mm程度の細い暗文の痕が3条残る。	和泉型
24	240	SD6B層	瓦器椀	14.6(3.3)			11C後半 ~13C前半	口縁下に幅広の横ナデを施し、体部下半に指頭圧痕が残る。内面には細い圓線状の暗文が残る。	和泉型
24	241	SD5C層	瓦器椀	15.9(4.7)			11C後半 ~13C前半	口縁端部に板状工具らしきもので横ナデを2段に施す。内面には口縁端部付近まで、4mm程度の太い暗文が圓線状に、見込部分には2mm程度の細い暗文が平行線状に走る。	和泉型
24	242	SD6B層	瓦器椀	16.0(3.3)			11C後半 ~13C前半	胎土、焼成とも並。口径に比して器高が低い。器壁は比較的薄く、口縁と口縁下に横ナデ。幅2~2.5mmほどの暗文が圓線状に走る。	和泉型
24	243	SD5B層	瓦器椀	15.4(3.3)			11C後半 ~13C前半	胎土は精良である。低火度焼成で、内外面とも炭素の吸着はよい。口縁端部に板状工具によと思われる強い横ナデ。外面部に指頭圧痕が残る。内面には3mm程度の比較的大い暗文が明瞭に残る。	和泉型
24	244	SD6A層	瓦器椀	13.0(4.0)			11C後半 ~13C前半	胎土は大粒の茶褐色の鉄分が多い。口縁部は2段にわたって横ナデされており、その下に指頭圧痕がいくつか明瞭に残る。内面は摩耗が激しく炭素がほとんどされているが、外側は銀化している。器壁は薄めである。	和泉型
24	245	SD5B層	瓦器椀	12.8(2.7)			11C後半 ~13C前半	胎土、焼成とも良好で内外面共に銀化。内面口縁端部まで3mmほどの圓線状の暗文が走る。板状工具により口縁部の横ナデが施され段になり明瞭な稜線を持つ。その下の指押えによるものと併せて2段の屈曲を持つ。	和泉型
24	246	SD6B層	瓦器椀	13.8(3.8)			11C後半 ~13C前半	胎土は並。器壁は薄く、口径に比して器高が高い。口縁部横ナデの幅は1cm程度と狭く、体部の屈曲も弱い。暗文の幅は比較的大く、見込から口縁部にかけて平行線状に、体部から口縁直下まで圓線状に暗文が走る。	和泉型
24	247	SD6B層	瓦器椀	13.8(4.6)			11C後半 ~13C前半	胎土は精良。当遺跡出土瓦器の中では暗文の隙間が狭く、ヘラミガキが密である。内面体部には幅2~4mm程度の圓線状に、見込部分には平行線状に暗文が走る。	和泉型
24	248	SD5C層	瓦器椀	13.0(3.4)			11C後半 ~13C前半	胎土焼成とも良好で内外面共に銀化する。内面には幅1mmほどの細い圓線状の暗文が走り、体部下半からやや太めとなる。外側は口縁部横ナデ後体部に2段にわたって指頭圧痕が残る。外側口縁下に1本の暗文が認められる。	和泉型
24	249	SD5C層	瓦器椀	14.6(3.7)			11C後半 ~13C前半	口縁端部横ナデ。体部外面には一面に指頭圧痕が残る。器壁は厚く最大で5mm程度。内面体部には幅2、3mm程度の太いヘラミガキを口縁直下まで圓線状に施す。	和泉型
24	250	SD5C層	瓦器椀	13.7(3.8)			11C後半 ~13C前半	器壁が薄く、焼成も良好。内外面とも口縁端部横ナデ。緩やかに内湾し外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部に指頭圧痕很多。内面は口縁近くまで2mmほどの連続輪状の暗文が7~8mmの間隔ではし。	和泉型
24	251	SD4C層	瓦器椀	12.4(2.9)			11C後半 ~13C前半	器壁が薄く、内面に口縁近くまで圓線状の暗文が6~7mmの間隔で走る。外側は口縁から体部下半まで指頭圧痕がみられる。横ナデは弱く、体部の屈曲も僅かである。	和泉型
24	252	SD6C層	瓦器椀	13.7(2.3)			11C後半 ~13C前半	胎土は並。器壁は薄く、口縁端部下に横ナデを施す。端部は肥厚する。暗文については摩耗のため確認できない。	和泉型
24	253	SD6B層	瓦器椀	17.8(3.8)			11C後半 ~13C前半	内外面とも口縁の一部に銀化がみられる。口縁より1cm程下を横ナデした後の指押えにより、強く屈曲する。体部外面下半にもいくつかの指頭圧痕が残る。内面には幅2mm弱の細い暗文が、体部には圓線状に太い暗文が走る。	和泉型
24	254	SD6B層	瓦器椀	13.4(4.0)			11C後半 ~13C前半	胎土はやや粗い。器壁は厚く、最大で4mmを越える。布状のもので口縁を横ナデし、端部を丸くおさめる。その下さらに横ナデし、指頭圧痕も頗著に残る。体部は強く屈曲する。内面にヘラミガキらしき痕が見えるが摩耗のため断定できない。	和泉型
24	255	SD6C層	瓦器椀	15.8(2.2)			11C後半 ~13C前半	胎土は並だが、焼成は一部銀化がみられる。口縁付近まで2mm程度の暗文が圓線状に走る。口縁部を軽く横ナデしたあと、その下をさらに強く横なでしているため、屈曲部が口縁より1cm程下にある。	和泉型
24	256	SD5C層	瓦器椀	14.0(3.4)			11C後半 ~13C前半	胎土は粗く、長石粒も大きい。器壁は厚く最大で5mmを越える。口縁部横ナデは弱く、屈曲も目立たない。内面の炭素の吸着はよく、摩耗してはいるが、ミガキも比較的密である。体部半ばから内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。	和泉型
24	257	SD4	瓦器椀	14.3(3.3)			11C後半 ~13C前半	胎土は並。外側口縁部に横ナデを施し、指頭圧痕がみられる。口径に比して器高が低く、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内面には摩耗してはいるが比較的密に圓線状のヘラミガキを施す。	和泉型

Tab.10 1・2区SD4・5・6出土遺物観察表(8)瓦器・東播系須恵器・土錐

Fig No.	挿図 番号	出土 地点	器種 器形	法量(cm)			時期	特 徴	備考
				口径	器高	底径			
24	258	SD6	瓦器椀	16.0(5.0)			11C後半 ~13C前半	胎土は精良で低火度焼成。器壁は厚く内湾気味に立ち上がり口縁付近で外反せず、そのまま端部を丸くおさめる。口縁部横ナデによる屈曲はみられず、体部下間に連続指頭圧痕。内面の暗文は密で、見込には斜格子状に暗文が走る。	和泉型?
24	259	SD6	瓦器椀	16.0(3.1)			11C後半 ~13C前半	胎土は精良で焼成も良好。口縁端部横ナデ。	和泉型?
24	260	SD6B層	瓦器椀	15.0	5.6	4.8	11C後半 ~13C前半	器壁が厚く断面台形状の貼付輪高台を持つ。口縁部の横ナデとその後の一連の指押えにより、体部が強く屈曲する。口縁から底部まで指頭圧痕が明瞭に残る。見込に平行線状の暗文を施した後、口縁端部まで圓線状の暗文が明瞭に残る。	和泉型
24	261	SD6A層	瓦器椀	14.4	4.1		11C後半 ~13C前半	胎土、焼成とも並。内面見込に斜格子状の暗文を施した後、圓線状の暗文を施す。	和泉型
24	262	SD6A層	瓦器椀	(2.8)	4.0		11C後半 ~13C前半	高台は台形といふ形や半円状に近い。摩耗しているが見込に幅3.4mmほどの太い暗文がみられる。胎土はやや粗。	和泉型
24	263	SD5	瓦器椀	(1.0)	4.6		11C後半 ~13C前半	焼成、胎土とも良好。炭素が多く付着する。内面見込に連結輪状の暗文がみられる。	和泉型
24	264	SD5C層	瓦器椀	(1.7)	4.6		11C後半 ~13C前半	焼成は甘く軟質。3.4mmと太い暗文を見込に平行線状に施した後、見込から体部にかけて乱方向に暗文が走る。外面底部近くにいくつかの指頭圧痕。	和泉型
25	265	SD6A層	瓦器椀	(1.0)	4.7		11C後半 ~13C前半	胎土は精良で、見込付近に1mmほどの細い平行線状の暗文が走る。高台を断面台形状に形成する際にへら削した痕跡が残る。高台付近に指頭圧痕。	和泉型
25	266	SD5C層	瓦器椀		1.2	4.1	11C後半 ~13C前半	輪高台内部に貼付時に粘土ひびを延ばした際の指押えの痕が残る。焼成胎土とも良好で、内面は銀化している。見込部分に2本一単位で幅2mm程の暗文を平行線状に施す。	和泉型
25	267	SD6	瓦器椀	15.9	3.5	5.6	11C後半 ~13C前半	胎土は並。口縁端部横ナデ。屈曲は弱い。内面体部には幅1.2mmの比較的細い圓線状の暗文が走る。見込部分には斜格子状に細い暗文がみられる。底部には底径5.6mmの断面三角形の貼付輪高台を持つ。	和泉型
25	268	SD6	瓦器椀	(1.2)	5.4		11C後半 ~13C前半	断面三角形状の輪高台を持つ。高台内部の底面は水平に近い。	和泉型
25	269	SD6C層	瓦器椀	(0.7)	4.0		11C後半 ~13C前半	断面三角形状の貼付輪高台を持つ。内面見込に連結輪状らしき暗文を持つ。	和泉型
25	270	SD4C層	瓦器椀	(1.2)	4.4		11C後半 ~13C前半	細く小さな断面三角形状の輪高台を持つ。胎土は精良で焼成もよく、淡灰色を呈す。内面見込は摩耗のため、ミガキの有無は不明。外面底部近くに指頭圧痕。	和泉型
25	271	SD5C層	瓦器椀	(1.6)	4.7		11C後半 ~13C前半	胎土は割合大粒の長石、石英などが混じる。見込に7.8mmほどの等間隔で平行線状に暗文が走る。	和泉型?
25	272	SD6B層	瓦器皿	8.1	1.5		11C後半 ~13C前半	胎土は粗。炭素の残りは多い。内面見込から口縁近くに指頭圧痕。	
25	273	SD6B層	瓦器皿	8.8	1.3		11C後半 ~13C前半	胎土は並で焼成は内面の一部が銀化。内面底部と外面口縁に横ナデ。内面見込部に1mmほどの細い暗文が残る。	
26	298	SD5C層	捏ね鉢	30.0(3.1)			12C前半	他の東播系捏ね鉢と明らかに口縁端部の形が異なる。口縁断面が丸みを帯びた方形でやや肥厚し、下方にやや拡張される。口縁内面直下に木製工具のよぎりものによる横ナデがみられる。口縁形態からみてやや古いもので12世紀前半頃のものと思われる。	東播系Ⅰ期 第2段階
26	299	SD6C層	捏ね鉢	29.0(10.5)			13C前半 ~後半	口縁端部の上方への拡張が顕著であり、肥厚の度合いを強めている。口縁部内面に強い横ナデ。底部近くに緩やかな段部を持つ。推定される底径は小さくⅢ期の13C前半~後半にかけてのものと思われる。	東播系Ⅲ期
26	300	SD5C層	捏ね鉢	33.0(3.1)			12C末~ 13C初頭	内面断続横ナデの痕。外面口縁部下に回転ナデ痕。口縁部に折り曲げによると思われる貼付痕がみられる。口縁端部の拡張が上下にみられ、外反が緩やかになっていることからⅡ期第2段階の物と思われる。	東播系Ⅱ期 第2段階
26	301	SD6A層	捏ね鉢	32.0(2.4)			12C末~ 13C初頭	口縁部横ナデ。体部外面回転横ナデ。口縁端部が上下に拡張する。30才同時期のもの。	東播系Ⅱ期 第2段階
26	302	SD6B層	捏ね鉢	32.0(2.6)			12C末~ 13C初頭	口縁部内外面とも回転ナデ。口縁下僅かに膨らみ段部を持つ。内面にも横ナデにより、段がつく。外面に煤が付着し、煮炊き具を使った可能性がある。口縁部の上下への拡張から30才30才同時期のものと思われる。	東播系Ⅱ期 第2段階
26	303	SD6A層	捏ね鉢	(1.6)	10.0			底部外面には回転糸切り痕が明瞭に残る。内面底部には顕著な横ナデの痕が残る。底部外面には煤が付着し、煮炊き具を使った可能性がある。口縁部がないため時期特定は難しい。	東播系
26	304	SD6B層	捏ね鉢	(3.4)	8.4			内面に指による横ナデ調整の痕が残る。口縁部分が欠けているため時期の特定は難しい。	東播系
26	305	SD5C層	捏ね鉢	(4.0)	9.2			外面に回転横ナデ調整の痕。底部外面には回転糸切りの痕らしきものがみられる。口縁部分が欠けており、時期の特定は難しい。	東播系
26	306	SD5C層	壺		(10.0)		13C末~ 14C	頸部、肩部から体部下半に至るまで煤の付着がみられる。肩部に明瞭な回転へら削り、内面体部には頸部と肩部の粘土紐接合の際と思われるいくつかの指頭圧痕。焼き色は青灰色で、Ⅲ期前半のものと思われる。肩部に二条のへら描沈線。	備前 Ⅲ期前半
26	312	SD6	土錐	全長	全幅	孔径			
				(3.2)	1.1	0.4		重量は3.g。胎土はやや精良。器面はなめらか。	川用
26	313	SD6	土錐	4.1	0.9	0.4		重量は2.g。	川用

Tab.11 1・2区SD4・5・6・7出土遺物観察表(9)貿易陶磁器

Fig No.	挿図 番号	出土 地点	器種 器形	法量(cm)			胎土	釉薬	特徴	備考
				口径	器高	底径				
25	274	SD6C層	白磁碗	16.9(3.0)			淡灰色	灰色がかった白色	口縁下にヘラ削りによる強い凹線 大きめの貫入がある。	IV 1類
25	275	SD6B層	白磁碗	16.8(4.0)			精良、暗灰色	灰色がかった白色	IV類の中ではやや薄めの玉縁を持つタイプである。口縁部外縁部下のヘラケズリにより、口縁下が浅い凹状を呈す。	IV類C期
25	276	SD5C層	白磁碗	14.8(5.0)			淡灰色	灰色がかった白色	IV類の中ではやや薄めの玉縁を持つタイプである。口縁端部付近に細かい貫入がある。	IV類C期
25	277	SD6A層	白磁碗	15.0(2.5)			淡灰色	黄色みを帯びた灰白色	厚い玉縁状口縁を持つIV類である。ヘラ削りにより、口縁外縁断面は浅い凹状を呈す。	IV類C期
25	278	SD6A層	白磁碗	14.0(3.5)			淡灰色	灰白色	上記に同じ。成型時ににおける折り返しのためわずかながら口縁断面に隙間がみられる。	IV 2類
25	279	SD6B層	白磁碗	15.6(2.8)			淡灰色 酸化鉄付着	黄色みを帯びた灰白色	IV類碗に比べて小さい玉縁状口縁を持つ白磁II類の碗である。外面と内面とも細かい貫入がある。II類碗はこれ1点のみである。	II類C期広東省?
25	280	SD5C層	白磁碗	15.4(5.1)			灰色	灰白色	外面櫛書き文様 体部内面中位に細い沈線。口縁部を外反させ、端部をへらで仕上げる。体部外下面には施釉されておらず、口縁部より所々内外面に釉薬が比較的厚く垂下する。	V 3b類C期
25	281	SD6B層	白磁碗	18.0(5.1)			淡灰色	黄色みを帯びた灰白色	輪花の白磁碗である。体部外下面にはヘラ削りによる調整痕が見られる。口縁部の輪花による凹部から釉薬が一筋垂下するようにヘラによる調整が施されている。V類碗の中にときどきこのようなタイプがみられるということである。	V類C期
25	282	SD6C層	白磁碗	15.1(2.9)			淡灰色	灰白色	内面口縁下に沈線を有する。口縁部は外反せず、直線的に外上方にのびている。器壁は比較的薄い。	VIII 2類?
25	283	SD6C層	白磁碗	(5.4)7.2			淡灰色	灰白色	高台幅広で削りが出しが浅い。見込みに沈線状の段を持つ。外側は底部近まで施釉され、所々高台の側面部分にまで釉薬が垂下しているのがみられる。無文。	IV 1a類C~D期
25	284	SD6A層	白磁碗	(2.3)7.0			黄色みを帯びた灰白色	灰白色	見込みに沈線状の段を持つ。高台は厚く削りだしわざかで浅いため、底部の器肉も厚い。丁度沈線を境に剥落しているため、図上では見づらいかも知れないが、見れば沈線上の落ち込みがみられる。摩耗のためか白磁特有の透明な光沢に乏しい。	IV 1a類C期
25	285	SD6B層	白磁皿	9.2(2.6)			灰色	薄く青みがかった白色	白磁II類の皿。口縁の形態を丸く収めたものと断面三角形を呈するものの二つがあるが、これは、後者の形態をしている。口縁外縁部下半をヘラケズリ。体部外下面半というか口縁部より下の方は施釉されていない。	
25	286	SD6B層	白磁皿	(1.4)3.6			灰色	釉は薄くやや黄色みを帯びている	VI類の皿。白磁皿のVI~VII類は底部が無高台となっているが、VIのb類はわずかに高台状のものが底部に作られている。これでも底部がやや上げ底状になっており、底部と高台の境がわかるようになっている。底部下半は施釉されない。	VI類C期
25	287	SD6A層	白磁水注壺?				黄色みを帯びた白色	片部付近は青み、その下は黄色みを帯びた白色	器形から、小型の水注壺かと思われるが不明である。体部内面は施釉されず、幅1cm程の単位で強い横ナデを施す。体部中くらいからヘラ削りによる調整痕がみられる。	
25	288	SD6B層	青磁碗	14.4(5.3)			白っぽい灰色	青磁と白磁の中間色	無文。口縁外縁部分一帯に釉薬が厚く~2cmほど垂下。器面の内外面に所々灰色がかったしみのようものがみられる。	龍泉I 1類D期
25	289	SD5C層	青磁碗	(4.4)5.9			比較的粗い灰色	青みを帯びた緑色	高台断面四角形。疊付及びその内部は露胎している。底部の器肉は厚く、内面に蓮華文を片彫りしているI~2a類である。外側面と大きな単位で明瞭な貫入が入っており、特に内面の貫入の単位が広い。	龍泉I 2a類D期
25	290	SD4C層	青磁碗	15.0(4.4)			濃いめの灰色	黄色みの強いくすんだ緑色で光沢はよくなない	内面に飛雲文が片彫りされており、I~4類に分類される。口縁部に輪花のあるものと無いものがあるが、口縁部分が短く確認できない。口縁外縁部下は強い横ナデが施されている。	龍泉I 4類D期
25	291	SD4D層	青磁碗	(2.7)			やや濃いめの灰色	黄色みの混ざった暗緑色で光沢がない	口縁部も底部も残っていないが、内底見込近くに蓮華文が片彫りされている。体部外側の底部近くの部分には横方向にヘラ削りによる調整を施す。	龍泉I 2a類D期
25	292	SD6B層	青磁碗	(3.3)6.0			粗く灰白色	青みを帯びた緑色	内外面とも無文。高台削り出しが浅く、底部の器肉が厚い。見込に段部を持ち、その部分の釉が厚く、濃緑色を呈す。	龍泉I 1類D期
25	293	SD4D層	青磁碗	(2.0)6.1			淡灰色	黄色みの強い緑色	底部の器肉が厚く、高台が断面四角形である。疊付部分に一部釉薬ががっついでいるが、高台内部は露胎である。内面残存部分に文様が見られないことから1類しかし確認できない。	龍泉I 1類D期
25	294	SD6C層	青磁碗	15.0(3.4)			灰色	黄色みの強いくすんだ緑色	内面上位に沈線を入れている。櫛目の単位は11本。外側底部下半には施釉しない。(化粧土が無い)	同安I 11類D期
25	295	SD5C層	青磁碗	15.0(1.8)			灰色	黄色みの強いくすんだ緑色	やや内湾気味に外上方へ立ち上がる。口縁下には強い横ナデを施し、その部分だけ釉の色が濃くなっている。体部外側には口縁下の横ナデの下から下方に向けて櫛目文様が入っており、内面上位には沈線が入る。	同安I 11類D期
25	296	SD5C層	青磁皿	12.1 2.5 6.0			灰色	黄色みの強いくすんだ緑色	体部中位で屈曲し、体部と見込の境に段を有する。内面にヘラによる片彫りと櫛によるグザグ文様が施されており、これらの特徴からI~1b類に分類される。	同安I 11類D期
25	297	SD6B層	青磁皿	10.0(2.0)			粗く、黄色みを帯びた白色	黄色みの強い明るい緑色	残存部が少ないためはつきりないが、体部と見込の境に2本の沈線を有することと、口縁部の形態から龍泉窯系のI類皿ではないかと思われる。	
29	336	SD7	青磁碗	14.8(2.9)			粗く白色	黄色みを帯びた緑色	中世後期のもので、底部から内湾気味に立ち上がり、直線的に上方にのびる。外側には幅の狭い蓮弁が線描きで描かれている。	小野II期青磁蓮弁文碗C群16C中頃

Tab.12 1・2区 遺構外出土遺物観察表(1)土師器

Fig No.	挿図 番号	出土地点 層位	器形	法量(cm)				特 微	備考
				口径	器高	胴径	底径		
30	334	SD7	高坏	12.8(4.4)				体部は直線的に立ち上がっている。外面はナデ調整。内面は摩耗が著しいがナデ調整か。	
30	335	SD7	坏		(2.3)		8.0	高輪高台。後で張り付けてある。内外面ともナデ調整。	
22	337	VII	甕	31.0(4.3)				口縁部内外面横ナデ調整。口縁部は「く」字状に外反している。外面は被熱しており、煤が付着している。	
22	338	VII	甕	27.1(3.5)				口縁部内面に荒いハケ調整。外面は調整不明。	
22	339		甕	30.0(3.8)				口縁部内外面横ナデ調整。口縁部は「く」字状に外反している。	
22	340	VII	甕	10.0(7.7)				胴部外面に叩き目。内面は横ナデ。口縁端部の上をつまみだしている。	
22	341	VII	鍋	27.4(6.1)				口縁は内傾してたちあがる。端部も内傾する面をもつ。鍔は水平に突出。体部は球胴形。内外面横ナデ。体部外面に叩き目。	
22	342	VII	羽釜	20.0(3.6)				口縁部を内反させており、同端部を外側に丸めて玉縁状にしている。(「て」字状口縁)	
22	344	VII	坏		(2.6)		6.6	底部は低い円盤状高台で糸切り。摩耗が著しいため調整不明。	
22	345	VII	坏	8.1	(2.3)			口縁部が、やや外反して終わっている。横ナデ調整がみられる。	
22	346	VII	坏	6.9	(3.3)			体部はゆるやかに内湾し、口縁部はやや大きく外反している。粘土紐巻き上げ成形の後、内外面横ナデ調整。	
22	347	VII	坏		(2.4)		5.4	円盤状高台で糸切り。底部と体部の境に段を有し、外面・内面とも横ナデ調整。	
22	348	VII	坏		(1.9)		6.8	摩耗が著しく調整不明。	
22	349	VII	坏		(2.0)		6.4	平底で糸切り。粘土巻き上げ成形であるが、内外面とも摩耗が著しいため調整は不明。	
22	350	VII	坏		(1.8)		6.4	内外面ともナデ調整。	
22	351	VII	坏		(2.7)		10.0	円盤状高台で糸切り。粘土紐巻き上げ成形の後、外面横ナデ調整。内面は摩耗が著しいため、調整不明。	
22	352		坏	11.6	(2.7)			ゆるやかに外反している。口縁端部外面横ナデ調整。	
22	353		坏		(1.6)		6.0	底部ヘラ切り。粘土紐巻き上げ成形でナデ調整。	
22	354		坏		(2.4)		5.4	円盤状高台。粘土紐巻き上げ成形で、外面はナデ調整。内面は摩耗が著しく調整不明。	
22	356		坏	15.0	(3.2)			体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。内外面ナデ調整。	
22	357		坏	12.0	(4.5)			体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。粘土紐巻き上げ成形後、ナデ調整。	
22	358	VII	椀		(2.1)		3.2	輪高台。外面横ナデか。調整不明確。	
22	359	VII	椀		(1.5)		4.5	ゆるやかに内傾している。調整は摩耗・損傷が著しいため不明。輪高台。	
22	360	VII	椀		(2.1)		6.0	輪高台。底部と体部に段を有し、器形は粘土を巻き上げ、横ナデ調整。	
22	361	VII	椀		(1.5)		8.2	輪高台。外面は横ナデだと思われるが、内面は摩耗が著しいため不明。	
22	362	VII	椀		(2.1)		7.8	内外面とも横ナデ調整。	
22	363		椀		(1.5)			底部ヘラ切りの後、輪高台を張り付けている。内面は摩耗が著しく調整は不明。外面はナデか。	
22	364	VII	皿	10.8	(1.6)			底部には粘土巻き上げ痕がみられ、内外面とも横ナデ調整。	
22	365	VII	皿		(1.4)		6.7	底部は粘土紐巻き上げ痕がみられるが、全体的に摩耗が著しいため調整は不明。	
22	367	VII	土錐	長さ 5.4	高さ 1.0	直径 1.1		摩耗が著しく調整不明。	
36	407	IV	羽釜		(4.2)			口縁部より下に鍔がついている。外面ナデ調整で、鍔の下に指頭圧痕あり。内面粗いハケ調整。	
36	407	X	高坏	18.0	(4.5)			内外面ともナデ調整。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	

Tab.13 1・2区遭構外出土遺物観察表(2)貿易陶器

Fig NO.	挿図 番号	出土 地点	器種 器形	法量(cm)			胎土	釉薬	特徴	備考
				口径	器高	底径				
32	381	VII層	白磁碗	15.9(2.3)			淡灰色	灰色がかった白色	IV類の中でもやや薄めの玉縁状の口縁を持つタイプである。口縁下が浅い凹状を呈している。	IV類C期
32	382	V層	白磁碗	16.0(2.0)			灰色	灰色がかった白色	IV類の中でもやや薄めの玉縁状の口縁を持つタイプである。口縁下が浅い凹状を呈している。	IV類C期
32	383	V層	白磁碗	16.1(2.2)			淡灰色	灰色がかった白色	IV類の中でもやや薄めの玉縁状の口縁を持つタイプである。口縁下が浅い凹状を呈している。	IV類C期
32	384	IV層	白磁碗	15.0(3.6)			精良、灰白色	青みを帶びた白色	内面中位に細い沈線、体部の器肉は薄く口縁部外反。口縁端部下の凹面に釉薬が溜まっている。外面櫛書き文様。	V 3b類C期
32	385	VI層	白磁碗	(3.9)			やや粗い。灰色	黄色みを帶びた白色	碗体部であると思われるが体部のみであり、手掛かりとなる部分も無いため形式時期とも不明。	
32	386	VI層	白磁碗				灰白色	黄色みを帶びた白色	底部がわずかに残るのみの破片であるが、見込みに段があり、その段の内側の袖をかきとっていることからⅦ類ではないかと思われる。体部はヘラ状のもので横なで調整し下半の袖をかきとっている。	Ⅷ類C期
32	387	表採	白磁碗	14.8(4.3)			灰色	灰白色	明らかに中世前期の白磁とは違ったプロポーションと種を持つ。体部外面は横方向に丁寧にへら調整される。内湾後口縁を強く外反させ、端部は丸く收める。器壁は厚く体部は丸みを持つ。袖は丁寧に塗られ、美しい光沢を持つ	ピロースク小野0期14C代
32	388	V層	白磁碗	17.0(4.1)			灰色	暗緑色	内面劃花文(途中に蓮華の葉を横から見た文様を入れている。)	龍泉I 2b類D期
32	389	VI層	白磁碗	(4.5)			暗灰色	暗緑色	底部の器肉が厚い。内外面無文の可能性あり。	龍泉I 類D期
32	390	V層	白磁皿	12.0(3.2)			灰白色	青みを帶びた灰白色で光沢がない	高台、全体のプロポーション、釉色とも中世前期の白磁とはかなり異なっている。	小野C群15~16C中頃まで
32	391	V層	染付	(3.0)			黄色みを帶びた白色	地色黄白色文様青	口縁部のみの細部ではあるが、口縁付近に残った文様から見ると波涛文と思われる文様があり、16世紀の染付である。器種については大皿の口縁部分か?	中国16C代

Tab.14 1・2区遺構外出土遺物観察表(3)須恵器・瓦器・その他

Fig NO.	挿図 番号	出土 地点	器種 器形	法量(cm)			時期	特徴	備考
				口径	器高	底径			
32	368	廃土中	須恵器 杯	13.8(5.0)	5.2		8C頃?	焼成は良好。輪高台付の杯。ハの字状に開いた高台の疊付部分は凹線状に窪む。内面には回転ナデの痕。	
32	369	表採	須恵器 椀	15.0(3.8)			10C中葉	胎土は精良で、焼成も良好。体部内面に回転ナデ。	在地
32	370	VII層	須恵器 椀	15.5(2.0)			10C中葉	非常に精良。口縁端部横ナデの痕が明瞭に残る。(板状工具使用か?)	在地
32	371	VII層	瓦器椀	16.0(5.2)			11~13C	胎土はやや粗。焼成は甘く、内外面とも付着した炭素が剥がれ、特に内面にはほとんど残っていない。器壁は厚く、底部から内弯しつつ立ち上がる。口縁より1cmほど下に強い横ナデを施し、強く屈曲する。口縁端部は内弯したまま丸くあさめる。	和泉型?
32	372	VII層	瓦器椀	16.0(2.9)			11~13C	口縁外面には幅の狭い横ナデ。その下にいくつかの指頭圧痕。	和泉型
32	373	VII層	瓦器椀	16.4(3.4)			11~13C	胎土精良。器壁が薄く、口縁部には幅13cmほどの横ナデ。口縁下には指頭圧痕がいくつか残る。	和泉型
32	374	表採	瓦器椀	15.0(3.2)			11~13C	内外面の一部銀化。口縁部の横ナデは弱く2段に施されている。内面には、幅2mm程度の細い暗文が数条残る。外側の口縁下にも横方向に細い暗文が走る。	和泉型
32	375	VII層	瓦器椀	16.0(3.8)			11~13C	胎土は粗く、長石、石英、酸化鉄色を呈す。細長い炭化植物のよどみ等が多く混じる。口縁部の横ナデは幅が広く、屈曲は弱い。体部下半にいくつかの指頭圧痕。内面には摩耗しているが幅2mm程度の暗文が数条走る。	和泉型
32	376	VII層	瓦器椀	(1.1)	5.0		11~13C	胎土焼成とも良好で内面の表面は銀化。高台内部の底面には貼付の際の指頭圧痕がいくつか残る。内面見込には、平行線とそれに交差した暗文がみられる。高台の厚みは3mm程度。高台付近の外側底部近くにも指頭圧痕が若干みられるが固化はできなかった。	和泉型?
32	377	VII層	瓦器椀	15.6	4	4.0	11~13C	口縁から底部まで残る。内面は摩耗がひどく、暗文については確認できない。和泉型の特徴である口縁部の強い横ナデが2段にわたって施されており、指頭圧痕も多い。口径にして器高が低く、Ⅲ期後半の頃のものか?	和泉型
32	378	VII層	瓦器皿	(1.0)	4.6		不明	焼成は甘く胎土もやや粗。残存部が少ないと摩耗のため暗文の有無はわからない。	不明
32	379	V層	瓦器皿	7.9	(1.4)		不明	口縁部はやや肥厚し、端部を丸くおさめる。口縁部強く横ナデ。	和泉型
32	380	V層	綠釉供 膳具	(1.5)	5.4		9~10C頃	口縁部欠損のため皿か椀かは不明である。底部削り出し高台。円盤状高台部分にくりぬき。底部に至るまで施釉。	搬入
32	392	廃土	捏ね鉢	30.0	(4.3)		II期第2段階 12末~13C初頭	口縁部の拡張が不明瞭で単に肥厚させた状態である。口縁部横ナデ。内面にも横ナデを施す。外側に煤が多量に付着しており、煮炊き具に使った可能性もある。	東播系
32	393	VII層	捏ね鉢	32.0	(4.0)		II期第2段階 12末~13C初頭	口縁下強い横ナデにより僅かに段部を持つ。下方への拡張は他に比べて弱い。体部外側の器面調整が粗く、焼成も甘くて軟質である。	東播系
32	394	V層	擂鉢	34.0	(6.4)		II期、14C	後の備前焼の茶褐色ではなく、還元焼成の青灰色を呈し、須恵器とほとんど変わらない。口縁部は外方に向かって斜めに直線的に切られる。体部は内外面とも木製ヘラに寄る横ナデの痕跡がみられる。内面には放射状の櫛描条線が数条(けり)、擂鉢として作られている。	備前
32	395	VII層	擂鉢	28.0	(7.0)		IV期初頭 15C	酸化炎症性による備前焼独特の茶褐色を呈すがやや赤味がかっている。焼成は甘く軟質。口縁部は下方が膨らみⅢ期末~Ⅳ期初頭の特徴を持つ。体部外面にヘラ削記と回転ナデ。内面にも同様の横ナデ。摩耗して不明瞭になっているが多条擂目である。	備前
32	396	V層	擂鉢				IV期、15C 後半頃	酸化炎焼成による赤褐色を呈し、堅く焼き締っている。口縁には片口の一部が残る。口縁の平坦面がはばひろで上下に立ち上がり拡張し、IV期後半頃の特徴を持つ。内面の擂目は1本程の多条擂目である。外側に木製ヘラによる欠いて横ナデ、ないしめにも横ナデ痕が残る。	備前
33	397	VII層	瓦質羽 釜	22.8	(2.7)		14世紀代か?	焼成不良。口縁下羽部の直上に工具による強い横ナデの痕。	釜G型式
33	398	V層	瓦質羽 釜	24.0	(7.1)		14~15C	焼成不良。外側だけでなく内面にも煤付着。	釜D型式
33	399	V層	陶器	11.6	(2.2)		近世	口縁端部下に強い横ナデ。ういす色の釉薬が口縁部にかかる。	
33	400	IV層	煙管	全長 6.0	全厚 1.1	孔径 0.4	江戸時代	キセルのらうの部分。乾燥のため木製の部分に亀裂が走る。	

Tab.15 1・2区出土遺物観察表(石器)

Fig No.	挿図 番号	器種	出土地点	時期	石質	法量(cm)				備考
						長さ	幅	厚さ	重さ	
26	307	楔形石器	SD6C層	縄文	緑色岩	2.9	5.3	1.7	27.2	長方形を呈し、刃部4ヶ所、側面截断面。
26	308	有孔円盤	SD6C層	古墳?	結晶片岩	3.5	3.7	0.0	6.9	石製模造品か。中央部に径1mm強の小孔が2ヶ所穿孔される。また縁辺部にも径3mm程の小孔が認められる。
26	309	砥石	SD6B層	中世?	砂岩	(7.4)(4.7)	1.4	(84.5)		使っているのは表面の一面のみ。左上に溝状に窪む擦痕が数条見られる。
26	310	砥石	SD6B層	中世?	細粒花崗岩	(4.0)(5.0)	2.3	(65.4)		先端部が残り、他は欠損している。三面のみ使用、一面は金属による細い線状の擦痕が数条見られる。もう一面には細長いものを擦るのに使ったと思われる跡がある。
26	311	円礫	SD6B層	中世?	細粒花崗岩	(14.8)9.1	8.4	(1180.0)		大型の円礫で、半分に欠損しており、側面に敲打痕らしきものが認められる。破損面以外は被熱する。
33	401	石鎌	V層	縄文?	チャート	2.0	1.7	0.3	0.8	凹器。三角形鎌。断面凸レンズ状。ややていねいな調整。
33	402	石鎌	V層	弥生?	サヌカイト	2.8	1.7	0.4	1.8	縁辺部両面より扇状に凹む。浅い凹基。縁辺部のみ調整。
33	403	楔形石器	VII層	不明	石英粗面岩	(8.8)6.0	2.0	(207.4)		六面体の内、側面の2面を残していくれも磨きあげられている。表面上端部に僅かに溝状の窪み。

Tab.16 1・2区出土遺物観察表(木製品)

Fig No.	挿図 番号	出土地点	器形	法量(cm)			備考
				全長	全幅	全厚	
27	314	SD4D層下	卒塔婆	108.9	6.6	1.5	卒塔婆には供養塔卒塔婆と墓標卒塔婆とあるが、どちらの性格のもののかは現在のところ不明である。肉眼では見えないが梵字が描かれている。上端は卒塔婆特有の二等辺三角形を成し、面取りの痕も残るが、下端は破損のためさくられ立っている。
27	315	SD4D層下	矢板	49.0	11.4	1.1	厚さ1.1cmの長方形の板状の矢板。一方の長辺をおよそ1cmの幅で斜めに切り落とし、上端部に1cm弱の面取りを施す。
27	316	SD4D層下	矢板	60.7	35.2	2.0	厚さ約2cm、幅約3.8cm、残存部の長さ約60cmの巨大な長方形の板状の矢板である。先端部分を約3cm強の幅で斜めに切り落とし、銛仕上げる。
27	317	SD4D層下	矢板	26.7	6.1	1.4	剥離による凹部があるが、断面長方形を呈す。側面の調整は比較的丁寧になされる。先端部には切り落とし痕らしいものがあるが、剥離や欠落のためはつきしない。
27	318	SD4D層下	部材?	40.0	12.3	1.2	厚さ1.2cmの薄い長方形形状の板材。断面長方形の短辺の一方に幅1cm強の面取りを施し、台形状を呈す。力変の片面に七面取り痕が残る。
27	319	SD4D層下	杭	60.4	6.2	4.0	33才同様の仕上げである。
27	320	SD4D	杭	60.3	4.1	4.0	一面を大きく面取りし、先端部の左右をさらに何面か細かく面取りする。
27	321	SD4D層下	杭	68.9	4.3	4.4	先端部を対面で二面ぞぎ落とした後、残る二側面の一方を二面、もう一方を一面小さく面取りする。上端部、枝からの切り離しによる面が残る。
27	322	SD4D層下	杭	70.0	3.8	3.2	幅3.8厚さ3.8cmの小振りの杭である。丸みを持った自然面を半分近く残し、両側面を小さく面取りする。残った部分を中央に稜線がくるようにさらに二面、面取りを施す。やや雑な仕上げである。
28	323	SD4	杭	79.5	4.1	4.0	一部自然面を残し、その両側を小さく面取りする。残った自然面の先端部分のみをさらに一面切り落とす。その後細かい面取りを施し、仕上げる。
28	324	SD4	杭	75.8	4.8	3.5	屈曲した枝を杭として使用。基本的には33才同様の仕様であるが、残った自然面のごく先端の部分を小さく面取りし、先端部をより鋭く仕上げている。上部に枝からの切り離しによる面取りが見られる。
28	325	SD4D層下	杭	37.2	3.7	3.7	最初に一面を大きく切り落とし、その両辺を小さく二面、面取りして、片刃のような形状に仕上げる。その後、細かい面取りによる仕上げ調整を施す。
28	326	SD4D層下	杭	52.4	5.0	3.6	先端部、五面にわたって全面に面取りを施す。先端近くでさらに細かく面取りを施し、鋭くする。
28	327	SD4D層下	杭	42.2	6.1	4.8	先端部全面面取り。大きく四面を切った後、細かく面取りを施す。
28	328	SD4D層下	杭	25.0	3.0	3.1	全幅全厚共におよそ3cmの小振りのくい。最初に一面を大きくぞぎ落とし、その両辺を小さく面取りする。残る自然面のごく先端の部分をわずかに面取りし、仕上げている。
28	329	SD5	杭	29.1	3.2	3.3	長さ、厚さとも小さめの杭。全面に面取りが施されるが、三面を面取りした後、残る一面を中央部に稜線が走る形に面取りする。先端部中位からも皿に細かく面取りを施し、鋭くしている。
28	330	SD6	杭	54.0	8.0	7.3	先端部表面の半分弱を自然のまま残す。残った表面を、大きく三面に切り落とす。その後數力所にわたり、細かい面取りを施す。
28	331	SD4D層下	杭	52.5	5.0	3.7	最初に一面を大きく面取りし、その両辺を小さく面取りする。残る自然面を二面に落とし、全面に面取りを施す。先端部をさらに面取りし、鋭くする。
28	332	SD4D層下	杭	55.5	4.5	4.0	先端部の一部を自然面のまま残し、三面を切る。三面の内、中央部を大きく、両側を小さく面取りする。自然面を残し、片刃のような仕上げである。
28	333	SD4D層下	杭	37.9	3.9	4.2	一面を大きく切り落とし、その両辺を小さく面取りする。
33	404	トレンチ1	田下駄	60.0	11.6	1.2	田下駄の中の足板の部分。これは三孔紐結合型足板で、孔の位置から右足用である。上下の四つの孔は他の部材(田下駄の枠)と結合するための孔であると思われる。ほぼ完形であるが足板の下端、踵部の方の右側の孔付近が一部欠落している。
33	405	VII層	紡織具	25.9	5.0	0.9	糸巻き具の中の横木。両端部の、枠木に差し込む棒状の部分が欠落している。2本の横木を十字にそれぞれ相欠きで組み合わせ、その中心に軸孔を持つ。

第2節 3区の成果

(1) 3区の概要

3区は1、2区の西北に位置し、標高10.6m前後である。各堆積層からは縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・近世陶磁器類が出土したが、すべて流れ込みと思われるものであった。当調査区からは自然流路(SR)3条が確認されたが、遺構内出土の遺物で図示できる遺物はなく、この3条の自然流路の時期について明確にすることはできない。

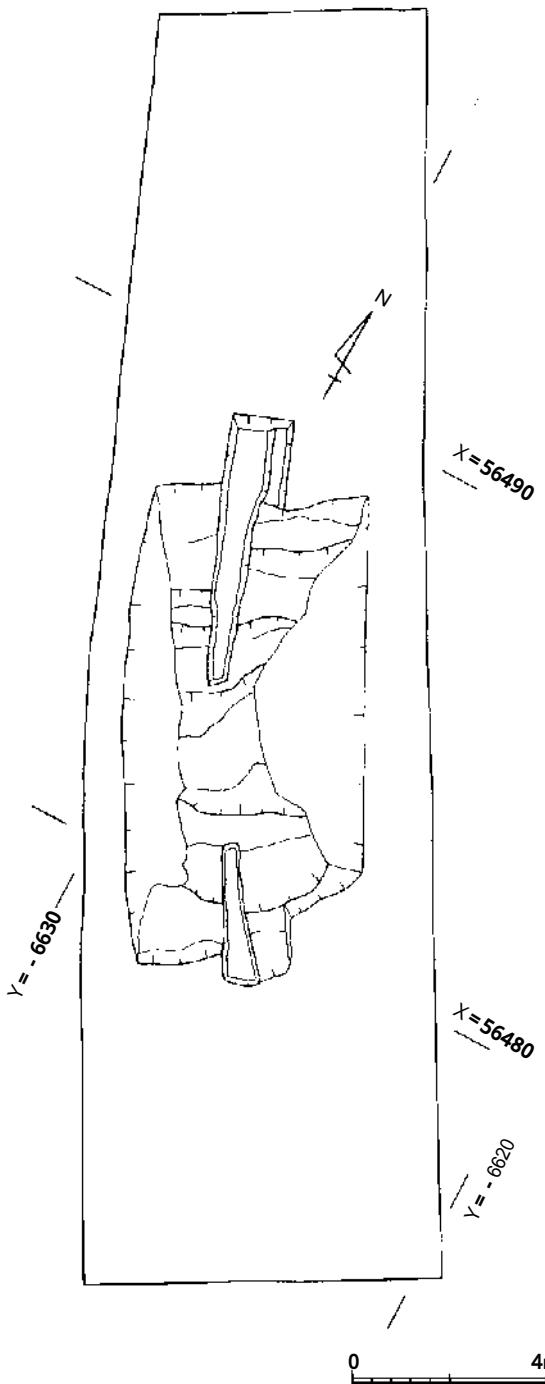


Fig.34 3区検出遺構平面図

(2) 検出遺構

3区では、自然流路3条を調査区中央部で検出した。この3条の自然流路は南西方向から北東方向に、それぞれほぼ平行に流れていたと思われる。出土遺物はSR1から縄文土器細片1点、弥生土器細片3点、土師器細片1点が出土したが、図示できるものは無い。SR2・SR3からは土器は出土しなかった。出土遺物の多くは自然遺物である。

1. SR1 (Fig34)

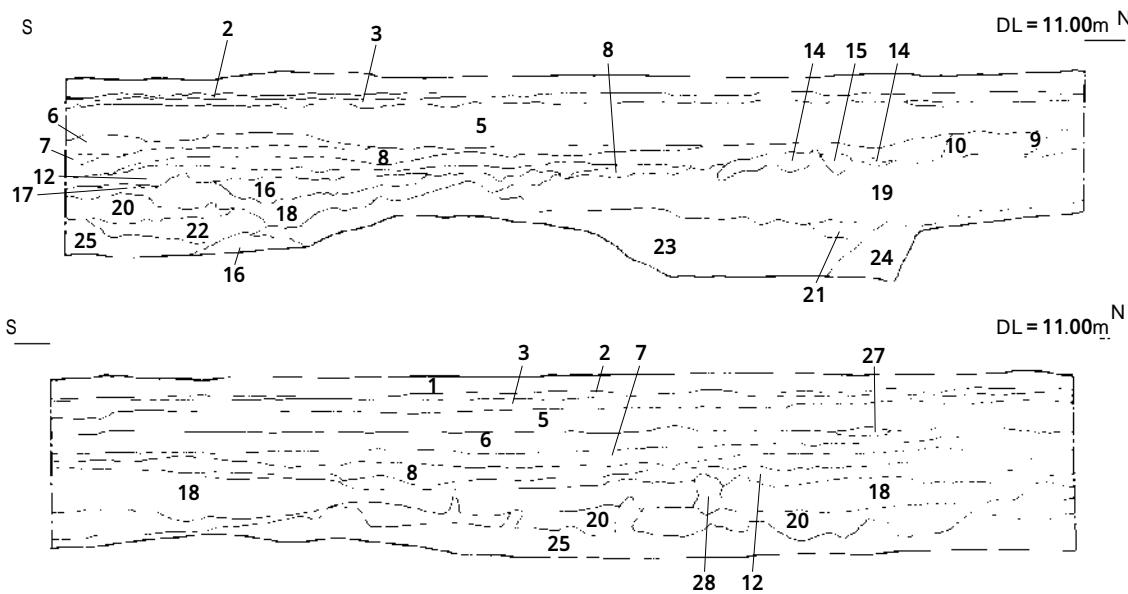
地表下約1.8m下で検出された自然流路である。確認延長4.8m、幅8mを測る。深さは約1.4mである。出土遺物はⅡ層から弥生土器細片2点、Ⅲ層から縄文土器細片1点・弥生土器細片1点・土師器細片1点が出土したが、図示できるものは無い。自然遺物の出土は、獸骨・二枚貝・堅果類である。

2. SR2 (Fig34)

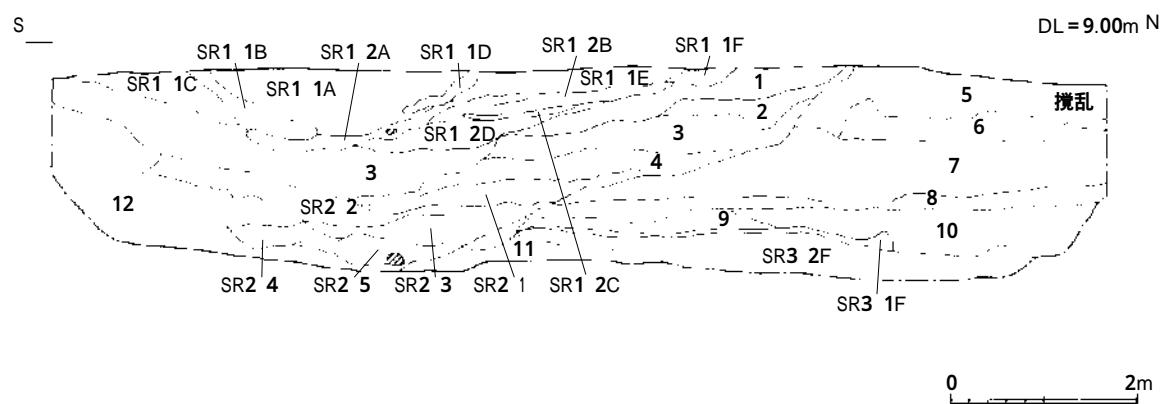
SR8の検出面の約1.2m下で確認された自然流路で、SR1によって切られている。確認延長4m、幅5.7m、深さ1mを測る。出土遺物は自然遺物（獸骨・二枚貝・堅果類）のみである。

3. SR3 (Fig34)

SR1の検出面から約1.8m下で確認された自然流路である。確認延長は約1.4mであったが、



- 1.灰～褐(粘質土) 2.にぶい黄灰(客土) 3.灰(粘質土) 4.灰オリーブ(粘質土) 5.灰オリーブ(粘質土)
 6.灰黄(粘質土) 7.暗灰黄(粘質土) 8.灰オリーブ(粘質土) 9.灰オリーブ(粘質土) 10.灰(粘質土)
 11.暗褐灰(粘質土) 12.灰(粘質土) 13.11と同じ 14.11と同じ 15.灰オリーブ(粘質土)
 16.黒褐(粘質土) 17.16と同じ 18.黒褐(粘質土) 19.灰オリーブ(粘質土) 20.黄灰(粘質土)
 21.暗褐(粘質土) 22.灰黄褐(粘質土) 23.黒褐(粘質土) 24.灰黄褐(粘質土) 25.灰(粘質土)
 26.灰(粘質土) 27.暗灰黄(粘質土) 28.黄灰(粘質土)



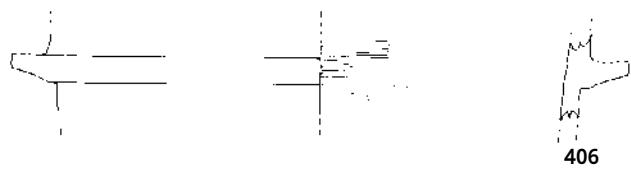
- SR1**
 1A.灰白(粘土) 1B.灰(粘土) 1C.灰白(粘土) 1D.灰(シルト) 1E.灰白(粘土) 1F.灰(粘土)
 2A.黄灰(シルト) 2B.黄灰(粘質土) 2C.灰(粘土) 2D.黒褐(粘質土) 3.灰(粘質土)

- SR2**
 1.黒灰(シルト) 2.黄灰(シルト) 3.灰(シルト) 4.暗緑灰(砂質) 5.灰(シルト)

- SR3**
 1.オリーブ黒(シルト) 2.黒灰(粘土)

Fig.35 3区基本層序

調査区の関係上SR3の幅・深さは確認することが出来なかった。出土遺物は自然遺物（堅果類）のみである。



406

(3) 出土遺物 (Fig36)

406は羽釜で口縁より下に鍔がついている。外面ナデ調整で、鍔の下に指頭圧痕があり、内面粗いハケ調整が行われている。407は高坏の坏部で、内外面ともナデ調整である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。共に遺構外出土の遺物である。

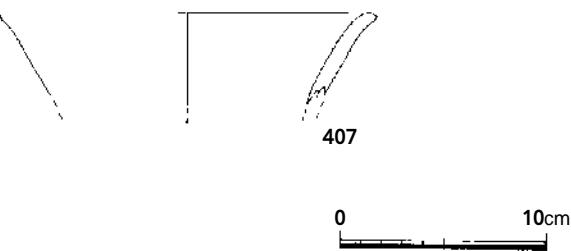


Fig.36 3区遺構外出土遺物

第3節 4区の成果

(1) 調査の経過と試掘調査の概要

用地未買収等の理由により、天崎遺跡の調査対象地点の中で4区に相当する部分のみ、平成8年度に試掘調査が実施できていなかった。平成9年12月15日から25日までの日程で調査範囲確定のための試掘調査を実施した。Fig.37に示したTR-1～TR-10の10ヶ所のトレンチの調査の結果、出土遺物は少ないものの、約2,200m²の範囲に遺構の広がりが確認され、翌平成10年1月～3月の日程で本発掘調査を実施した。

調査面積は2,000m²、調査日時は平成10年1月6日～3月26日である。

4区の試掘調査は、遺構の広がりと調査対象の遺構面の数を把握することを目的として実施した。出土遺物は小破片が多く、実測可能遺物は3点と少量ではあるが、遺物包含層の形成は認められ、天崎遺跡では従来確認されていなかった弥生前期の遺物も検出された。Fig.38の408は須恵器・円

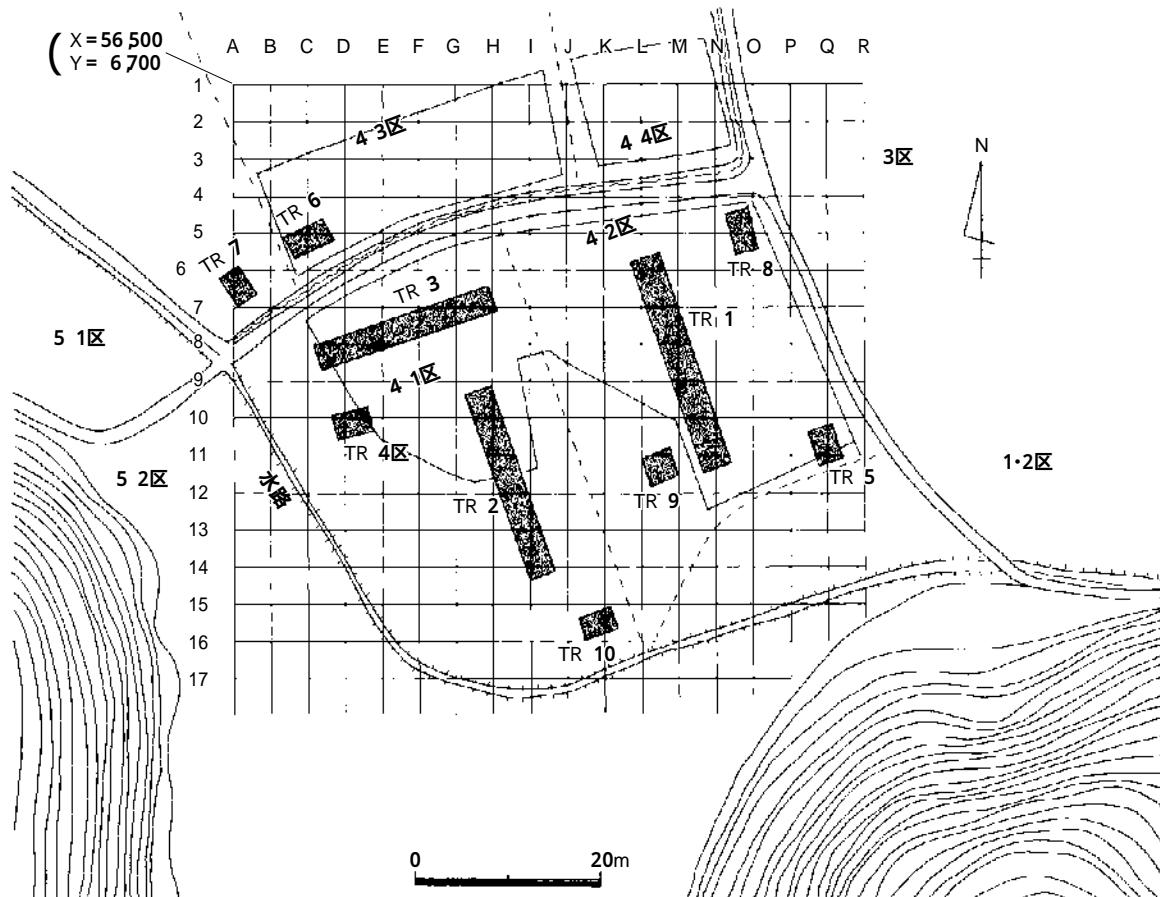


Fig.37 4区試掘トレンチ位置図及びグリッド図

盤状高台の椀で、底部はヘラ切り、10世紀中葉に位置づけられる資料である。軟質の須恵器で、外面は黒灰色に発色するなど器表から受ける印象は瓦器に近いものがある。意図したものではないが、瓦器椀と類似した条件下での焼成により製作されたものである。

409は土師器甕、10世紀の資料である。410は弥生土器甕、小片ではあるが多条のヘラ描沈線により弥生前期末の遺物だと判断される。

Fig.37のTR-1・2・3・6・8の各試掘トレンチからは黄褐色シルトを遺構面としたピット等の遺構が確認され、試掘対象範囲東南端のTR-5からは溝と方形のプランを持つ遺構が灰色粘土層の上面で検出されている。

水田区画等の現在の地割りを基準に設定した4区の小区だが、試掘調査の結果、4-1・2区と4-3・4区を区画する生活道付近が旧地形の標高は最も高く、遺構が集中していることが判った。また、4-2区の南端付近は黒褐色腐植土を埋土とする遺構が青灰色（～灰色）粘土層上面に形成されていることがTR-5により判明したため、調査区は4-2区南端まで連続させて拡張した。4-2区南半の遺構形成面の粘土質シルトと北半の上層に黒褐色粘土の包含層を持つ黄褐色シルトは異なった層であり、形成時期は特定できないものの北半のシルト形成後に南半のシルトが形成されている。

下層の遺構面を把握するため、部分的に地表下3～5mまで重機により土層、包含遺物等の確認のため掘削したが、遺構面である黄褐色シルトの下層は粘土が連続して堆積しており、遺構の形成や土器・石器等の遺物は全く認められない。TR-1からは流木や植物遺体が集中する黒褐色腐植土を埋土とする自然流路が地表下2.5～3mの地点から検出されたが、人為的な遺物は認められなかった。この流路は3区の流路と連続する自然流路であると考えられる。

(2) 調査の方法

4区は1～3区と5区に挟まれた調査区で、調査工程と調査区の中央を生活道が縦断する関係上、4-1、4-2、4-3、4-4の4つの小区に分けて調査を進めた。調査区の位置関係については第1章Fig.2のとおりである。4区の調査に際しては公共座標に即して、東西方向A S(西から東へアルファベット順)、南北方向1～17(北から南へ数字の昇順)の4mグリッド(Fig.37)を組み、西北端の測量杭を基点として遺物の採り上げ、遺構測量等の測量作業を実施した。測量杭の設置に関しては、遺跡周辺に平成9年7月に設置した3級基準点2点を基点に、調査区内に公共座標に即した測量杭を設置して行った。使用した3級基準点はNo.1 (X=56,477.622、Y=-6,527.800)、No.2 (X=56,448.722、Y=-6,621.751)の2点

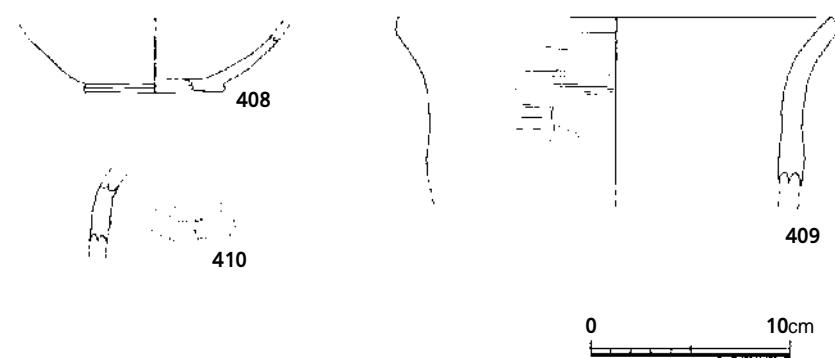


Fig.38 4区試掘調査出土遺物 (S=1/4)

である。

試掘調査によって確認された包含層上面までは重機により掘削し、遺物包含層から下は人力による掘削で調査を進めた。遺構の平面図、土層堆積状況等については基本的にS=1/20の図面に記録し、遺物出土状況等状況に応じてS=1/10など他の縮尺の図面に記録する。

(3) 4区本発掘調査の成果

調査小区を3つに分けて、(1).4-1・4-2区、(2).4-3区、(3).4-4区の順に成果の記述を進める。出土遺物は大別して、弥生時代・古墳時代前期・古代・中世以降に分けられる。各小区ごとに時代順に記述を進める。

1.4-1区・4-2区

①調査区の概要と基本層序 (Fig.39・40)

調査工程の関係上2つの小区に分けて設定したが、遺構面・出土遺物から見ても同じ内容を持つ調査区である。出土遺物は土器の小破片が多く、図示し得た遺物は両方の調査区を併せて7点に過ぎない。また、この調査区からは古墳時代以前の遺物は出土していない。

南側では粘土層の厚い堆積が認められ、地層は20層に分層できるが、遺構面の基本的な堆積はVI層である。Fig.40の調査区北壁セクションで示したとおり、I層が耕作土である灰黄褐色粘土、II層がオリーブ灰色粘土、III層が灰色・灰黄色シルト質粘土、IV層はにぶい黄褐色シルト質粘土、V層は褐色・暗褐色シルト質粘土、VI層は黄褐色シルト層である。

遺構形成面は黄褐色シルト(VI層)上面であり、遺構面の上には暗褐色粘土層(V層)が5~15cmの厚さで堆積している。VI層上面で検出される遺構の埋土は暗褐色粘土と黒褐色粘土の2種類がある。IV層上面にも灰色粘土(III層)を埋土とする遺構が形成されているが、V層を掘り込んでVI層でも検出されている。I層からは湿田を乾田化する目的で地表面からの深さ約1mの暗渠が掘り込まれており、本線暗渠とそれに連なる支線暗渠とが縦横に張り巡らされている。この調査区では粘土及びシルトの堆積と侵食が繰り返されており、遺構検出面(VI層上面)では、これらの遺構が錯綜した状況での遺構検出となった。

ピットは合計232基検出したが、建物跡を復元することはできなかった。4-1・2区の北端から6~10メートルの幅で黄褐色シルトを基盤とする微高地状の地形が形成され、南半に向かって落ち込んでいる。V層が分布しているのはこの微高地上である。南半の遺構埋土は4-2区南端を除き、すべて灰色粘土である。

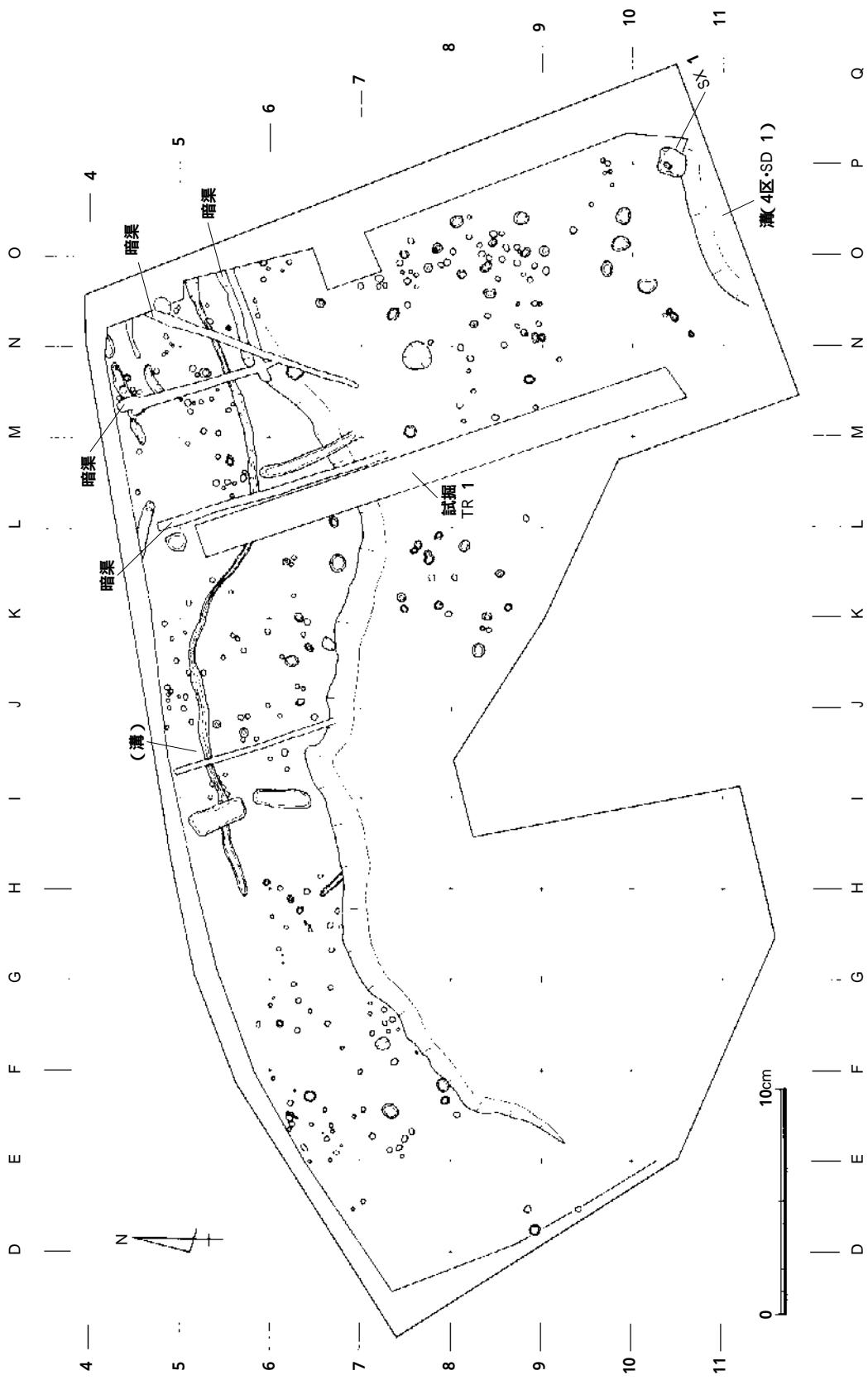


Fig.39 4-1・2区全体図 (S=1/250)

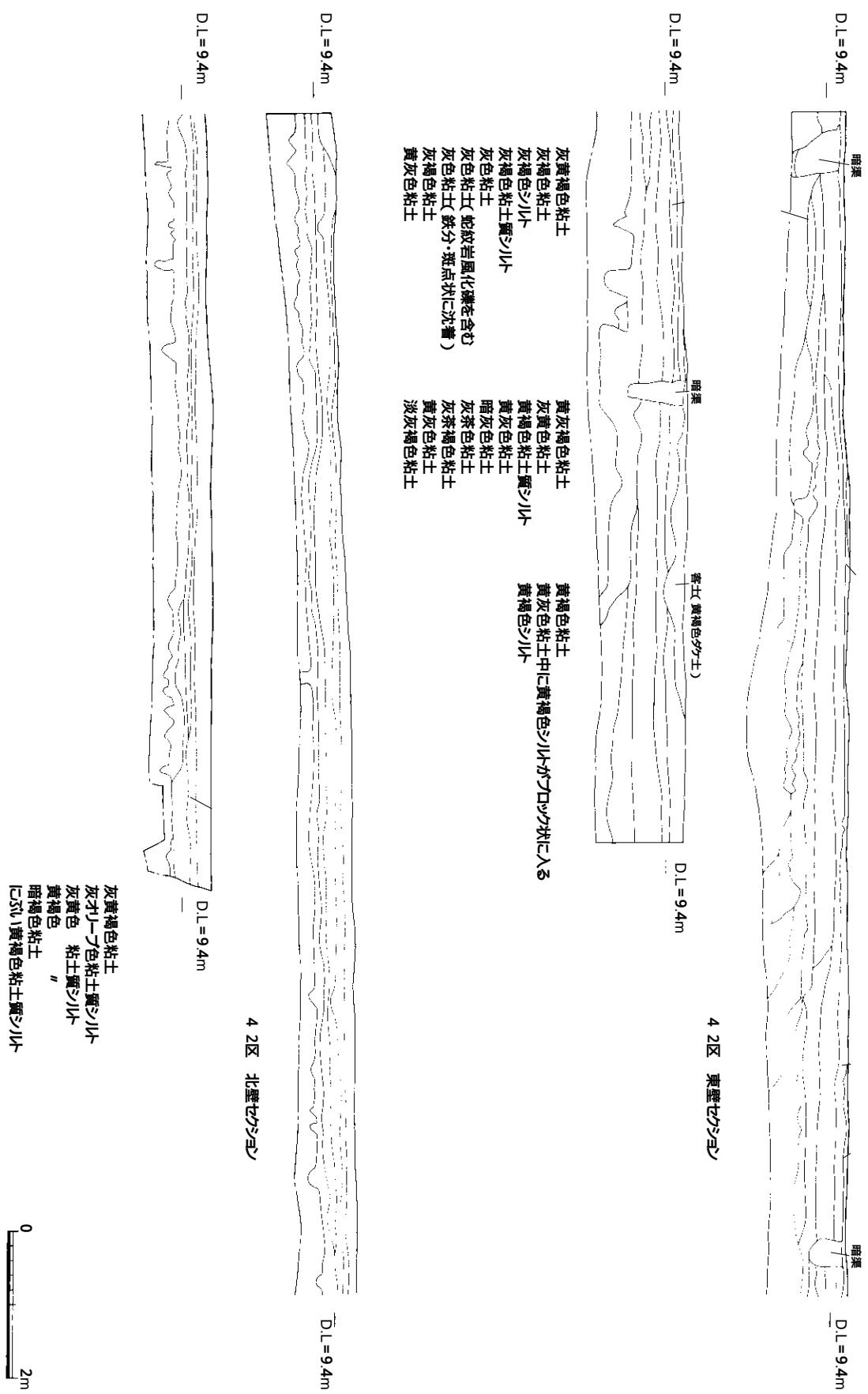


Fig.40 4-2区東壁・北壁セクション(S=1 / 80)

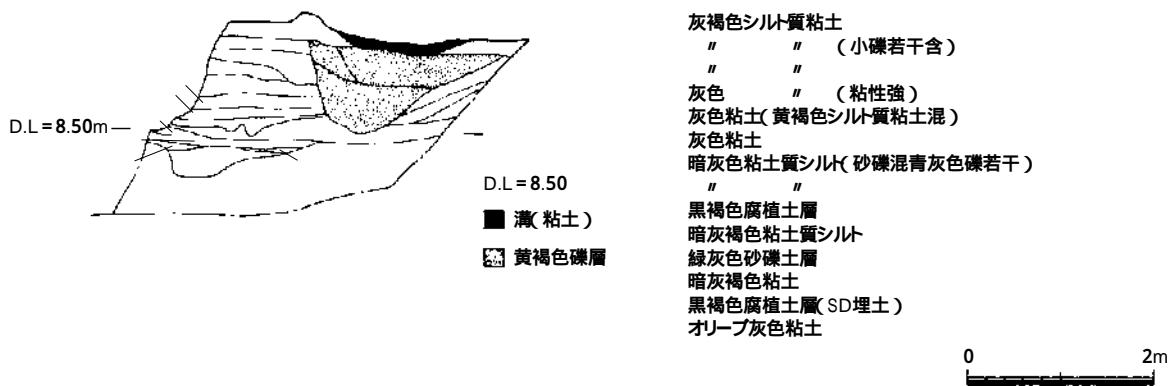


Fig.41 4-2区南端セクション (S=1 / 80)

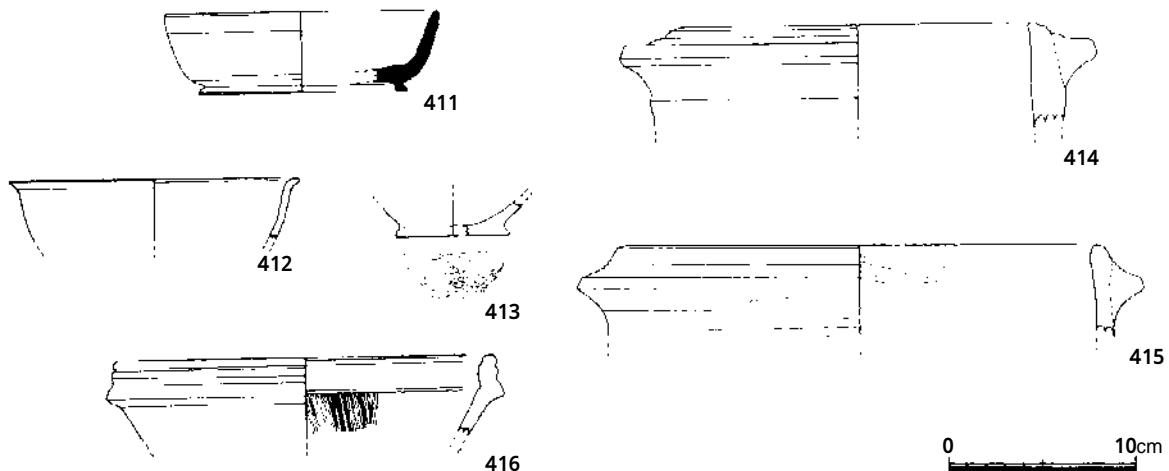


Fig.42 4-1・2区出土遺物 (S=1 / 4)

②遺構と遺物

A.古代

明確に古代の遺構であると特定できるものはない。

包含層出土遺物としてFig.42-411～416が挙げられる。4-1区出土の411の須恵器・杯は遺構検出時に出土したもので、8世紀後半に位置づけられる遺物である。また4-2区IV層及び遺構検出時には412～415の遺物が確認されている。412は土師器の椀で口縁部の小片であるが、器壁4mmと薄く口縁は端反の形状である。413は底部糸切りの円盤状高台の杯、414・415は摂津C型の土師器・羽釜である。断片的な出土であり、10～11世紀に位置づけられるものの詳細な時期の特定はできない。

古代の遺物は少量であり、検出されたピットの中に当該期の遺構が含まれている可能性はあるが、この地点に集落の中心はなかったものと考えられる。。

B.中世

4-2区南端からは、溝1条(SD-1)と皿状土坑1基(SX-1)が検出されている。

SD-1(Fig.43)

SD-1は黒褐色腐植土を埋土とし、幅1~1.2m深さ0.3mの溝で、長さ約9mを検出した。SD-1出土遺物の中で図示し得る遺物は無いが、小片の土師器・瓦器が出土しており、12~13世紀に埋積した溝だと考えられる。埋土及び出土遺物から1区及び2区のSD-4・5・6に連続する溝の可能性がある。

SX-1(Fig.44)

SX-1は隅丸方形の深い皿状の小土坑である。一边115cm、深さ6cm~20cm遺構床面にはピット状の落込みがあり、遺構とその周辺には15本の直径3~5cm程度の小杭が打たれ、石灰石と砂岩の円礫がFig.44のように配されていた。砂岩円礫の下にも小杭は倒れた状況で検出されており、これらの礫との関係で打たれた可能性もある。

埋土はSD-1と極めて似通っており、上面で遺構の切り合い関係を明確に捉えることはできなかった。

遺構の性格は不明である。水路と想定できる溝(SD-1)に接していること、意図的に円礫が配され、方形のプランを有することから何らかの祭祀的な意味を持つ遺構である可能性もある。約32m離れた地点に銅矛が埋納された遺構(2区SK-1)が溝上面で検出されているが、SX-1は同時期に形成されたとみられる遺構であり、その関連においても注目される。

C.その他の時期の遺構と遺物

時期の特定できるものとしては、近世後期の擂鉢口縁(Fig.42-416)と第2次世界大戦中に形成された暗渠がある。

416は近世後期の擂鉢である。内面に12条1単位の条線を持つ。中世~近世前期を通して土佐の擂鉢の主役である備前の擂鉢とは、明らかに異なり鮮やかな赤橙色に発色する。18世紀から19世紀にかけて、安価な普及品として浸透、備前の擂鉢を席卷した堺の擂鉢である。

第2次世界大戦中の暗渠(Fig.39)

暗渠が4条検出された。地表面からの深さ約100cm、幅30cm前後の直線的に掘られる。最下層には割られた竹や柴などの植物が敷き詰められている。地元で暗渠の工事に携わった方によれば、節を抜いた竹を芝と共にそのまま埋めて水田暗渠としたという。基本的に側壁は直立しており断面長方形である。天崎遺跡の調査対象地点の水田全域から暗渠が確認されている。遺跡周辺の暗渠が作られたのは昭和18年から19年にかけてのことである。第2次大戦時の食料増産政策の一環として土佐市一帯の湿田が乾田化され二毛作が可能となる。

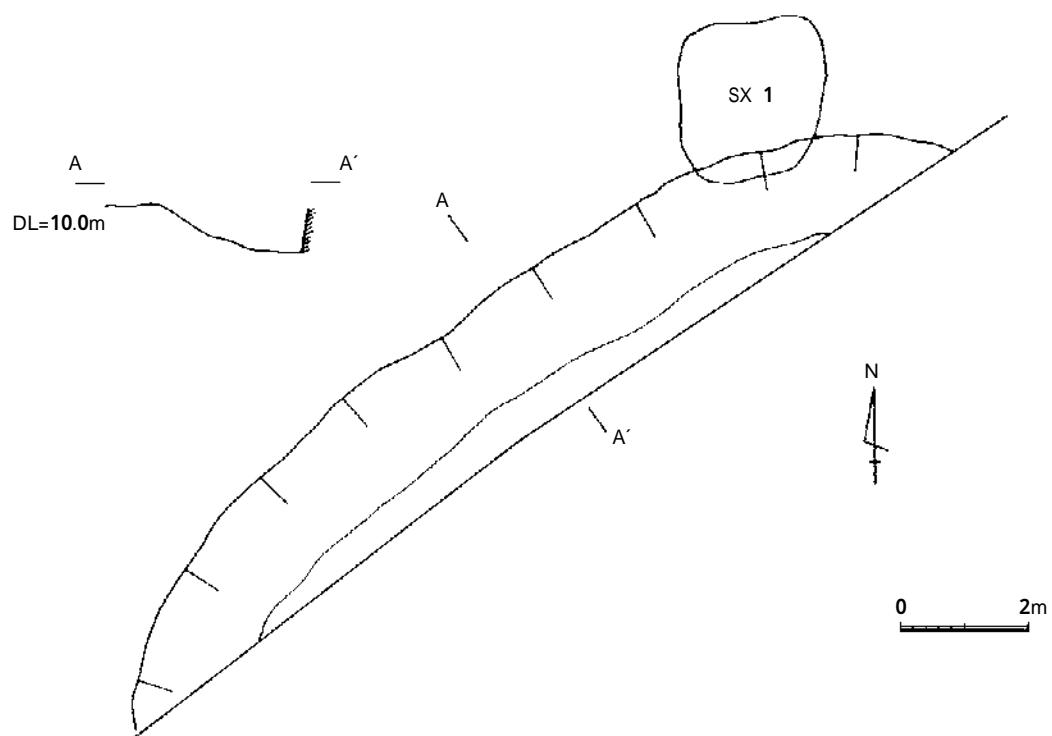


Fig.43 4区SD-1平面・エレベーション図 (S=1 / 60)

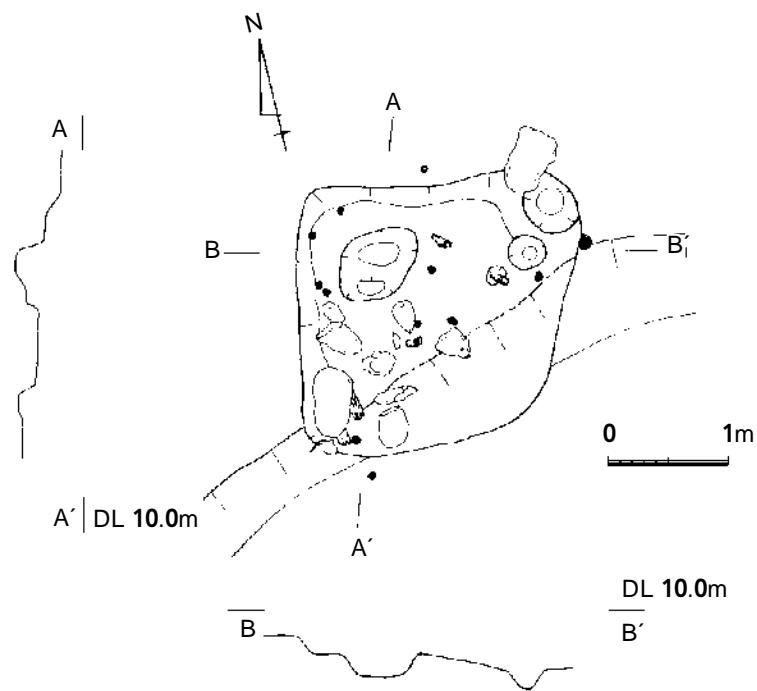


Fig.44 4区SX-1平面・エレベーション図 (S=1 / 30)

2.4-3区

①調査区の概要と基本層序

4-3区からは弥生時代から中世にかけての遺構が検出されている。調査面積は260m²で3面の遺構面(780m²)が確認されたが、1~2面目についてはほとんど遺構が認められず、1面目からは3条の南北方向に走る溝状遺構、2面目からは2基のピットが確認されたのみである。1~2面目の遺構面はFig.45に示したとおりであり、1面目の3条の溝は幅24~5cm、深さ約20cmの断面U字型で、直線に走るほぼ平行な溝である。溝の埋土は灰色粘土質シルト(Ⅲ層)である。3面目からはピット、皿状土坑、溝状土坑、竪穴住居等の遺構が検出された。同一検出面から弥生中期と古墳時代前期の遺構が混在した状況で検出されている。

4-3区の基本層序はFig.46に示したとおりである。灰黄褐色粘土である。層は現水田耕作土である。Ⅱ層はオリーブ灰色粘土、Ⅲ層は灰色・灰黄色シルト質粘土で、Ⅳ層のにぶい黄褐色シルト質粘土上面に遺構面を形成する。Ⅴ層は褐色・暗褐色シルト質粘土、Ⅵ層は黄褐色シルト質粘土、Ⅶ層はオリーブ灰色粘土、Ⅷ層の下層は粘土層堆積が続き、地表下3mまでは遺物は認められなかった。

②遺構と遺物

A.弥生中期

SK-1(Fig.47)

平面形は細長い溝状で、長さ4.56m、幅50~64cmの土坑である。検出面からの深さは最深部でも20cmほどであり、残存状況は悪い。6点ほどの弥生土器小片が含まれていたものの図示可能な遺物は認められなかった。

遺構埋土は褐色・黄褐色混粘土である。

SX-2(Fig.47)

浅い皿状の遺構で、埋土は炭化物が多く含まれた褐色・黄褐色混粘土である。平面形は長軸3.5m、短軸2.0mの不整形で検出面からの深さ約10cmと浅いが、炭化物が集中しており、地形の凹凸ではなく何らかの意図を持って形成された遺構だと考えられる。

弥生土器が25点ほど出土しているが、小片が多く、図示し得た遺物はFig.47-417の1点のみである。417は微隆起帯貼付後、微隆起帯間に櫛描平行線を施文する弥生中期後半の土器である。

ピット(P-1 P-16)

遺物は出土していないものの、3面上面で36基のピット状遺構を検出した。遺構埋土は弥生時代中期の遺構と類似(褐色粘土)しており、弥生中期の遺構として取り扱う。ただ同一検出面上で古墳時代の遺構も検出されており、他時期の遺構の可能性も残る。

直径5cmほどの小規模なものもある。主なピットの規模はTab.17のとおりである。

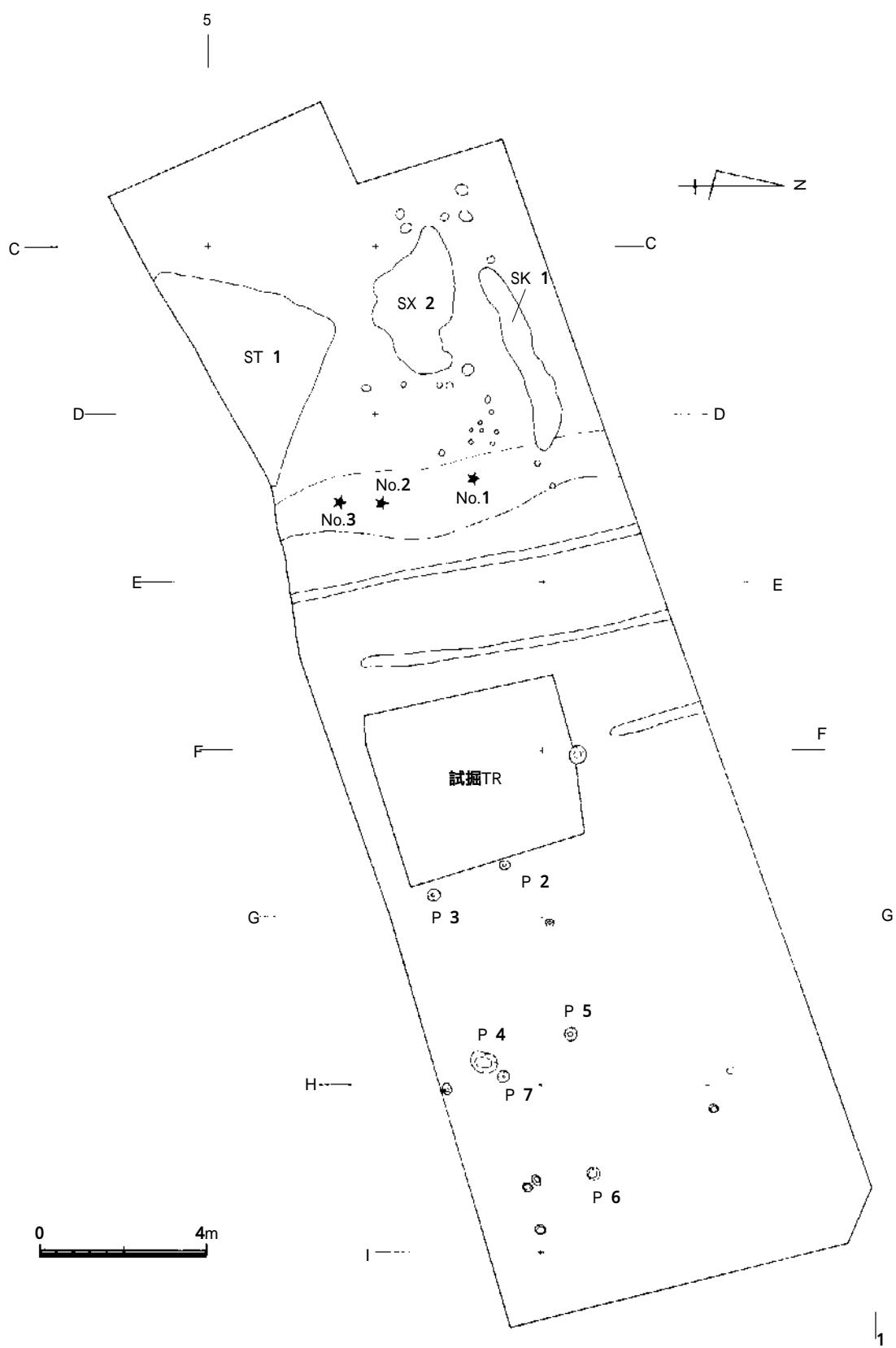
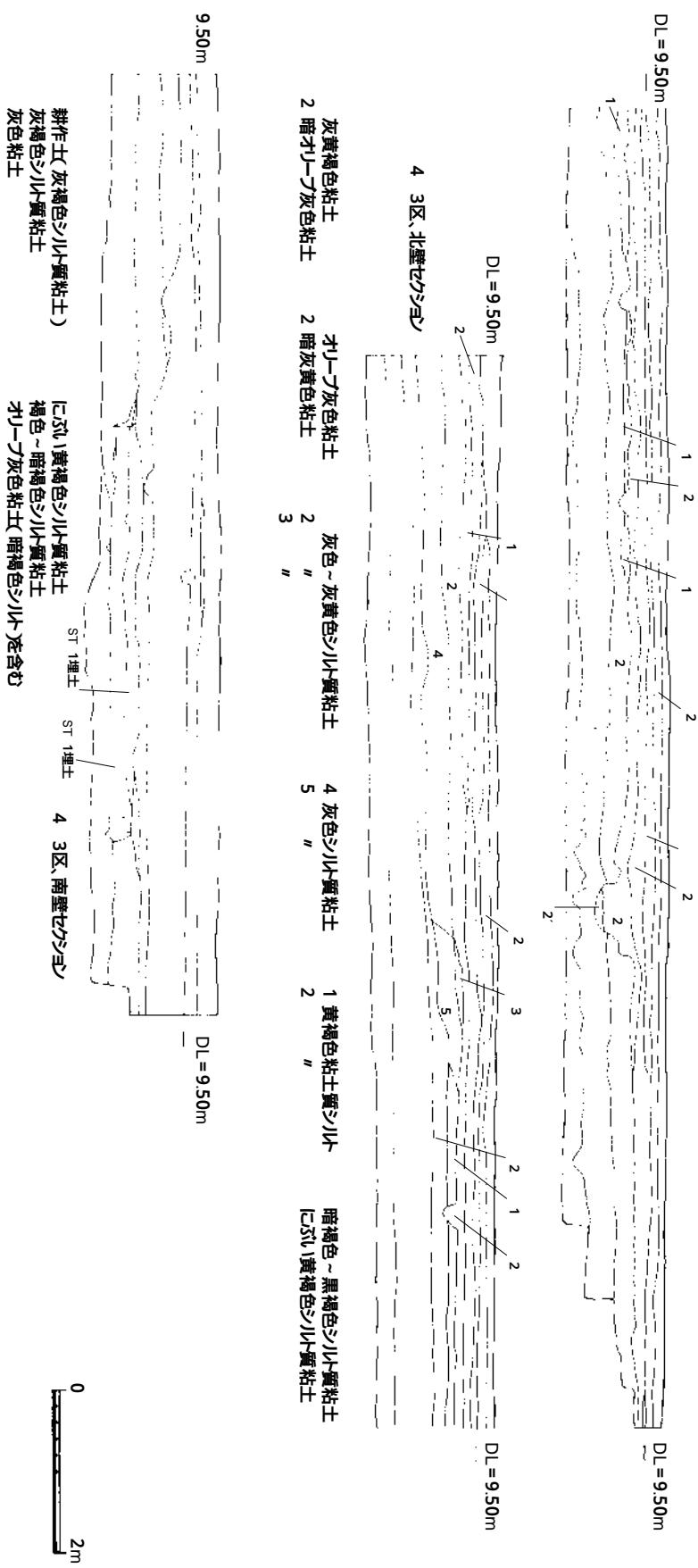


Fig.45 4-3区遺構平面全体図

2



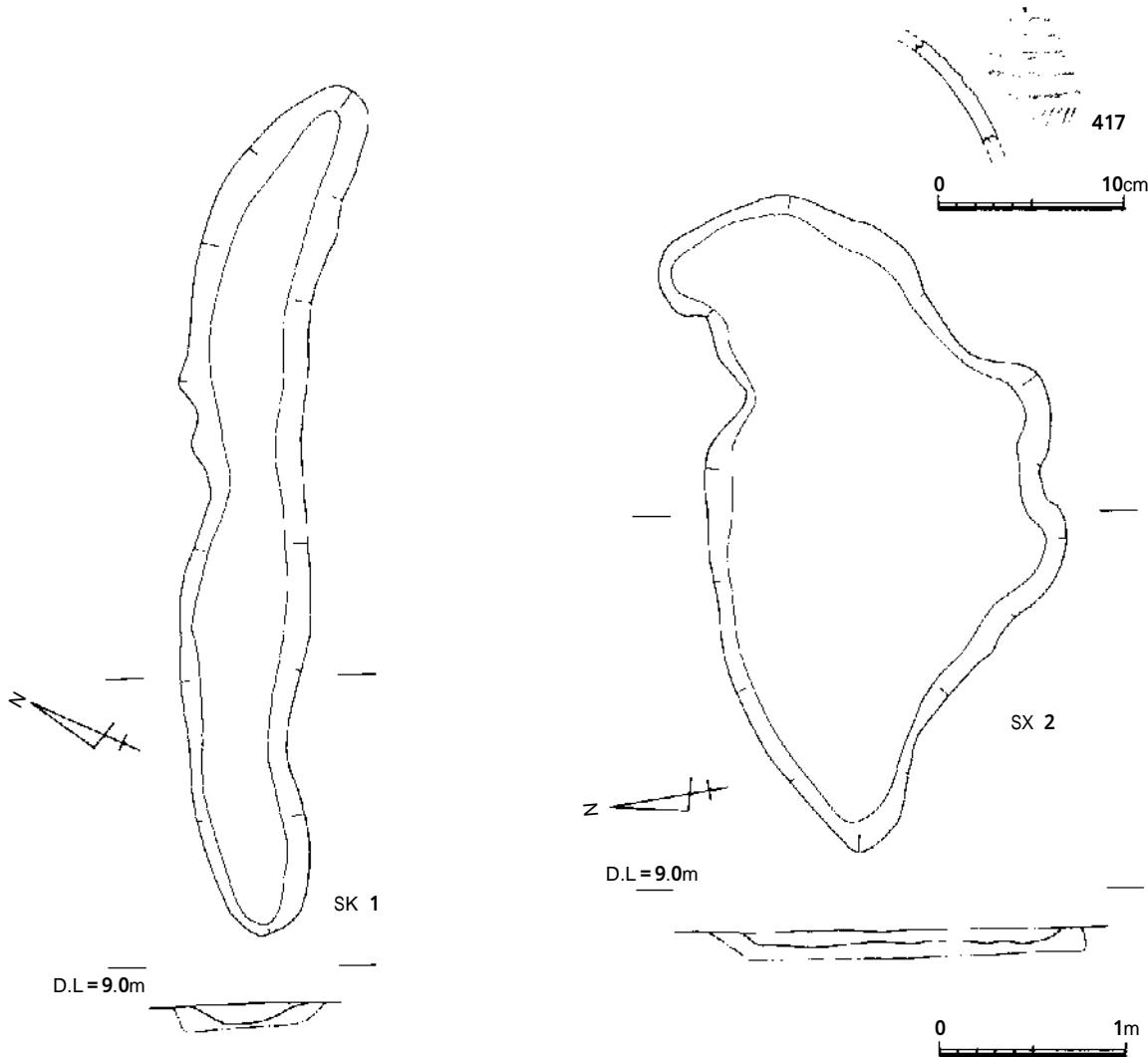


Fig.47 4-3区SK-1、SX-2遺構平面図・セクション図 (S=1 / 40) 出土遺物 (S=1 / 4)

B.古墳時代

ST-1(Fig.49)

1辺4.2～4.3mの方形の竪穴住居である。検出できたのは住居址の北辺・西辺を含む北西の約1/2である。Fig.49に示したとおり、住居址床面には何カ所かの浅いピット状の落込みは認められるものの、全て深さ1～2cmの落ち込みである。今回調査した範囲に明確に柱穴であると断定可能なピットは存在せず、ST-1床面の落ち込み位置については記したがピット番号を付けることは避けた。その中でP-1のみが明確な床面遺構として捉えられる。住居の中央部北寄りに位置するP-1は長軸48cn短軸30cm深さ12cmの規模の落込みで、周辺に厚さ4cmの炭化物集中土が分布することから炉跡だと考えられる。

幅10 12cm、床面からの深さ3～4cmの壁溝が巡らされ、検出面からの深さは30cm程である。Fig.46の南壁セクションで観察可能のように住居址壁面及び遺構検出面が被熱により赤化してい

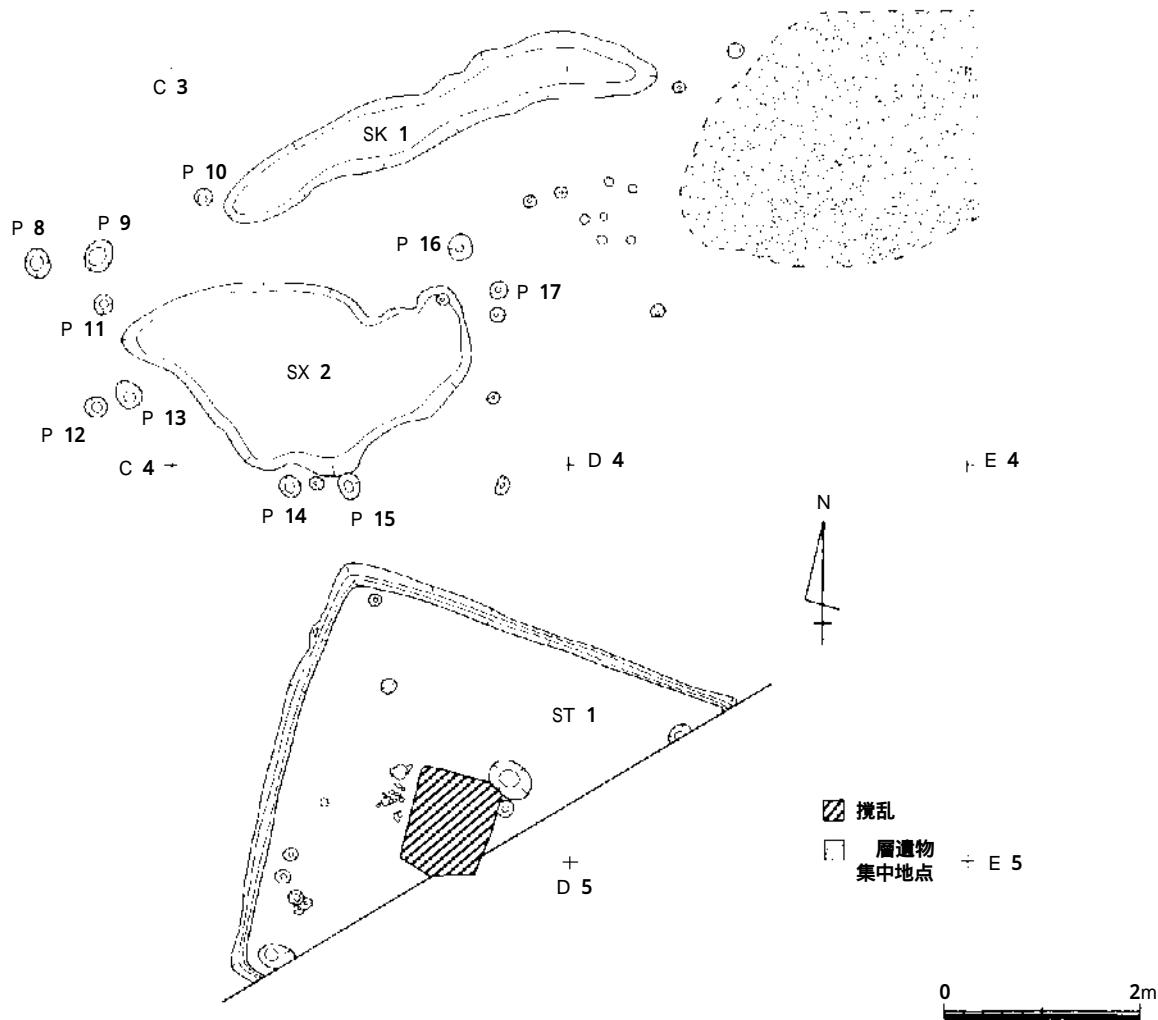


Fig.48 4-3区西端遺構配置図及びVI層遺物集中地點 (S=1 / 80)

Tab.17 4-3区ピット計測表

	直径(cm)	深さ(cm)		直径(cm)	深さ(cm)
P 1	33	16	P 10	16	6
P 2	24	15	P 11	15	5
P 3	25	20	P 12	20	7
P 4	64 × 46	18	P 13	25	12
P 5	20	21	P 14	17	6
P 6	18	22	P 15	22	5
P 7	19	15	P 16	22	10
P 8	24	5	P 17	16	15
P 9	24	8			

る。今回の検出面が当時の生活面に一致すると考えられ、この住居址の地表面からの本来の深さも30cm程度であったと推定できる。

遺構埋土はI層灰黄褐色シルト質粘土(褐色シルト混)、II層灰黄褐色粘土(褐色シルト質粘土混)、II-2層灰黄褐色粘土(褐色シルト質粘土混)-炭化物多く含む、III層黒褐色粘土(炭化した木片を含む)、IV層黒色炭化物集中土層である。I層は遺構検出面にわずかに残るのみであり、IV層もP-1周辺に分布するに過ぎない。Fig.46のセクション図でST-1埋土I層とした灰褐色粘土層がII層・II-2層に相

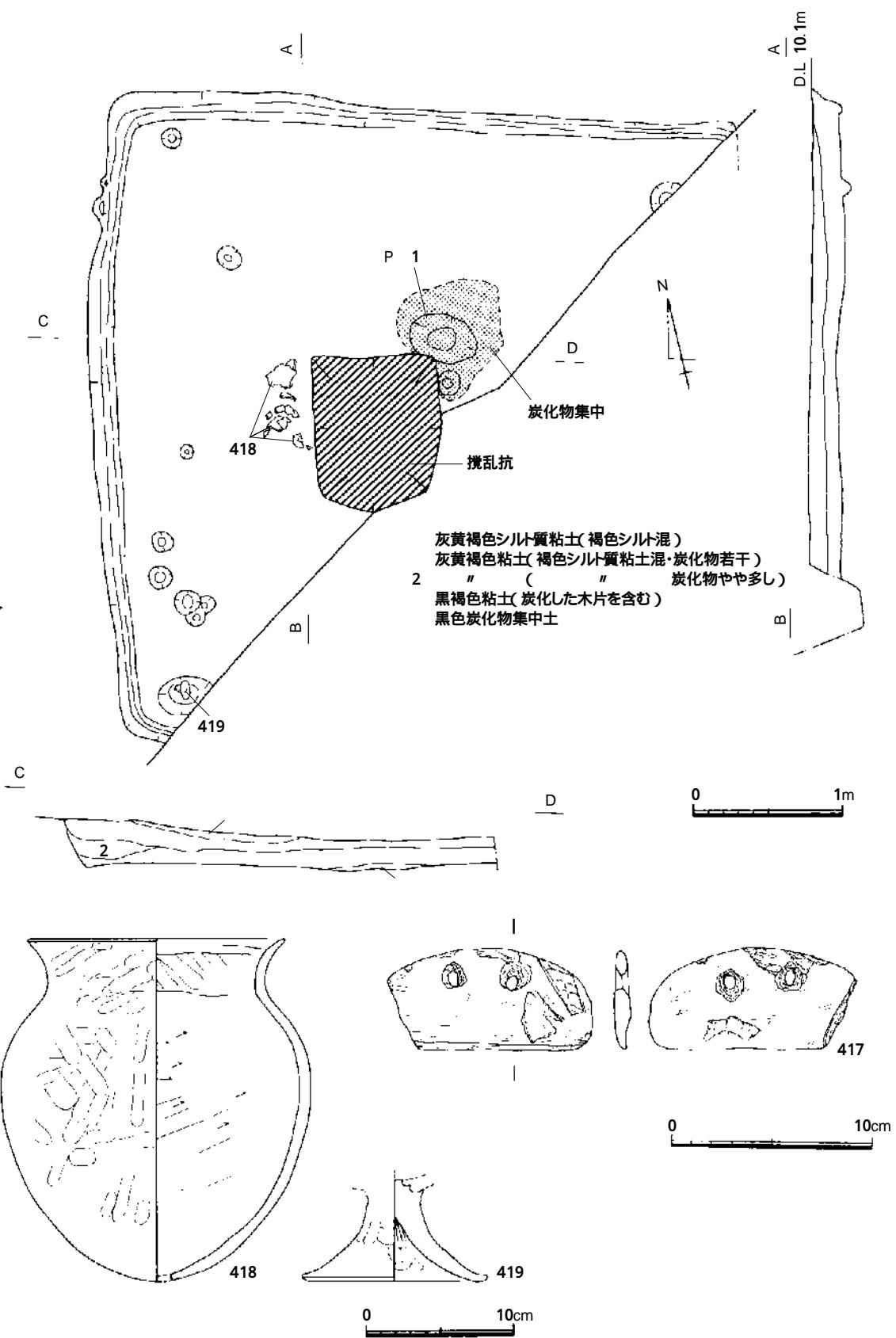


Fig.49 ST-1遺構平面図・セクション図 (S=1/40) 出土遺物 (石器S=1/3、土器S=1/4)

当し、ST-1埋土Ⅱ層とした暗褐色粘土層がⅢ層に相当する。

図示可能な出土遺物は418・420の3点であり、それ以外の遺物は小片の土師器が認められるにすぎない。418は全面研磨で片刃の磨製石包丁で粘板岩製である。ST-1は弥生中期の包含層(Ⅵ層)を掘り込んで遺構が形成されており、最上層から出土した418の石包丁は弥生中期に属する。床面出土遺物は419・420の土師器である。419は甕であり、胴部内面中位下から頸部下にかけてヘラ削りが観察される。外面はナデにより仕上げられ、不定方向のナデ・指頭圧痕が観察される。420は高壇の脚部で脚部内面にヘラ削り、外面はナデにより仕上げられる。いずれも古墳時代前期の資料で4世紀後半から5世紀初めの時間幅の中で捉えられる資料である。

③包含層出土遺物(Fig.50・51)

Fig.50と51が包含層出土遺物である。50がⅡ・Ⅲ層及び、Ⅳ・Ⅴ層出土遺物、51がⅥ層出土遺物である。

Ⅱ・Ⅲ層出土遺物(Fig.50)

Ⅱ・Ⅲ層出土遺物は近世陶器(421)、瓦器(422)の2点のみで、Ⅳ層(黄褐色シルト)上面で確認した422の瓦器から、1面目の遺構面は中世(12・13世紀)の遺構面だと考えている。421はⅡ・Ⅲ層の特定ができない。

Ⅳ・Ⅴ層出土遺物(Fig.50-423 437)

Ⅳ・Ⅴ層からは、弥生土器・土師器が混在して出土する。424～426は弥生土器であり、貼付口縁(424・425)、円形浮文と縦位沈線を持つ頸部(426)、いずれも壺形土器である。435・436は平底の弥生土器底部であり、これらの弥生土器は下層のⅥ層出土遺物と同時期(弥生中期後半)の遺物である。

古墳時代前期に属する遺物としては、428・434の土師器高杯が挙げられる。杯部形状は大きく開いてラッパ状に外反するもの(428・429)と内湾気味に椀状に立ち上がるもの(430)がある。どちらも一旦屈曲する。脚部内面には、横方向のヘラ削りが観察される。

Ⅵ層からは423の鉄器が出土している。小刀であり、基部は折損する。時期の特定はできない。

Ⅵ層出土遺物の中で437は土師器杯底部である。古代以降の遺物だが、摩耗が著しく、詳細な時期は特定できない。

Ⅵ層出土遺物(Fig.51-438 467)

Ⅵ層からは約300点の弥生土器と3点の石器が出土した。そのうち図示可能遺物についてはFig.51に示した。438・461の弥生土器は、文様の明瞭なものについては小破片でも拓本で提示した。口縁部は貼付口縁で頸部に円形浮文を有し、頸部或いは上胴部には微隆起帯を貼付後微隆起帯間に櫛描平行線を施文するという特徴を持つ。これらの文様とタテ方向の連続するヘラ描沈線や列点文を組み合わせ、上胴部から頸部・口縁部に至る外面の器壁全面を加飾する。胎土はチャート砂粒を多量に含み、器壁は同時期の高知平野中央部の土器と比較すると薄い。

462は球形の胴部を持ち、ゆるやかに屈曲する頸部を持つ壺で、438 461と較べ加飾が全く認められない壺である。463は外面に4条の凹線を持つ高杯である。これらの弥生土器は、円形浮文・微隆起帯・櫛描沈線が盛行する弥生中期中葉から中期後半の時間幅の中で捉えられる資料である。463の凹線を持つ高杯は形態から確実に中期末に位置付けられる資料であり、中期後半の資料が主体となっているものと考えられる。

これらの土器の正確な位置付けについては、高知平野西部、仁淀川流域の弥生中期中葉 後半の遺構出土資料が揃った段階で判断することとし、現段階では中期後半(IV様式併行期)の資料として位置付けておきたい。

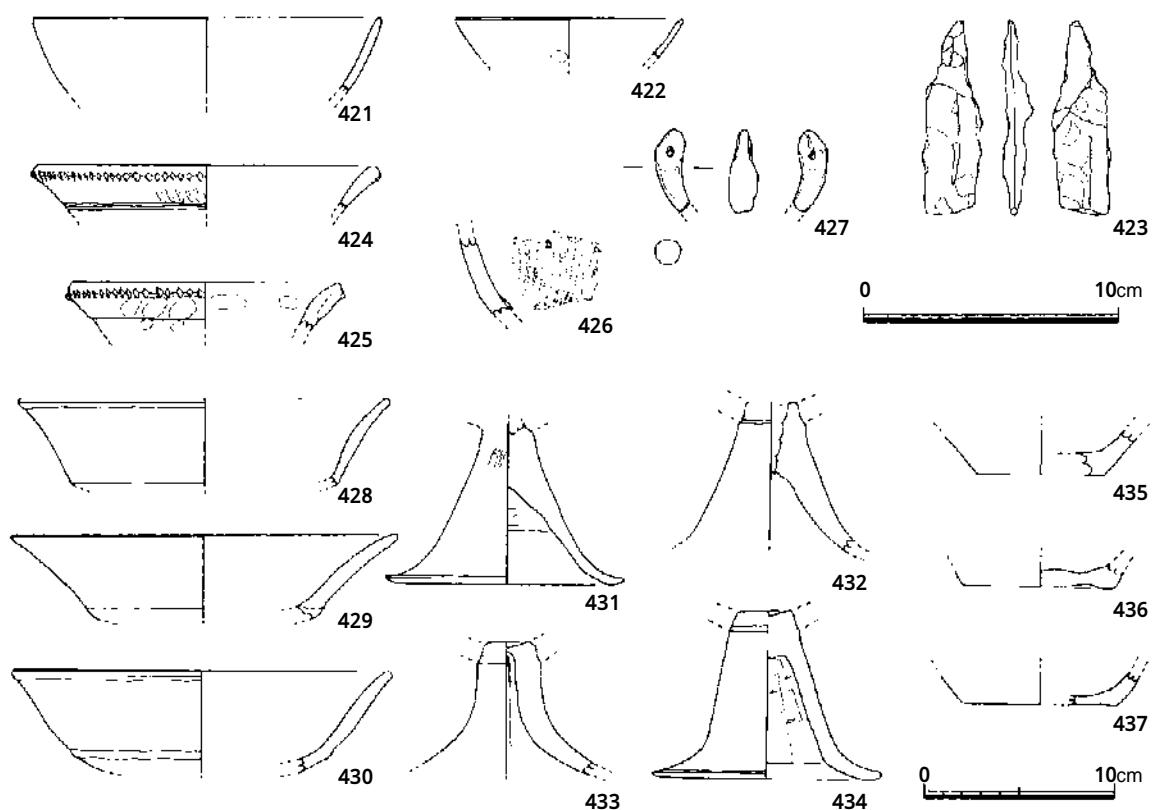


Fig.50 4-3区包含層(Ⅱ・Ⅲ層及びⅣ・Ⅴ層)出土遺物(S=1/4)

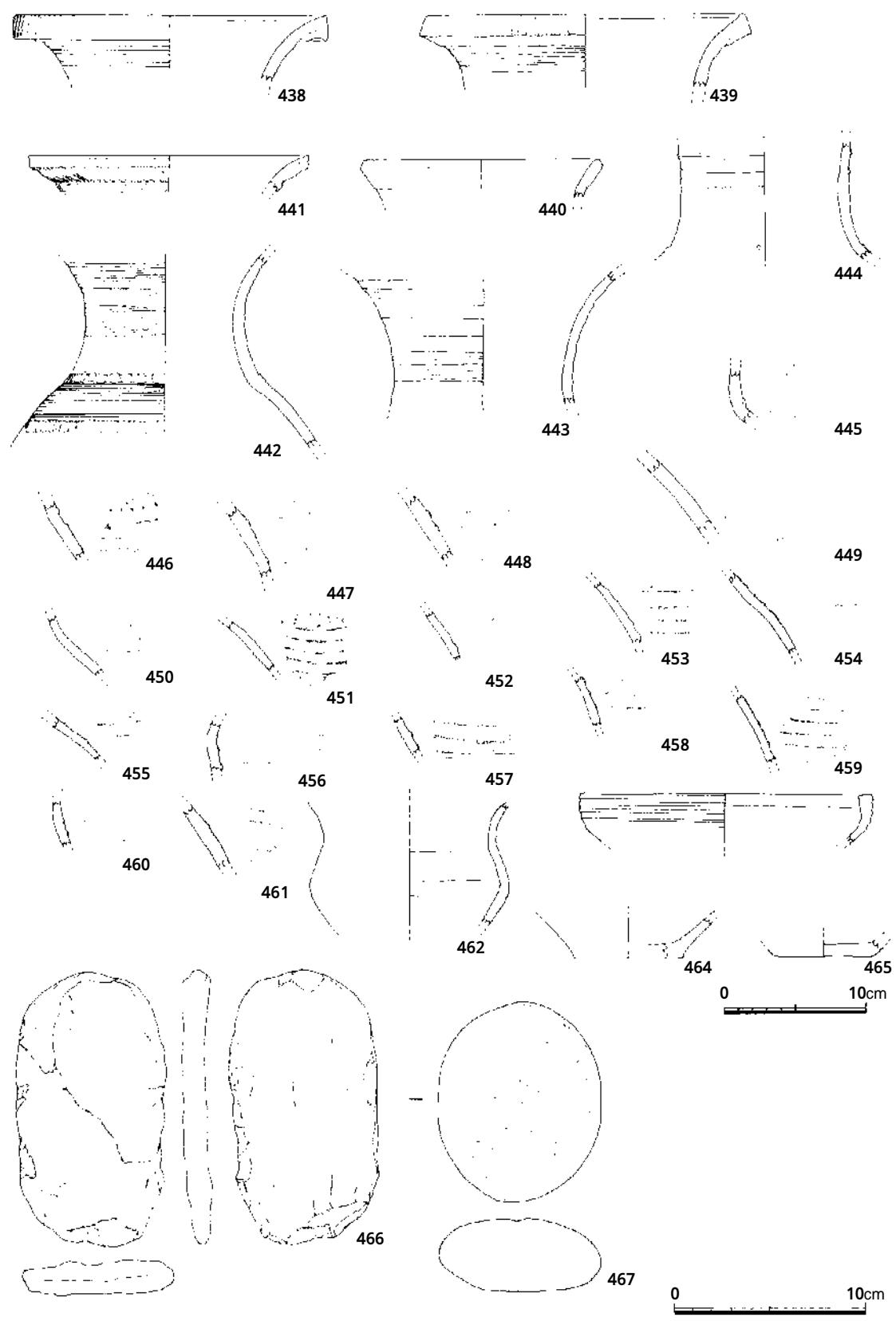


Fig.51 4-3区包含層(VI層)出土遺物(S=1 / 4)

3.4-4区

①調査区の概要と基本層序

4-4区は4-3区の東側に連続する調査区で、2面の遺構面を確認した。調査面積は500m²である。1面目の遺構面はIV層（黄褐色シルト）上面に形成され、2面目の遺構面はV層（褐色粘土）上面に形成される。V層までが遺物包含層であり、VI層以下に遺物は認められない。VI層上面に遺構は検出できなかった。

基本層序は4-3区と同様であり、Fig.52の通りである。

②遺構

遺構面1面目についてはFig.53に示した通りの遺構の状況である。遺構面の上面には、鉄分の沈着が認められる部分もあり水田の可能性も考えたが、水田の畦畔は検出することができず、代わりに縦横に走る浅い溝状の遺構が確認された。これらの浅い溝によって隔された南北に細長い区画は畠の畠形成時にしるされた痕跡であり、1面目の溝状遺構は畠の畠の存在を示す遺構であると考える。4-4区は周辺の水田と比べ、現在も最も高い標高を示しており、1面目遺構形成当時、畠の形成に適した立地を示していたのであろう。なお、セクションから鉄分の沈着が確認されるということは、この遺構面に滞水していた時期も考えられ得るということであり、この遺構において水田と畠の両方の土地利用がなされたこと、すなわち二毛作の可能性を指摘できる。

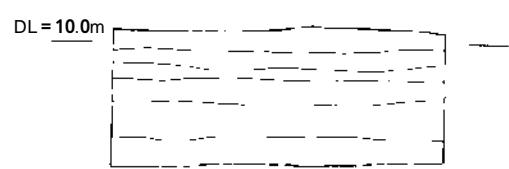
遺構から遺物の出土は認められない。4-4区では上層の包含層中からも遺物は出土していない。4-3区と同様の堆積状況からFig.50-422の瓦器の出土した遺構面に連続すると考えられるが、中世以降の遺構であること以上の遺構時期特定はできない。

遺構面2面目についてはFig.54に示した。SD-2及びSK-2～8の遺構が検出されている。SD-2は南北方向に直線的に伸びる溝、SK-2～8は不整形あるいは橢円形の土坑である。SD-2からタタキ目のある土師器小片を10点、SK-2から摩耗した土師器

底部1点、SK-4から弥生土器8点土師器2点、SK-5から土師器1点、SK-6から土師器1点、SK-7から土師器4点、SK-8から土師器1点、いずれも小片・細片であり遺構面の時期特定はできない。

SD-2

断面U字型の溝で、南北方向に直線的に伸びる。幅52 70cm、深さ16cmで、埋土はにぶい黄褐色シルト質粘土である。タタキ目のある土師器10点が出土しているが、小片のため時期特定はできない。



耕作土 灰色～黄灰色
灰オリーブ色～灰色 粘土質シルト
灰黄色 "
黄褐色 "
暗褐色 粘土
にぶい黄褐色 粘土質シルト

0 1m

Fig.52 4-4区西壁セクション (S=1 / 80)

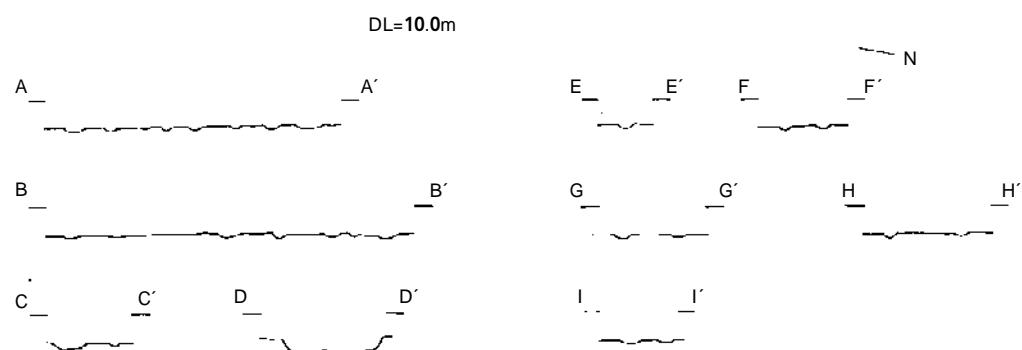
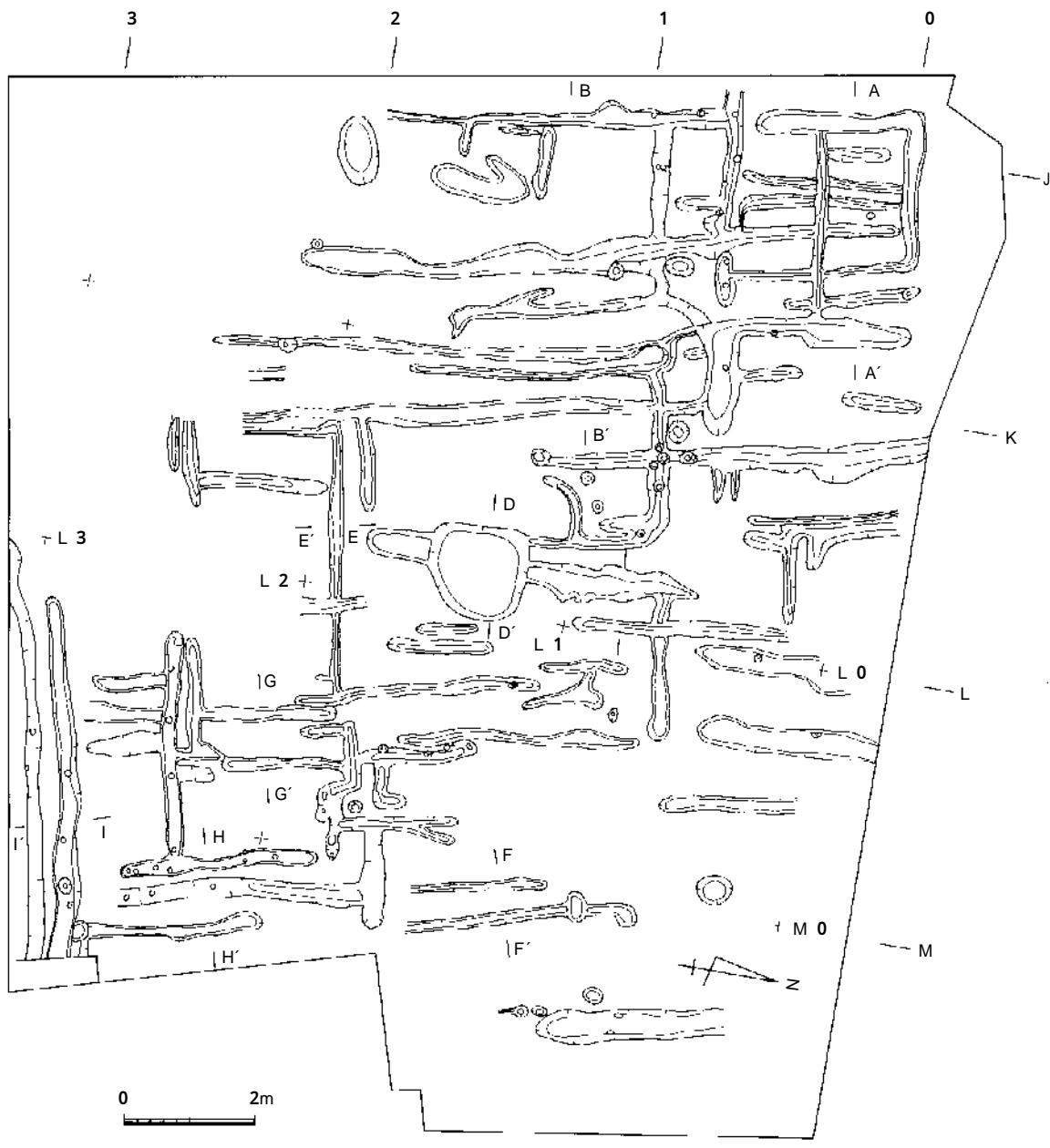


Fig.53 4-4区1面目造構平面及びエレベーション図 (S=1 / 100)

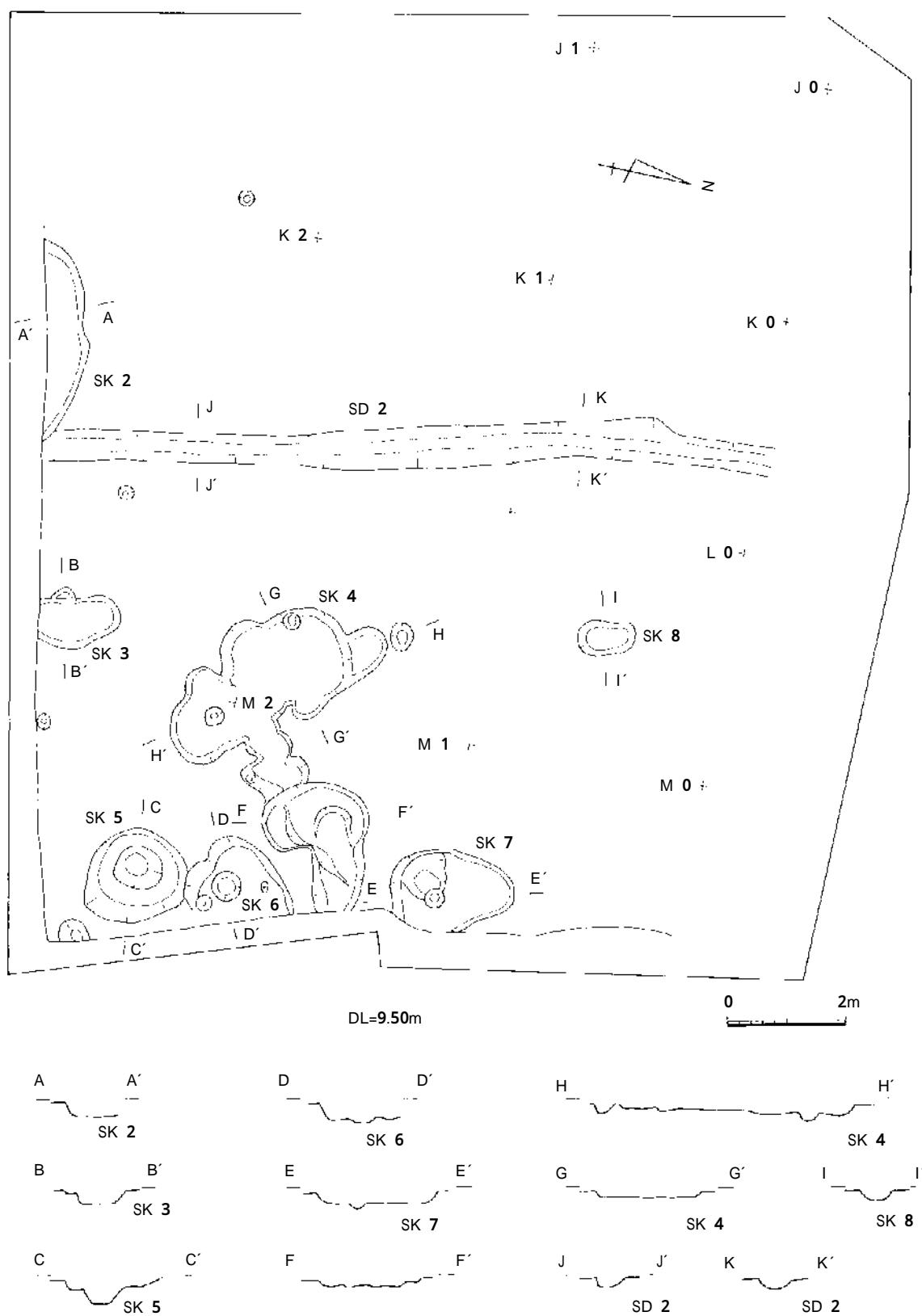


Fig.54 4-4区2面目造構平面及びエレベーション図 (S=1 / 100)

SK-2

楕円形の土坑で、長軸350cm、深さ20cm、調査区北端で確認された。遺構の北半のみの調査であり、全体形状は不明である。摩耗した土師器が1点出土している。遺構形成時期は不明。

SK-3

楕円形の土坑で、長軸200cm、短軸90cm、深さ24cmである。遺物は出土していない。

SK-4

不整形の土坑で、長軸410cm、短軸180cm、深さ30cm、弥生土器8点土師器2点が出土している。いずれも小片で時期の特定はできない。

SK-5

ほぼ円形の土坑で2段堀になっている。直径160cm、深さ40cm。土師器が1点出土している。時期不明。

SK-6

不整形の土坑で、長軸170cm、短軸150cm、深さ32cm。土師器が1点出土している。時期不明。

SK-7

不整形の土坑で、長軸210cm、短軸140cm、深さ24cm。土師器が4点出土している。時期不明。

SK-8

楕円形の土坑で、長軸90cm、短軸52cm、深さ18cm。土師器が1点出土している。時期不明。

③包含層出土遺物(Fig.55)

4-4区の包含層中からは468～474の遺物が出土している。遺物の出土した層はIV・V層に限られる。468は弥生土器・甕の頸部小破片で前期末の遺物である。469は弥生土器・壺頸部、弥生中期後半の遺物で突堤上に列点文を施す。470は弥生土器・高杯で後期前半に属する。天崎遺跡の今回の調査で確認された後期前半の資料はこの高杯のみである。471～474は古墳時代前期の遺物で、古墳時代初頭の甕(471)、4世紀の甕(472)、直口壺(473)、甕(474)である。時期の特定はできないが475は円筒形の土錐である。

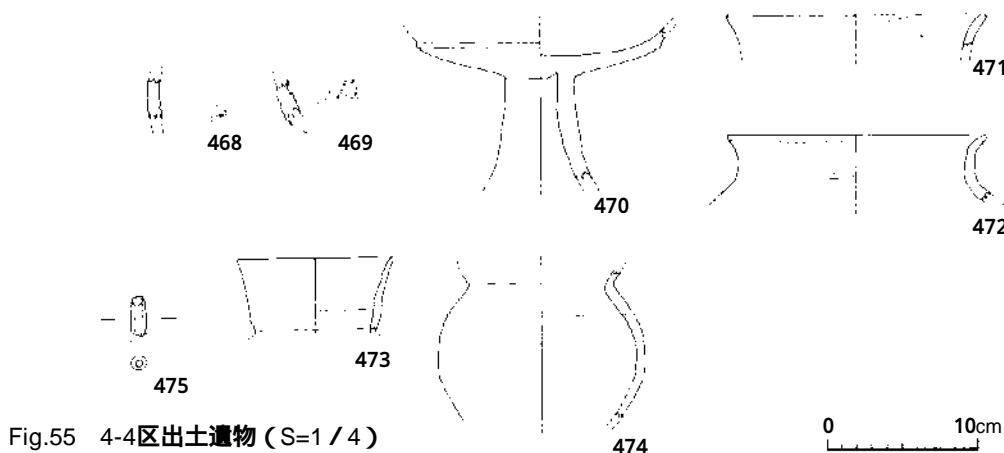


Fig.55 4-4区出土遺物 (S=1 / 4)

Tab.18 4区出土遺物観察表(1)

Fig No.	挿図 番号	出土地点 層位	種別	法量(cm)				特徴(形態・手法等)	胎土	色調		備考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
38	408	TR-3II層	須恵器・椀			7		摩耗顯著で軟質の須恵器。底部はヘラ切り。	微細砂を若干含む	灰白色	灰白色	10世紀中葉
38	409	TR-5SD	土師器・甕					外面に刷毛調整残る。口縁は緩やかに屈曲して外反。端部は丸みを帯びた面をなす。外面に煤付着。	1~3mm大のチャート砂粒を多く含む	にぶい褐色	灰白色	10世紀
38	410	TR-6V層	弥生土器・甕					甕頸部小片。外面にヘラ描沈線が4条残る。	1~2mm大のチャート砂粒を多量に含む	橙色	橙色	弥生前期末
42	411	4-区 検出時	須恵器・杯	14.4	4.3		11		精選されており、チャートの微細砂を含むのみ	灰色	灰色	8世紀後半
42	412	4-区・IV層	土師器・椀	15.2				口縁部小片。器壁は4mm弱と薄く、口縁は明瞭に外反する端反の形状を示す。	精選され、ほとんど砂粒を含まない。	浅黄色	浅黄色	10世紀後半 ~1世紀前半
42	413	4-区 検出時	土師器・杯			6.0		円盤状高台の土師器壺。底部糸切り痕あり。	0.5mm大未満の微細砂粒を含む	灰白色	灰白色	11世紀
42	414	4-区 検出時	土師器・羽釜	18.6				横方向のナデで仕上げる。外面に断面台形の鈎を貼付。	1~2mm大の砂粒を多量に含む。雲母片も観察される。	にぶい黄橙色	にぶい褐色	10世紀 ~11世紀 ・摂津C型
42	415	4-区 検出時	土師器・羽釜	25				内面に横方向の刷毛調整。口縁端部は横方向のナデで仕上げる。断面台形の鈎を貼付し、鈎下には指頭圧痕が残る。	1~2mm大の砂粒を多量に含む。雲母片も観察される。	にぶい黄橙色	にぶい褐色	10世紀 ~11世紀 ・摂津C型
42	416	4-区・II層	灰器・擂鉢	20				口縁は肥厚して屈曲。上方に直立して立ち上がる。口縁外面に2条の凹線。内面の条線は12条1単位。	胎土は精選されている。径7mm大の小礫を含む。	にぶい赤褐色	橙色	近世
48	417	4-区・SX-1	弥生土器					幅2mmの微隆起帯を貼付、微隆起帯間に櫛描平行線を施す。微隆起帯下に縱方向の刻み目。	1~1.5mm大のチャート砂粒を多く含む	明灰黄色	明灰黄色	弥生中期
49	419	4-区・ST-1 埋土 II・III層 ・No.1	土師器・甕	17.1	23.6	20.1	1.0	胴部中位~上胴部頸部下内面ヘラ削り(左下右上)。口縁部内外面、胴部外面はナデによって仕上げられ、外面に指頭圧痕が残る。刷毛調整がわずかに観察される。煤付着。	0.5~1mm大の砂粒をやや多く含む	暗灰黄色	暗灰黄色	古式 土師器 II・III期
49	420	4-区・ST-1 埋土 III層 ・No.3	土師器・高坏					高杯の脚部。脚部内面ヘラ削り。外面に指頭圧痕が残り、脚部はヨコナデによって仕上げられる。脚部端部は折れ	1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	橙色	橙色	古式 土師器 II・III期
50	421	II・III層	近世陶器・椀					釉調はオリーブ黄色で、釉厚は0.2mm程度である。		オリーブ黄色	オリーブ黄色	肥前系近世陶器
50	422	III層	瓦器・椀					瓦器の口縁部小破片、外面に指頭圧痕残る。	0.5~1mm大の細砂粒を含む			詳細な時期不明
50	424	V層	弥生土器・壺	(17.7)				口縁部。貼付口縁で、端部は内傾面をなし、下端に刻み目を有する。外面にヘラ状原体による押圧。	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	弥生中期
50	425	IV層	弥生土器・壺	(14.0)				口縁部。貼付口縁で、端部は内傾面をなし、下端に刻み目を有する。外面に指頭圧痕。	1~3mm大のチャート砂粒を多量に含む	灰色	灰色	弥生中期
50	426	IV層	弥生土器・壺					頸部。上胴部に円形浮紋を貼付、頸部に縦位の連続する沈線を施す。	1~2mm大のチャート砂粒を多量に含む	灰オリーブ色	にぶい橙色	弥生中期
50	427	V層	土製模造品	全長	全幅	全厚	重量	手づけによる土製模造品(土製勾玉)。端部欠損。直径0.2mmの小孔を穿つ。焼成前穿孔。孔の両側から指で押されて成形。	チャート砂粒を若干含む	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
50	428	IV層	土師器・高坏	(19.2)				坏部は段を形成して明瞭に屈曲する。口縁は外反しながらラバ状に開く。ヨコナデ。	1~2mm大のチャート砂粒をやや多く含む	にぶい黄橙色	にぶい橙色	古式土師器I期
50	429	IV層No.4	土師器・高坏	(20.4)				坏部は段を形成して明瞭に屈曲する。口縁は外反しながらラバ状に大きく開く。調整不良。	3~5mm大のチャート砂粒を少量含む	橙色	橙色	古式土師器I期
50	430	IV層	土師器・高坏	(19.8)				坏部は大きく開いて内湾気味に椀状に立ち上がり、わざかに外反する口縁に至る。口唇外面若干肥厚。ナデ。	1~2mm大のチャート砂粒をやや多く含む	にぶい黄橙色	にぶい橙色	古式土師器I期
50	431	IV層・V層 No.2	土師器・高坏					脚部内面中位より上にヘラ削り(右左)。外面刷毛後ナデ。脚部は端反の形状を示す。	チャートの微細砂粒を多く含む	にぶい橙色	にぶい橙色	古式土師器I期
50	432	V層	土師器・高坏					脚部。脚部形状不明。ナデ。	1mm前後のチャート砂粒多く含む。赤色チャート多し。	灰白色	にぶい橙色	古式土師器I期
50	433	IV層	土師器・高坏					脚部。脚部形状不明。内面絞り目あり。外面ナデ。	1mm前後のチャート砂粒多く含む。赤色チャート多し。	浅黄橙色	浅黄橙色	
50	434	IV層No.4	土師器・高坏					脚部。脚部で短く屈曲、稜をなして大きく開く。脚部内面ヘラ削り(右左)。脚部内外面及び外面ヨコナデ。	チャート微細砂を多量に含む	オリー ブ黒色	にぶい黄褐色	
22	435	IV層	弥生土器・甕					平底で外面にわざかに指頭圧痕が残る。	1~2mm大のチャートを多量に含む	灰黄褐色	灰黄褐色	
22	436	IV層	弥生土器・甕					平底。	1~2mm大のチャートを多量に含む	にぶい黄褐色	灰色	
22	437	IV層	土師器・壺					磨耗顯著で調整不良。	精選されており、砂粒はほとんど含まない	橙色	黒褐色	時期不明
22	438	VI層	弥生土器・壺	(21.8)				口唇は面をなし下端を拡張する。口唇面全体に棒状原体による刻み目を施す。貼付口縁。口縁下頸部に櫛描沈線による平行線施す。櫛描は3条1単位で連続させる。口唇内面にヨコナデ。	1~2mm大のチャートを多量に含む	にぶい褐色	にぶい褐色	弥生中期後半
22	439	VI層	弥生土器・壺	(22.0)				口唇は面をなし下端を拡張する。口唇面全体に棒状原体による刻み目を施す。貼付口縁。口縁下頸部に櫛描沈線による6条の平行線施す。口唇内面にヨコナデ。	1~3mm大のチャートを多量に含む	灰オリーブ色	橙色	弥生中期後半
22	440	VI層	弥生土器・甕	(16.4)				貼付口縁。外面に指頭圧痕が残るが、それ以外は磨耗のため調整不良。	1~2mm大のチャートを多量に含む	明黄褐色	にぶい黄橙色	弥生中期後半
22	441	VI層	弥生土器・壺	(19.6)				3支同一個体。口縁は外反し、口唇は面をなす。貼付口縁でヘラ状原体による刻み目を巡らせるこにより、外面に粘土帶貼付、口縁下に円形浮紋を配し、円形浮紋と口縁の間にヘラ状原体による押圧で沈線状になる。	1~3mm大のチャートを多量に含む	にぶい黄橙色	オリーブ黒色	弥生中期後半

Tab.19 4区出土遺物観察表(2)

Fig No.	挿図 番号	出土地点 層位	種別	法量(cm)				特徴(形態・手法等)	胎土	色調		備考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
51	442	VI層	弥生土器 ・壺					卵形の上胴部から頸部は直立し外反する口縁に至る。上胴部は列点文の上に櫛描直線文、頸部との境界に円形浮文、さらに頸部下半にタテ方向の沈線を連続して巡らせ、その上方口縁下にかけて櫛描直線文を施文する。上胴部から上位は器面全体が文様で埋め尽くされる。	1~3mm大のチャートを多量に含む	にぶい 黄橙色	オリー ブ黒色	弥生中期 後半
51	443	VI層	弥生土器 ・壺					壺の頸部。直立した後、ラバ状に大きく開く。頸部下半にタテ方向の沈線を巡らせ、上半に8条の微隆起帯を貼付した後、微隆起帯間に櫛描直線文を巡らせる。微隆起帯間は幅1cm前後の等間隔。	1~3mm大のチャートを多量に含む	黄橙色	黄橙色	弥生中期 後半
51	444	VI層	弥生土器 ・壺					壺の頸部。頸部下半にタテ方向の沈線を巡らせ、その上に微隆起帯を貼付した後、微隆起帯間に櫛描直線文を巡らせる。微隆起帯間は幅1cm前後で、2条だけ残る。	1~3mm大のチャートを多量に含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄褐色	弥生中期 後半
51	445	VI層	弥生土器 ・壺					頸部屈曲部に押圧による刻目のある粘土帯を貼付、その上方頸部にタテ方向の櫛描沈線(3条1単位)を連続させる。	1~3mm大のチャートを多量に含む	褐灰色	橙色	弥生中期 後半
51	446	VI層	弥生土器					円形浮文貼付。下方に微隆起帯を形成、微隆起帯間に櫛描直線文。	1~2mm大のチャート砂粒を多量に含む	にぶい 黄橙色	橙色	弥生中期 後半
51	447	VI層	弥生土器					粘土紐貼付による微隆起帯形成。微隆起帯間に櫛描直線文を施文、ヘラ状原体によるタテ方向の短沈線を連続させる。内面ヨコ方向のナデ。	1~2mm大のチャート砂粒を多量に含む	明黄褐色	にぶい 黄橙色	弥生中期 後半
51	448	VI層	弥生土器					粘土紐貼付による微隆起帯形成。微隆起帯間に櫛描直線文を施文、ヘラ状原体によるタテ方向の短沈線を連続させる。	1~2mm大のチャート砂粒を多量に含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	弥生中期 後半
51	449	VI層	弥生土器					ヘラ状原体によるタテ方向の短沈線(列点文)を連続させる。	1~2mm大のチャート砂粒を多量に含む	黄灰色	にぶい 黄橙色	弥生中期 後半
51	450	VI層	弥生土器					粘土紐貼付による微隆起帯形成。微隆起帯間に櫛描直線文を施文、ヘラ状原体によるタテ方向の短沈線を連続させる。	1~2mm大のチャート砂粒を多量に含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	弥生中期 後半
51	451	VI層	弥生土器					粘土紐貼付による横位の微隆起帯形成。5条の微隆起帯間に櫛描直線文を施文、その上方に縦位の粘土紐を連続して貼付する。	1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	にぶい 黄橙色	明褐色 黄橙色	弥生中期 後半
51	452	VI層	弥生土器					微隆起帯間に櫛描直線文を施文する。	1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	弥生中期 後半
51	453	VI層	弥生土器					微隆起帯間に櫛描直線文を施文する。	1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	弥生中期 後半
51	454	VI層	弥生土器					微隆起帯間に櫛描直線文を施文する。	1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	弥生中期 後半
51	455	VI層	弥生土器					微隆起帯間に櫛描直線文を施文する。	1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	弥生中期 後半
51	456	VI層	弥生土器					微隆起帯間に櫛描直線文を施文。上方にタテ方向の沈線を連続させる。	1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	浅黄橙色	浅黄橙色	弥生中期 後半
51	457	VI層	弥生土器					微隆起帯間に櫛描直線文を施文。	1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	弥生中期 後半
51	458	VI層	弥生土器					微隆起帯間に櫛描直線文を施文。4条1単位の櫛描沈線。	1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	にぶい 黄橙色	黑褐色	弥生中期 後半
51	459	VI層	弥生土器					微隆起帯間に櫛描直線文を施文。微隆起帯の間隔は6~7mm、4条1単位の櫛描沈線。	1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	弥生中期 後半
51	460	VI層	弥生土器					微隆起帯間に櫛描直線文を施文。上方にタテ方向の沈線を連続させる。	1mm前後のチャート砂粒を多く含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	弥生中期 後半
51	461	VI層	弥生土器					粘土紐貼付により横位の微隆起帯を形成する。微隆起帯形成後に隆起帯間に櫛描直線文施文。	1~2mm大のチャート砂粒を多量に含む	明灰黃色	灰オリーブ色	弥生中期 後半
51	462	VI層	弥生土器		14.0			球形の胴部、頸部は緩やかに屈曲する。内面に指頭圧痕が残る。胴部-頸部は無文。	1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	灰白色	浅黄橙色	弥生中期 後半
51	463	VI層	弥生土器 ・高環	(21.9)				口唇は水平面をなし、外面に4条の凹線が残る。	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	弥生中期 後半
51	464	E-2 VI層	弥生土器・甕		7.6			平底。調整不明。	0.5~2mm大のチャート砂粒を多量に含む	オリー ブ黒色	オリー ブ黒色	弥生中期 後半
51	465	VI層	弥生土器・甕		7.0			平底。調整不明。	1~2mm大のチャート砂粒を多量に含む	灰黃褐色	灰黃褐色	弥生中期 後半
55	468	4-区・IV層	弥生土器・甕					甕頭部小片。ヘラ描沈線が4条残る。	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む	灰黄色	にぶい 橙色	弥生前期 末
55	469	IV~V層	弥生土器・壺					壺頭部小片。頸部に粘土帯を貼付し、粘土帯の上に列点文を施文。	1~3mm大のチャート砂粒を多く含む	にぶい 黄橙色	橙色	
55	470	IV層	弥生土器 ・高環					胎土は4~3V層出土遺物に類似。	精選された胎土。3~5mm大のチャート砂粒を若干含む。	橙色	橙色	
55	471	V層	土師器・甕	(17.0)				内外面刷毛調整。内面ヨコ方向、外側タテ方向。	1~3mm大のチャート砂粒を多く含む	にぶい 橙色	にぶい 橙色	
55	472	V層	土師器・甕					口縁は縦方向のナデにより成形する。	1~2mmのチャート砂粒をやや多く含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	
55	473	V層	土師器 ・直口壺					口縁端部は丸く収める。摩耗顯著で調整不明瞭。	1~2mm大のチャート砂粒をやや多く含む	橙色	明赤褐色	
55	474	V層	土師器・甕					球形の胴部から頸部で屈曲市、口縁は強くの字状に外反する。内外面に刷毛目と指頭圧痕が観察される。刷毛をナデで消す。	0.5~2mm大のチャート砂粒をやや多く含む	橙色	にぶい 橙色	

第4節 5区の成果

(1) 調査の方法

調査区は農道を隔てて2ヶ所に分け、丘陵の先端部を5-1区、谷の湿地部を5-2区と設定した。発掘調査面積は、5-1区が 320m^2 、5-2区が 90m^2 である。3級（X = 56448.722 Y = 6621.751）・4級（X = 56624.378 Y = 6652.534）の公共座標の基準点を基に地形に即した任意の座標軸を設定し、調査を進めた。まず調査区の草刈りから始め、重機による表土掘削を行い、人力によって遺構検出、遺構・遺物包含層の掘り下げに努めた。5区の場合調査区が東西あるいは南北に細長いため一辺4mのグリッドの設定は行わなかった。尚、検出遺構・遺物出土状況・土層堆積状況等は、測量・写真撮影によって記録した。

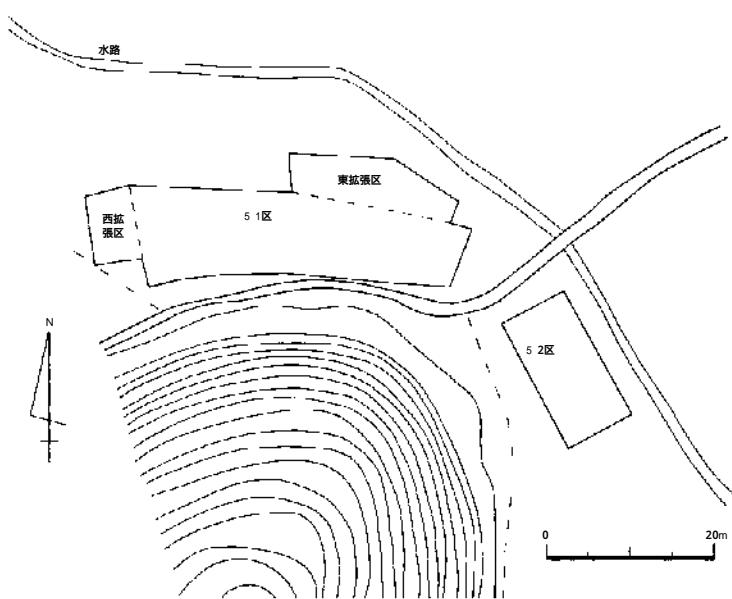


Fig.56 5区調査区位置図

(2) 基本層序

1. 5-1区

5-1区は、4区に隣接した西側の山の先端部に位置する調査区である。調査区は、幅7.0m～11.0m、長さ35.0m～40.0m、発掘調査面積は 320m^2 で東西に長く伸びた形状をしている。平成8年度の確認調査において、任意のトレント（TP5）を設定し、重機による掘削を行ったところ、遺物として土師器の高杯・壺・甕・ミニチュア土器他、土器片数十点が出土している。遺構も溝1条検出している。しかし調査区の西側のトレント（TP6）には、遺物も少なく、溝は検出されていない事から、本調査は西側への拡張は行わないこととした。TP5で出土した遺物は、祭祀の際に使用された可能性が高い事から、遺構検出は慎重に行う事とした。調査区を東西に第2次世界大戦に作られた暗渠が走っており、現在も機能しているようだったので、除去することなく掘削することとした。湧水は少量である。尚、層の確認は、調査区の中央部の西壁セクションで行った。

5-1区で確認された基本層序は以下のとおりである。

表土層（除去）

第Ⅰ層 黄灰色土層

- 第Ⅱ層 黒褐色土層（木片多く含む）溝埋土
- 第Ⅲ層 灰色粘質土層（木片多く含む）遺物包含層
- 第Ⅳ層 灰色粘質土層 遺物包含層
- 第Ⅴ層 緑灰色粘質土層（小礫含む）

表土層は、すでに重機で掘削した後であり、この調査区は第Ⅰ層が耕作土に伴う床土である。

第Ⅱ層は、有機物を多く含む層で、厚さ約5cm～30cmで、南側まで、約5m程薄く延びている。

当時かなり滯水をして沼化したものと考えられる。古代から中世にかけての遺物が出土している。

第Ⅲ層から第Ⅳ層にかけては粘性が強くなり下層になる程、1cm～2cmの礫が入る。出土遺物から古墳時代の遺物包含層と判断される。この層は、セクションの南部に肩部の立ち上がりが見られることから、自然流路の埋土と考えたが、北側部分の流路の肩部が調査範囲外のため確認できなかった。

第Ⅴ層は、緑灰色粘質土層で少し礫まじりで流路の肩部を形成している土層である。この層からは、縄文土器が60点程出土したが細片で実測できるものはなかった。遺構らしきものも確認できなかったことから遠方より流れ込んだものと考えられる。5-1区は、1区～4区の土層と較べると年代の割りには、堆積土は少ないと言える。又、西壁セクションと東壁セクションは、かなり層位は異なり東壁には古墳時代の遺物包含層は確認できなかった。

2. 5-2区

5-2区は、4区から用水路を隔てた、西側の山際までが調査区である。以前は5-1区と同様、水田として使用されていた。調査区は幅7.8m～9.5m、長さ15.0m～15.5m、発掘調査面積は、90m²である。この調査区も、平成8年度の確認調査において、任意のトレンチ（TP9）を設定し、重機による掘削を行ったところ、遺物として古代の壺と須恵器片が少量確認されていた。又、5-1区の溝が、

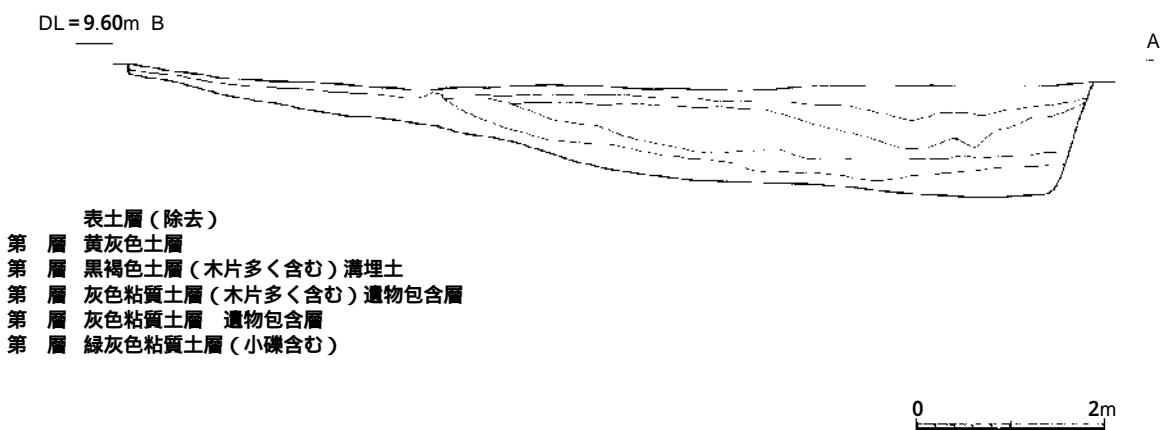


Fig.57 5-1区西壁セクション (S=1 / 80)

この調査区まで延びているかと期待したが、遺構を確認するには至らなかった。ここでも竹管にシダを敷き詰めた戦時中の暗渠が南北に通っていたが、機能していなかったので除去し掘削した。湧水は下層でひどく当時は、調査区の南側山際奥まで、湿地が広がっていたと考えられる。尚、土層の確認は、調査区の北壁セクションで行った。

5-2区で確認された基本層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 表土層（黄褐色土層）
- 第Ⅱ層 黄灰色土層
- 第Ⅲ層 灰色土層
- 第Ⅳ層 灰色土層（礫含む）遺物包含層
- 第Ⅴ層 オリーブ黒色土層（礫含む）遺物包含層
- 第Ⅵ層 灰色粘質土層
- 第Ⅶ層 灰オリーブ砂質土層（礫含む）
- 第Ⅷ層 褐灰色土層（やや粘性）
- 第Ⅸ層 褐灰色粘質土層 遺物包含層
- 第Ⅹ層 黒褐色土層 遺物包含層
- 第Ⅺ層 灰色粘質土層（礫含む）
- 第Ⅻ層 オリーブ色粘質土層

第Ⅰ層は表土層で、以前は水田として使用されていた耕作土である。

第Ⅱ層は、表土に伴う床土である。

第Ⅲ層は、灰色土で無遺物層である。

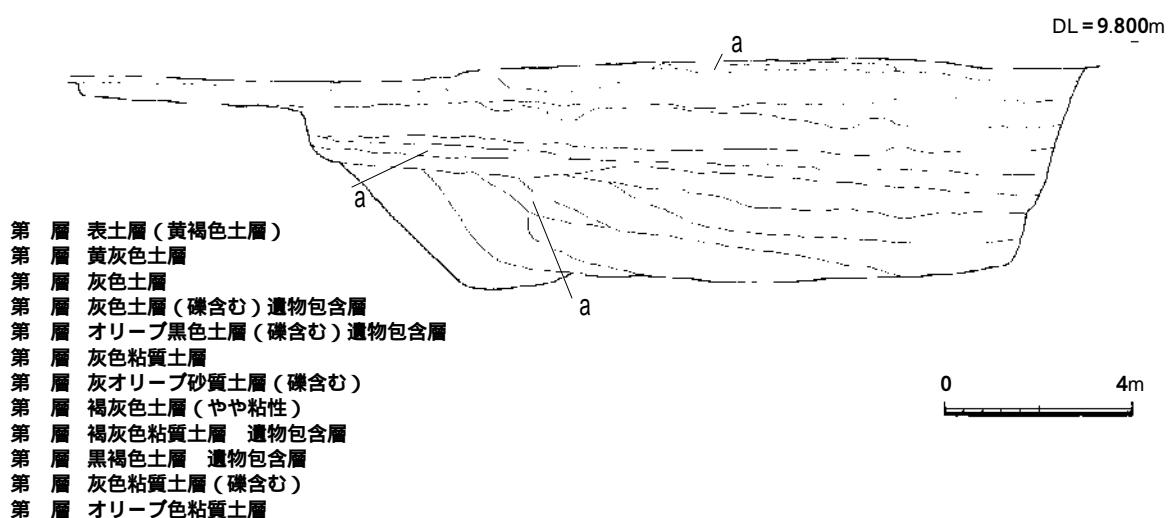


Fig.58 5-2区北壁セクション (S=1 / 80)

第Ⅳ層と第Ⅴ層はそれぞれ、遺物包含層で主になる年代は、出土遺物から古代以降とみられるが、遺構は確認できなかった。

第Ⅵ層は層厚が、4cm～10cmの粘性の強い灰色粘質土層である。

第Ⅶ層は灰オリーブ色で砂と礫を多量に含んでいた。仁淀川の氾濫洪水での土砂が堆積したものと推測される。層厚は、厚いところで20cmを越えかなり大規模な洪水であったと思われる。

第Ⅷ層から第Ⅹ層までは、自然流路の埋土と考えられ出土遺物から古墳時代のものであると思われる。第Ⅸ層の左部分に流路の肩が立ち上がるのが、確認できた。

第Ⅺ層は褐灰色土層でやや粘性があるが、流路の上面であり、ほとんど遺物は含まれていなかつた。

第Ⅻ層は褐灰色粘質土層で、遺物包含層である。層厚は、10cm～33cm程で古墳時代の甕が出土した。

第Ⅹ層は、厚さ10cm～30cmの黒褐色土層で有機物を多量に含んでいた。流路の底の部分であると判断される。この有機物層は、試掘調査により南側山際まで広がっているのが確認されているので、当時は、低湿地を広く形成していたと考えられる。湧水量は多く滞水しやすい地形となった。この層から、古墳時代の古式土師器の壺が出土した。

第Ⅺ層は、灰色粘質土層で、流路の西側の肩の部分を形成していた。

第Ⅻ層はオリーブ色粘質土層で地山が粘土化し、礫を多く含んでいた。

(3) 遺構と遺物

1. 5-1区

① 遺構

SD-1

5-1区の北端部で検出した断面が逆台形状を呈する東西方向に延びる溝である。検出長約33m、

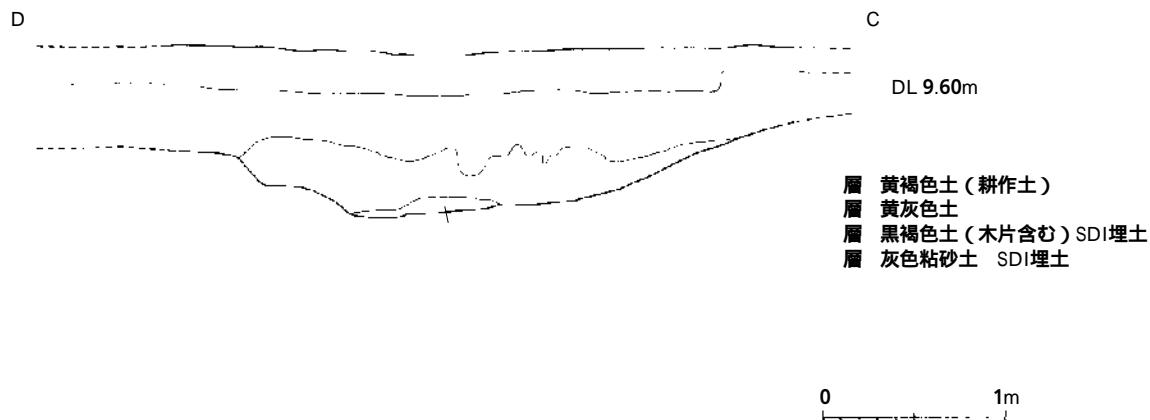


Fig.59 5-1区SD-1東壁セクション (S=1 / 40)

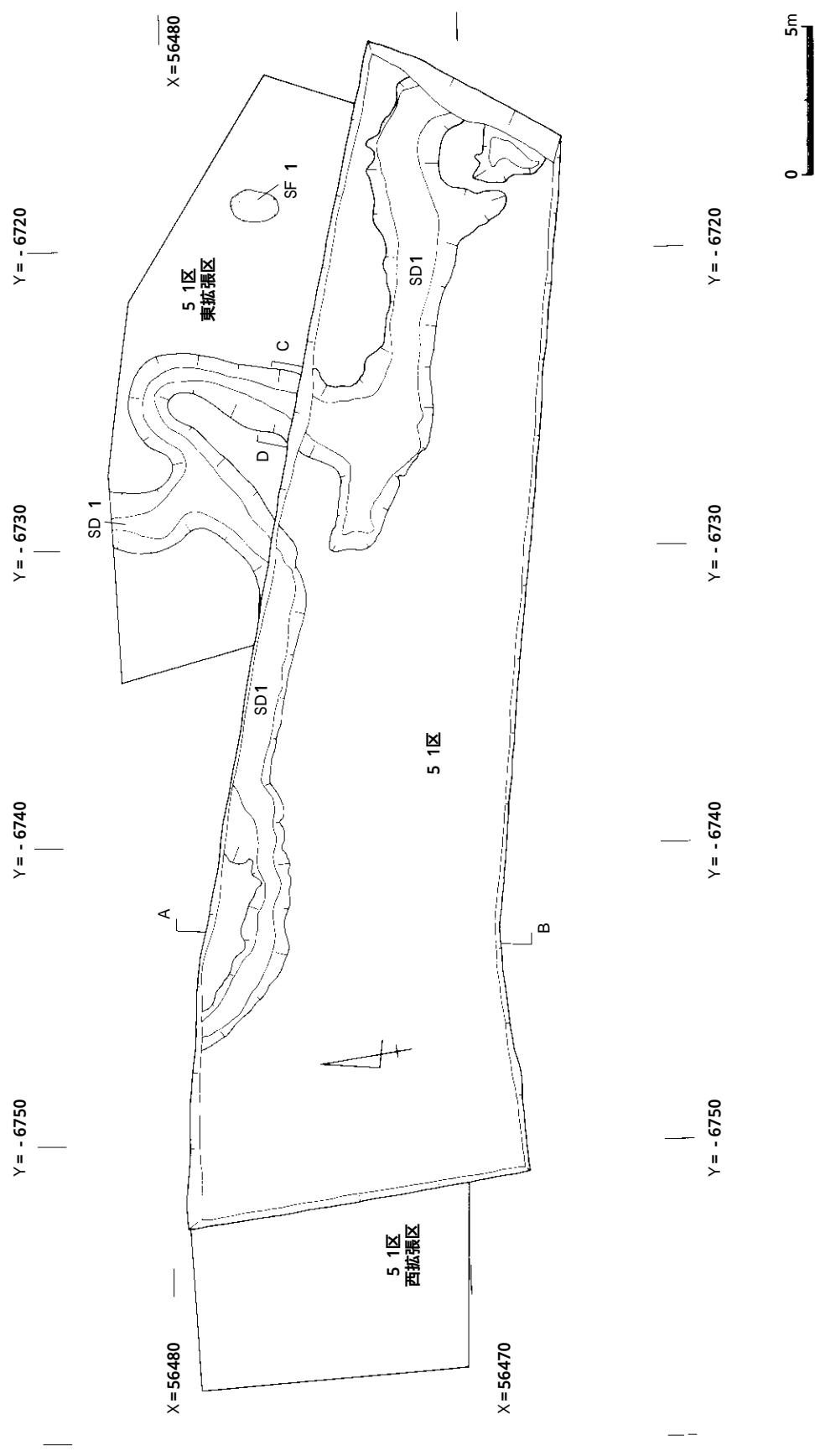


Fig.60 5-1区及び5-1区拡張区調査区全体図及び遺構平面図 (S=1 / 200)

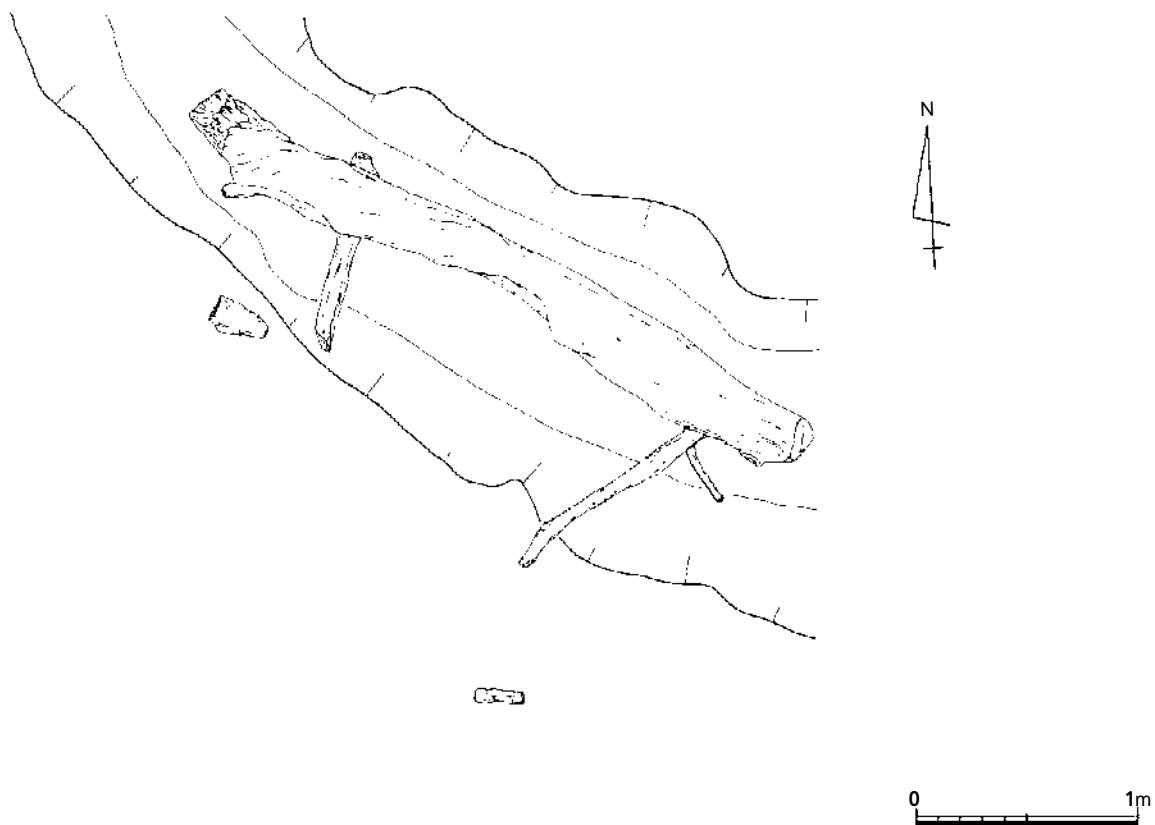


Fig.61 5-1区SD-1木製品出土状況 (S=1 / 40)

幅1.5～2.8m、深さ0.3mを測る。埋土は、第Ⅰ層が黒褐色土層で多量に木片を含んでいた。第Ⅱ層として、底面に灰色砂質粘土があった。調査区の搅乱(TP5)部より東部は、砂性粘質土層を確認したが、搅乱より西部は、黒褐色土の単純1層であった。又、この溝は中央部で大きく蛇行してつながっている事が、調査終了時の重機掘削によって判明した。当時、山の先端部が突出していたと考えられる。遺物は、少量であったが木製品が1点検出できた。

SD1出土木製品

SD1の西端部から出土した。全長3.1m、全厚0.2m～0.3mの樁円状の胴木と枕木2点で、形成されていた。左側の枕木は、全長0.9m、全厚0.12m、右側の枕木は、全長1.3m、全厚0.16mを呈していた。用途不明であるが、溝の中央部から西側部分は水が滞水しやすい所で、およそ当時の生活用具とは言い難い。故にこれは後述する古墳時代の祭祀時に使用されたとする土器等から、この場所を選定して水辺の祭祀に使用されたものと考えたい。丁度、SD1に沿って東西に胴木が据えられており、わずかに枕木の中心から、北よりにずれた状態で溝に埋没していた。

②包含層出土遺物(Ⅱ層)

A.土器

出土遺物の総点数は、295点で内訳は土師器282点、須恵器8点、近世陶磁器3点、石器2点である。Ⅱ層から出土し、図版化できた土器は、57点であった。476～479は、土師器碗である。いずれも底

部が欠損している。体部は外上方にのび、口縁部に到る。480は土師器の皿で、貼付の高台を有し、外上方に内湾気味に立ち上がる。481は、土師器の椀で、底部欠損し体部は外上方に立ち上がり、口縁端部でやや外反する。体部から口縁部にかけてナデ調整が施されている。482～484は、杯である。485は瓦器の椀で、486は土師器の椀である。いずれも底部が欠損している。485は、体部が内湾気味に立ち上がるが、486は直線的に立ち上がる。口縁端部は、いずれも外反しナデ調整が施されている。487～501まで杯である。台状の底部から体部が立ち上がる物が多い。このSD1出土の土器は、杯が大半を占める。502は、椀である。台状の底部から体部は外上方にやや内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切り、外面はナデ調整である。503～516までは、杯である。中でも、505は、底部に高い脚台を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は若干外反する。底部回転糸切り、内外面ナデ調整である。517は、土師器の皿である。平底の底部から体部は外上方に立ち上がる。口縁部欠損。底部回転糸切り、内面ナデ調整である。518は、杯である。やや上げ気味の底部である。519は、瓦器の椀である。底部欠損、体部は外上方に内湾気味に口縁部に至る。端部はやや外反する。520は、杯である。521～523は甕である。いずれも底部欠損、口縁部は「く」の字状に外反する。524～525は、土師器の高杯の脚部である。526は、手すくね土器の体部である。527は、土師質の羽釜の口縁部である。木製品の出土地点からの出土である。528は、土錐である。529～530は、須恵器の杯身である。特に529は、鋭い稜によって体部と口縁部とに分けられる。口縁部はやや外反する。初期須恵器である。531は須恵器の壺である。平底の底部から斜め上方に直線的に立ち上がる。532も、須恵器で杯身である。平底の底部から体部は、緩やかに立ち上がる。口縁端部は欠損。内外面回転ナデ調整が施されている。

B.石器

磨製石斧が調査区の西側より南部のSD1覆土底面から2点出土した。533は、大型蛤刃石斧で全長7.6cm、全幅4.8cm、全厚2.5cm、重量150.2gで石質は、御荷鉢緑色岩である。534は、扁平片刃石斧で全長9.2cm、全幅8.6cm、全厚2.0cm、重量288.4g、石質は、これも御荷鉢緑色岩である。全体的に丁寧な研磨を受けている。2点とも基部は欠損している。いずれも弥生時代のものだと考えられるが、溝覆土の腐食土の第Ⅱ層から出土している。

③包含層出土遺物(Ⅲ～Ⅳ層)

Ⅲ～Ⅳ層の遺物包含層から出土し、図化できたのは、18点程であった。535～540までは、土師器の高杯である。特に537は、復元する事ができた。脚部は「ハ」の字状に下方に開く。杯部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部に至る。内外面ナデ調整が施されている。541～545までは、土師器の甕である。特に541は、底部は丸底で胴部中位に最大径を有し球形を呈する。頸部で屈曲し口縁部は強く外反する。546は、壺である。547は、甕である。主に、Ⅲ～Ⅳ層は古墳時代に使用された土器が出土した。548は、初期須恵器のcである。水辺の祭祀時に使用された可能性がある。549は、壺である。550は、復元できた長頸の壺で、口縁部は外上方へ直線的に立ち上がり、端部は

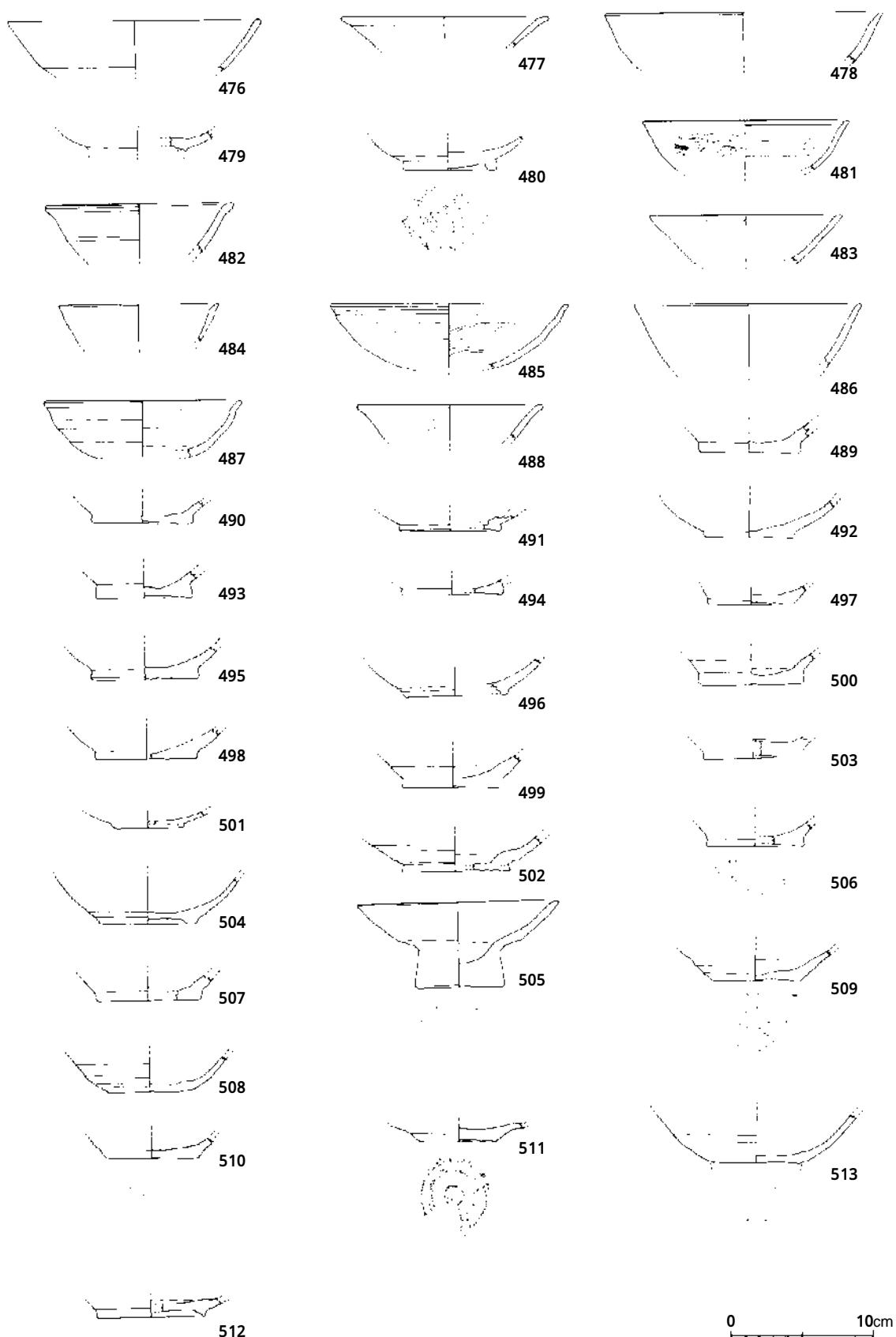


Fig.62 5-1区包含層(Ⅱ層)出土遺物(1)(S=1/4)

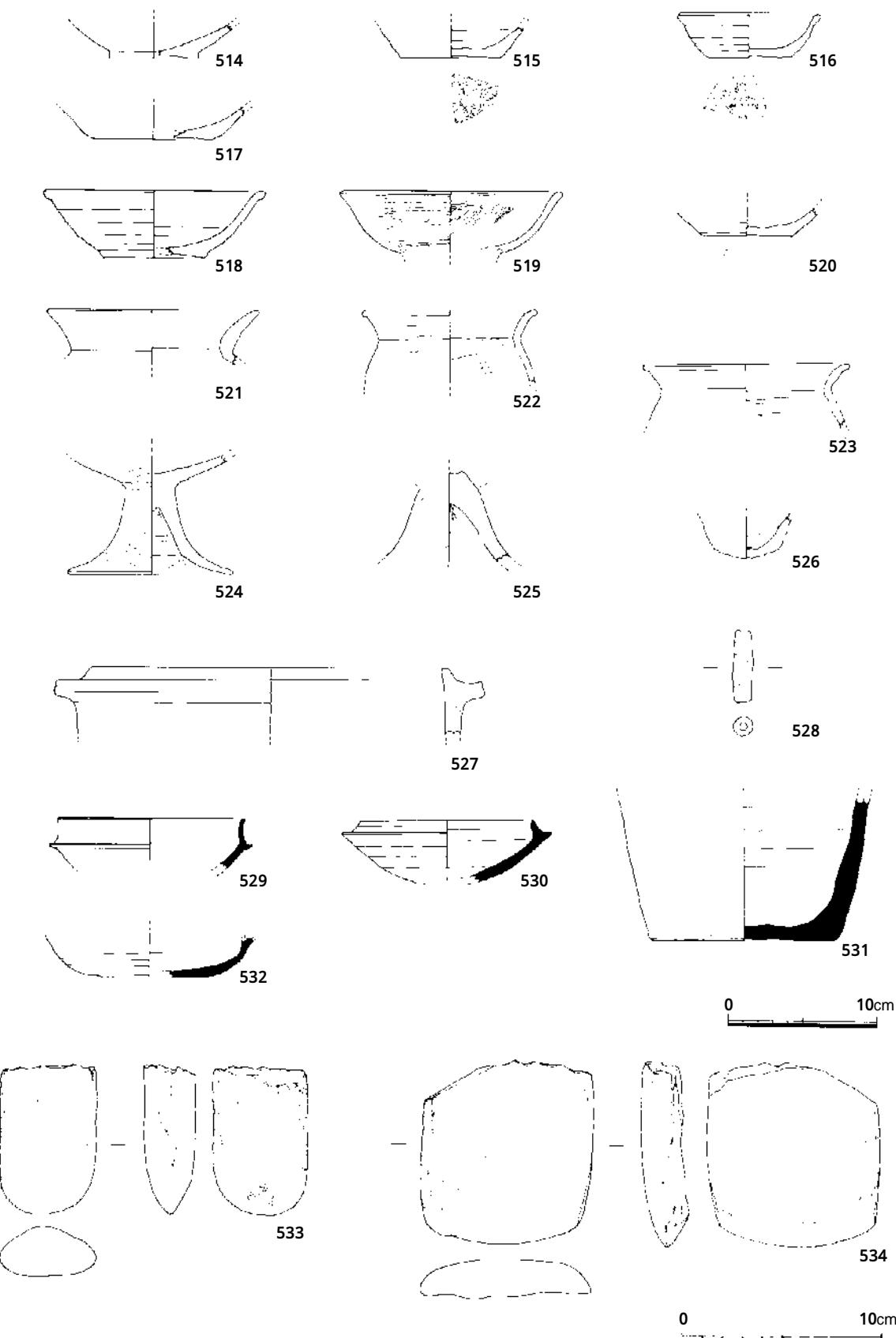


Fig.63 5-1区包含層(Ⅱ層)出土遺物(2)(S=1/4)

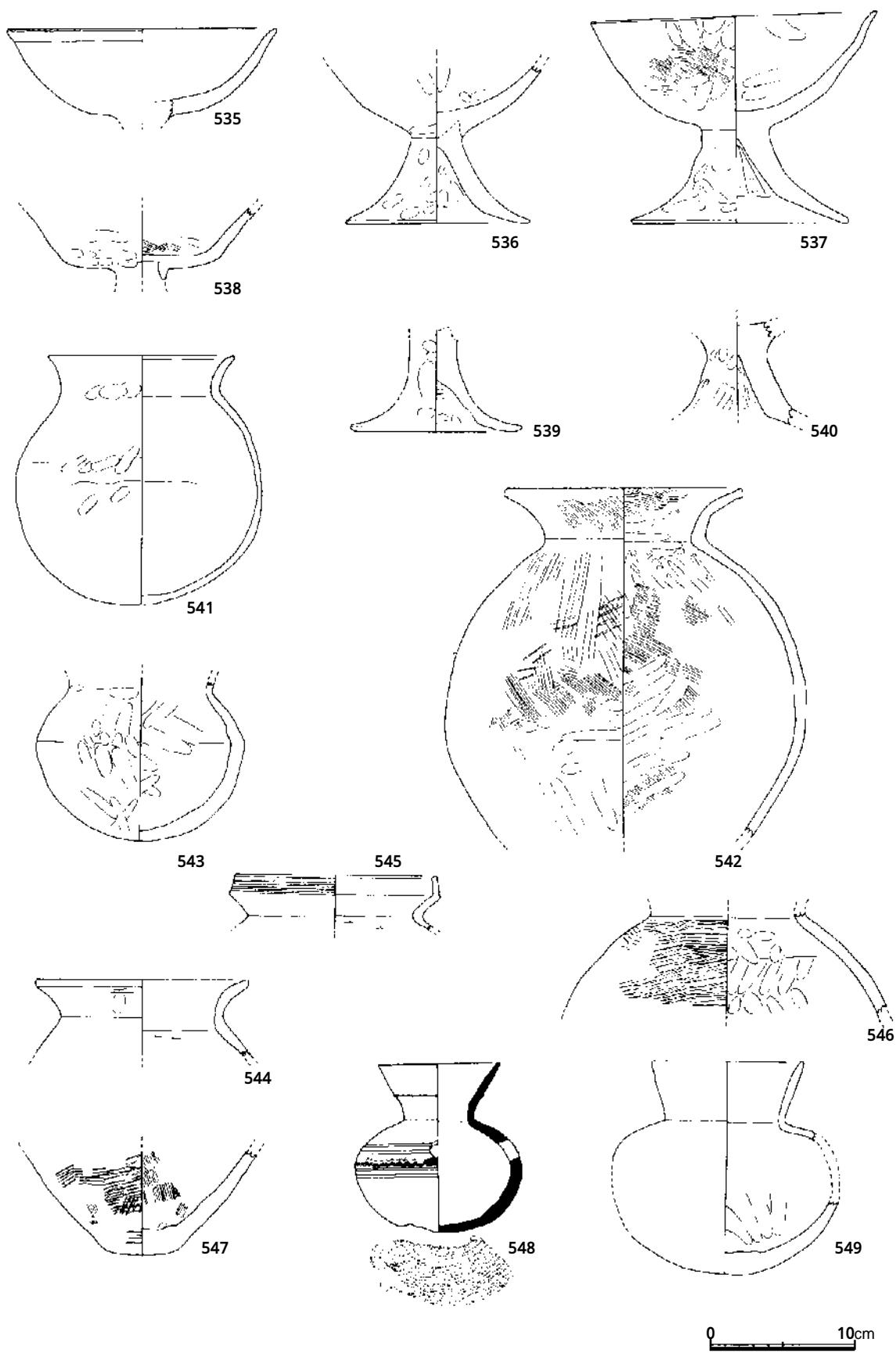


Fig.64 5-1区包含層(Ⅲ・Ⅳ層)出土遺物(1)(S=1/4)

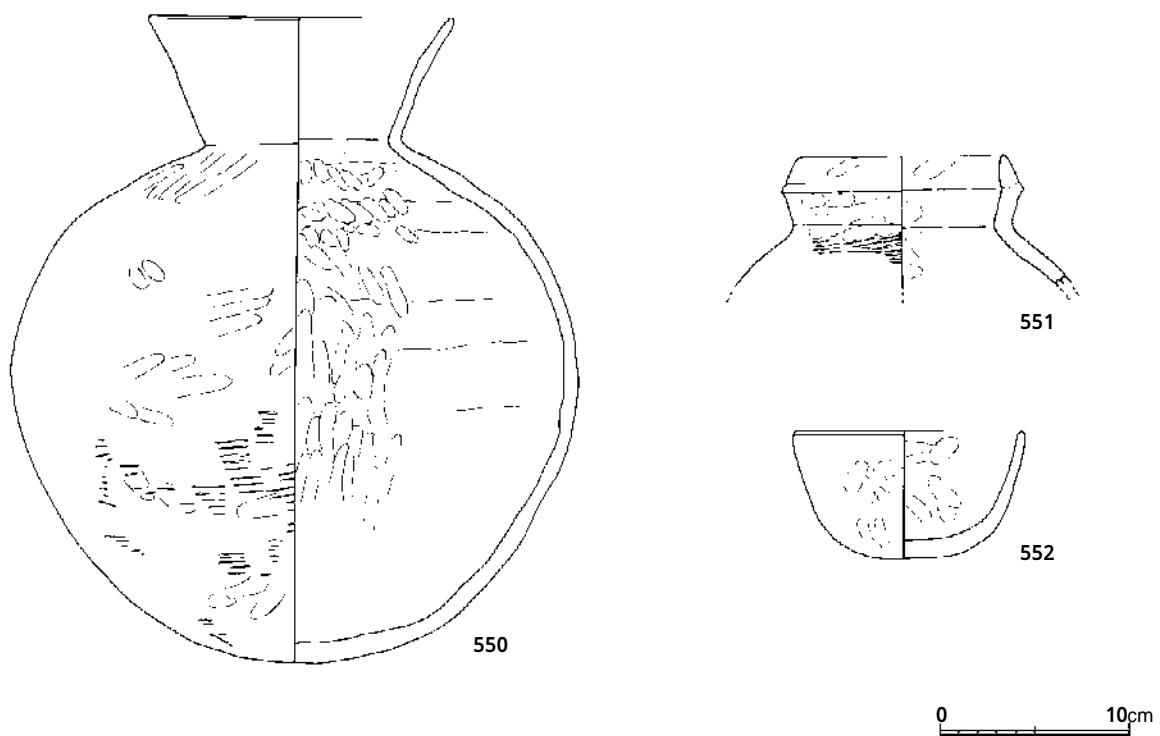


Fig.65 5-1区包含層(III・IV層)出土遺物(2)(S=1/4)

若干外反する。胴部は球形を呈する。口縁部内外面ヨコナデ調整、胴部内外面下位がヘラナデ調整が施されている。551は土師器の甕である。肩の張った上胴部から口縁部は、強く外反する。端部は直線的に丸くおさめる。552は、土師器の椀である。丸底の底部から内湾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。外面ナデ、内面ハケ調整が施されている。

2. 5-2区

①包含層出土遺物(IV～V層)

出土遺物の総点数は599点で、内訳は土師質土器が181点、須恵器が19点である。細片が全体で399点あった。この包含層には、遺構はなく遺物も細片が多く、図版化できる物が少なかった。ほとんどが流れ込んだものと判断される。

553は、瓦器の椀である。口径14.6cm、器高2.9cmを測る。体部は外上方に直線的に立ち上がる。外面ナデ調整が施される。554は、須恵器の長頸の瓶の底部である。底径は、9.3cmを測る。脚台部分から体部は、外上方に立ち上がる。555は、陶質の皿の底部である。底径は4.8cmを測る。逆台形状の高台を持ち体部は、外上方に立ち上がる。556は、土師質の杯の底部である。底径9.0cmを測る。やや上げ気味の底部は、断面逆三角形の厚い貼付の高台を有する。557は、土師器の高台付の皿である。器高0.9cm、底径4.6cmを測る。体部は外上方に立ち上がる。口縁部欠損。

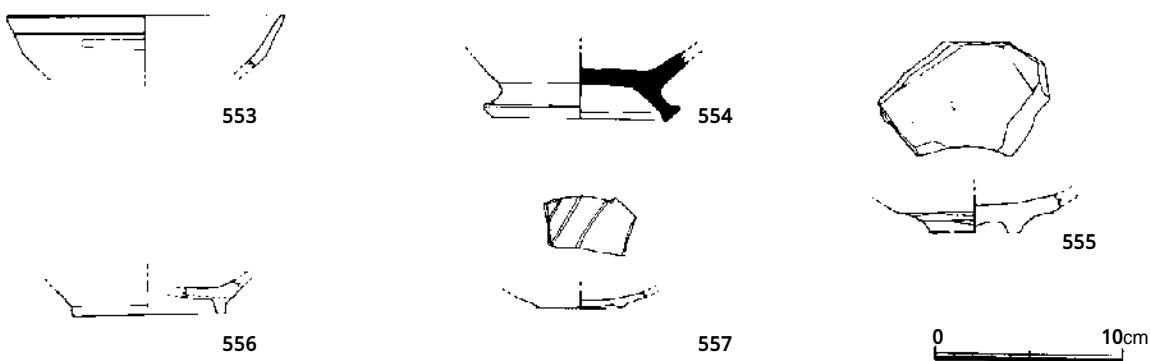


Fig.66 5-2区包含層出土遺物 (S=1 / 4)

②自然流路(SR-1)出土遺物-埋土IX ~ X層

出土遺物の総点数は土師器が73点、弥生土器が1点であった。その中で図版化できたものは、7点であった。

主な遺物を挙げると、558は、土師器の甕で底部は丸底、胴部中位に最大径を有し、球形を呈する。頸部で強く屈曲し、口縁部は外反し丸くおさめる。口径14.4cm、器高23.5cm、胴径21cmを測る。外面ナデ、内面ヘラナデ調整である。第IX層からの出土である。559は土師器の壺で、頸部から大きく外反し端部は上方に拡張され複合口縁を有する。口径14.4、器高30.6cm、胴径24.3cmを測る。内外面ともナデ調整で口縁部に指頭圧痕がみられる。560は、土師器の小型丸底壺である。口径8.1cm、器高8.7cm、胴径8.3cmを測る。丸底で胴部中央部に最大径を持つ丸みの強い胴部を有す。口縁は直立して斜め上方にのびる。ほぼX層から完形に近い状態で出土した。558～560までの、土器は古墳時代に使用された物である。特に560は、祭祀の際に使用されたものであり、近くに祭祀場所があったと考えられる。561は、土師器の高杯の脚部である。器高6.2cm、底径12.3cmを測る。柱状部は、下方に広がりをみせ、裾部は屈曲して水平に開く。外面はヘラ削り、内面は横位のヘラ削りが施されている。562は、土師器の甕の口縁部である。563は、弥生土器の壺の口縁部である。564は、土師器の甕の口縁部である。

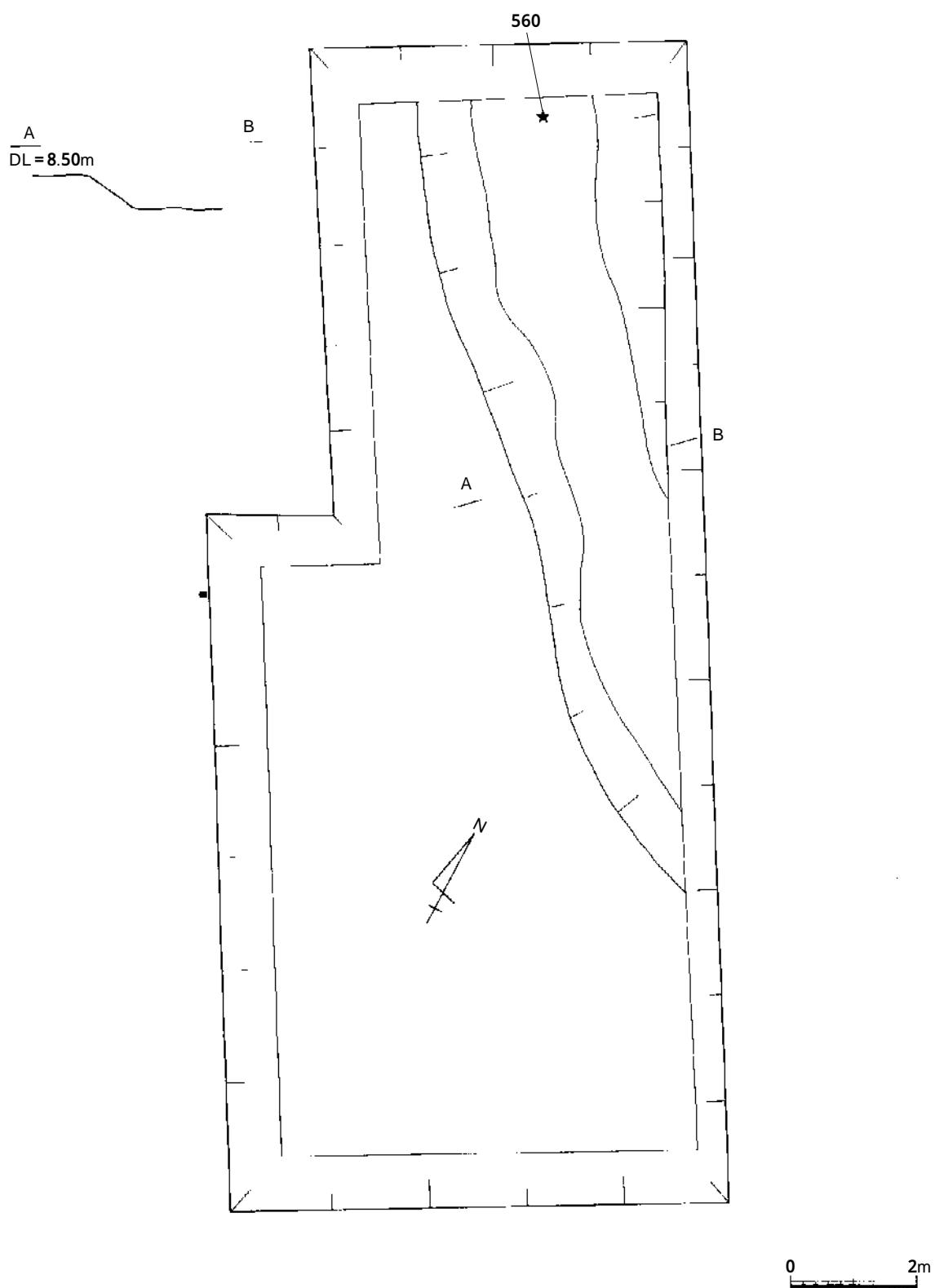


Fig.67 5-2区調査区及びSR-1平面・エレベーション図 (S=1 / 100)

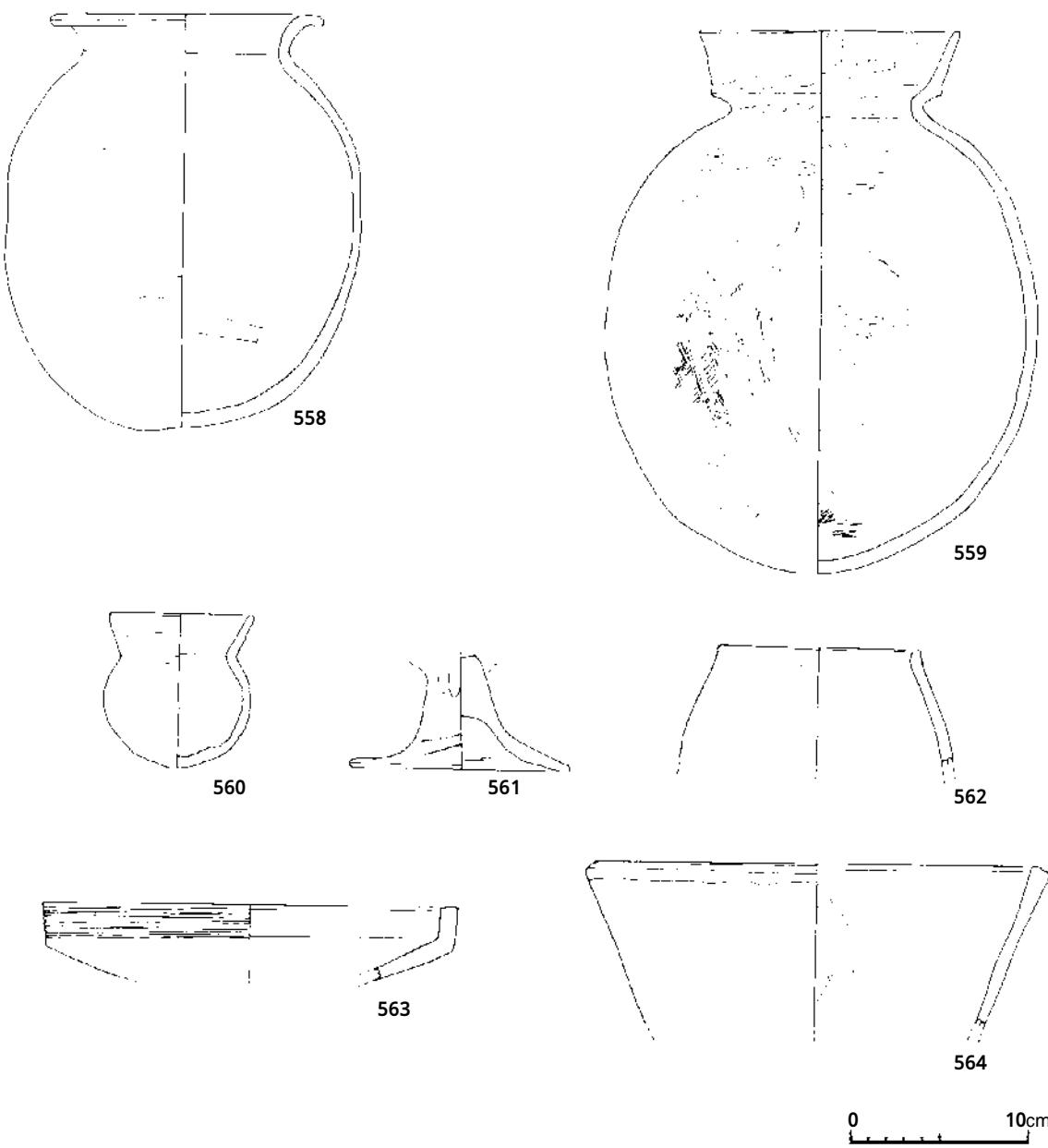


Fig.68 5-2区SR-1出土遺物 (S=1 / 4)

Tab.20 5 - 1区 層出土遺物観察表 (1)

Fig.番号	挿図番号	出土地点層位	器種 器形	法量 (cm)	口径 器高 底径	形態 文様	手法	備考
Fig62	476	層	土師器 椀	17.6 (3.6) -	底部欠損。体部は外上方に立ち上がり口縁部に至る。	内外面ともナデ調整。		
"	477	層	土師器 椀	14.4 (2.1) -	底部欠損。口縁部はやや外反しておさまる。	内外面ともナデ調整。		
"	478	層	土師器 椀	19.2 (3.6) -	底部欠損。体部は、外上方に立ち上がる。	内外面ナデ調整。		
"	479	層	土師器 椀	(1.5) (6.8) -	底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部、底部欠損。	内外面ともナデ調整。		
"	480	層	土師器 皿	(2.5) 3.3 -	貼付の高台から、体部は、外上方に内湾気味に立ち上がる。口縁部欠損。	底部ヘラ切り痕残る。外面ナデ調整。		
"	481	層	土師器 椀	14.4 (4.6) -	底部欠損。体部は外上方に立ち上がり、口縁端部でやや外反する。	体部から口縁部にかけてナゼ調整。		
"	482	層	土師器 杯	12.9 (3.6) -	底部欠損。体部は外上方に立ち上がり口縁部は外反し、丸く収まる。	回転ナデ調整。		
"	483	層	土師器 杯	13.4 (3.4) -	底部欠損。体部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	内外面ともナデ調整。		
"	484	層	土師器 杯	11.1 2.1 -	口縁はわずかに外反、丸くおさめる。細砂粒を含む。	口縁部ヨコナデ調整		
"	485	層	瓦器 椀	16.5 (4.5) -	底部欠損。体部は外上方に内湾気味に立ち上がり口縁端部はやや外反する。	内外面ともナデ調整		
"	486	層	土師器 椀	15.8 (4.6) -	底部欠損。体部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。	外面ナデ調整		
"	487	層	土師器 杯	13.5 (4.0) -	底部欠損。体部は外上方に立ち上がる。口縁部はやや外反する。	内外面ナデ調整。		
"	488	層	土師器 杯	12.7 (2.5) -	底部欠損。体部は外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反し丸くおさめる。	内外面ともナデ調整。		
"	489	層	土師器 杯	(2.2) 6.9 -	台上の底部から体部は外上方に立ち上がる。口縁部欠損。	底部ヘラ切り。		
"	490	層	土師器 杯	(1.6) 7.0 -	台上の底部から体部は外上方に立ち上がるが、口縁部は欠損。	底部ヘラ切り。		
"	491	層	土師器 杯	(1.2) 7.0 -	台上の底部である。口縁部、体部欠損。	内外面とも著しく摩耗しているので不明。		
"	492	層	土師器 杯	(2.8) 6.3 -	台上の底部。体部は外上方に立ち上がる。口縁部は欠損する。	底部回転糸切り。内外面ナデ調整。		
"	493	層	土師器 杯	(1.8) 6.6 -	ややあげ気味の台上の底部から、体部は外上方に立ち上がる。口縁部欠損	底部ヘラ切り。		
"	494	層	土師器 杯	(1.1) 7.0 -	体部、口縁部欠損。台上の底部を有する。	底部ヘラ削り痕残る。		
"	495	層	土師器 杯	(2.3) 7.5 -	台上の底部から体部は外上方に内湾気味に立ち上がる。口縁部欠損。	内外面ナデ調整。底部ヘラ切り。		
"	496	層	土師器 杯	(2.5) 7.2 -	高台を有し、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	全体的に摩耗が著しく不明		
"	497	層	土師器 杯	(1.4) 5.9 -	平底の底部である。体部、口縁部欠損。	底部ヘラ切り。内面ナデ調整。		
"	498	層	土師器 杯	(2.2) 6.8 -	台上の底部から体部は外上方に立ち上がる。口縁部欠損。	ナデ調整。底部ヘラ切り。		
"	499	層	土師器 杯	(2.4) 7.0 -	台上の底部から体部は外上方に立ち上がる。口縁部欠損。	底部ヘラ切り。外面ナデ。		
"	500	層	土師器 杯	(2.3) 7.0 -	台上の底部から体部は外上方に直線的に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。		
"	501	層	土師器 杯	(1.2) 4.4 -	張付の高台から、内湾気味に立ち上がる。口縁部欠損	底部はヘラ切り。外面ナデ調整。全体的に摩耗が激しい		
"	502	層	土師器 椀	(2.5) 7.6 -	台上の底部から体部は外上方にやや内湾気味に立ち上がる。	底部回転糸切り。外面ナデ調整。		
"	503	層	土師器 杯	(1.5) 7.0 -	口縁部体部欠損。台上の底部。	底部ヘラ切り。		
"	504	層	土師器 杯	(3.3) 6.8 -	逆台形状の貼付高台の底部から体部は外上方にやや内湾気味に立ち上がる。口縁部欠損。	外面回転ナデ。底部ヘラ切り。内面ヘラ磨き。		
"	505	層	土師器 杯	6.0 6.0 -	底部は高い脚台を有し、体部は外上方に立ち上がる。口縁部は若干外反する。	底部回転糸切り。内外面ナデ調整。		

Tab.21 5 - 1 区 層出土遺物観察表 (2)

Fig.番号	挿図番号	出土地点層位	器種 器形	法量 (cm)	口径 器高 底径	形態 文様	手法	備考
Fig62	506	層	土師器 杯		(1.9) 6.8	やや上げ気味の台の底部から、体部は外上方に立ち上がる。口縁部欠損。	底部ヘラ切り。内面摩耗が著しい。	
"	507	層	土師器 杯		(1.75) 7.0	台の底部から体部は外上方に立ち上がる。口縁部欠損。	内外面ともナデ調整。底部ヘラ切り。	
"	508	層	土師器 杯		(2.5) 5.8	平底で体部は外上方に立ち上がる。口縁部欠損。	内外面ともナデ調整。	
"	509	層	土師器 杯		(1.6) 6.4	口縁部、体部欠損。底部は平底を呈する。	内外面ともナデ調整。底部は回転ヘラ切り	
"	510	層	土師器 杯		(1.6) 6.4	口縁部、体部欠損。底部は平底を呈する。	内外面ともナデ調整	
"	511	層	土師器 杯		(1.3) 5.0	台の底部。体部から口縁部欠損。	底部ヘラ切り。	
"	512	層	土師器 杯		(1.3) 7.4	底部は平らで、底端部にハの字状の高台を付す。体部、口縁部欠損。	底部ヘラ切り。	
"	513	層	土師器 杯		(3.5) -	口縁部は欠損。平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	底部はヘラ切り ナデ調整	
Fig63	514	層	土師器 杯		(2.4) 6.0	上げ気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部欠損	内外面ともナデ調整	
"	515	層	土師器 杯		(2.1) 6.9	口縁部欠損。平底で体部は外上方に立ち上がる。	ロクロナデ調整。底部糸切り	
"	516	層	土師器 杯		(2.9) 5.6	平底の底部から、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は丸く收まる。	底部回転ヘラ切り。内外面ともナデ調整。	
"	517	層	土師器 皿		(2.3) 8.2	平底の底部から体部は外上方に立ち上がる。口縁部欠損。	底部回転糸切り。内面ナデ調整。	
"	518	層	土師器 杯		(14.4) 4.5 6.9	やや上げ気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反し丸く收める。	底部はヘラ切り。ロクロナデ調整	
"	519	層	瓦器 椀		(14.4) (4.2)	底部欠損。体部は外上方に内湾気味に口縁部に至る。端部はやや外反する。	内外面ナデ調整痕残る。	
"	520	層	土師器 杯		(1.95) 6.2	口縁部欠損。平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	内外面ともナデ調整	
"	521	層	土師器 甕		(14.0) (3.7)	口縁部は「く」の字状に外反する。	全体的に摩耗して調整不明。	
"	522	層	土師器 甕		(11.4) (5.0)	口縁部は大きく外反する。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。	
"	523	層	土師器 甕		(13.6) (4.5)	口縁部は強く外反する。	内外面ヨコナデ調整	
"	524	層	土師器 高杯		(8.0) 10.8	柱状部は下方に広がりをみせ屈曲して裾部に至る。	内外面ともヨコナデ調整。	
"	525	層	土師器 高杯		(6.0) -	杯部欠損。脚部は短く「ハ」の字状に下方に開く。	ナデ調整。	
"	526	層	土師器 手捏ね土器		3.0	丸底の底部から体部は、内湾気味に立ち上がる。口縁部欠損。	全体的に摩耗が著しく不明。	
"	527	層	土師器 釜		(23.1) (4.6)	胴部は直線的にやや内傾して上方に立ち上がる口縁端部から貼付された鰐有する。	口縁部内外面はヨコナデ調整。	
"	528	層	土錐		全長 4.9 前幅 1.4 全厚 1.3 重量 7.6	孔径 0.55 形状は管状を呈する。		
"	529	層	須恵器 杯		12.5 (3.5) 13.8	底部は欠損。鋭い棱によつて体部と口縁部と分かれれる。口縁端部はやや外傾する。	体部回転ナデ調整	
"	530	層	須恵器 杯		12.4 (2.8) 14.1	丸底の底部から直線的に体部は立ち上がり断面三角状の稜によつて口縁部と分かれる。口縁端部は垂直に立ち上がる。	内外面回転ナデ調整	
"	531	層	須恵器 壺		(9.6) 12.6	平底の底部から斜め上方に直線的に立ち上がる。胴中央部から欠損。	外面に回転ナデ痕残る	
"	532	層	須恵器 杯		12.4 (2.8) (14.0)	平底の底部から体部は穏やかに立ち上がる。口縁端部は欠損。	内外面回転ナデ調整	
"	挿図番号	遺構番号 層位	器種	計測値 最大長 最大幅 最大厚 重量		石 質	特 徴	備考
"	533	層	石斧		7.6 4.8 2.5 150.2	御荷鉾緑色岩	大型蛤刃石斧の刃部で基部は欠損する。全体をよく研磨している。	
"	534	層	石斧		9.2 8.6 2.0 288.4	御荷鉾緑色岩	扇平片刃石斧で基部は欠損する。表面の研磨は、丁寧である。	

Tab.22 5 - 1 区 ~ 層出土遺物観察表

Fig.番号	挿図番号	出土地点 層位	器種 器形	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態 文様	手法	備考
Fig64	535	層	土師器 高杯	18.6 -	(6.3) -	杯の体部は、内湾気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさまる。柱状部は欠損。	内外面ともナデ調整	
"	536	層	土師器 高杯	- -	(11.0) 12.1	脚部は短く「ハ」の字状に下方に開く。杯部は内湾して外上方に立ち上がる。	杯部、脚部ともナデ調整。	
"	537	層	土師器 高杯	- -	19.7 14.4 14.6	脚部は「ハ」の字状に下方に開く。杯部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部に至る。	内外面ヨコナデ調整。	
"	538	層	土師器 高杯	- -	(5.0) -	脚部欠損。体部は外上方に立ち上がる。口縁部欠損。	体部内外面にかけてヨコナデ調整。	
"	539	層	土師器 高杯	- -	7.1 11.9	杯部欠損。柱状部は下方にいくに従って広がりをみせ屈曲して裾部に至る。	全体的に摩耗が著しく不明。	
"	540	層	土師器 高杯	- -	(7.2) -	杯部欠損。脚部は短く「ハ」の字状に下方に開く。	ナデ調整。	
"	541	層	土師器 甕	- -	(12.6) 17.3 17.1	底部は丸底。胴部中位に最大径を有し球形を呈する。頸部で屈曲し口縁部は強く外反する。	内外面ともナデ調整。	
"	542	層	土師器 甕	- -	16.2 (24.2) 25.4	底部欠損。口縁部は強く外反し直線的に伸びる。胴部は中央部に最大径を有する。	内外面にハケ調整を施す。	
"	543	層	土師器 甕	- -	(11.2) 14.3	丸底の底部から体部は扇球形の胴部を有する。口縁部を欠損。	全体的に摩耗しているが内外面ナデ調整	
"	544	層	土師器 甕	- -	14.6 (5.4) -	底部欠損。口縁部は直線的に外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ	
"	545	層	土師器 甕	- -	13.7 3.8 -	口縁部は大きく外反し、端部まで直立してのび、丸くおさまる。	口縁部外面はヘラナデ。内面はヨコナデ調整。	
"	546	層	土師器 壺	- -	(7.3) -	肩の張った上胴部から直線的に頸部へ移行する。口縁部欠損。	内外面ナデ調整。外面に叩き痕残る。	
"	547	層	土師器 甕	- -	(7.3) 5.4	底部は丸底で、体部は外上方に立ち上がる。口縁部欠損。	胴部内外面にハケ調整。	
"	548	層	須恵器 壺	- -	8.4 11.8 11.6	口縁部は外上方へのび、断面三角形の凸部を境に外反気味にさらにのびる。肩部は比較的に緩やかに下る。体部外面には、沈線をはさんで、1条(6本)の波状文を施す。円孔は波状文の上から穿つ。底部は丸い。	内外面とも回転ナデ痕残る。	
"	549	層	土師器 壺	- -	10.3 (14.7) -	長頸の壺で胴部は球形を呈する。口縁部は外上方へ直線的にのび立ち上がる。	内外面摩耗が著しく不明。	
Fig65	550	層	土師器 壺	- -	15.7 33.8 29.4	長頸の壺で、口縁部は外上方へ直線的に立ち上がり、端部は若干外反する。胴部は球形を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面下位がヘラナデ調整。	
"	551	層	土師器 甕	- -	10.6 (6.9) -	肩の張った上胴部から口縁部は強く外反する。端部は直線的に丸くおさまる。	外面ナデ調整	
"	552	層	土師器 椀	- -	11.8 (6.7) -	丸底の底部から内湾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	外面ナデ。内面ハケ調整。	

Tab.23 5 - 2 区 ~ 層 出土遺物観察表

Fig.番号	挿図番号	出土地点 層位	器種 器形	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態 文様	手法	備考
Fig68	558	層	土師器 甕	- -	14.4 23.5 21.0	底部は丸底。胴部中位に最大径を有し球形を呈する。頸部で強く屈曲し、口縁部は外反し丸くおさめる。	外面ナデ調整。内面ヘナナデ。	
"	559	層	土師器 壺	- -	14.4 30.6 24.3	頸部から大きく外反し端部は上方に拡張され複合口縁を有する。底部は丸底を有する。	内外面ともナデ調整。口縁部に指頭圧痕がみられる。	
"	560	層	土師器 小型丸底壺	- -	8.1 8.7 8.3 -	丸底で胴部中央部に最大径を持つ丸みの強い胴部を有す。口縁は直立して斜め上方にのびる。	口縁部内外面ナデ調整。内面胴部下半指頭圧痕が残る。	
"	561	層	土師器 高杯	- -	6.2 12.3	杯部は欠損。柱状部は、下方に広がりをみせ、裾部は屈曲して水平に開く。	外面ヘラ削り。内面はヘラ削り。	
"	562	層	土師器 甕	- -	11.3 (6.6) -	口縁部はわずかに外反する。	内面横方向にナデ調整。外面右下りのハケ調整。	
"	563	層	弥生土器 壺	- -	13.4 4.1 -	体部は外上方に立ち上がり端部は上方に直線的に拡張される。口辰部に5条の凸線文。	全体に摩耗が著しく不明。	
"	564	層	土師器 甕	- -	- -	ゆるく外反する口縁部に張りの弱い胴部が続く。	内外面横ナデ調整。	

第5節 5-2区SR下層及び5-1区拡張区の成果

5区の中で、調査工程上、残った部分については、4区の調査と平行して最終確認調査を行った。5-2区では自然流路最下層及び下層粘土層であり、5-1区では東西に設定した拡張区である。調査に使用した基準杭、層位は全て5区の調査に準じる。追加調査(第2次調査)の成果について以下に記す。

(1) 5-2区SR下層

自然流路の最下層(IX層)から、古墳時代前期の土師器(Fig.69-568～573)と木製品(Fig.74・75-574～576)を検出した。木製品の出土状況は、Fig.63の通りである。黒褐色粘土(腐植土・植物遺体多し)層中に折り重なるようにまとまって検出された。574は臼状木製品で、丸太状の原材から削り出して成形されている。出土時には裏面の大半が樹皮で覆われていた。575は幅24cm長さ117cm厚さ1.8cmの板材である。576は先端を剣先状に削りだした木製品である。長さは96cm用途は不明で、先端のみに丁寧な加工が施され基部は未加工である。

流路中から出土した土器は567・568・571のように口縁外面はタテ方向、内面は横方向のナデによって仕上げられ、頸部で緩やかに外反するという共通の特徴を持つ。571は572と同一個体で内面頸部下までヘラ削りが確認され

自然流路の下層の灰色粘土層からは、弥生土器2点を確認した。Fig.72の565と566である。いずれも、弥生時代中期後半に属する遺物である。465は高杯の杯部、466は平底の甕底部。465の外面に櫛描平行線が施されている。高杯の形態は中期末の資料であるが、当該期の高知平野の同形態の高杯は外面に凹線文が施文されており、465のように櫛描直線が施文された高杯の例はない。その意味で注目される資料である。

(2) 5-1区拡張区

5-1区の調査終了後、遺物の集中が西端・東端の2ヶ所に認められたことから、調査工程の関係上確認することができなかった範囲をそれぞれ拡張区として設定、埋め戻し作業の直前に調査を実施した。なお、層位については5-1区に準じる。測量基準点についても5区調査時と同様の基準点を使用する。西拡張区では、包含層中から古式土師器が、東拡張区では5区の溝状遺構(SD-1)に連続する遺構を検出、さらに下層から古墳時代前期の祭祀遺構(SF-1)を確認した。

1. 遺構

SF-1(祭祀遺構・Fig.72)

5-1東拡張区青灰色粘土層(5-1区IV層)中から検出された遺構である。出土遺物はFig.72に示した土師器の甕(577)、壺(578)、高杯(579 588)、小型土器(589)、土製模造品(590)であり、粘土層中からの出土でプラン等は確認できなかったものの、小河川沿いの湿地(水辺)に展開する祭祀遺構であるといえる。

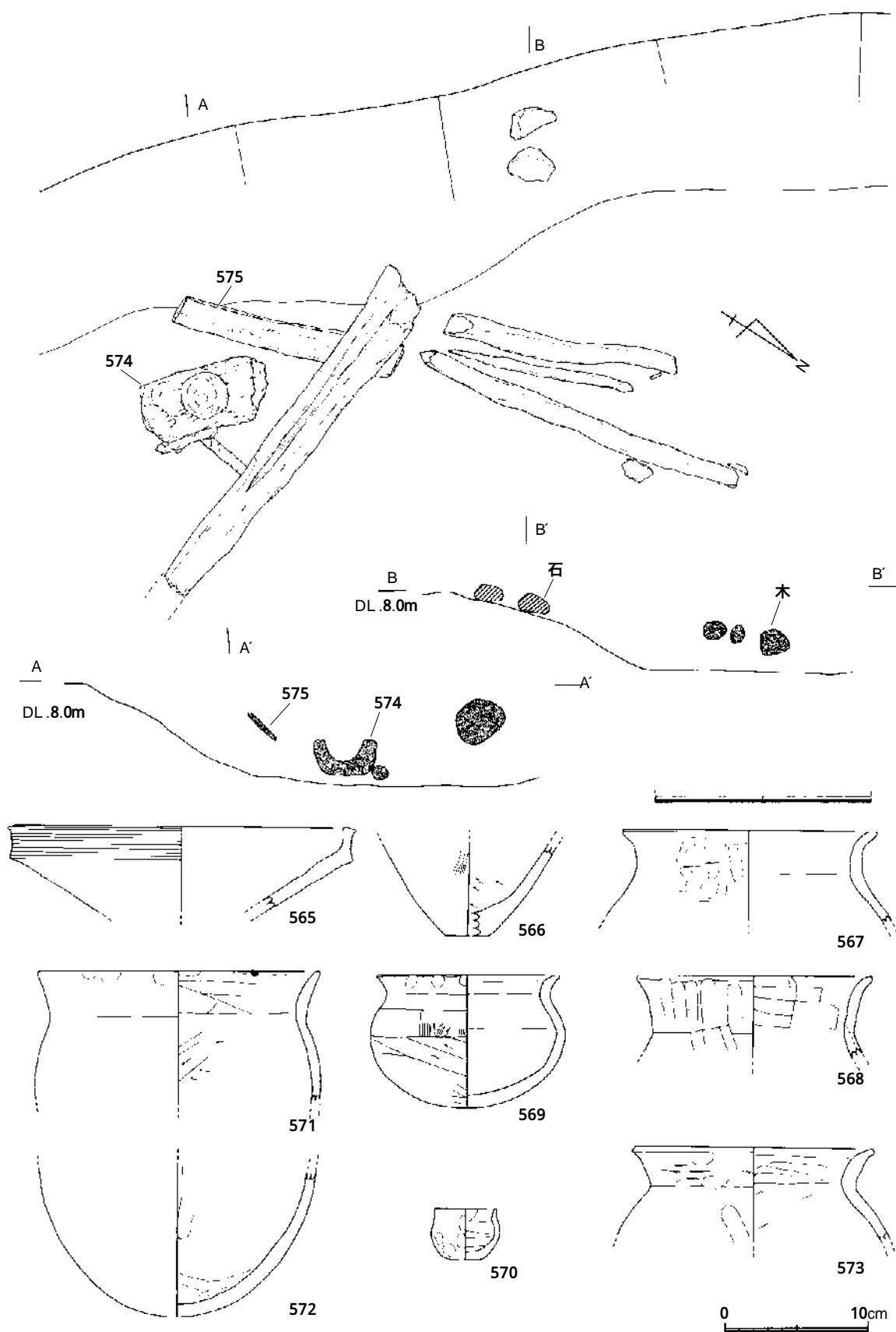


Fig.69 5-2区SR1木製品出土状況平面図・エレベーション図 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/4)

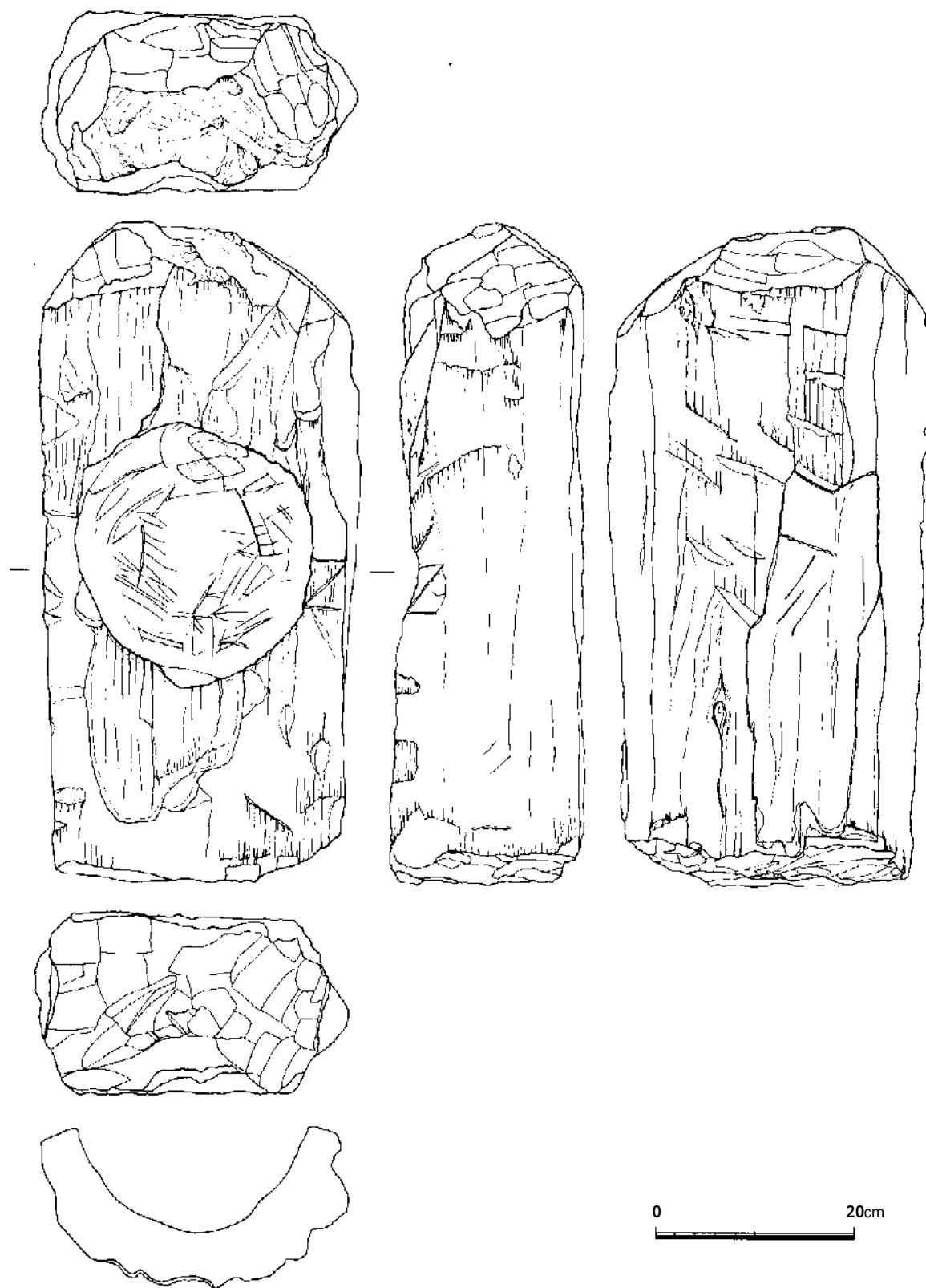
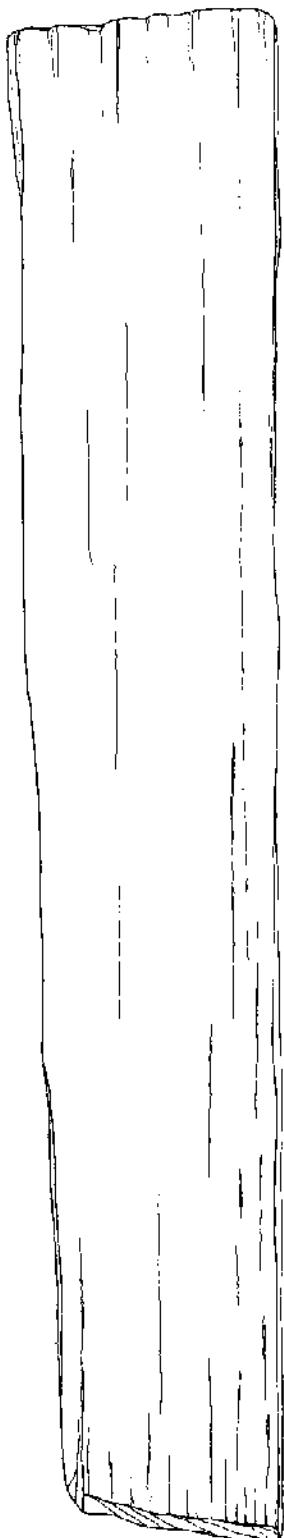
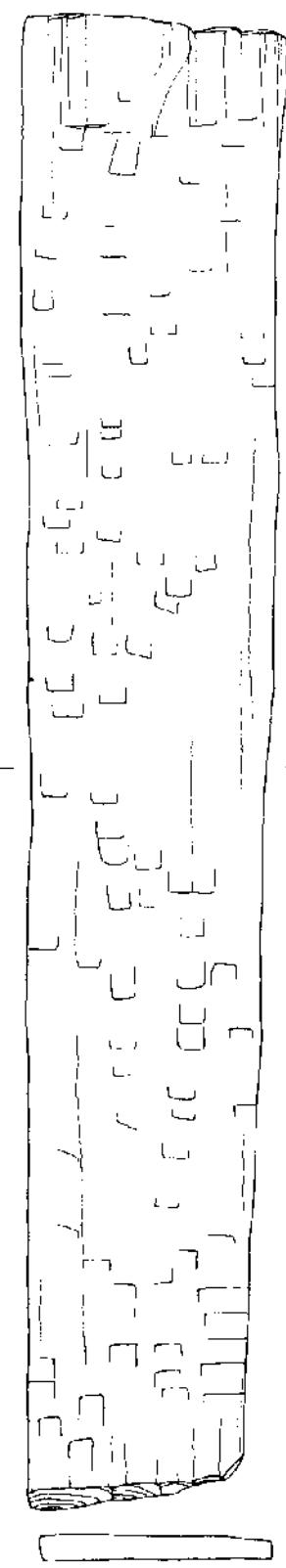
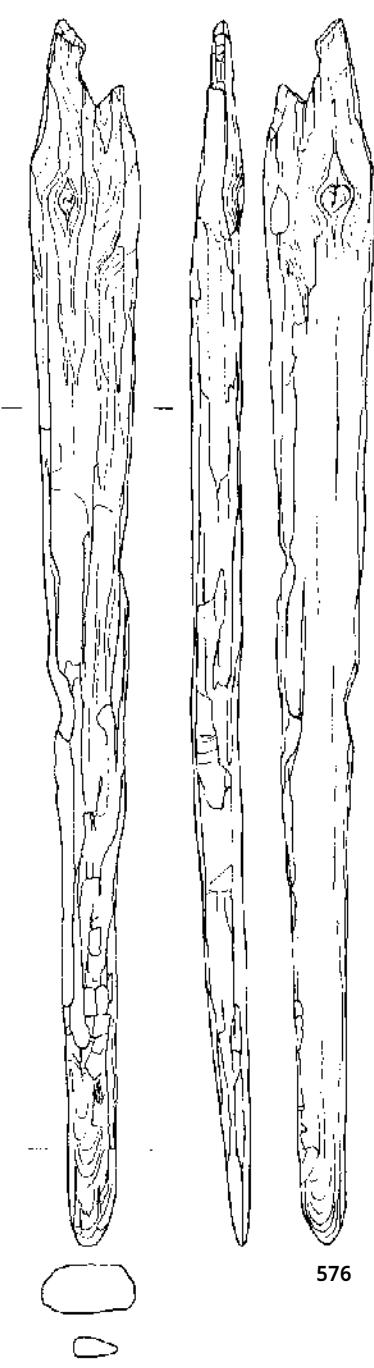


Fig.70 5-2区SR-1木製品(1)(S=1/6)



575



576

0 20cm

Fig.71 5-2区SR-1木製品(2)(S=1/6)

遺物の集中は長軸150cm、短軸140cmの範囲に限定されている。SF-1を構成する遺物は、甕1点、壺1点、高杯10点、小型土器1点、棒状土製品1点である。

出土遺物は全て古式土師器Ⅲ期～Ⅳ期(高知平野)に属する。甕・壺の内面にはヘラ削りが観察され、外面はナデにより仕上げられる。高杯には杯部に屈曲が認められるものと屈曲がなく内湾して椀状に立ち上がるものの2形態がある。

SD-1(Fig.60)

5-1区のSD-1に連続する溝である。埋土は黒褐色粘土で、灰色粘土層(Ⅲ層)上面に形成される。植物遺体を多く含むが、土器等の遺物は全く含まれていない。検出した範囲では、幅40～60cm、深さは最深で32cmである。

2.包含層出土遺物

東拡張区(Fig.73)

青灰色粘土層(Ⅳ層)から591～597の土師器・甕が出土している。内面頸部下までヘラ削りが残り、外面は刷毛調整がわずかに観察されるものの、仕上げは全てナデにより、器面には指頭圧痕が残るという特徴を持つ。甕の口縁は緩やかに屈曲して外反するものが大半で、596のように強く屈曲するものは少ない。古墳時代前期、古式土師器Ⅲ～Ⅳ期(高知平野)の遺物であり、SF-1出土遺物と同時期のものである。

西拡張区(Fig.74)

青灰色粘土層(Ⅳ層)から598～606の土師器・甕が出土した。外面にはタタキ目が残り、刷毛調整で仕上げる。口縁はくの字状に強く屈曲、底部は丸底という古墳時代初頭の資料である。高知平野の古式土師器Ⅰ期・ヒビノキⅢ式土器の範疇で捉えられる。

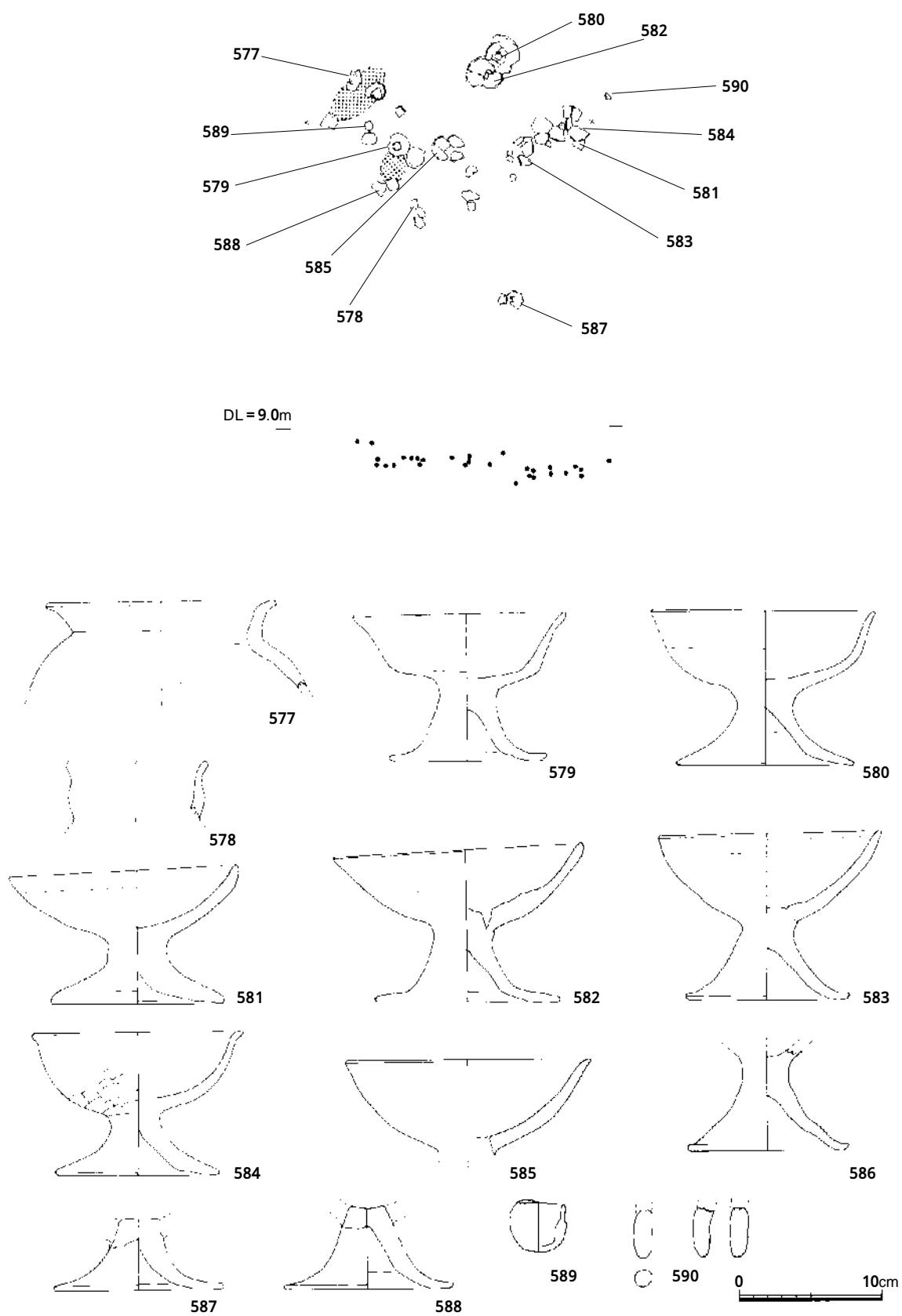


Fig.72 5-1区東拡張区SF-1遺物出土状況 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/4)

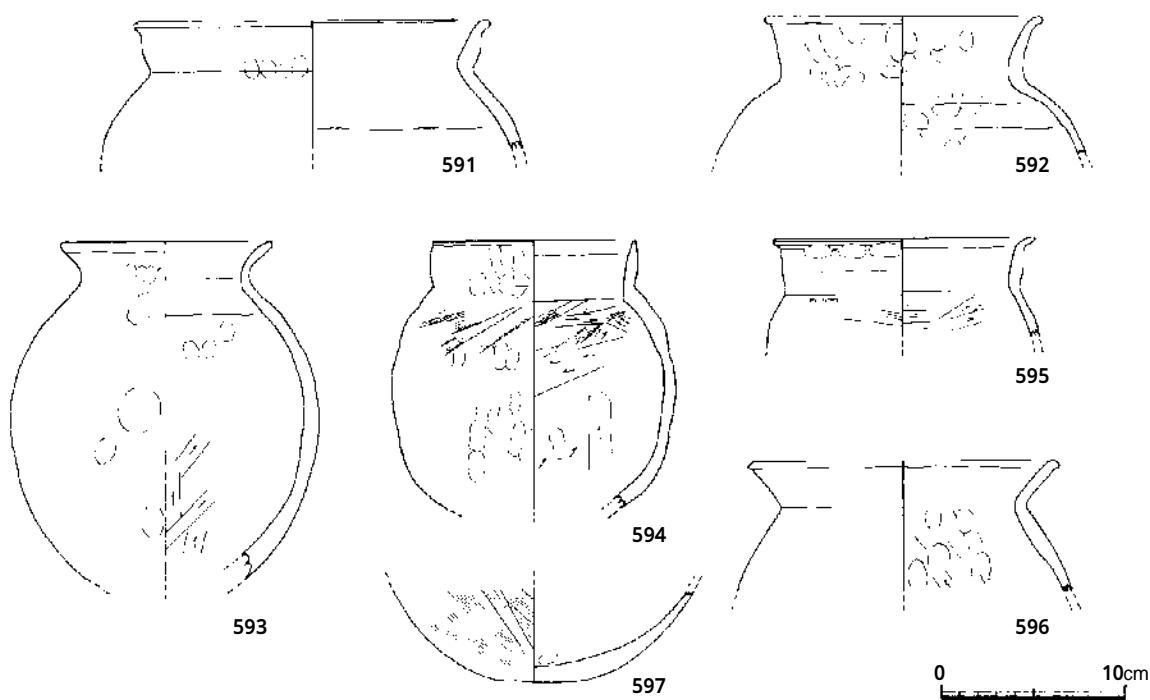


Fig.73 5-1区東拡張区包含層出土遺物 (S=1 / 4)

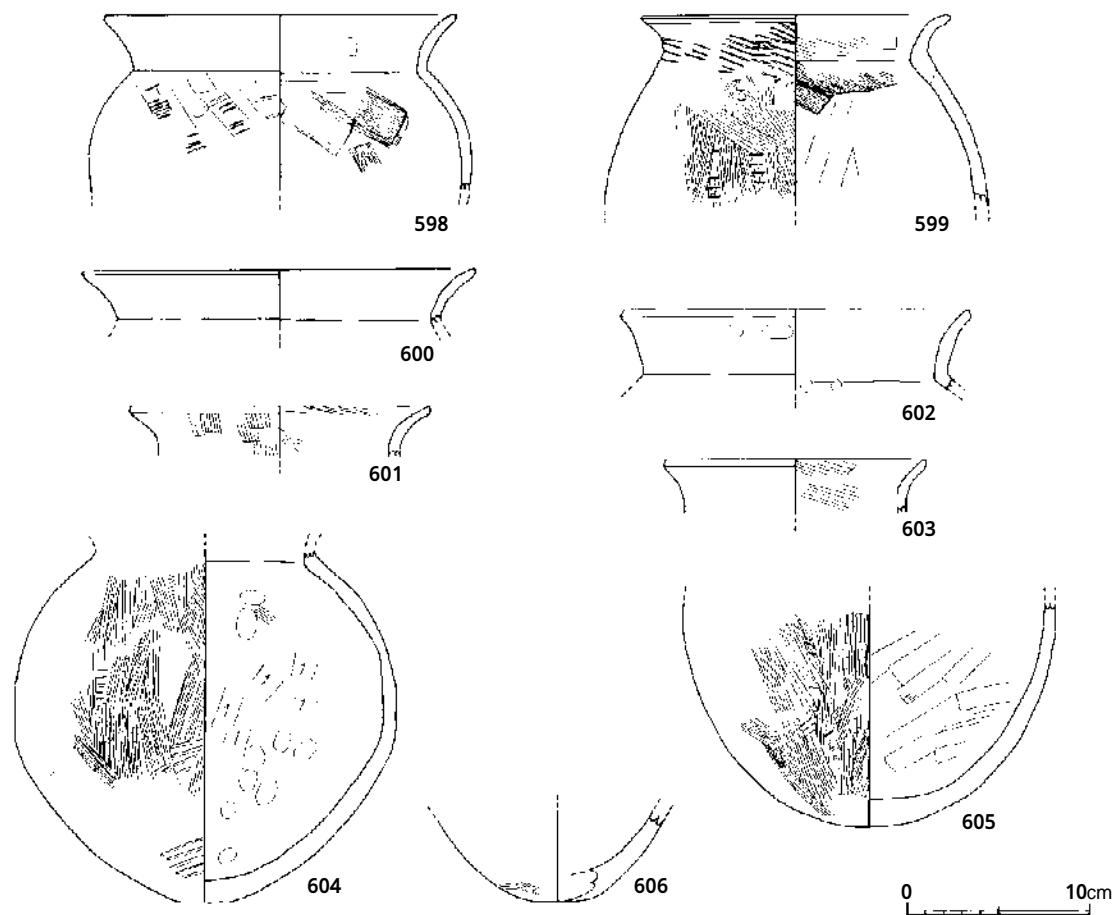


Fig.74 5-1区西拡張区包含層出土遺物 (S=1 / 4)

Tab.24 5-2区下層及び5-1区拡張区出土遺物観察表 (1)

Fig. 番号	図版 番号	出土地点層位	種別	法量 cm				特徴(形態・手法等)	胎土	色調		備考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
69	565	X I層	弥生土器・高杯	23				高杯杯部。杯部は大きく開いて口縁に至り、口縁部は短く屈曲して直立、口唇は水平面をなす。口縁部外面に7条の櫛描直線文を施す。調整はナデによる	1~2mmの大チャートを多く含む	にぶい 褐色	にぶい 黄褐色	弥生中期
69	566	X I層(S R下)	弥生土器・甕				3.1	平底の底部。内面ヘラ削り、外面刷毛調整。外面に煤付着。	1~4mmの大チャートをやや多く含む	灰色	にぶい 黄橙色	弥生中期
69	567	S R - 1	土師器・壺	17.4				頸部でゆるやかに屈曲、口縁は上方に立ち上がり端部は外反する。口縁はヨコナデで仕上げる。	0.5~1mmの大チャートをやや多く含む	褐灰色	にぶい 橙色	古式土師器期
69	568	S R - 1	土師器・甕	16.2				頸部でゆるやかに屈曲、口縁は上方に立ち上がり端部は外反する。内面ヨコ方向(左 右)、外面タテ方向(下 上)の板ナデにより口縁部を仕上げる。	1mm前後のチャート砂粒を多く含む	灰褐色	灰褐色	古式土師器期
69	569	S R - 1	土師器・壺	12.8	9.2	13.4	2	扁平な球形の胴部から頸部はゆるやかに屈曲し、口縁は短く外反する。口縁はヨコナデで仕上げ、外面に指頭圧痕が残る。上胴部にタテ方向の刷毛目が観察可能。丁寧な仕上げで、外面胴部下半にヘラ削りが認められる。	1mm前後のチャート砂粒を多く含む	橙色	橙色	古式土師器期
69	570	S R - 1	土師器・小型土器	4.3	3.6	4.8	2.4	手づくねのミニチュア土器。胴部は球形で口縁は屈曲してわずかに外反する。内面不定方向のナデ、外面指頭圧痕。	1mm前後のチャート砂粒を少量含む	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
69	571	S R - 1	土師器・甕	19.4		19.6		106と同一個体。頸部でゆるやかに屈曲し、口縁はわずかに外反する。口縁内面にヨコ方向の板ナデ、端部内外面に指頭圧痕が残る。内面頸部下にヘラ削り(左 右)が認められ、胴部下半はナデで仕上げる。外面はナデで仕上げる。	1mm前後のチャート砂粒を多く含む	暗灰白色	オリーブ黒色	古式土師器期
69	572	S R - 1	土師器・甕			19.6	4	丸底。内面はナデで仕上げる。	1mm前後のチャート砂粒を多く含む	暗灰白色	オリーブ黒色	古式土師器期
69	573	S R - 1	土師器・甕	16.4				ゆるやかに屈曲し外反する口縁。口縁部内面にヨコ方向の連続する板ナデにより仕上げ、外面は指頭圧痕と刷毛状原体による圧痕が残る。上胴部(頸部下)内面ヘラ削り(左 右)。	1mm前後のチャート砂粒を多く含む	灰オリーブ色	灰褐色	古式土師器期
72	577	S F - 1・No 1	土師器・壺					上胴部にヘラ削り。外面に指頭圧痕圧痕が残る。口縁は横ナデで仕上げる。		明褐色	にぶい 褐色	
72	578	S F - 1・No 1	土師器・壺					ヨコナデで仕上げる。	チャート砂粒を含む	橙色	橙色	
72	579	S F - 1・No 1	土師器・高杯	14.8	10.3	裾部 10.0		杯部は大きく開き、一旦屈曲してから斜め上方へ立ち上がる。杯部の屈曲は明瞭で、稜が入る。脚部外面指頭圧痕、内面ヘラ削り(左 右)。杯部摩耗顕著で調整不明瞭。	0.5~1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	橙色	橙色	
72	580	S F - 1・No 4	土師器・高杯	15.6	10.7			杯部は大きく開き、ゆるやかに一旦屈曲してから斜め上方へ立ち上がる。脚部内面ヘラ削り(右 左)。裾部内面の稜は明瞭で、裾部は大きく開く。	0.5~1mm前後のチャート砂粒を多量に含む	橙色	橙色	
72	581	S F - 1・No 5	土師器・高杯	15.9	9.3	裾部 12.0		摩耗顕著で調整は全体に不明瞭。杯部は椀状に内湾する。杯部口縁及び裾部はヨコナデで仕上げられ、杯部には指頭圧痕が残る。脚部外面にヘラ磨きがわずかに観察される。	1mm前後のチャート砂粒を多く含む	にぶい 橙色	にぶい 橙色	
72	582	S F - 1・No 4	土師器・高杯	17.2	10.5			杯部は椀状に内湾する。杯部口縫はヨコナデで仕上げられ、杯部には指頭圧痕が残る。裾部は屈曲して大きく開く。裾部内面の稜明瞭。	1mm前後のチャート砂粒を多く含む	橙色	橙色	
72	583	S F - 1・No 5	土師器・高杯	15.3	11	裾部 11.4		杯部は椀状に内湾する。杯部口縫及び脚部はヨコナデで仕上げられ、杯部には指頭圧痕が残る。脚部内面にヘラ削り(右 左)が観察される。裾部内面の稜はゆるやかで、端部は端反であり、わずかに上方へ屈曲する。	1mm前後のチャート砂粒を多く含む	橙色	橙色	
72	584	S F - 1・No 5	土師器・高杯	14.6	10			杯部は椀状に内湾し、口縁端部は外反する。杯部口縫及び脚部はヨコナデで仕上げられ、杯部には板ナデが観察される。脚部内面にヘラ削り(右 左)。裾部内面の稜はゆるやかで、端部は端反であり、わずかに上方へ屈曲する。	微細砂粒を多く含む	橙色	橙色	
72	585	S F - 1・No 1	土師器・高杯	17				高杯杯部。口縫は椀状に内湾し、端部はわずかに外反する。口縁端部はヨコナデで仕上げる。	チャートの微細砂粒を多く含む	橙色	橙色	
72	586	S F - 1・No 1	土師器・高杯					高杯脚部。外面に指頭圧痕が残る。裾部は端反で、上方へわずかに立ち上がる。	1~2mmの大チャート砂粒をやや多く含む	にぶい 橙色	にぶい 橙色	

Tab.25 5-2区下層及び5-1区拡張区出土遺物観察表 (2)

Fig. 番号	図版 番号	出土地点層位	種別	法量 cm				特徴(形態・手法等)	胎土	色調		備考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
72	587	S F - 1・No 6	土師器・高杯				裾部 11.6	高杯脚部。外方へ大きく開く。内面に稜をなし、端部は丸みを帯びる。摩耗のため調整は不明瞭だが、内面にヘラ削り(左 右)が観察される。	チャートの細砂粒(0.5mm未満)多く含む	にぶい 橙色	にぶい 橙色	
72	588	S F - 1・No 1	土師器・高杯					高杯脚部。器表の剥離顯著だが、内面のヘラ削り(右 左)と外面のナデがわずかに観察可能。	チャートの細砂粒多量に含む	橙色	橙色	
72	589	S F - 1・No 2	土師器・小型土器	3.3	3.7			手づくねのミニチュア土器。内外面全面に指頭圧痕が残る。	チャートの細砂粒及び1mm大のチャート砂粒を含む。	灰褐色	黄灰色	
72	590	S F - 1・No 3	土製模造品	全長 (3.4)	全幅 1.2	全厚 1.2	重量 3.2g	手づくねの土製模造品。先端部が欠けており、全体の形状は不明。土製勾玉(勾玉模造品)だと考えられる。	1mm前後のチャート砂粒を少量含む	灰色	灰色	
73	591	層	土師器・甕	18.8				頸部はくの字状に屈曲。外面に指頭圧痕が残る。内外面ナデ、ナデ以外の調整痕確認できず。	0.5~2mm大のチャート砂粒やや多く含む	黄灰色	にぶい 橙色	
73	592	層	土師器・甕	14.7				口縁端部外面肥厚。頸部・口縁部には指頭圧痕が残り、胴部外面に板ナデの痕跡が認められる。	0.5~2mm大のチャート砂粒やや多く含む	黄灰色	暗灰黃色	
73	593	層	土師器・甕	11.4		16.4		卵形の胴部から口縁は屈曲して外反する。口縁の調整は摩耗のため不明瞭。外面に指頭圧痕と板ナデ、内面上胴部にナデ・指頭圧痕、内面中位~下半にヘラ削り(下 上)が観察される。	1~2mm大のチャート砂粒やや多く含む	にぶい 赤褐色	にぶい 赤褐色	
73	594	層	土師器	11		15.4		球形の胴部から頸部で強く屈曲し、口縁は上方へ立ち上がる。口縁はナデにより細く仕上げる。外面刷毛調整が一部残り、全面に指頭圧痕。頸部下の胴部内面全面にヘラ削りが観察される。外面煤付着。	1mm前後の砂粒やや多く含む	褐灰色	にぶい 黄橙色	
73	595	層	土師器・甕	13.9				頸部でゆるやかに屈曲、口縁は上方へ立ち上がり、外方へ短く屈曲し端部外面が肥厚する口唇に至る。口縁は砂粒が動くほど強いヨコナデで仕上げる。外面にごくわずかに刷毛目の痕跡、口縁端部外面に指頭圧痕。内面頸部下、ヘラ削り(左 右)。	1mm前後の砂粒やや多く含む	灰黄色	にぶい 赤褐色	
73	596	層	土師器・甕	16				頸部でくの字状に強く屈曲。口縁はヨコナデで仕上げる。内面頸部下上胴部にヘラ削り(下 上)。外面上胴部に縱方向のナデ。	1~2mm大のチャート砂粒やや多く含む	黄灰色	黄灰色	
73	597	層	土師器・甕			4.6		甕底部。わずかに平坦面を残す丸底。内面不定方向のナデ、外面縱方向刷毛調整。	1mm前後の砂粒やや多く含む	灰黄色	灰黄色	
74	598	層	土師器・甕	18.7				頸部で強く屈曲し、口縁は外反する。口縁はヨコナデで仕上げる。内面板ナデ。外面タタキ後板ナデ。		にぶい 橙色	褐色	古式土師器Ⅰ期
74	599	層	土師器・甕	16.6				頸部で強く屈曲し、口縁は外反する。口縁はヨコナデで仕上げる。内面刷毛調整、外面タタキ後刷毛調整。	1~2mm大のチャート砂粒やや多く含む	黄灰色	にぶい 黄色	古式土師器Ⅰ期
74	600	層	土師器・甕	21				外反する口縁。砂粒が動くほど強いヨコナデ。外面に煤付着。	1~2mm大のチャート砂粒やや多く含む	にぶい 橙色	にぶい 黄褐色	古式土師器Ⅰ期
74	601	層	土師器・甕	16				外反する口縁。刷毛後ヨコナデで仕上げる。外面に煤付着。	0.5~1mm大のチャートやや多く含む	にぶい 褐色	にぶい 褐色	古式土師器Ⅰ期
74	602	層	土師器・甕	18.6				くの字状に強く屈曲し、外反する口縁。外面に煤付着。口縁はヨコナデで仕上げる。不明瞭だが口縁部内面に刷毛目、頸部下に指頭圧痕が残る。	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む	明褐色	にぶい 褐色	古式土師器Ⅰ期
74	603	層	土師器・甕	14				外反する口縁。口縁はヨコナデで仕上げる。内面に刷毛目残る。外面に煤付着。		褐灰色	褐灰色	古式土師器Ⅰ期
74	604	層	土師器・壺			20.5	3	壺胴部。球形の胴部で、最大径は胴部中位に有る。底部はわずかに平坦面を残す。内面中位にヘラ削り(下 上)、上胴部に刷毛目と指頭圧痕、下胴部に指頭圧痕が観察される。内面下胴~底面付近に炭化物が付着する。外面はタタキ後刷毛調整。底部周辺はタタキ目のみが残る。	0.5~2mm大のチャートをやや多く含む	暗灰色	黄灰色	古式土師器Ⅰ期
74	605	層	土師器・壺			20	3	底部は丸底。胴部は球形。内面は板ナデ、外面はタタキ後刷毛調整で全面に刷毛目が残る。	1~2mm大のチャートをやや多く含む	オリーブ黒色	オリーブ黒色	古式土師器Ⅰ期
74	606	層	土師器・甕					わずかに平底を残す。タタキ後タテ方向の刷毛調整を観察できるものの摩耗著しく不明瞭。	2~3mm大のチャートをやや多く含む	にぶい 橙色	にぶい 橙色	古式土師器Ⅰ期

第V章 小結

第1節 1・2・3区

(1) 1・2区

今回の1・2区の調査では、7条の溝構と銅矛埋納土壙を除いて住居址に繋がるような遺構は検出できなかったが、遺物については、縄文土器から近世の陶器に至るまで、遺跡の変遷を物語る興味深い遺物を多数検出することができた。埋納された青銅器（銅矛4本）については特筆される。

また、小片のため本文中ではふれてないが、もっとも古い土器として縄文土器数点が溝から出土している。607（SD6）と608（SD5）の2点については小結の中で図示する。607は縄文原体がRLの胴部小片で詳細な時期は特定できないが、縄文後期に属する遺物である。608は口縁部小片で外面に断面三角形の刻目突帯を貼付し、口唇部上面にも刻目が認められる。縄文晩期終末の遺物である。

縄文時代から古墳時代にかけての遺物も出土しているものの少量である。当遺跡1・2区の中心となる遺物の時期は古代から中世にかけてのものであり、出土場所はほとんどがSD4・5・6である。中でもSD6が突出して多い。実測した遺物の中で石器、木製品、縄文土器を除いてある程度まとまった出土量を持つ土器を便宜的に時代別に大きく分けると以下のよう構成になる。

1. 古代1（8世紀～9世紀前半）の遺物

須恵器（杯、杯蓋、甕）土師器

2. 古代2（9世紀後半～10世紀中葉）の遺物

緑釉供膳具、黒色土器椀、須恵器椀（炭素吸着のものと吸着のないもの）土師器

3. 中世前期（11世紀後半から13世紀）の遺物

白磁、青磁、和泉型瓦器、東播系捏ね鉢、初期備前擂鉢、備前壺（備前壺と一部の東播系須恵器は13世紀末～14世紀初頭のものが混じる）

4. 中世後期（14～16世紀）の遺物

白磁、青磁、染付、瓦質土器、備前擂鉢

以上の中で突出して出土量の多いのは中世前期のものであることから、天崎遺跡の盛行期は11世紀後半から13世紀であったと思われる。

以上、天崎遺跡1・2区についてざっと概括したが、次章では、出土した遺物が使われた当時の遺跡周辺の状況を含め、代表的な遺物を取上げ、それらから見えてくる天崎遺跡の変遷について述べて

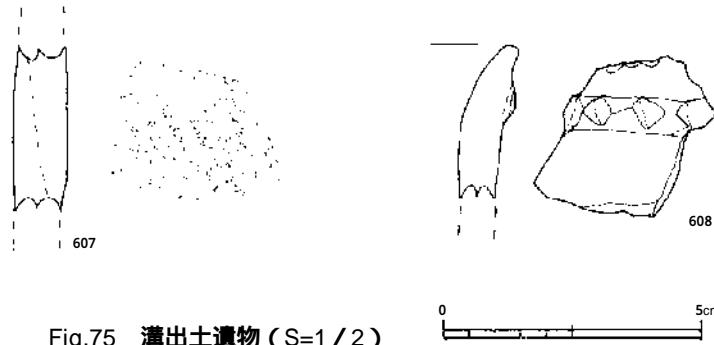


Fig.75 溝出土遺物 (S=1/2)

いきたい。

(2) 3☒

確認遺構はSR3、2、1の順に形成されたと考えられる自然流路3条のみであり、遺構の時期を特定する遺物は検出できていない。SR2が埋没し、ある程度の堆積層が形成された後、SR1が堆積層とSR2の上層を切る形で形成されたと考えられる。遺物については下記のとおりであり、実測遺物は遺構外出土の406（羽釜体部）と407（高杯口縁部）の2点のみである。

1. 遺構外出土遺物 ······ 繩文土器、弥生土器、土師器、須惠器、近世陶磁器
 2. SR1 ······ 弥生土器細片（Ⅱ層）繩文土器細片、弥生土器細片、土師器
細片、（Ⅲ層）獸骨、二枚貝、堅果類
 3. SR2 ······ 獸骨、二枚貝、堅果類
 4. SR3 ······ 堅果類

第2節 4・5区

今回の調査地点の西半に位置する4区及び5区は、中世前期の溝を中心の1~3区とは異なった様相を示している。ここでは、4・5区を通じた出土遺物・遺構を時代別に概観して、まとめにかえた。

(1) 弥生時代

1区では縄文時代後期・晚期の遺物が確認されているが、4・5区では、4区包含層中から出土した弥生前期末の甕型土器が最も古い遺物である。仁淀川水系では土佐市居徳遺跡、土佐市倉岡遺跡・森岡遺跡、春野町西分増井遺跡、春野町仁ノ遺跡、伊野町八田神母谷遺跡など近年の調査により弥生前期前半～中葉の遺跡が多く知られるようになった。天崎遺跡の当該期の集落の中心がどこにあったのか不明だが、今後、分村により成立する前期末集落の例が増加することが予想され、当遺跡のような低湿地に立地する遺跡についても注意する必要がある。

4-3区・5-2区からは弥生中期後半の土器が出土している。微隆起帯を多用し、微隆起帯間に櫛描沈線を施文、口縁は貼付口縁の中期後半の特徴を有する土器が主体である。包含層出土遺物が主だが、溝状土坑(4-3・SK-1)やピットなどの遺構も確認されている。4-3区463の高杯や、5-2区565の高杯など明らかに第Ⅳ様式新段階(中期末)の特徴を持つ遺物も含まれる。463・565ともに口縁は水平面を成すが、463は外面が櫛描沈線で加飾され、凹線文を持つ565とは異なっている。高知平野周辺には同形態の高杯に463のような櫛描沈線を持つ例はなく、凹線文土器を受容しながらも凹線文の代わりに在地(高知平野西部)に盛行する櫛描沈線を施文した例として注目される。

弥生時代後期の土器は4-4区の440の高杯1点のみである。後期前半に属する遺物である。

(2) 古墳時代

4・5区から古墳時代前期の遺物は比較的まとまって出土している。3・4世紀から5世紀初めにかけての資料である。

古墳時代前期初頭の古式土師器Ⅰ期の遺物は、4-3区包含層・5-1区包含層・5-2区自然流路から確認されている。545の甕は吉備型甕(搬入品)であり、それ以外は在地産の土師器である。甕・壺はタタキ目を残し、刷毛調整によって仕上げる。高杯の杯部は大きく開く形態を示す。

それに続く、古式土師器Ⅱ期からⅢ期にかけては、竪穴住居1棟(4-3区ST-1)と祭祀遺構(5-1区東拡張区SF-1)が、現在の水路を挟んで約20mほど離れて検出されている。南側から延びる小丘陵先端の地点であり、小字名は「梅ヶ崎」である。小河川沿いの水辺の祭祀が行われた地点であり、1棟のみ検出された竪穴住居も祭祀に関連して形成された可能性が高い。祭祀遺構と集落との関係が明らかになった例は少なく、南四国においても集落と祭祀遺構の位置関係を明瞭に捉え得た例はない。天崎遺跡の当該期集落本体の存在についても、今次調査では明らかにすることことができなかった。祭祀遺構の検出地点に近接して嘗まれたST-1は、床面から明確な柱穴が検出できなかったことから恒常的な住居ではなく、短期に祭祀遺構に接して嘗まれた住居だと考えられる。出土した土器は、甕の外面に刷毛目がほとんど残らず、ナデによって仕上げられる。古式土師器Ⅲ期とされる香我美町押原遺跡ST-5出土資料(外面に刷毛目が残る)よりも新しい特徴を備えている。さらに、甕は内面

にヘラ削りが明瞭に観察されるなど、古式土師器Ⅳ期の西分増井遺跡ST-8よりも若干古相であり、Ⅲ期とⅣ期をつなぐ資料として位置付けられる。

なお、5-1区Ⅱ層出土の548は初期須恵器である。近年、高知市介良遺跡、伊野町神母谷遺跡、土佐市居徳遺跡など各地で初期須恵器の出土例が知られるようになってきた。これらの須恵器と共に伴する5世紀初頭の高知平野の土師器の様相も今後の資料の増加とともに明らかになってこよう。天崎遺跡のST-1・SF-1出土資料も現段階では古式土師器として扱ったが、初期須恵器が出土していることから須恵器出現後の土師器である可能性も考えられる。4世紀第3四半期 5世紀第1四半期の時間幅の中で捉えておきたい。

(3) 古代

4・5区から出土した古代の遺物は、その多くが10世紀の資料である。4-1区の8世紀後半の須恵器杯(411)などを除くと5-1区のⅡ層から出土した円盤状高台の須恵器椀・土師器椀など10世紀の遺物が多い。量的には少ないが、1・2区SD-4・5・6出土の遺物と同時期の資料である。

当該期の遺構は、4-1・2区の微高地に形成されていた可能性もあるが、遺構出土遺物に乏しく、また復元可能建物跡も見出せなかった。古代に属する建物がこの地点にあったとしても、今次調査地点(4・5区)は古代の天崎集落の中心ではない。

(4) 中世～近世

中世～近世に属する遺物も量的には少ない。図示し得た遺物の中で、土師器(413)、瓦器(422)、近世陶器(421)、近世擂鉢(416)などを挙げ得るのみである。

時期は特定できないが、4-4区1面目遺構面(Ⅳ層上面)では、中世以降の畝状遺構を検出した。生産関連遺構として、注意する必要がある。この遺構が埋積した時点では畝状遺構が形成されており、ここは畠として利用されていたはずだが、同時にセクションには、層上面に滞水即ち水田の可能性を示す鉄分の沈着が認められる。この地点が、近接した時期に畠・水田の2種類の土地利用がなされていたことを示している。

今回の天崎遺跡の調査地点の大半は第2次世界大戦中、昭和18年から19年にかけて暗渠を造成することにより湿田から乾田へと変化、二毛作が可能になったことが、当事者の証言より明らかになっている。しかし、時期による環境の変化は大きい。16世紀末の長曾我部地検帳によると調査地点周辺には、上田・中田など比較的生産力の高い水田が集まっていたことが記されている。地下水位の変化や天崎の谷底平野を形成する加茂川の流れの変化によって、環境は大きく変わる。4-4区1面目遺構は、中世～近世にかけての一時期に、戦前の環境(湿田)とは大きく異なる環境が当地に存在したこと示唆している。

第VI章 考察

第1節 天崎遺跡出土銅矛とその意義

山本哲也

天崎遺跡の中世・溝跡SD4から、弥生時代の国産青銅器である中広形銅矛4本が納められた不整形土坑SK1が検出され、中世の溝跡に再埋納された銅矛が存在することが明らかとなった。埋納土坑と銅矛の検出状況、出土銅矛の観察所見については前述したとおりであるが、仁淀川流域での銅矛の出土と中世における再埋納の意義についてふれ、まとめることにしたい。

1 銅矛出土地点の位置

天崎遺跡は、仁淀川河口から約7.6km上流域の土佐市天崎に所在し、河川右岸の後背湿地に立地する。天崎の集落は、高知市針木から伊野町・天王ニュータウンを経て仁淀川にかかる八田大橋をわたり、土佐市方面に少し南下した西側の集落である。集落の南側には東方向に延びる小丘陵があり、この丘陵部と集落にはさまれた低地一帯が遺跡の範囲に該当する。また、丘陵部には南側斜面に松尾八幡宮が鎮座し、山上には中世城跡・人麻呂様城跡が所在する。丘陵東端の標高61.0mの頂部から北向けに派生した支尾根の北西裾端周辺が、今回の調査で銅矛が出土した場所である。

銅矛は、中世の水路であるSD4の埋没土に掘り込まれた不整形土坑SK1から出土し、弥生時代ではなく中世に再埋納されたものである。SD4については、溝跡の埋没時期が鎌倉時代中頃（13c 中葉）で、SK1の形成時期はそれ以降の所産であると推察される。SD4の北側には、SD5・SD6が形成されているが、水路肩の切り合い関係や埋土中の出土土器類の所属時期からみて、SD6 SD5 SD4の順に形成され、時期が下降するのに従って次第に南側の山際へと移行しながら掘削されたことがうかがわれる。現在の水路がSD4のさらに南側の山添にあることからすれば、現水路の保全のため検証はできなかったもののSD4から後続の水路等が現水路下に形成されていることが推定される。SK1が山際に形成されていることや、水路跡の形成過程から判断して、中世のある時期に水路・溝の掘削のため山際の傾斜面を掘削した際に偶然に銅矛が掘り出され、出土地近くに発見された状況に近い姿で再埋納したと理解することが最も適切であると考える。天崎遺跡出土銅矛は、出土地近くの山裾傾斜面地に本来は埋納されていた可能性が極めて高いことを指摘しておきたい。

2 銅矛の埋納

SK1から検出された銅矛が、弥生時代の埋納状況をどの程度伝えながら再埋納されているのか、中世の再埋納行為を受けていることからすれば、復元することは憶測の域を脱しない。しかし、袋部と峰を2本1組みに交互に埋納している点を除いて他は、埋納状況にこれまでに知見されている銅矛の埋納事例と符号する点が多く、無造作に銅矛を集めて埋めなおした痕跡とはみなされにくい。特に、①穴に埋める②接して並べる③耳を上に刃を起こす④袋部と峰（穂部）を交互に置く⑤袋部

下端と鋒（穂部）先端の位置を揃える、などの諸点のうち②～④は弥生時代の埋納銅矛例と共に通し、銅矛の埋納状態を知らなければ考えつかない類似性をもつ。従って、偶然埋もれたままの銅矛に出くわし、丁寧にとりあげた後に持ち去ることなく、元の状態に近い姿で別の位置に埋め直したことが推考される。その場合、発見場所にそのまま埋め戻すのにはなにか不都合な要因があり、一度は掘り出されて場所替えされたことが想定される。⁽¹⁾

ここでSK1の銅矛埋納状態の解釈にひとつの試論を呈示しておきたい。銅矛の取り上げ時と、出土銅矛の泥落としの際には各銅矛の表面に付着した土を観察したが、赤土（山土）・シルトなどSK1の埋土及びSD4の堆積土とは明らかに異なる成分をもつ土の存在は観察されなかった。ただ、わずかではあるが各銅矛の袋部の内側にSK1の埋土である淡茶色粘質土とともに1～2mmの小砂粒を含む緑灰色粘質土が付着していることが観察され、銅矛のもともとの埋納地は異なる土質を持つ場所ではなく出土地に近い堆積土を持つことが予見された。この緑灰色粘質土はSK1東側から南側にかけての埋土ではあるが、SK1ではこの部分の銅矛が約20cmほどSK1の底面から高くなっている。この緑灰色粘質土が銅矛発見地の堆積土とすれば、銅矛は埋納時の状態のまま泥付状態で取り出されて運ばれ、別穴のSK1に埋め込まれたと考えることができる。⁽²⁾

そうすると、SK1における銅矛の遺存状態は、発見地の銅矛の埋納状態を観察して埋め直したというよりも、そのまま銅矛を泥付の塊で取りだし、取り上げ時の泥の付き具合と埋納直前までの泥の剥落度合によって高低・傾きが定まり、結果的にSK1南側の銅矛下部の付着土が比較的厚く残っていたと推測される。なお、緑灰色粘質土は、SD4の堆積土中や山際の地山土のなかにみられ、丘陵裾から低地にかけての傾斜面地が水の流れによって還元化された土壤であるとみなされる。銅矛の埋納はSD4近くの傾斜面地で行われ、後世の開墾によって取り出された可能性を有する。

銅矛発見時の当初は、銅矛出土地点がSD4の水路肩に該当するのではないかとの推定のもとに調査が進められたが、結果的にはSD4の流入土に掘り込まれたものであることが判明している。

仮に、SK1の下層がSD4ではなく、SK1真下の堆積土から中世の土器片が出土していないければ、この銅矛と埋納土坑の形成は弥生時代の所産として報告されていたかもしれない。特異な類例かもしれないが、弥生時代以外の中世に銅矛を再埋納したことがあった事実をうけとめる必要があり、これまでの銅矛出土地や新たな発見地についても、今後再検討を加えることが望まれる。

高知県下で発見されている青銅利器の多くは神社に寄進されており、神体・神宝となっている。中村市山路の宮崎家所有銅矛（中広b）には、鋒の欠損部近くに双孔二孔が穿たれており、後世に御正体としてつるされ祭られていたことが推察されている。また、現在でも高岡郡窪川町高岡神社では11月15日秋の祭礼に、神幸として社宝の銅矛5本（窪川町根々崎出土・中広形b4本、広形a1本）⁽³⁾が使用されている。発見された青銅利器が神社に寄進されるのは近世以降の行為であるとみられるが、いずれも神の形代として丁重に取り扱われている。矛は平安期以前から神社等の重要な祭礼用具のひとつであり、後世に発見された銅矛もその形状から「矛」として察せられたことは充分に想像されることである。今回出土した銅矛は、持ち去られて神社等に寄進されることなく再び埋納された青銅利器であり、近世以降の扱われ方とは相違している。この再埋納行為の背景には、近世

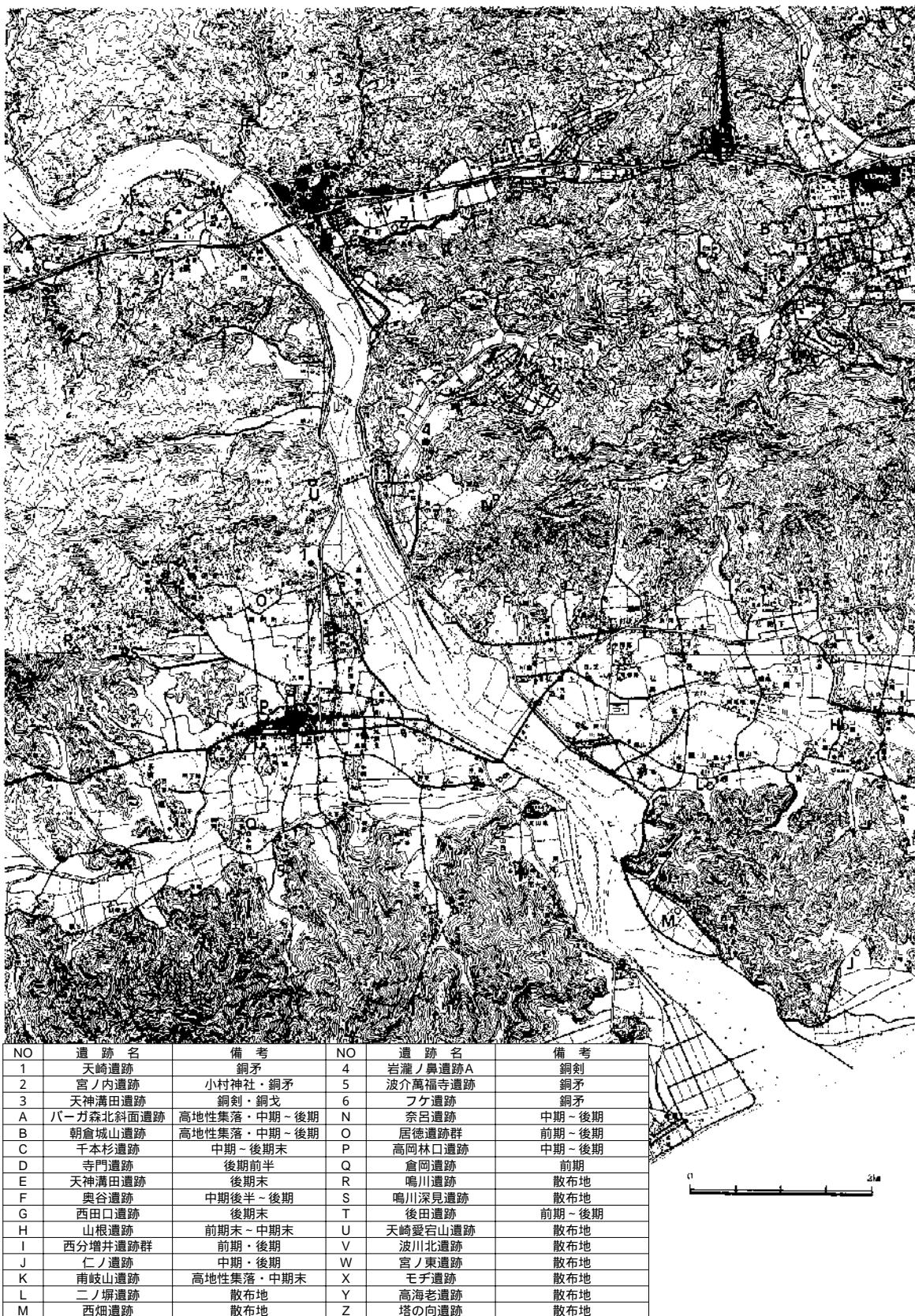


Fig.75 仁淀川流域の青銅器出土地・弥生集落

国産青銅器類の分布と前記弥生遺跡の所在地を比較すれば、小村神社周辺地・天神溝田遺跡周辺地・岩瀧ノ鼻遺跡周辺地・高岡平野部・波介川流域・仁淀川河口域・弘岡平野部にそれぞれ核となる集落が形成されていたことが類推される。

各遺跡の消長や展開については、該当遺跡の多くが遺物散布地等の未調査地が含まれているため今後の検討課題もあるが、伊野町バーガ森北斜面遺跡（高地性集落・中期後半）寺門遺跡（後期前半）天神溝田遺跡（後期末）春野町山根遺跡（前期末～中期末）西分増井遺跡群（前期・後期）奥谷遺跡（中期後半～後期・石包丁多数採集）日高村千本杉遺跡（中期～後期末・磨製石斧出土）西田口遺跡（後期末）などは代表的な弥生遺跡であり、青銅利器の導入や埋納行為に関与した集落の一部であることが考えられる。

仁淀川流域の平野部の面積は、高知平野や窪川町・高南台地平野部に比べるときわめて狭小であり、また、仁淀川右岸から波介川流域にかけての高岡平野部は度重なる河川の氾濫と沖積作用が繰り返されている場所である。流域の地形環境としては、広範囲な拠点集落の形成は困難であったと考えられ、平野部の微高地や河川背後の尾根上、段丘部に点在する形で弥生遺跡は立地している。集落の主たる生産地としては、丘陵谷部の谷水田・河川沿いの後背湿地等に基盤が求められるが、弥生農村の経営維持に際しては、なにより近隣諸村との連携・紐帶が必要で、青銅利器を用いた祭祀を共有することが重要な要素であったと推定される。仁淀川流域では、上流域で細形銅劍（細形a）を用いた祭祀が開始され、続いて中細銅劍（中細a）が搬入される。中広形銅矛a類までの段階が空白であるが、中広形銅矛b類の流入段階に至って多量の銅矛が持ち込まれ、広形銅矛a類の段階まで祭祀が存続したことが類推される。銅劍祭祀から矛形祭器を用いた祭祀へと移行しているが、青銅利器を用いた祭祀の盛行期は中広形銅矛b類の段階である。⁽⁷⁾

これまでの県下の中広形銅矛出土例からは、中広形銅矛b類と広形銅矛a類との共伴事例が多いが、天崎遺跡出土例では中広形b類のみの構成であり、中広形b類単独の搬入段階を設定することが可能ではないかと考える。

中広形銅矛b類搬入段階の地域の様相について素描を試みれば、仁淀川流域の青銅利器の分布と弥生遺跡の立地から、この時期に最も多くの集落間の結束が強化され、それまでの集落間の連結・紐帶の枠組みを越えるさらに広範囲な他集団との繋がりが生じ、仁淀川流域下の諸集落を結ぶ集落体と連合体としての地域勢力圏が形成されたものと考えられる。なお、この地域勢力圏の範囲については、巨視的には伊野町バーガ森北斜面遺跡から同一丘陵上で東に直線距離約4kmの距離に所在する高知市・朝倉城山遺跡、朝倉城山第2遺跡（高地性集落・中期～後期）を含めた高知市西部の丘陵部から鏡川流域にかけての範囲、西は仁淀川上流域から柳瀬川流域・佐川盆地を含むきわめて広範囲なものであることを推考しておきたい。⁽⁸⁾

仁淀川流域は、武器形祭器を使用した祭祀が行われている地域で、銅鐸分布圏外の地域である。いわば、高知平野東部（狭義には香長平野）以東の銅鐸分布圏とは対峙する勢力の存在が想定され、高南台地から四万十川流域にかけての西の勢力とのつながりが深い地域であったとみられる。また、青銅利器のなかでも矛形祭器の流入に関しては、高南台地の地域勢力と密接な関係を有していたこ

とが推測される。仁淀川流域における弥生遺跡群は、単位集落としては非力ではあるものの他単位集落と連携した複数体の集落体を構成することにより、勢力圏を形成したのではないかと考えられ、青銅利器搬入の背景を求めることができよう。

仁淀川弥生遺跡群は、銅鐸祭祀を否定し武器形祭器による祭祀を継続した地域として重要であり、遺跡群の消長や動向が注目される。仁淀川弥生遺跡群を青銅利器集中地域として位置づけるだけではなく、青銅利器を搬入し武器形祭器による共通の祭祀を採用して集落間の連結を図った中核地であることを提示したい。なお今後各遺跡について詳細に検討することにより、上記素描を咀嚼して行きたいと考える。

5　まとめ

天崎遺跡は、仁淀川右岸の後背湿地に立地する遺跡で、11c後半～13cの水路3条、自然流路3条、古墳時代（5c前半～中頃）の自然流路、9c～13cの柱穴・ピット、古墳時代前期の竪穴住居跡1棟、祭祀跡などが検出されている。出土遺物のなかでは、11c後半～13cに属する土器類（瓦器・土師質土器・青磁・白磁等）が主体で、平安後半から鎌倉時代にかけて盛行した集落等が営まれていたことが確認されている。

遺跡の南端で検出されたSD4は12c後半～13c前半の水路跡で、この水路跡の埋土に掘削された不整形土坑SK1から中広形銅矛4本が出土し、天崎遺跡出土銅矛として注目されることになる。再埋納された銅矛に関連する弥生時代の遺構等については、今回の調査で明らかにすることはできなかったが、出土銅矛は発見地近くの丘陵北側傾斜面に本来埋納されていた可能性を帯びている。

SK1は、調査終了間際まで残されていた土層断面観測用のバンク中から検出され、Ⅱ区のSD4の遺構検出作業過程ではその存在に留意することはできなかった。なお、SK1の上層は灰色粘質土で、この層はSD4の検出面全体を覆う堆積土でもある。灰色粘質土中からはごく僅かな土師質土器細片等の出土にとどまり、堆積時期の下限については明確ではないが、SD4の埋没に近接した時期にSK1は形成されたと考えられる。あえて年代を付せれば、鎌倉時代中頃以降の中世に形成されたと考えておきたい。

銅矛の出土は後世の遺構に伴うものではあるが、天崎遺跡の所在する地域は仁淀川流域における青銅器類出土の集中域であり、周辺には弥生集落等の存在が知見されている。前項では、仮説ながら単位集落の集合としての集落体を想定し、青銅器類の保有と埋納を仁淀川弥生遺跡群のなかで位置付け、地域勢力の存在を提示した。もとより一視点であり、武器形祭器の集中と仁淀川流域における弥生遺跡群の動向のなかで、再考したいと考える。

銅矛の再埋納行為については、中世の祭祀遺構としてSK1を捉え、松尾八幡宮の鎮座する丘陵を神域の一角として把握する必要性に触れてみた。場所は相違するが、・区では古墳時代の祭祀行為が認められ、古くは丘陵と山裾の小河川を対象とした祭りが行われている⁽⁹⁾。

天崎の集落は、土地の古老によれば、かつて西北の清滝山中・清滝寺に向かう参詣路としてにぎわいがあったと場所とされ、現在では途絶しているものの集落から、また集落南の丘陵上から清滝

寺のある山麓との通行がうかがわれる。なお、清滝寺は四国八十八ヶ所の三五番札所で、本尊は藤原後期作の木造薬師如来立像。応永二二年（1415）の棟札がある。また、松尾八幡宮は高岡村の総鎮守で足仲津彦尊・息長足媛尊・品陀和氣尊を祭る。社記には「高岡親王（平城天皇の第二皇子）京都より御勧請」とされる。応安三年（1370）の鰐口を有する。背後の山上には中世城館・人麻呂様城跡が所在する。

天崎の集落は、摂津四天王寺五智院領の荘園であった中世の高岡庄に含まれる。高岡庄は後白河院が勅旨をもって四天王寺領に施入し鎌倉幕府から守護使不入の特権を得られたとされる。⁽¹⁰⁾

私見では、平安後半～鎌倉時代にかけて清滝山を礼拝する山岳信仰が起り、靈場の修験地として活発な往来があり、後に寺社の造営が行われて礼拝地が設けられ、山麓裾の集落として天崎集落は繁栄したのではないかと考えられる。銅矛の再埋納は、天崎集落のおかれた中世の歴史的環境のなかで、山岳信仰などの靈地崇拝と密接な関係をもち、時の権力者に献上されることなく、また神社・寺に奉納されず、見出された姿のままゆかりの地に「神の矛」として納められたのではないかと推測される。あるいはこの時期既に、他の土地からも同様な青銅器類の発見があり、伝聞されていたかもしれない。

<補記> 「人麻呂様」考

松尾八幡宮が鎮座する丘陵は、天崎遺跡の南側に位置する丘陵でSD4・SK1の検出地点背後の支尾根に繋がる丘陵である。この山の山上には中世城跡が所在し、「人麻呂様城跡」と呼称されている。城跡のさらに西側には、同じ丘陵上に連接して「曾我山城跡」が所在し、一連の城跡であったことが推定される。二城跡とも城主・構築時期等は不明で、関連文献についても知られていない。丘陵上には、郭とみられる平坦部や堀切等が認められるが、太平洋戦争当時に軍隊が防御用の陣地を築いていたと地元で伝えられており、現地踏査では城跡関連遺構とその後の新たな改変地形を区別することは難しい。

「人麻呂様城跡」の所在する丘陵の頂部付近には、祠の土台とみられる石積みが残されている。社はなく、詳細は不明である。地元関係者の話では、「祠が有り、祭りが行われていたが、現在では途絶えている。」とのことで、祭神・祭りの時期と内容・氏子・主体者などについて詳しく調査することはできなかった。ただ、この場所周辺は、由来は不明であるが「人麻呂様」と呼称されており、城跡名に土地の名称が冠せられている。

「人麻呂様」は人名であり、属人的な崇敬伝承の存在がうかがわれるが、今日では地元においても故事・由来の伝承等は残されてはいない。なお、松尾八幡宮の応安三年（1370）の鰐口銘には「土州高岡本郷松尾次郎丸」と記され「松尾次郎丸」の名が認められる。⁽¹⁾

「人麻呂様」を探るには、以下の内容が参考となる。

① 仁淀川の河口、春野町仁ノ字沖の仁ノ八幡宮（旧郷社）は、『高知県神社明細帳』によれば文亀二年（1502）別当坊栄意を大願主として創建されたとされ、⁽²⁾ 祭神は足仲津彦尊（仲哀天皇）・息長足媛尊（神功皇后）・品陀和氣尊（応神天皇）を祭る。仁ノ八幡宮の境内には、宝永四年

(1707)の大津波による罹災を機に、村内から勧請合祀されたと伝えられる「万葉神社」が所在し、祭神は柿本人麻呂・山部赤人・依通姫(依通郎姫)の和歌三神である。

② 柿本人麻呂は、古今和歌集の仮名序で紀貫之が「歌聖(歌のひじり)」とし、紀淑望は真名序で「和歌仙」として山部赤人とともに名を掲げている。平安時代以降、和歌仙として崇拜されており、平安末～鎌倉時代にかけては人麻呂の影像を前に盛んに影供(えいぐ)が行われる。「影供歌合」は、特に柿本人麻呂の影像を祀り、歌合わせを行っている。後に、柿本人麻呂、山部赤人と依通姫の三者が和歌三神とされ、鎌倉時代には三十六歌仙を描いた歌仙絵が盛行し、室町時代には歌仙扁額⁽³⁾が社殿に奉納されるようになる。

③ 日高村小村神社には、中世高岡庄の支配者・蓮池城主大平国雄が自筆の歌を添えて奉納した文亀三年(1503)銘の三十六歌仙扁額(一面一歌仙)が残されている(日高村指定文化財)。

上記の如く、この地域における社のなかに、和歌三神を祭神とする神社が所在し、中世における歌仙扁額奉納の記録を知ることができた。仁ノの「万葉神社」を除いて、県下で和歌三神を祭神とする他の社寺はなく、中世における「人麻呂信仰」の名残をとどめるものとして留意される。大平氏治世下の15c後半～16c前半には人麻呂崇拝があったことと、この風習はそれ以前の時期にまで遡ることを示唆しており、「人麻呂様」の地名は「柿本人麻呂」への信仰を背景にするものではないかと考えられる。

銅矛出土土地の背後の丘陵に、由来は不明ではあるが「柿本人麻呂」信仰に関連したとみられる地名が残されていることは、平安末～戦国時代にかけての「崇拝」の存在があり、柿本人麻呂を祭る社が置かれた「崇拝地」として機能していたことを物語るものではなかろうか。

註

「天崎遺跡出土銅矛とその意義」

- (1) 水路や山際の通行路等として発見地を利用するため、出土銅矛を移動せざるをえない要因が想定される。なお銅矛の残存状態からは、崖崩れ等により露出して散在していた銅矛を集めて埋納した行為や、伝世品であった銅矛を埋めたものとは見なし難い。
- (2) 発見状況によるが、一括した状態で発見され、なおかつ周囲の泥切りをすることで4本一組のまま容易に取り出せたものと仮定する。
- (3) 岡本健児「高知県発見の銅矛について」『高知の研究』1 昭和58年 清文堂
- (4) 小村神社所蔵銅矛のなかで1本(中広b)は、吾川郡伊野町波川から発見されたものが寄進されたと推定されている。註(3)文献 P214

新発見銅矛は、中広形a類とみられる。(鋒の幅5cm・関部最大幅7.4cm・耳に一孔あり)

『日高村「小村神社」出土の銅矛』記者発表資料 平成7年8月 日高村教育委員会

「県内最古の銅矛出土」平成7年8月3日(木) 高知新聞紙上

小村神社出土銅矛例については、弥生時代の埋納土坑の存在や天崎遺跡例のような中世の再埋納遺構が伴うことも考えられる。

- (5) 註(3)文献による
- (6) 岡本健児「高知県発見の銅剣・銅戈・石剣について」『高知の研究1』 昭和58年 清文堂
- (7) 岩永省三「弥生時代青銅器型式分類編年再考」『九州考古学』 55号 昭和55年
九州考古学会
- 岩永省三「矛形祭器」『弥生文化の研究』6 道具と技術Ⅱ 昭和61年 雄山閣
- (8) 山本哲也 (仁淀川遺跡考)「土佐考古通信」(5)『文化高知』NO.78 平成9年7月
(財)高知市文化振興事業団
- (9) 今回の調査成果による。
- (10) (「高岡庄」土佐市 P499) 山本大 監修「高知県の地名」『日本歴史地名大系』40
昭和58年 平凡社

「補記」

- (1) 山本大 監修「高知県の地名」『日本歴史地名大系』40 昭和58年 平凡社
- (2) 同上 「仁ノ村」吾川郡 P398
- (3) 「概説 歌仙絵の世界」『歌仙絵の世界』平成4年 埼玉県立博物館

(参考文献)

- 岡本健児『高知県史 考古編』 昭和48年 高知県
- 岡本健児『高知県史 考古資料編』 昭和48年 高知県
- 斎藤茂吉『柿本人麻呂』 昭和9年 岩波書店

第2節 天崎遺跡1・2・3区出土の土師器について

下村 裕

今回天崎遺跡の1・2・3区調査で、1・2区ではSD1・2・3とSD4・5・6、3区ではSR1・2・3が確認された。1・2区のSD1・2・3は水田の区画をしていた可能性が考えられる溝で、出土遺物は土師器の細片1点のみであった。また、3区のSR1・2・3からは土師器細片1点が出土しているが、これも図示できるものではない。それらに比べて、1・2区のSD4・5・6からは古代から中世にかけての土師器が多く出土している。1・2区のSD4・5・6は、本来ひとつの溝として捉えられるものであるので、SD4・5・6出土の土師器については同一遺構の遺物として扱った。このSD4・5・6出土の土師器についてこれから述べていきたいと思う。

1) SD4・5・6出土土師器の分類

① 壺

すべて回転台成形と思われるもので、すべてナデ調整である。粘土紐の単位を明瞭に残しているタイプもあるが多くはナデ調整で消している。底部は糸切りとヘラ切りのふたつのタイプがあり、多くは切りっぱなしである。口縁部の形態によってⅠ類、ⅡA類、ⅡB類、ⅡC類、Ⅲ類に大別することができる。

Ⅰ類 (14~24)

比較的厚手のつくりをしており、さらに細別すると口縁部が直立しているタイプ(21~24)、口縁部がやや外反しているタイプ(14~20)に分けることが出来る。また体部中程に帯状の突堤を付けているもの(17)もある。口径10.6cm~16.0cmである。

ⅡA類 (25~31)

比較的薄手のつくりをしているもので、口縁部が直立しているタイプであり、口径は12.8cm~18.0cmである。

ⅡB類 (32~51)

比較的薄手のつくりをしているもので、口縁部がやや外反するタイプである。体部中程に2条の沈線が施されているもの(38)もあり、口径は11.8cm~18.4cmである。

ⅡC類 (52~55)

比較的薄手のつくりをしているもので、口縁部が強く外反するタイプであるが、器壁が厚いタイプ(54)もある。口径9.2cm~16.3cmである。

Ⅲ類 (56・57)

底部から口縁にかけてラッパ状にひらく、特異なタイプ。器壁の比較的薄いタイプ(56)と器壁の厚いタイプ(57)に分かれる。蓋としての可能性も考えられるものである。口径10.8cm~12.0cmである。

②椀 (58・59)

すべて回転台成形で、内外面横ナデ調整であると思われる。体部は内湾しながらたちあがっていき、口縁部はやや外反し、端部をまるくおさめる。貼り付けの高台を有する。口径15.0cm～16.2cmである。

③皿 (60～66・78)

口径10cm以上、器高2cm以上のもの。すべて回転台成形の後内外面横ナデ調整であり、粘土紐の単位が明瞭に残るもの (64・66) もある。また、口縁端部を玉縁状にしているタイプ (65) がある。底部はヘラ切り (60・61・63・65) と糸切り (62・78) のふたつのタイプがある。口径10.4cm～14.8cmである。

④小皿 (67～77・79～81)

口径10cm以内、器高2cm以内のもの。すべて回転台成形で内外面横ナデ調整。粘土紐の単位が明瞭に残るものもある。底部はヘラ切り (68・69・72・77・80) と糸切り (70・74) のふたつのタイプがある。板状圧痕がみられるもの (79・81) もある。口径8.1cm～9.6cmである。

⑤甕

I類 (82・83)

体部外面に叩き目のはいるタイプで、内外面ナデ調整。外面は丁寧に仕上げており、口縁端部を上方につまみだしている。口径17.8cm～27.3cm。

II A類 (84～89)

口縁部外面は横ナデ調整、内面は横方向のハケ調整の後、横ナデ調整が施され、体部外面には縦方向のハケ調整が施される。口縁部は「く」字状に外反している。搬入品である。口径20.0cm～25.0cm。

II B類 (90～93)

II A類より口径が大きく、30.0cm以上あるタイプ。内面ナデ調整で外面は粗いハケ調整が施されている。口縁部は「く」字状に外反する。搬入品である。口径32.0cm～36.0cm。

III A類 (94)

口縁部は「く」字状に外反し、内外面ともナデ調整を施している。口縁部外面に指頭圧痕があり、口縁端部の横ナデが強い。比較的丁寧に作られており、胎土からみて在地産である。口径30.0cm。

III B類 (95・96)

III A類に比べて雑なつくりである。口縁部は「く」字状に外反し、内外面ナデ調整を施しているが、III A類に比べて口縁端部の横ナデが弱い。胎土からみて在地産である。口径32.0cm～36.6cm。

SD4・5・6出土の土師器は自然流路内出土ということもあり、ある時期を象徴するような良好な一括資料としては扱うことはできないが、以上の分類をもって高知平野から出土した土師器をもと

に、天崎遺跡の土師器について述べていきたいと思う。

天崎遺跡SD4・5・6出土の土師器には壺・椀・皿・小皿・甕・羽釜・土錘がある。まず壺について述べていきたい。壺で全体を知ることはできるのは、16・23・28・34・45・57である。16・23は壺Ⅰ類、28は壺ⅡA類、34・45は壺ⅡB類、57は壺Ⅲ類である。16の壺は比較的厚手のつくりをしており、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめており、底部は糸切りである。内外面とも口クロ目が顕著に残っている。16は円盤状高台の形骸化が進んでおり、曾我遺跡SK5⁽¹⁾、高柳遺跡SK1⁽²⁾出土の土師器壺が同様の形態をしているが、16は曾我遺跡SK5・高柳遺跡SK1出土の土師器壺に比べて法量が小さい。時代が下るにつれて壺の法量は縮小していくという指摘もあり⁽³⁾、これは曾我遺跡SK5・高柳遺跡SK1とほぼ同時期か、やや時代が新しくなると思われる。23も同様に厚手のつくりをしており、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がっている。底部の円盤状高台は形骸化してはいるが、16に比べて円盤状高台の名残りがみられる。同形態のひびのきサウジ遺跡SE1⁽⁴⁾出土土師器壺は底部ヘラ切りであるが、23は糸切りである。このことなどから、ひびのきサウジ遺跡と同時期か、時代は新しくなるものだと考えられる。28は底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、底部はヘラ切りだと思われる。小籠遺跡SK136⁽⁵⁾からほぼ同じ法量の土師器壺が出土しており、ほぼ同時期だと考えられる。34は底部から直線的にたちあがり、口縁部をやや外反させている。底部はヘラ切りである。34も同じく、小籠遺跡SK130・SK136⁽⁶⁾出土の土師器壺に類似しているが、法量が少し小さいので、時代が少し下がるか、ほぼ同時期だと考えられる。45は底部から内湾しながら立ちあがり、口縁部は強く外反させている。底部は摩耗が著しく調整不明である。これは土佐国衙SX1⁽⁷⁾から出土している土師器壺に類似しているが、45はこれより法量が大きい。このことなどから、ほぼ同時期か、土佐国衙跡SX1より時期がやや古い可能性が考えられる。57は厚手の作りをしており、底部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がる。内外面ナデ調整で、底部糸切りである。風指遺跡では同様の形態、底部の断面形態を見ると内底が高台内に深く落ち込むタイプが出土しているが、風指遺跡の土師器壺は底部がヘラ切りである。57は底部糸切りであるので、風指遺跡のタイプが11世紀と位置付けられているが、57は風指遺跡のタイプより時代はやや新しくなるものと思われる。これらのことから時期については、そのまま前述した分類にあてはまるとは思われないが、全体を知ることできるもので時期差を考えてみると、28・45 34 23・57 16の順になると考えられる。

椀で全体を知ることのできるのは、59のみであるが、全体的に摩耗が著しく調整は不明確だが、ナデ調整だと思われる。内湾して立ちあがり、口縁部は直線的に立ち上がる。推定径5.8cmの高台が張り付けてあるが、底部内面は摩耗が著しく調整は不明である。現在までの資料からすると、ひびのきサウジ遺跡SE1⁽⁸⁾の時期（10世紀後半～11世紀前半）から土師器椀が出現してくるので、この時期よりやや下るものと思われる。

次に皿についてふれてみたい。これらは10cm以上のものである。61・62についてはここでは皿として扱っているが、壺の可能性も否定できない。これらは口径の差によって4群に分けられる。

仮に14cm以上のものをA群(61・65)、13cm内外のものをB群(63・64・66)、11cm内外のものをC群(62・78)、10cm内外のものをD群(60)とする。まずA群についてみてみる。10世紀前半代に位置付けられている比江廃寺SD2出土の土師器皿が口径14cm以上あるが、これより時代の下った10世紀中葉～後半(第3四半期)⁽¹⁰⁾に位置付けられている土佐国衙SX5・8・10では口径が12cmまで縮小しており、底部はヘラ切りである。このことから考えるとA群は10世紀中葉～後半(第3四半期)⁽¹¹⁾以前だということになる。ただ65の口縁部は特徴的で、所謂「て」字状口縁である。またB群は、口径でいうと、前述したちょうど中間になり、底部はヘラ切りである。このことから10世紀中葉になるのではなかろうか。またC群は、10世紀中葉～後半(第3四半期)⁽¹²⁾に位置付けられている土佐国衙SX5・8・10出土の土師器皿に比べて口径は縮小しており、両方とも糸切りである。10世紀末～11世紀初頭に位置付けられているひびのきサウジ遺跡SE1・土佐国衙SX11出土の土師器皿⁽¹³⁾と口径はほぼ同じなので、同時期に位置付けられると思われる。D群は曾我遺跡SK5・高柳遺跡SK1出土の土師器皿と口径がほぼ同じであるので、11世紀後半～12世紀初頭かそれより1段階古い時期に位置付けられるものではなかろうか。

次に小皿であるが、これは口径10cm以内のものである。口径9cm内外のものが67・68・69・70・72・79・80で、口径8cm内外のものが、73・74・76・77・81である。71・75は口径が10cm弱である。仮に10cm弱のグループをA群、9cm内外のものをB群、8cm内外のものをC群とする。A群は底部の摩耗が著しく、糸切りかヘラ切りか判断することができないが、10世紀前半代に位置付けられると思われる。B群は68・69・72・79・80が底部ヘラ切り、70が糸切りで、67は摩耗が著しく不明である。B群はA群より口径が縮小しており、ヘラ切りと糸切りが混在しているので、10世紀後半～11世紀前半に収まるものと思われる。⁽¹⁴⁾C群にいたるとさらに口径が縮小し、ヘラ切りが77・81、糸切りが74、摩耗が著しく不明なものが73・76である。これらはB群より口径が縮小しているが、B群と同様にヘラ切りと糸切りが混在している。C群はB群とほぼ同時期かやや時代が新しいものと考えられる。

甕の82は胴部に叩きがはいるタイプで、83は口縁部しか残存していないが、おそらく胴部に叩きがはいるタイプであろう。Ⅱ A類(84・85・86・87・88・89)は口縁部を「く」字状に外反させ、胴部にハケ目がはいるタイプである。Ⅱ B類(90・91・92・93)はⅡ A類と同様の器形であるが口唇部のナデが弱く、胴部のナデが外面全体に及んでいないタイプである。小籠遺跡SK130・SK136から出土している土師器甕と同器形と思われ、搬入品である。これらⅡ A類・Ⅱ B類は9世紀末～10世紀初頭に収まるものだと思われる。Ⅲ A類・Ⅲ B類は、胎土からみて在地産の土師器甕である。Ⅲ A類は口唇部に強い横ナデがみられ、Ⅲ B類はそれに比べて口唇部横ナデが弱い。

羽釜は97・98とも口縁端部外面にそのまま鍔を有する。ひびのきサウジ遺跡SE1から同形態の羽釜が出土している。これは摂津C1型の羽釜であるので、ひびのきサウジ遺跡SE1と同時期、10世紀後半～11世紀前半と考えられる。

<参考文献>

- (1)高橋啓明・吉原達生「曾我遺跡」野市町教育委員会 1989年
- (2)山本哲也「高柳遺跡」土佐山田町教育委員会 1992年
- (3)吉成承三「土佐の古代末から中世前期にかけての土器様相」『中近世土器の基礎研究XII』日本中世土器研究会 1997年
- (4)高橋啓明「ひびのきサウジ遺跡」土佐山田町教育委員会 1990年
- (5)出原恵三・泉 幸代・浜田恵子・藤方正治「小籠遺跡」(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- (6)(5)と同じ
- (7)廣田佳久「土佐国衙跡発掘調査報告書第9集」高知県教育委員会 1989年
- (8)出原恵三・松田直則「風指・アゾノ遺跡」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』高知県教育委員会 1989年
- (9)(4)と同じ
- (10)池澤俊幸「下ノ坪遺跡の古代土器より」『土佐の土器・古代から中世へ』第8回 四国中世土器研究会資料 1996年
- (11)(7)と同じ
- (12)(4)と同じ
- (13)(7)と同じ
- (14)(7)と同じ
- (15)(5)と同じ
- (16)(4)と同じ

第3節 天崎遺跡1・2区出土遺物（土師器以外）

田坂京子

(1) はじめに（土師器以外の出土遺物の概要）

当遺跡の主要な出土遺物は瓦器52点、貿易陶磁器36点、律令期の須恵器5点、不明3点、古代末の須恵器椀29点、中世須恵器10点であり、あとは備前焼4点、緑釉供膳具3点、瓦質土器2点、黒色土器1点、近世陶器1点、石器8点、木製品22点、土錘2点、キセルのらう1点の計179点となる。考察に際しては、これらを、下記の七つのグループに分類し、各グループ毎に代表的な遺物を取上げながら最後の（まとめ）の項で考察としたい。

8世紀代の須恵器

9世紀後半から10世紀中葉の遺物（緑釉、黒色土器、須恵器椀）

瓦器

中世の貿易陶磁器（白磁、青磁、染付）

中世の調理具・煮炊き具・貯蔵具（東播系須恵器、備前焼、瓦質土器）

石器

木製品

(2) 各遺物について

8世紀代の須恵器（杯蓋194、195）

出土の須恵器杯蓋二つはいずれも律令期に生産されたものであり、194は8世紀の疑似宝珠形のつまみを持つもの、195は8世紀でも後半に属するつまみ中央が凹むタイプである。

古代1〔9世紀後半から10世紀〕の遺物（緑釉陶器3点、黒色土器椀1点、炭素吸着の須恵器椀29点）

a. この時期の注目すべき遺物としてまず緑釉供膳具3点が挙げられる。

380はⅡ類に分類される底部削り出し高台で圓線状のくりこみがあり、蛇の目高台風になっている。底部に至るまで施釉されていることから、9世紀前半以降から10世紀までの畿内製作のものである。229、230はどちらも口縁部のみで、時期、生産地とも特定は難しいが、暗緑色を呈し、口径12cm器高2cm前後という法量から見ると10世紀にかかるものである。

b. 228は唯一の黒色土器(A類)である。口径復元も困難な細片であるためはっきりしたことは言えないが、形状に下ノ坪SR3出土の10世紀前半代のものと共通するものがあり、胎土に雲母片が含まれることから、10世紀内におさまる搬入品である。⁽²⁾

c. 炭素吸着の須恵器29点（201～227、369、370）はすべて椀である。ほとんどが底部から内湾氣味に立ち上った後、口縁部分でわずかに外反し、口縁端部を丸くおさめるというプロポーションを持つ。そのうち底部のわかるものは13点で、201、202、227、224の4点を除き全て底部ヘラ切りの円盤状高台椀である。四国では4県とも在地産の土器椀の出現は10世紀代と考えられるが、奥谷南K-1より円盤状高台の須恵器椀が出土するのが10世紀中葉であること、10世紀末とされるヒビノ

キサウジSE1出土の円盤状高台椀は底部回転糸切りとなっていることから、今回出土の須恵器椀は10世紀の中におさめてよいと考える。焼成は律令期の須恵器と違い、軟質で、炭素吸着の度合いに差はあるが、ほぼ完形のものでカーボンが膜状に均一に器面を覆っているものもある。意図したものかどうかは資料が少なく、不明であるが、可能性がないとは言えない。これらの須恵器がどこで焼かれたものかは類例の資料が少なく、現在のところ不明であるが、遺跡付近の犬ノ場窯跡が古代の須恵器の窯であることが確認されている。春野町西畠で同系統と思われるほぼ完形の須恵器椀が出土しており⁽⁵⁾今後仁淀川周辺で出土する可能性がある。

瓦器

(皿272、273、379、椀231～271、371～378)

瓦器は実測遺物の中では最も出土量の多い器種で全部で52点出土している。3条の溝から43点、包含層(V～VII層)から8点、表採1点である。皿3点以外は椀であり、そのうち底部の形状がわかるものは、断面三角形のもの5点(267、268、269、270、377)、逆台形状のもの8点(260～266、378)、板状の粘土を貼り付けたような形状のもの2点(271、376)の計15点である。口径は復元したものであり、約13cm～17cmの範囲内に納まる。ほとんどの椀が口縁下の強いヨコナデ、体部の顯著な指頭圧痕、口縁端部を丸くおさめ、内面より見込の暗文を先に施すといった和泉型の特徴を備えているが、板状の高台を持つ椀271、376や、口縁端部が肥厚せず、体部から口縁部にかけて内湾気味のままに直立気味に收まる椀258、259など、一部に畿内の和泉生産のものとはやや異なる様相を持つものがあることから、搬入品だけでなく在地生産の和泉型椀の可能性も高い。次にこれらの瓦器が生産された時期と流通状況について述べてみたい。

ヘラミガキの省略で成型時の指頭圧痕が目立つ体部、低めの器高、内面のヘラミガキの隙間の大きさ、見込部の粗い斜格子や平行線状の暗文、高台の形状などからみて、ほとんどの椀が森島康雄氏編年のⅡ-3期～Ⅲ-3期(12世紀後半から13世紀前半)までに入り、確認できるものでⅣ期に相当するものは1点もない。3個の瓦器皿についても法量からみて13世紀頃のものと考える。Ⅱ-3期に相当する12世紀後半以後は、中・四国を含む各地での瓦器椀の出土量が増え、地域色も鮮明になる時期であり⁽⁶⁾、土佐においても瓦器椀が最も多く流通し、土師器椀に取って代わりだす時期である⁽⁷⁾。当遺跡の瓦器はその時期のものがほとんどであり、それより新しいものはない。

天崎遺跡は仁淀川右岸に位置しているが、四国では瓦器椀は、沿岸部や大規模河川に近接する集落遺跡から出土する。⁽⁸⁾1992年度までに本県で確認された瓦器出土遺跡は、拝原遺跡、田村遺跡群、土佐国衙跡、籠の谷遺跡、大上遺跡、王子遺跡、サジキ遺跡、具同中山遺跡群、アゾノ遺跡の9遺跡を挙げることができる。これらの遺跡はほとんど高知平野と中村市に集中し、出土数も中村市の2遺跡を除き少量であった。しかしながら近年発掘件数の増加に伴い、瓦器出土地も増加しており、天崎遺跡をはじめ土佐市近辺の遺跡での出土量が目立っている。1992年以降の瓦器出土地は、高知県埋蔵文化財センター年報によれば、具同中山遺跡群、船戸遺跡、深淵北遺跡、神田ムク入道遺跡、飛田坂本遺跡、姫野々土居跡遺跡、八田神母谷遺跡、八田奈路遺跡、天神遺跡、犬ノ場遺跡、林口

Tab.26 高知県の瓦器出土遺跡(1)

番号	年度	遺跡名	所在地	立地	調査面積	出土器種	出土地量	その他の出土土器	担当者	備考
1	79	田村遺跡郡	南国市田村	物部川河口西岸	16290m ²	瓦器椀	Loc 1、8、9、10、15 の包含層	土師器、瓦質土器、東播系須恵器、白磁青磁	出原、森田廣田、松田その他	14~16Cの環濠屋敷多数
2	82	土佐国衙跡第3集	南国市比江		842m ²	瓦器椀	府中地区Ⅲ層SK7	須恵器、土師器 黒色土器 緑釉 青磁 白磁	森田、出原、廣田その他	
3	83	土佐国衙跡第4集	南国市比江		922m ²	瓦器椀	太郎三郎屋敷，SD17	須恵器、土師器 青磁、白磁	森田、出原、廣田その他	
4	83	同上	南国市比江		922m ²	瓦器椀	太郎三郎屋敷地区SE1	土師質土器		
5	91	土佐国衙跡第11集	南国市比江			瓦器椀	金屋地区Sk 118, 119	青磁、鉄製品 土師器	廣田	
6	88	アゾノ遺跡	中村市森沢	中筋川右岸	3850m ²	瓦器椀	皿 遺構、包含層	土師器、瓦質土器 東播系須恵器、備前瀬戸 美濃系陶器、青磁、白磁	松田	集落跡、土坑、溝、集石墓
7	89	具同中山遺跡群	中村市具同	中筋川河川敷き	4700m ²	瓦器		土師器、土師質土器、輸入陶磁器	松田	掘立柱建物跡、溝、墓 土坑
8	91	拝原遺跡	香美郡香我美町	山南側右岸河岸段丘	4000m ²	瓦器椀	SD 5, 包含層	土師器、白磁、青磁	出原	弥生、古墳 鎌倉室町時代を中心とする集落遺跡
9	92	西畠・大上遺跡	吾川郡春野町	仁淀川河口東岸の自然堤防上	900m ²	和泉型瓦器	包含層	洛西産綠釉陶器 白磁 備前焼	近森 江戸	遺構、遺物なし 繩文 中世
10	93	船戸遺跡	中村市森沢	中筋川右岸河岸段丘上	6000m ²	和泉型瓦器椀	鎌倉期の溝	土師器 漆器 青磁	松田 出原	呪符 石製錨 下駄 箕籠 繩文～室町
11	94	深淵北遺跡	香美郡野市町	物部川河岸段丘上	1800m ²	楠葉型瓦器椀	包含層	綠釉 黒色土器 白磁	佐竹 吉成	奈良後半～平安
12	94	具同中山遺跡群	中村市具同中山	中筋川左岸沖積地	552m ²	楠葉型と和泉型瓦器	鎌倉期の流路	土師器 木製品	松田 山崎	繩文～鎌倉
13	95	八田地区	吾川郡伊野町	丘陵谷部の緩斜面・低湿地	1500m ²	瓦器		土師器 陶磁器	坂本 憲江 戸	繩文～近世
14	95	上美都岐遺跡	高岡郡佐川町	幸田川右岸沖積地	2818m ²	瓦器	遺構?	輸入陶磁器	廣田 田上	刻書土器 弥生・奈良～江戸
15	95	神田ムク入道遺跡	高知市神田	鏡川水系沖積地	375m ²	瓦器椀		中国陶磁 瓦質土器 中世須恵器 国產陶器	田上	古墳～中世 中世屋敷跡 石組みの井戸
16	95	飛田坂本遺跡	須崎市神田	桜川左岸谷部	800m ²	和泉型瓦器椀	TR	青磁	小嶋	繩文～中世

Tab.26 高知県の瓦器出土遺跡（2）

番号	年度	遺跡名	所在地	立地	調査面積	出土器種	出土地量	その他の出土土器	担当者	備考
17	96	八田奈路遺跡	丘陵谷部の緩斜面	丘陵谷部の緩斜面	28000m ²	瓦器椀		土師器 備前焼 瓦質土器 白磁 青磁	大野 江戸	弥生 古代～近世 中世の溝、道跡 土坑 ピット
18	96	飛田坂本遺跡	須崎市神田	桜川左岸段丘部	4000m ²	瓦器	集石遺構	土師質土器 青磁	小嶋 下村	弥生 古代～中世
19	96	天神遺跡	土佐市高岡町	仁淀川右岸扇状地性低地	2439m ²	和泉型瓦器椀皿	瓦器250点 . 中世掘立柱建物跡 . 堀跡	東播系須恵器 常滑焼 備前焼 白磁 青磁 青花 古銭	廣田 泉 小野	中世～近代 瓦器250点 . 中世掘立柱建物跡 . 堀跡
20	96	犬ノ場遺跡	土佐市高岡町	仁淀川右岸自然堤防上	5104m ²	瓦器		土師質土器 東播系須恵器 白磁 青磁 湖州方鏡	廣田 田中 伊藤	古墳 古代 中世 遺跡付近に犬ノ場窯跡(須恵器) 古代の遺構から綠釉20数点官衙関連遺跡?
21	96	林口遺跡	土佐市高岡町	沖積平野	2717m ²	瓦器椀		土師質土器 白磁 青磁 石鍋 下駄	廣田 泉 小野	中世～近世 中世の屋敷跡(12～15世紀)
22	97	姫野々土居跡	高岡郡葉山村	新莊川左岸河岸段丘	4100m ²	和泉型瓦器椀	柵列。掘立柱建物跡	東播系捏鉢 常滑瀬戸 美濃 青磁 タイ産褐有釉四耳壺 備前焼 瓦質羽釜	大崎 小林 松田 吉成	室町 土居に伴う柵列 掘立柱建物跡 堀
23	97	具同中山遺跡	中村市具同	中筋川左岸微高地	2189m ²	瓦器椀皿		土師器、東播系須恵器 青磁、白磁、瀬戸系おろし皿 北宋銭等	山崎、堅田 浜田 池澤、竹村、武吉	縄文～近世、礎板敷き掘立柱建物跡
24	97	天神遺跡	土佐市高岡町	仁淀川右岸扇状地	5050m ²		溝掘立柱建物跡		廣田 伊藤 田中 泉	弥生～近代 古代官衙関連遺構の溝 ピット
25		サジキ遺跡	伊野町サジキ	河川改修に伴い発見						
26		籠の谷遺跡	高知市横浜	丘陵谷部		瓦器	包含層	土師器 白磁 IV類	門脇	12～13世紀の集落
27	92	王子遺跡	春野町弘岡中	仁淀川左岸		瓦器椀	SD2	土師器、東播系須恵器椀	山本哲、江戸	溝跡
28	93	大上遺跡	春野町西畑	仁淀川左岸低湿地	試掘	和泉型瓦器椀	包含層	瓦器椀 土師器椀 白磁 緑釉	近森、江戸	

遺跡、天崎遺跡の12遺跡である。中村市の2遺跡を除いた10遺跡の内6遺跡までが仁淀川近辺の遺跡である。今後の資料の増加により、土佐における瓦器椀の生産集団や流通形態の解明につながることを期待したい。

中世の貿易陶磁器

実測できるものでは、青磁13点、白磁22点、染付け1点の計35点出土している。器種は青磁、白磁ともに、ほとんどが椀である。染付けは口縁部の細片であるため断定はできないが、盤の口縁部の可能性がある。中世前期は森田分類、中世後期は小野分類を参考として、それぞれ資料の分類を試みた。編年は太宰府在地土器編年を基礎とした山本信男氏のものを使用した。

a. 白磁

11世紀後半から土佐にもたらされるようになったと考えられる玉縁状の口縁を持つ椀(Ⅱ類、Ⅳ類)[◎]は、Ⅳ類椀が10点(274~278、283、284、381~383)Ⅱ類椀が1点出土している。その他に同時期の端反タイプのV類3点(280、281、384)、VI類の皿1点(286)、VII類の椀1点(282)がある。また、注目すべきものとして、287の小型の壺又は水注(?)と281と387の白磁椀がある。281は口縁部が輪花になっており、輪花の刻み部分の垂下沈線で花模様を現し、定窯の白磁を模倣したものである。387は、ビロースクという沖縄でよく出土する小野〇期のものである。⁽¹¹⁾

b. 青磁・染付

青磁は336を除いてほとんどがD期(12世紀後半から13世紀前半)のものであり、同安窯系3点と龍泉窯系9点、龍泉窯系の可能性がある不明の青磁皿(297)1点となっている。染付(391)は16世紀明代のものである。

c. まとめ

以上の資料をまとめてみると、白磁は大部分が窯不明の12世紀から14世紀に続く江南産白磁であり、14世紀以降の口禿や唇筈底のタイプはない。青磁は12世紀中葉から13世紀末まで福建省から広東省一帯にかけての窯で生産された同安窯系のものと、13世紀から16世紀に及ぶ龍泉窯系のものに大きく二分される。出土量は白磁が最多であり(22点)、青磁がそれに次ぐ。時期は青磁、白磁とともに少量の中世後期のものを含んでいるが、江南産白磁が11世紀後半から12世紀にかけて、同安窯系青磁は12世紀中葉から13世紀末まで、龍泉窯系青磁が少し遅れて13世紀にかけての時期のものである。⁽¹²⁾

当遺跡の資料は青磁に比べ白磁の出土量が多い(2倍弱)という特徴がある。このことが遺跡周辺の集落の盛行期と関係するのか、あるいは集落の性格によるものか、遺物の流通期の高岡庄の情勢と考えあわせる必要があり、現在のところ不明である。

中世の調理具・煮炊き具・貯蔵具(東播系捏ね鉢、備前擂鉢、備前壺、瓦質羽釜)

東播系捏ね鉢は、その後備前擂鉢に取って代わられるまで中世前期における代表的な広域流通品であり、各地における土器編年の指標ともなるものである。ここでは森田稔氏の3期8段階の編年によって分類した。備前製品は、真壁忠彦氏の編年を、瓦質羽釜は松田直則氏の編年試案を参考にした。

a . 東播系捏ね鉢 (298 ~ 305、392、393) 10点

392と398の2点を除いて8点は溝からの出土品である。時期不明の3点 (303 ~ 305) を除き298が一番古く12世紀前半頃、299 (SD6) が一番新しくⅢ期段階で13世紀前半から後半にはいる。残りはほぼ同時期で12世紀末～13世紀初頭のⅡ期2段階に相当する。

b . 備前擂鉢 (394 ~ 396) 3点と壺1点

V層とⅦ層より、出土しており、Ⅲ期からⅣ期のものである。なお調理具ではないがこの他にⅢ期前半と思われる (13末～14世紀前半) 備前壺 (306) が1点出土している。Ⅲ期の擂鉢394と同様、古い時期のもので、後の備前焼の酸化焰焼成による茶褐色ではなく、還元焼成の青灰色を呈し須恵器とほとんど変わらない。

c . 瓦質羽釜 (397.398)

398は河内・和泉型の羽釜であり14世紀から15世紀にかけてのものである。397は釜G型式と呼ばれる古いタイプに属するもので14世紀頃のものではないかと考える。

東播系捏ね鉢は土佐では12世紀後半から13世紀前半にかけて搬入されはじめ、13世紀後半から14世紀前半には広範囲に流通するようになる。14世紀代になると徐々に備前焼の製品が目に付くようになり、備前焼Ⅲ期の製品はまだ量的に少ないがⅣ期になると主流になる。⁽¹³⁾

石器 (全8点)

当遺跡出土の石器で実測できたものは、全部で8点 (砥石3、石鏸2、楔形石器1、円礫1、有孔円盤1) ある。出土地は包含層とSD6の二つに分かれる。

包含層からは砥石1点 (Ⅶ層) 石鏸2点 (V層) の計3点、残りの砥石2点、円礫、楔形石器、有孔円盤各1点の計5点は、SD6よりの出土である。

遺物の時期は、V層出土の石鏸は、401が縄文時代、402は弥生時代の可能性があるものの断定はできない。楔形石器307は、縄文時代と考えられる。有孔円盤は古墳時代の祭祀に使われたものではないかと考えられる。⁽¹⁴⁾ SD6並びにⅦ層出土の砥石3点についても時代決定は難しいが、溝の盛行期が中世であり、溝出土遺物で時代の確定できるものはほとんど中世の遺物であることから、SD6出土の309、310並びにⅦ層出土の403の砥石3点とも中世のものと見ても差し支えないであろう。V層の石鏸や、SD6の円礫、楔形石器、有孔円盤は混入と考える。

天崎近辺での石器出土状況に付いていえば、土佐市最古の石器は徳安C地点出土の縄文草創期のサヌカイト製尖頭器とされている。⁽¹⁵⁾

木製品 (矢板3点、田下駄、糸巻き、卒塔婆各1点)

検出遺構がほとんど溝という遺跡の性格上、杭や流木も含めると木製品の出土量は多く、実測したものは22点ある。上記6点以外は、全て溝に伴う杭である。ここでは、上記の四つに絞って述べてみたい。

a . (矢板) 315 ~ 317...矢板は全てSD4の両サイドに打ち込まれた状態で出土したものである。写真 (PL10) に在るように矢板にさらに横木を渡しているところがあり、他よりもしっかりと土留がなされている。矢板の状況からそこは流路の変わり目か、岸として使われたのではないかと考える。

b .(糸巻き) 405...紡織機の中の組合せ式の糸巻きである。数本の枠木とそれを固定する横木、横木の芯に通す軸棒からなっているが、その中の横木である。弥生時代から存在するが形状や法量、出土場所などから中世のものであろう。

c . 田下駄404 ...田下駄はその機能によって湿田や湿地で足が沈まないために用いる稻刈田下駄と、土ならしや縁肥を土と混ぜならすシロフミ田下駄の二つに分かれる。稻刈田下駄は複数の部材を組合わせて作るものが多く足板が分類の主たる対象となっている。四孔式足板は孔に通した紐で足の甲や踵を縛りつける結緒、三孔式は現代の鼻緒と同じである。⁽¹⁶⁾ 404は稻刈り用田下駄の三孔紐結合型足板であり、レンチ出土ではあるが出土状況から見てVI層が形成された当時の湿田や湿地での農作業に盛んに使われたものであろう。

d . 木製卒塔婆 (314)

314は、長さ108.9cm・幅6.6cm・厚さ1.1cmを測る比較的大型の木製卒塔婆である。上部の形状は切り込みのない三角形を呈す。広辞苑によると板塔婆は供養のため墓に立てる細長い板の塔婆とあり、墓標並びに供養塔として平安中期頃から用いられ始め、平安末期には供養のため奉納することが、大衆化されていたようである。板塔婆は、墨書が見られなくてもその形状から比較的認識しやすいものであり、長さは30cmから1mを超えるものまで様々である。上部の形状は、五輪形、下部に切込みを2ヶ所入れた三角形、三角形の三種類あり、314は先述のとおり、上部三角形のものである。五輪は密教でいう物質構成の五大要素である五大を円輪に擬したものであり、上から順に空風火水地の五つをそれぞれの刻みの形で表す。主に天台・真言宗などの密教において用いられるものであるが、平安期より始まった神仏習合によるものであろうか、国分寺の前住職林広裕氏によれば、上部に刻みのない三角形のものは神道で用いられた可能性もあるとのことである。五輪形のものはI期からIV期まであるが、三角形で切り込みを入れたものはI～II期に集中しており、それ以後、これに代わるように三角形のものが見られる傾向にある。⁽¹⁷⁾

当初、墨書は視認できなかったが、赤外線写真によりPL50のような梵字を認識することができた。草戸千軒での出土例を見ると、板には空風火水地の五輪を表す梵字の後に、諸仏、菩薩名などが記される例が多い。314は検出墨書が梵字であることは間違いないが、意味は不明である。国分寺の前住職林広裕氏によれば梵語のヲに点のついたものである可能性があるということであった。オムと発音し、諸仏に祈願奉るの意で、その下に祈願の目的に合った仏の名が記されることである。

出土場所は、草戸千軒の例では、日常的な居住区からは離れたところが主流であり、当然のことであるが、寺院や墓地などが営まれた地区に接したところが多い。⁽¹⁸⁾ 当遺跡は人麻呂様城跡や松尾八幡宮のある丘陵の北側下に位置し、数キロ西には高岡親王ゆかりの五輪塔が所在する35番札所の清滝寺がある。中世以降この清滝寺を中心に土佐市北方の山々で修験の信仰が栄えており、丘陵の麓付近には自動車道建設に伴い移転となつたが、最近まで遺跡付近の集落の代々の墓地が存在していた。上記のいずれかに関連するものであろう。

(3)まとめ

以上、天崎1・2区出土遺物について各グループ毎におおよその様相を述べたが、天崎遺跡の特徴を現す炭素吸着の須恵器椀と出土量の多い瓦器椀を主として当時の遺跡周辺の政治社会状況と絡ませながら述べることで天崎遺跡の性格についてのまとめとしたい。

高知における須恵器供膳具生産の流れを追ってみると土佐の須恵器生産は8世紀代の律令期において土佐国衙跡、土佐国分寺跡をはじめ官衙関連遺跡である野市町曾我遺跡、深渕遺跡、香我美町十万遺跡SK50、大方町宮崎遺跡、下ノ坪遺跡SK1,SD817などで展開し、9世紀末から10世紀初頭に比定する小籠遺跡SK130,136の時期では完全に消滅する。

高知県ではこの時期に消滅するが、四国の他の3県でも、香川を除き、8世紀末から9世紀初頭に須恵器供膳具の衰退期を迎える。須恵器調貢国として最も長く須恵器生産が続いた香川でも10世紀初頭には消滅し、その後土師器供膳具の時期に入る。ところが10世紀中葉頃から高知県では、須恵器碗が一時期再登場する。再登場した須恵器碗は、円盤状高台を持つ新しい形態で、播磨系須恵器碗の影響を受けていると考えられ、播磨地方の相生窯跡群、札馬窯跡群段階のものと形態的に類似している。⁽¹⁹⁾

現在、再登場した円盤状高台須恵器碗の最も古い例は奥谷南K-1出土の底部ヘラ切りの須恵器碗である。これらは山岳寺院に付随する須恵器窯出土のものであり、在地生産されたものである。少し遅れて10世紀末より11世紀初頭にかけて田村SK31、ヒビノキサウジSE1出土の須恵器碗が続く。しかしながら両者とも奥谷出土の物より法量が小さく、底部糸切りで、ヒビノキサウジ出土のものは輪高台の須恵器碗も混在している。10世紀末から11世紀初頭のこの時期は、高知県では画期4の段階とされ、播磨系須恵器碗とそれを模倣した土師器碗（土佐国衙SX11等で出土している）が同時に展開し、今までの供膳形態の組成から大きく変容し、椀・杯・小皿という土器組成が確立され、中世的土器様式の成立する時期とされている⁽²⁰⁾。当遺跡出土の須恵器碗と奥谷南出土の須恵器碗はこれらのものよりも古く、底部切り離しも全てヘラ切りであるという共通点はあるが、天崎出土のものは、ほとんどのものに程度の差はあっても炭素が吸着し、口縁部が端反り形態という特徴がある。類例を探してみれば試掘時のものではあるが、同じ仁淀川水系に属する春野町西畠出土の円盤状高台須恵器碗がある。前述の3遺跡出土のものはプロポーションからいっても当遺跡のものと同じ系統のものとは考えにくい。もし、当遺跡出土の須恵器碗と奥谷南の須恵器碗を吉成承三氏の指摘する播磨系の須恵器碗の系統の中に位置付けることができるのなら、奥谷南と並んで、天崎出土の須恵器碗は、土佐における中世的土器様式が確立する直前の、播磨系の流れを受けた最も古い須恵器供膳具となる。しかも播磨系の影響を受けながらも奥谷南をも含む前述の土佐中部の遺跡とは異なる系統の須恵器供膳具生産が仁淀川周辺に行われていたと推定することができる。現在のところ類例は春野町西畠出土のものだけであるが、近年土佐市近辺での発掘件数は増加しており、当遺跡と遺物出土の様相が類似する遺跡もあるようで、今後の資料の増加に期待したい。

また、それより時代は少し下るが、廣田佳久氏が、指摘されている須恵器の変遷の中に興味深い例をみることができる。廣田氏は南四国の須恵器を四期六型式に分類し、三期を8世紀から10世紀

Tab.27 天崎出土土器消長表

	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀
須恵器壺 蓋	1 2	2 3	4 5	6 7	1 2 3 4 5 6	1 2 3 4 5 6	1 2 3 4 5 6	1 2 3 4 5 6	1 2 3 4 5 6
須恵器壺 蓋	2	(壺蓋)	...	3
須恵器碗	1
土師器壺
土師器皿	A群
土師器皿	B群
土師器皿	C群
土師器皿	D群
土師器小皿
土師器碗
土師器甕
土師器羽金	II A
須恵器碗	29	...	(円盤状高台碗)
瓦器	52
白磁	22
青磁	13
東播系捏鉢
円盤状高台 須恵器碗標 識遺構	ヒビノキサウジSE1、田村SK31 奥谷南K1	深淵北SD12
備前壺
備前壺鉢
瓦質羽金
染付

その他の出土遺物、縄文土器 弥生土器 近世キセリのらう土錐 砥石 石器 木製品
帶内の数字は実測点数

頃までの律令体制下の須恵器生産の時期、四期を在地生産が終焉し、他地域から搬入される時期としている。四期第VI型式が東播系須恵器が搬入される時期のものであり、森田稔氏編年のⅠ期第2段階（11世紀後半）のものと考えられる春野町王子遺跡出土底部回転糸切りの須恵器2点をその例として挙げている。⁽²¹⁾

当遺跡ではⅡ期第2段階（12世紀末葉から13世紀初頭）の東播系捏鉢が数点出土しており、少なくともこの時期から天崎周辺では東播系の製品が流通していたことが確認できているが、播磨系の影響を今回出土の須恵器碗からとすると、天崎を含む仁淀川水系周辺では10世紀中葉段階から13世紀初頭に至るまで播磨と流通面で何らかの繋がりを持っていたと考えることができる。

以上須恵器碗を中心にして述べてきたが、天崎遺跡では先述したとおり、Ⅱ期第3段階（12世紀後半）～Ⅲ期第3段階（13世紀初め）までに納まる和泉型瓦器が多く出土している。瓦器碗の出土量の多さは上記の10世紀代の炭素吸着の黒い器に対する需要が後の時代まで影響しているのであろうか。また8世紀代の律令期の須恵器をはじめとして、緑釉供繕具、黒色土器、おおむね11世紀末～13世紀前半に納まる貿易陶磁器など、当時の一般集落での使用が考えにくい、寺院、郡衙、あるいは官系の在地有力者層などの存在を伺わせる遺物が出土している。

現在の天崎遺跡は、古代から現代に至るまでその景観にそれほどの変化を受けなかったと考えられる低丘陵に囲まれた小さな集落である。このような調査地から上記のような遺物が出土したことについて遺跡盛行期の天崎周辺の政治社会状況の面から考えてみたい。

天崎周辺の政治社会状況

841年、吾川郡8郷のうち4郷が高岡郡として独立した頃は既に律令体制の崩壊が進行しており、天崎独特の炭素を吸着させた須恵器碗が作られ流通していたころには、社会は律令国家から王朝国家へと完全に変質を遂げていた。この時期に、律令体制の崩壊と共に滅んだ須恵器供繕具が天崎周辺で、形を替えて再び登場している。支配体制の変化に連動して再び須恵器生産を行う集団とその需要層が表れて起った事象であろう。その後王朝国家の根幹である荘園支配体制がしだいに崩れていいく中で時代は中世へと移っていくが、土佐の中世史において天崎遺跡の所在する高岡郡は政治上も大きな位置を占めている。

香長平野には、弥生時代の大規模拠点集落である田村遺跡群や土佐国衙跡、後の守護代細川氏の田庄村の館、戦国期の長宗我部氏の岡豊城などがあることから、古代から一貫して、政治・社会の中心地が土佐中部にあったような印象を受けるが、遺跡の溝盛行期の12世紀後半、平重盛の家人であった蓮池權守家綱は仁淀川西岸の高岡庄を基盤とし、東岸から北方の別府方面にも分派勢力をもって土佐一国を支配しており、後に源希義を年越し山で斬殺した時も恐れて希義を葬るものがいなかつたと伝わるほど強大な力を持っていた。この時期の仁淀川周辺の遺物の出土状況などをみると仁淀川を利用した海上、水上交易が盛んに行われたことが推察できる。その後鎌倉幕府が成立し公武二元体制の中で守護、守護代、地頭による支配が朝廷により公認され、在地の小領主が地頭として支配力を強め荘園制を変質させていく。この鎌倉初期に高岡庄は後白川院の勅旨により四天王寺五智院領として施入され、守護使入部禁止の特権を与えられている。幕府からも年貢公事を免ぜら

れ、他と異なる寺領として重んぜられていたことがわかる。⁽²²⁾ この時期守護所が何処におかれたかははっきりしないが、鎌倉末期には守護代クラスの豪族として高岡庄の蓮池城に居城する大平氏が登場してくる。土佐における南北朝両者の激突の記録の中にも1336年南朝方の浦戸攻撃に北軍の主力が結集した場所として高岡館の名が出てくるが『土佐国編年紀事略』では高岡館主は大平氏となっている。1340年1月の段階で土佐における南北決戦は北朝方の勝利で一応の決着が付くが、その後1380年頃細川頼益が土佐の守護代として香美郡田庄村に入部しても細川氏の直接支配区域は土佐郡以東が中心であり、現在の高知市以西は吉良氏、片岡氏、大平氏、津野氏等が独自の権力を打ち立て間接的に細川宗家の支配を受けていたと考えられている。⁽²³⁾ このように当遺跡周辺は中世において独自の有り様をしてきた地域であり、当然、文化的社会的にも独自のものを育ててきたと考えられる。

いずれにせよこれまで埋没する度に位置を少しづつ南にずらしながらも再建されていた溝であるが最後に埋没しその埋土を掘り込んで銅矛が再埋納された後は、新たに掘りなおされ利用されるることはなかった。13世紀半ば頃に、何らかの理由で物資の流れや、生産のありようが変わり溝が使われることがなくなったのである。土地所有形態にも何らかの変化があった可能性も考えられる。その上に形成された堆積層はおそらく耕作地として現在まで機能し続け銅矛並びにさまざまな遺物は、数百年間の長い眠りについたのである。

註

- 1) 高橋照彦「緑釉陶器」『概説中世の土器陶磁器』中世土器研究会編1995年
- 2) 池澤俊幸氏の御教示を得た。
- 3) 松田直則「11四国(5)土佐」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編1995年
- 4) 「土佐の土器・古代から中世へ」『四国中世土器研究会第8回高知大会資料』1996年のなかの吉成承三氏発表の〔8世紀から12世紀初頭の土器編年試案〕を参考とした。
- 5) 松田直則氏の御教示を得た。
- 6) 森島康雄、近江俊秀「6.瓦器椀」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編1995年
- 7) 松田直則「11四国(5)土佐」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編1995年
- 8) 松田直則「11四国(1)概要」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編1995年
- 9) 森田尚宏「土佐出土の瓦器と在地土器」『四国中世土器研究会第4回徳島大会発表資料』1993年
- 10) 岡内三眞「高知出土の輸入陶磁器」『高知の研究1地質考古編』1983年
- 11) 橋本久和氏の御教示を得た
- 12) 岡内三眞「高知出土の輸入陶磁器」『高知の研究1地質考古編』1983年
- 13) 松田直則「土佐の古代末～中世の煮沸具について」『第3回四国中近世土器研究会発表資料』1991年
- 14) 前田光雄氏の御教示を得た
- 15) 岡本健児「考古・古代編」『土佐市史』1978年

- 16) 木器集成図録近畿原始編解説奈良国立文化財研究所センター
- 17) 草戸千軒町発掘調査報告Ⅳ 広島県草戸千軒遺跡調査研究所編第Ⅳ章 遺物木製品C 墨書き木札 P.102～第V章 考察墨書き木札類P.151～
- 18) 草戸千軒町遺跡発掘調査報告、広島県草戸千軒町遺跡調査研究会編1995年での時期区分
- 19) 吉成承三、第8回四国中世土器研究会高知大会総括『四国中世土器研究第2号1998年』
- 20) 同上
- 21) 廣田佳久 周辺地域における須恵器の変遷 「南四国の須恵器」『王朝の考古学』1996年
- 22) 山本大「中世編」『土佐市史』1978年
- 23) 同上

付編 高知県天崎遺跡から出土した木製品の樹種

天崎遺跡出土木製品の材同定報告・(株)東都文化財保存研究所

(1) 試料

試料は、出土した木製品7点(試料番号1~7)である。各資料の詳細は、樹種同定結果とともに表に記した。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目・(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混同液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表2に示す。試料は、針葉樹2種類(コウヤマキ・サワラ)と、広葉樹1種類(スダジイ)に

天崎遺跡の樹種固定結果

番号	遺物	樹種	Fig.番号	図版番号
1	田下駄	サワラ	33	404
2	木製卒塔婆	コウヤマキ	27	314
3	紡織具	サワラ	33	405
4	矢板	コウヤマキ	27	315
5	板状木製品	サワラ	71	575
6	杭状木製品	サワラ	71	576
7	木臼	スダジイ	70	574

同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・コウヤマキ

(*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sied. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属
仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1~10細胞高。

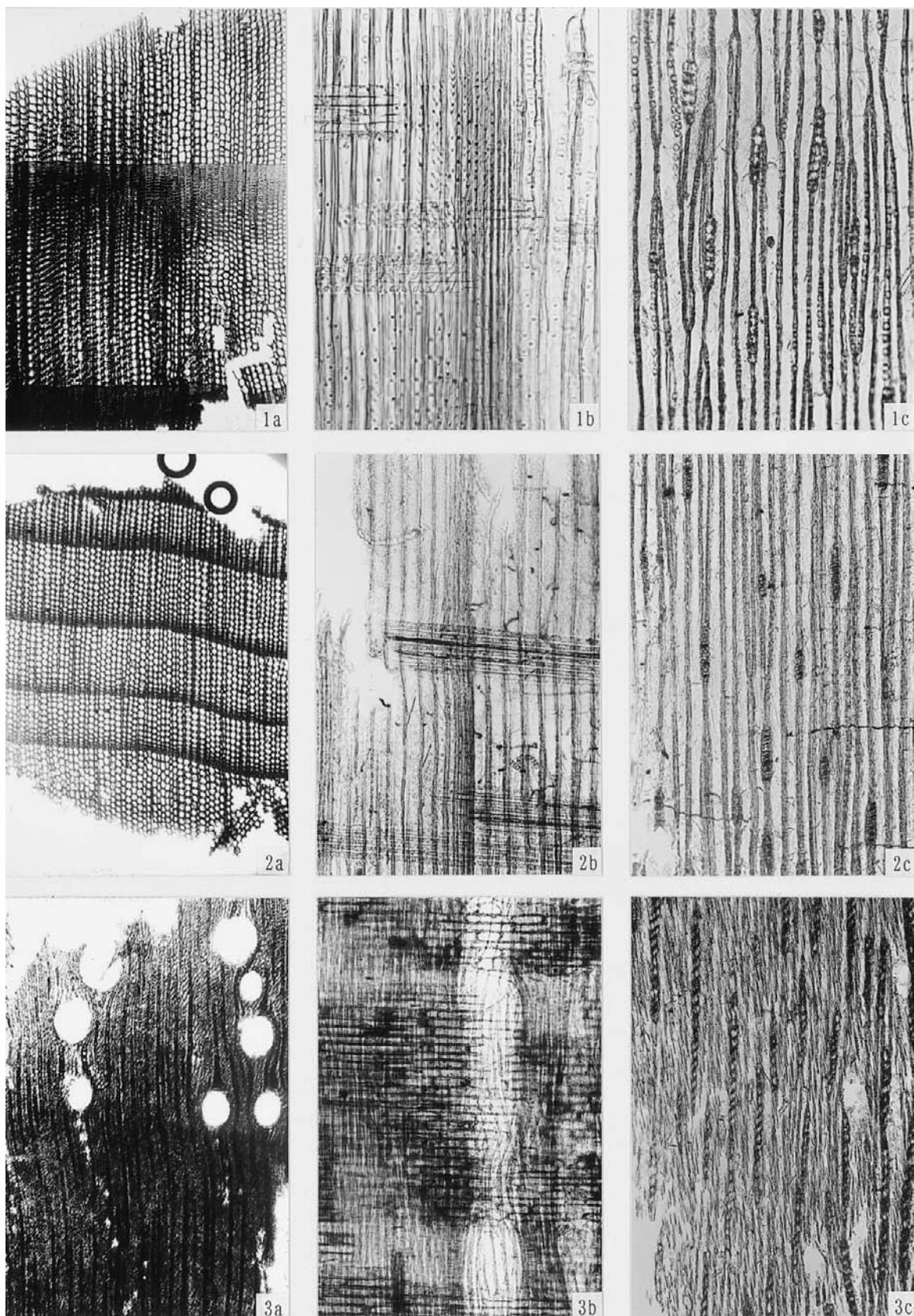
・サワラ (*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞は滑らか。分野壁孔はスギ型~ヒノキ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圈部は3~4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

天崎遺跡・木材



1.コウヤマキ (No.2 板状木製品)

2.サワラ (No.3 紡織器具)

3.スダジイ (No.7 木臼)

a : 木口 , b : 柄目 , c : 板目

■ 200 : a

■ 200 : b , c

写真図版



1・2・3区 調査前全景（南東から）



同上（北東から）

PL-2



1区 西壁セクション



同上



1区 流木出土状況



同上

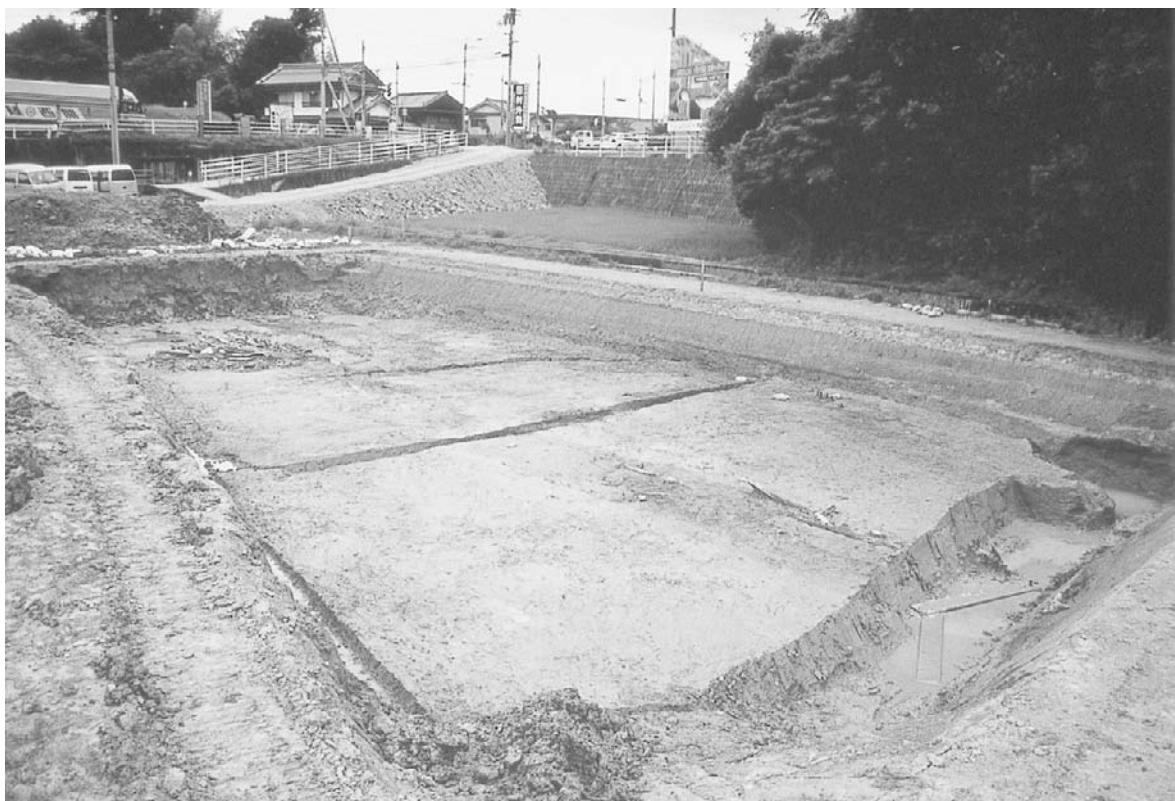
PL-4



1区 SD1・2・3 検出状況



1区 SD1・2・3 完掘状況



1区 SD4・5・6 検出状況



1区 SD4・5・6 完堀状況

PL-6



2区 SD4・5・6 検出状況



2区 SD4・5・6 完堀状況



3区 SR1・2・3 検出状況



3区 SR1・2・3 完堀状況

PL-8



2区 銅矛出土状況



同上



2区 銅矛取り上げ風景



同上

PL-10



1区 流木出土状况



2区 矢板出土状况



1区 杭列出土状况



2区 杭列出土状况

PL-12



23 (SD6)



57 (SD6)



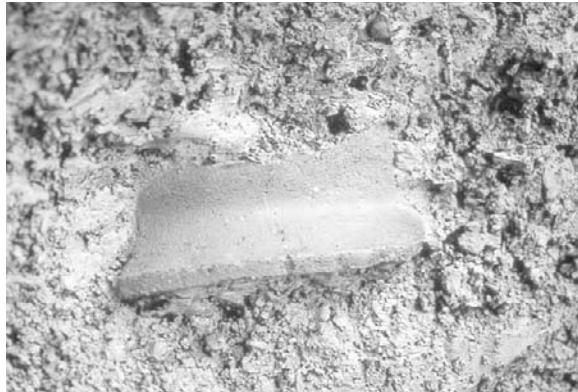
109 (SD5)



16 (SD5)



175 (SD6)



94 (SD4)



314 (SD4)



404 (TR)

1・2区 遺物出土状況 (土師器・木製品)



198 (SD6)



194 (SD6)



223 (SD6)



219 (SD6)



377 (、層)



223 (SD6)

1・2区 遺物出土状況（須恵器・瓦器）

PL-14



405 (、層)



316 (SD4)



283 (SD6)



280 (SD5)



299 (SD6)



226 (SD5)

1・2区 遺物出土状況 (木製品・白磁・須恵器)

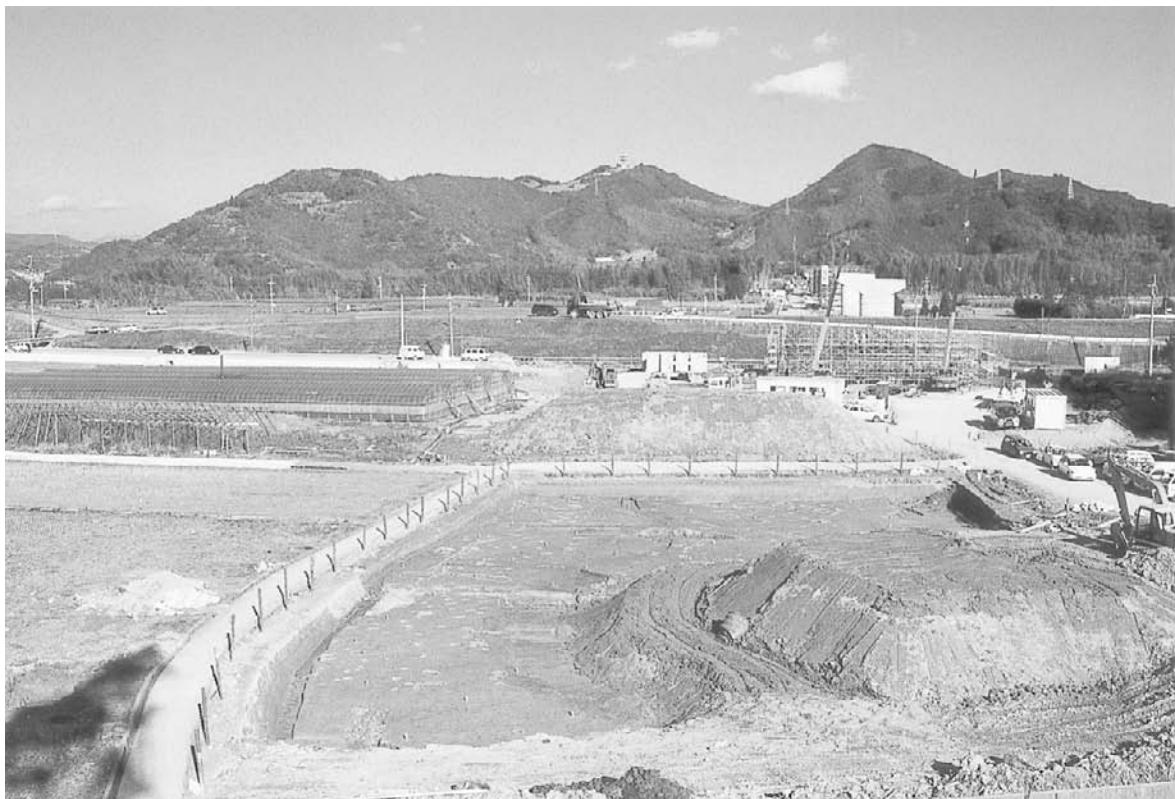


4区 調査前風景



4区 調査終了時 天崎遺跡遠景

PL-16



4-1・2区 完掘状況（西から）



4-1・2区 完掘状況（東から）



4-2区 遺構完掘状況



4-2区 SX-1 碟・小杭 検出状況

PL-18



4-3区 遺構完掘状況



4-3区 北壁セクション



4-3区 ST-1



4-3区 ST-1 及び 南壁セクション

PL-20



4-4区 遺構面（1面目）完掘状況（北から）



4-4区 畋状遺構



4-4区 遺構面（2面目）完掘状況（北から）



4-4区 遺構完掘状況（南から）



ST-1 (418)



ST-1 (419)



ST-1 (417)



4-3区、・層、1 (423)



4-3区・層 (434)



5-2区 西擴張区

4区・5区 遺物出土状況



4区 調査風景

PL-24



5-1区 調査前全景（西から）



5-2区 調査前全景（南から）



5-1区 遺物出土状況



同上

PL-26



5-1区 SD1 木製品出土状況



作業風景

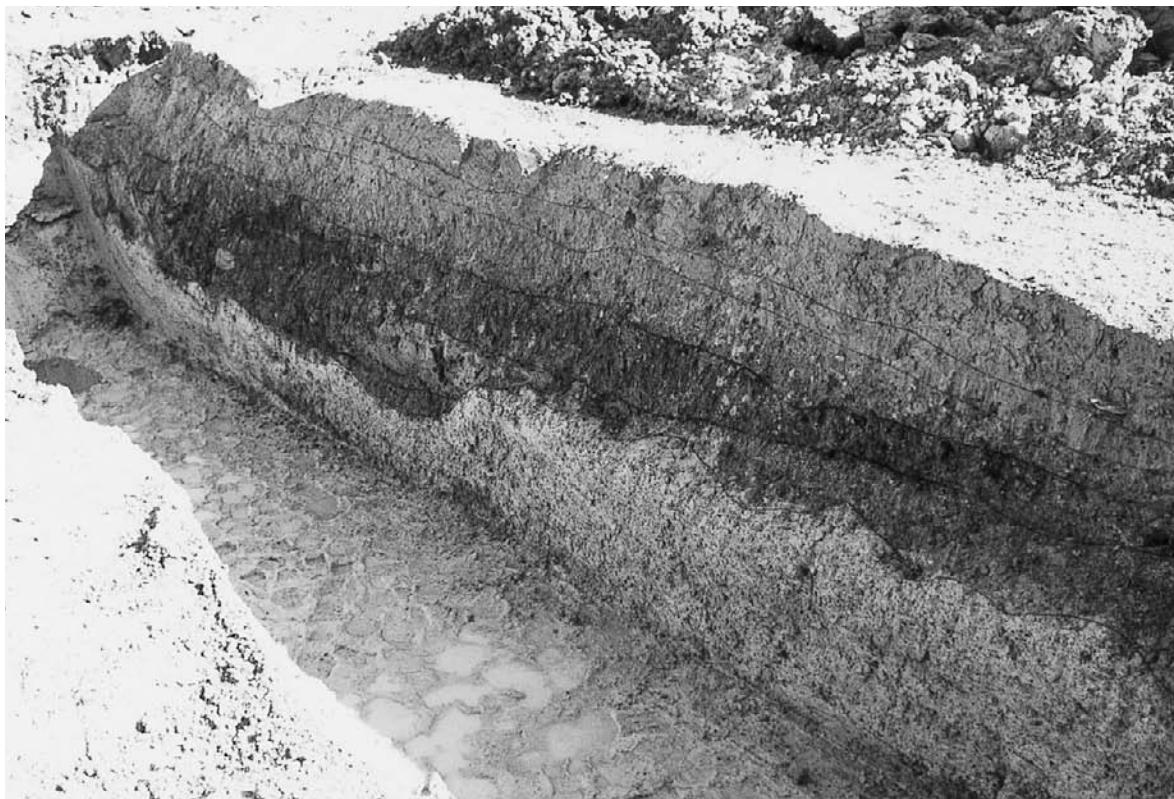


5-2区 遺物出土状況



同上

PL-28



5-1区 東壁セクション検出状況



5-2区 北壁セクション検出状況



5-1区 完掘状況（西から）



5-2区 包含層完掘状況（南から）

PL-30



5-2区 SR-1 木製品出土状況



同上

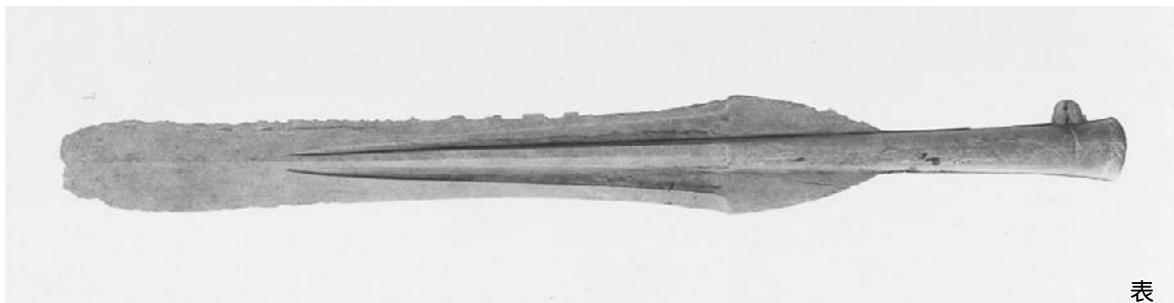


5-1区 東拡張区 SF-1 遺物出土状況



同上

PL-32



1号銅矛



2号銅矛



表



裏

3号銅矛



表



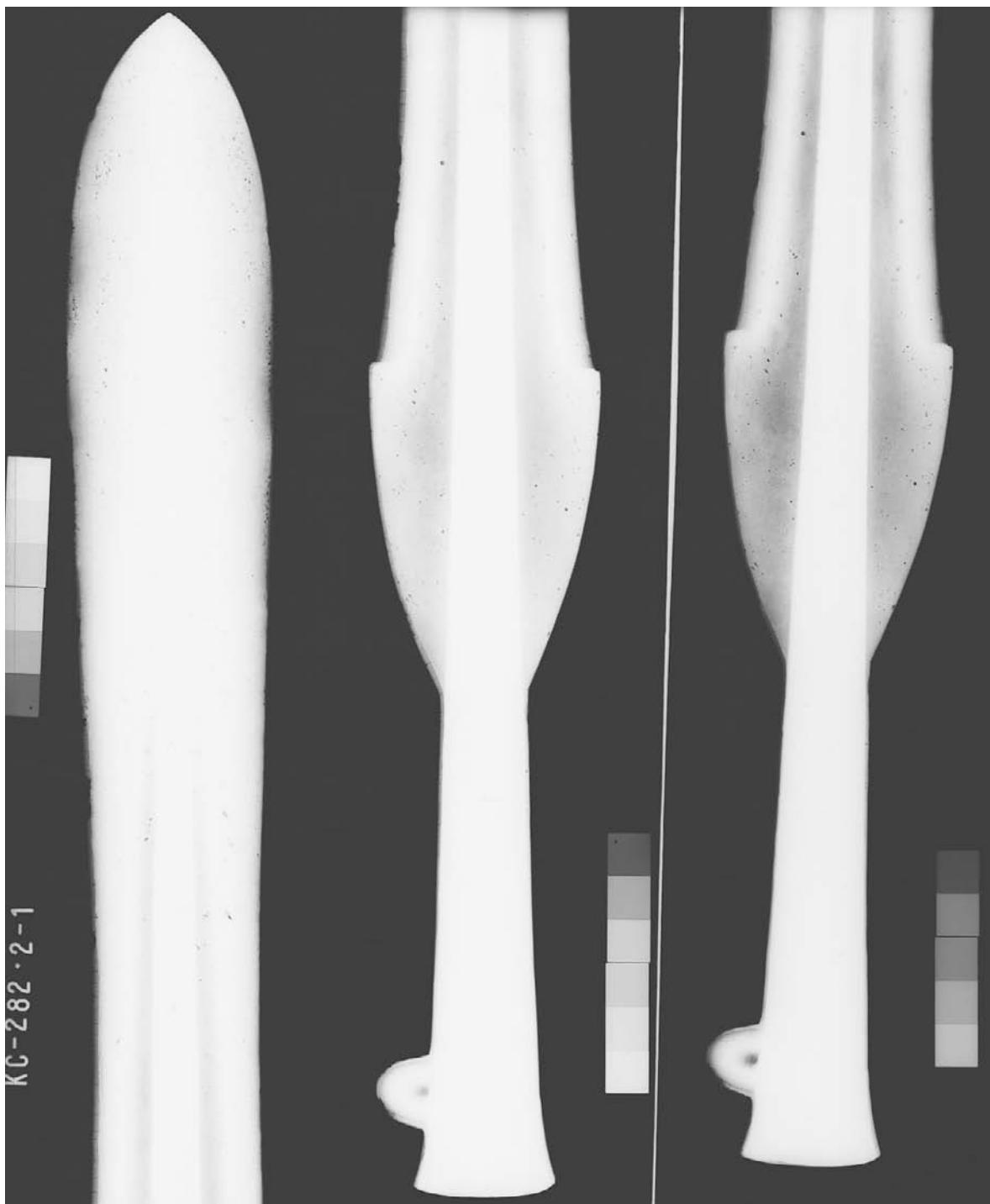
裏

4号銅矛

PL-34

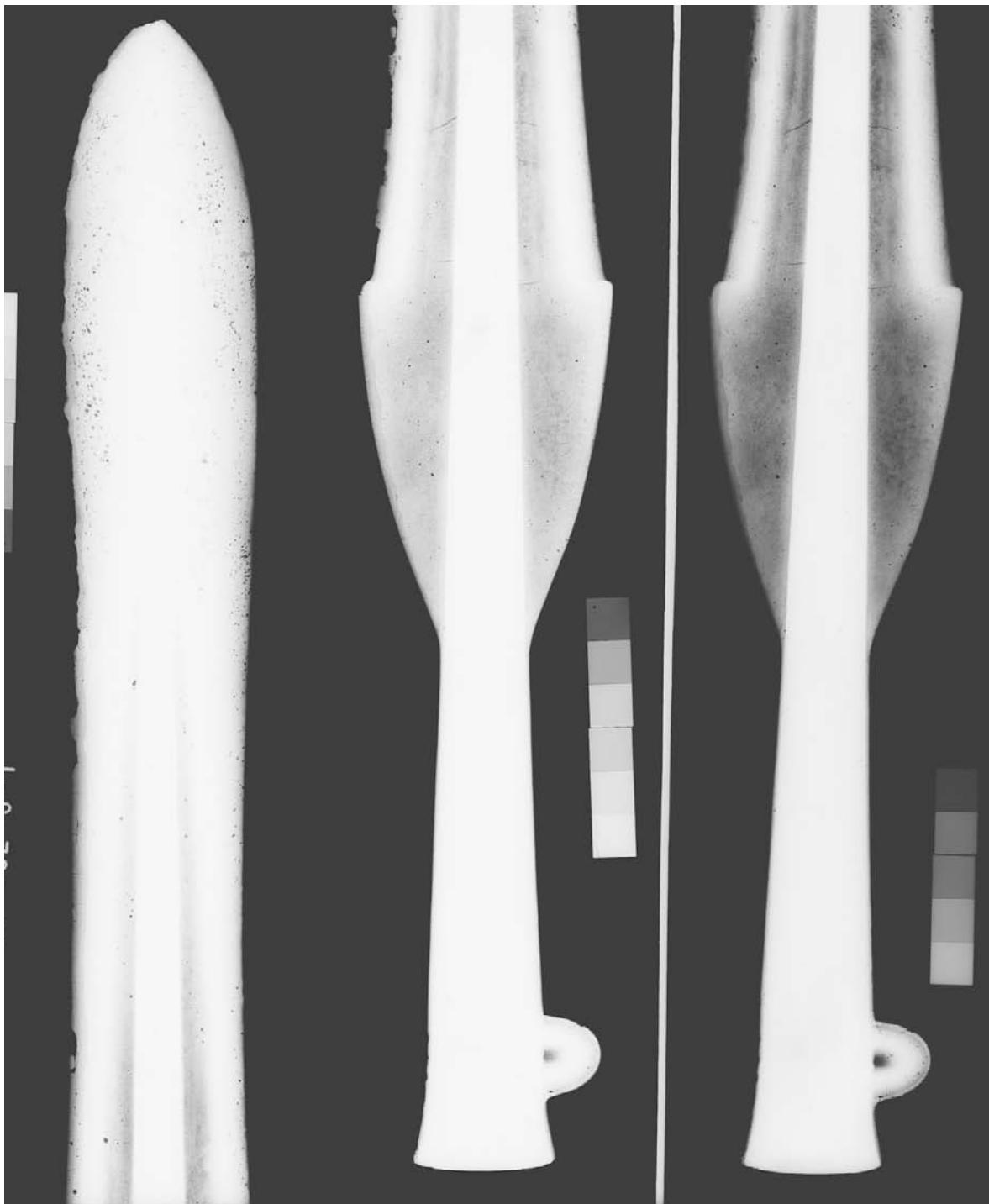


銅矛レントゲン写真（1号銅矛）

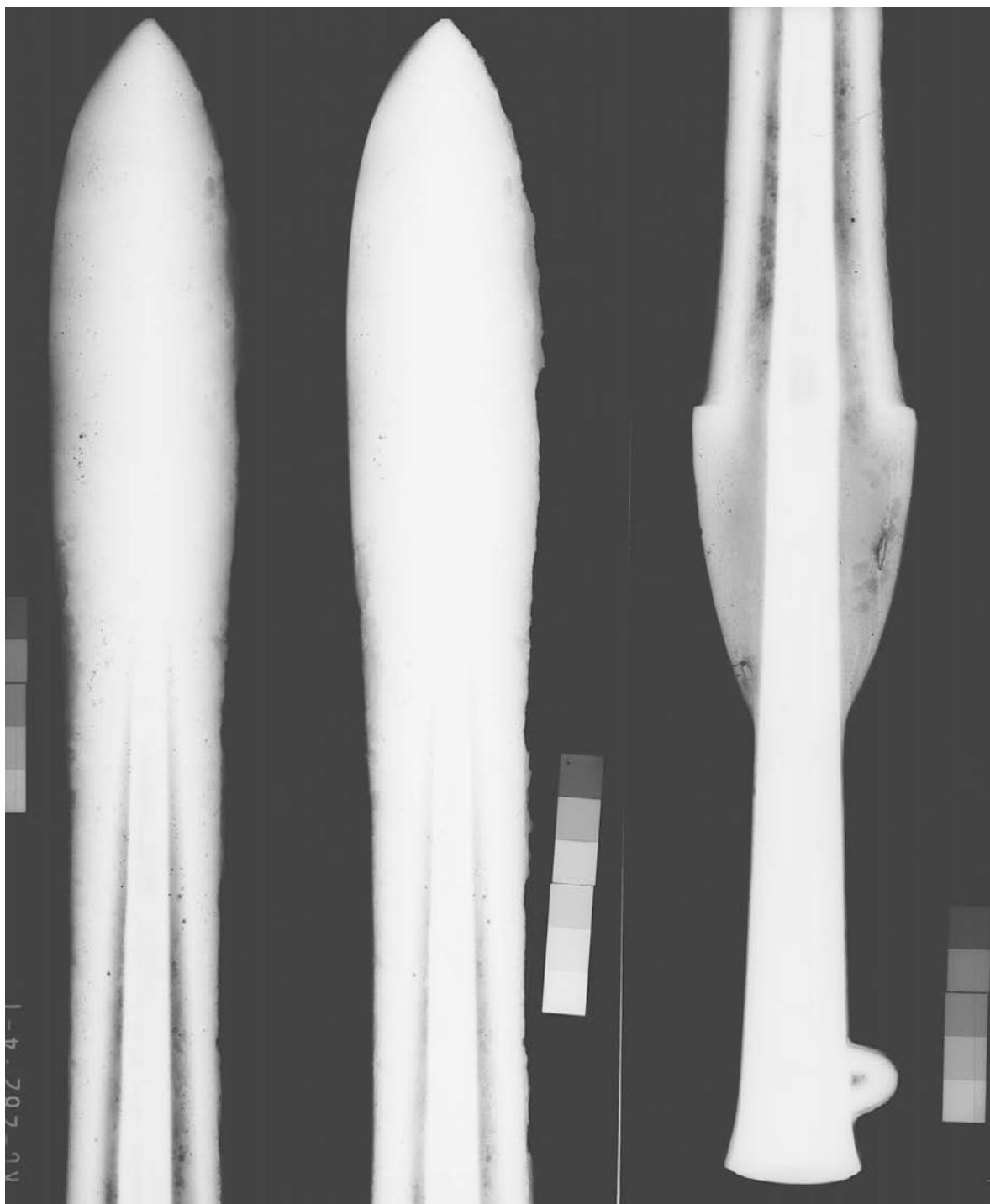


銅矛レントゲン写真（2号銅矛）

PL-36

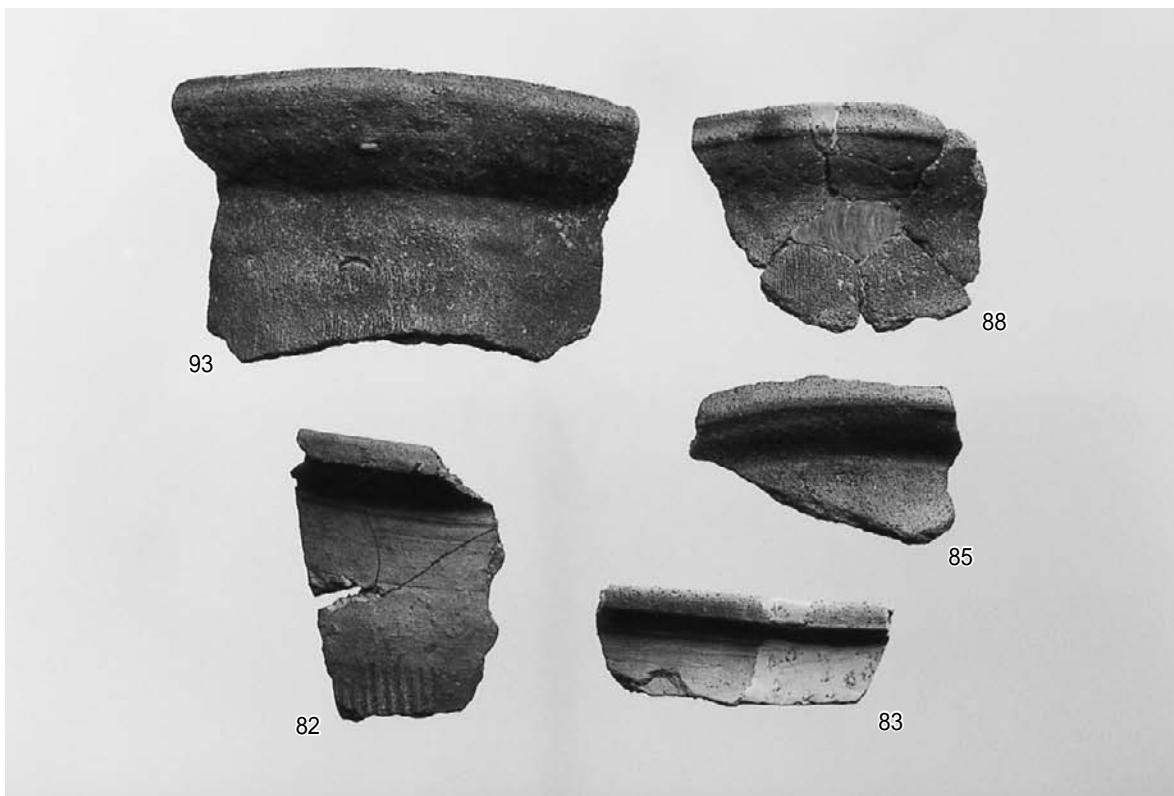


銅矛レントゲン写真（3号銅矛）

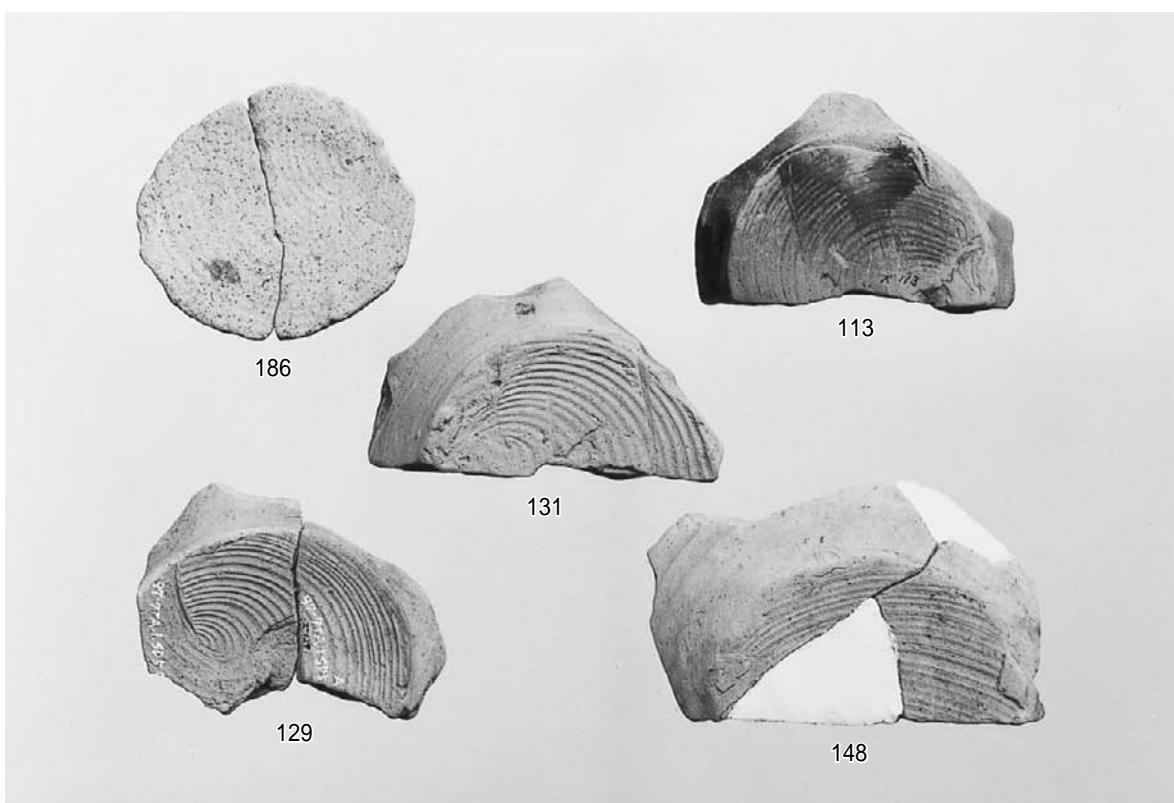


銅矛レントゲン写真（4号銅矛）

PL-38



1・2区 出土遺物（土師器）



同上



16



28



57



110



23



109



23



109

1・2区 出土遺物（土師器）

PL-40



115



45



115



143



175



182



61



69

1・2区 出土遺物（土師器）



81



66



81



72



76



79



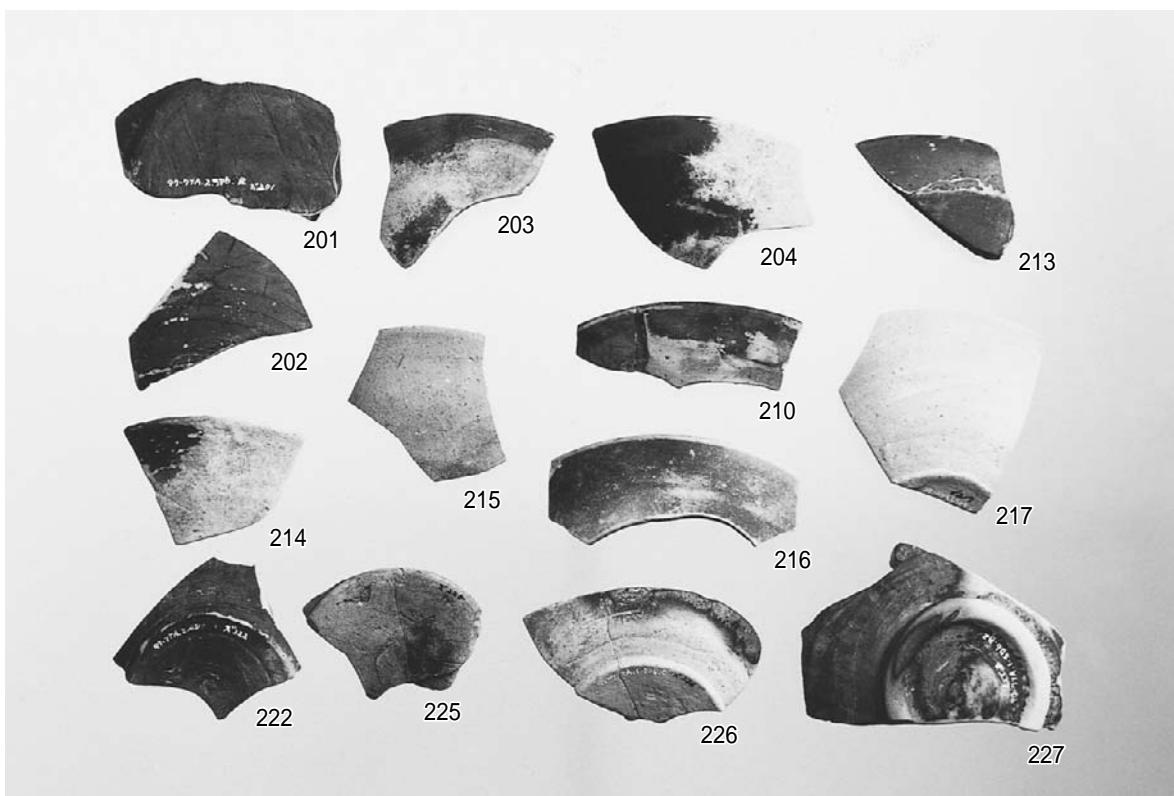
84



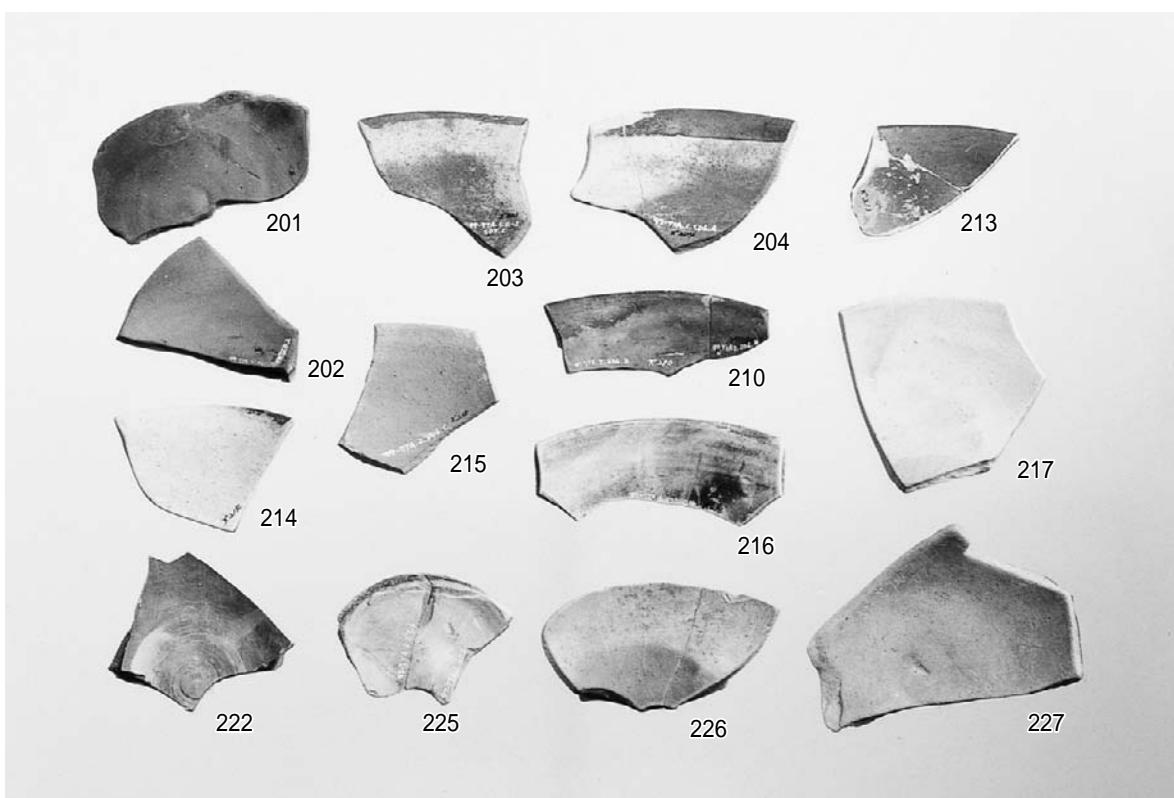
188

1・2区 出土遺物（土師器）

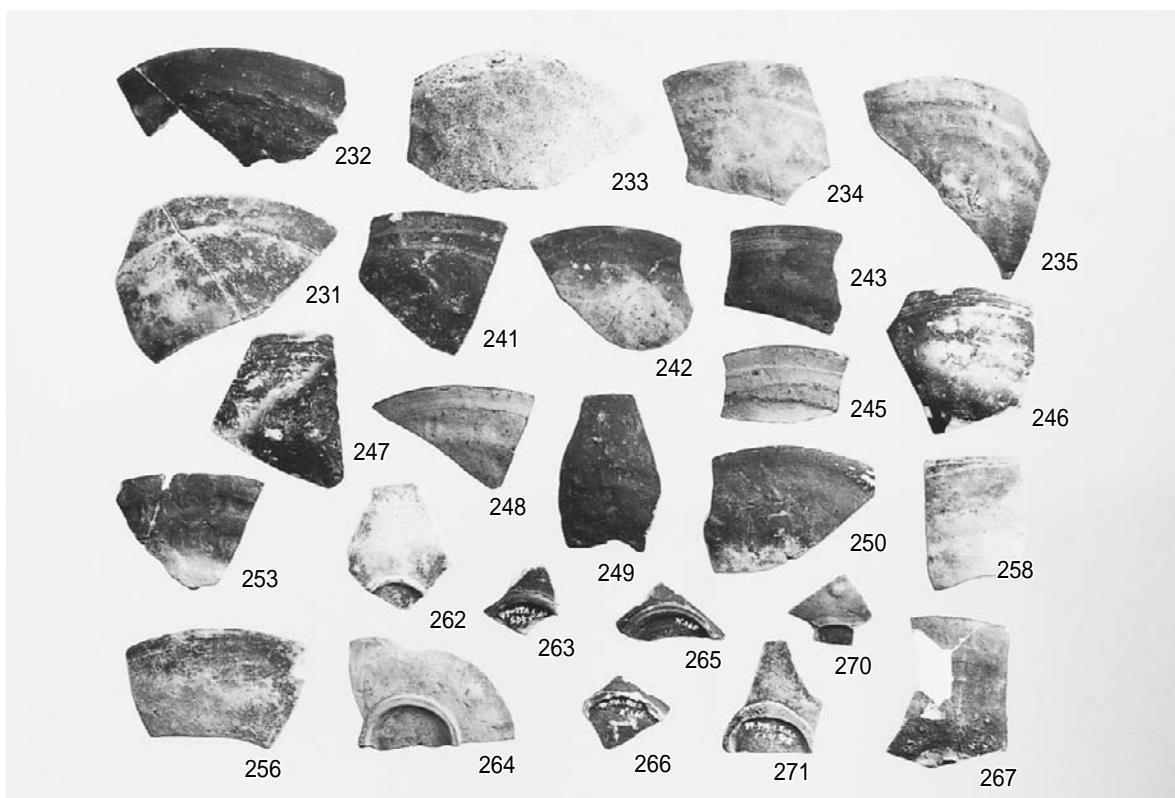
PL-42



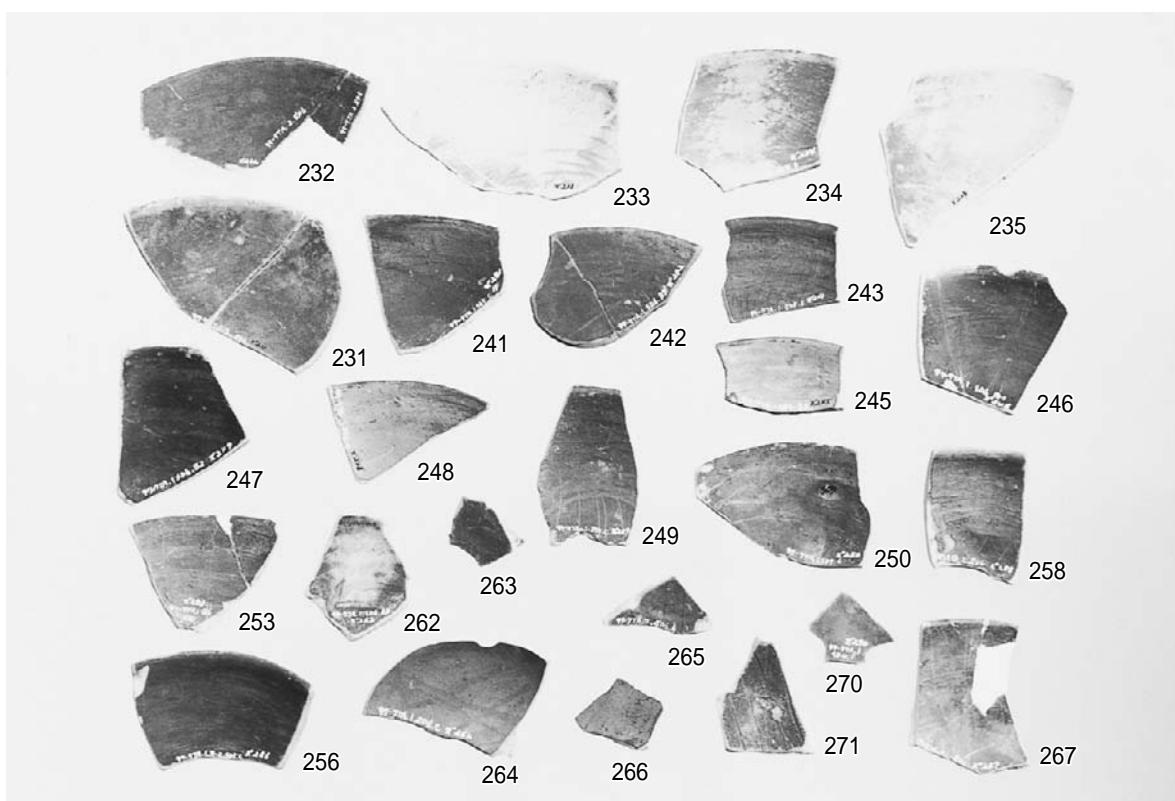
1・2区 出土遺物(須恵器椀) 外面



同上 内面

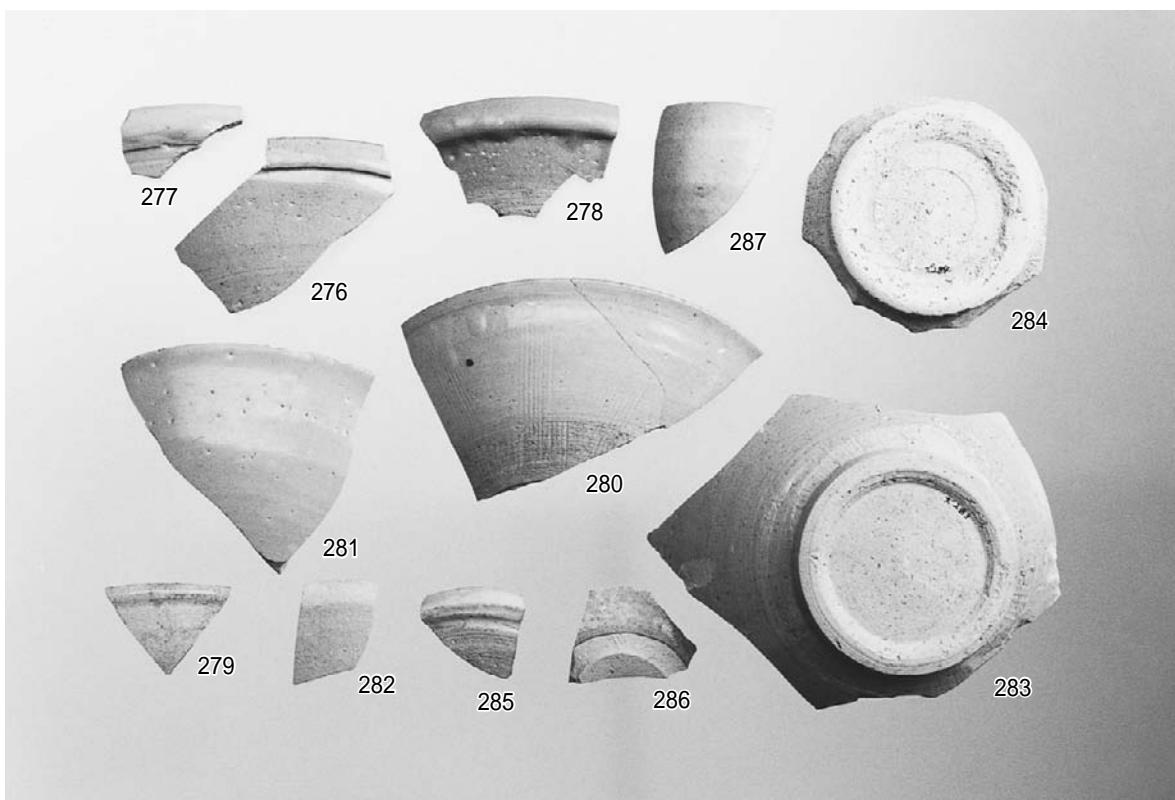


1・2区 出土遺物(瓦器碗) 外面

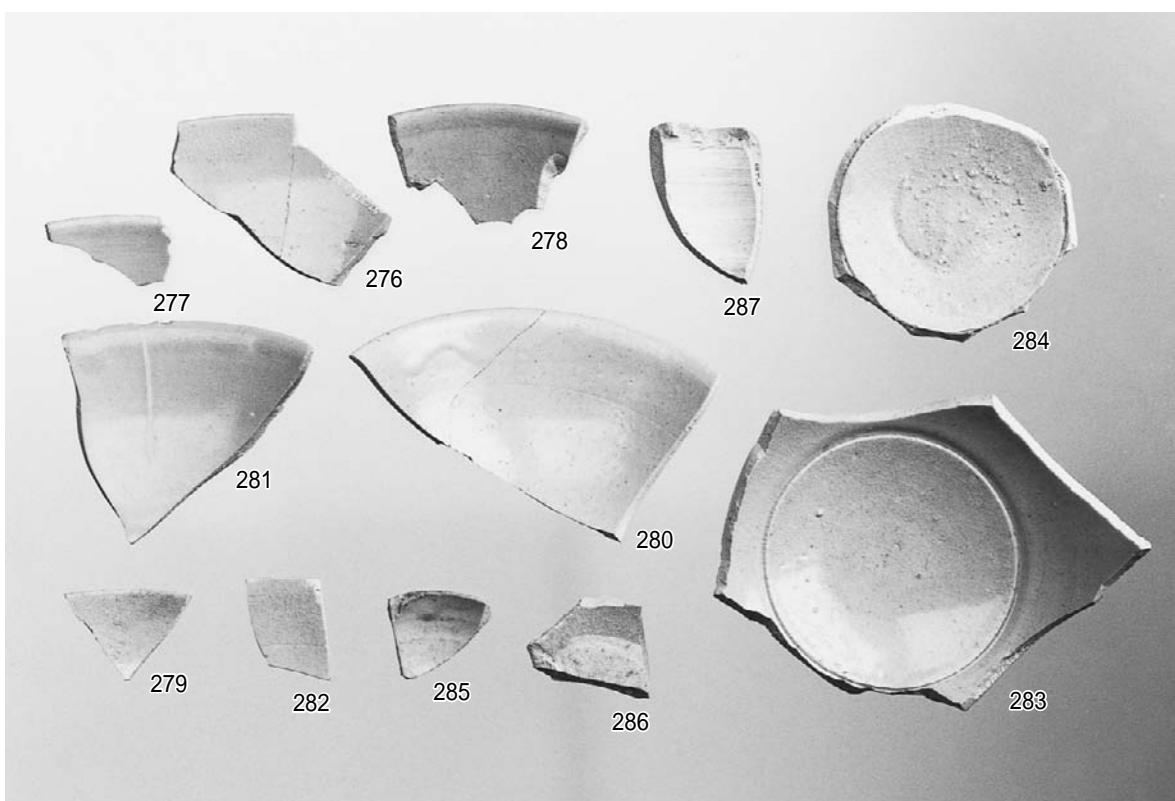


同上 内面

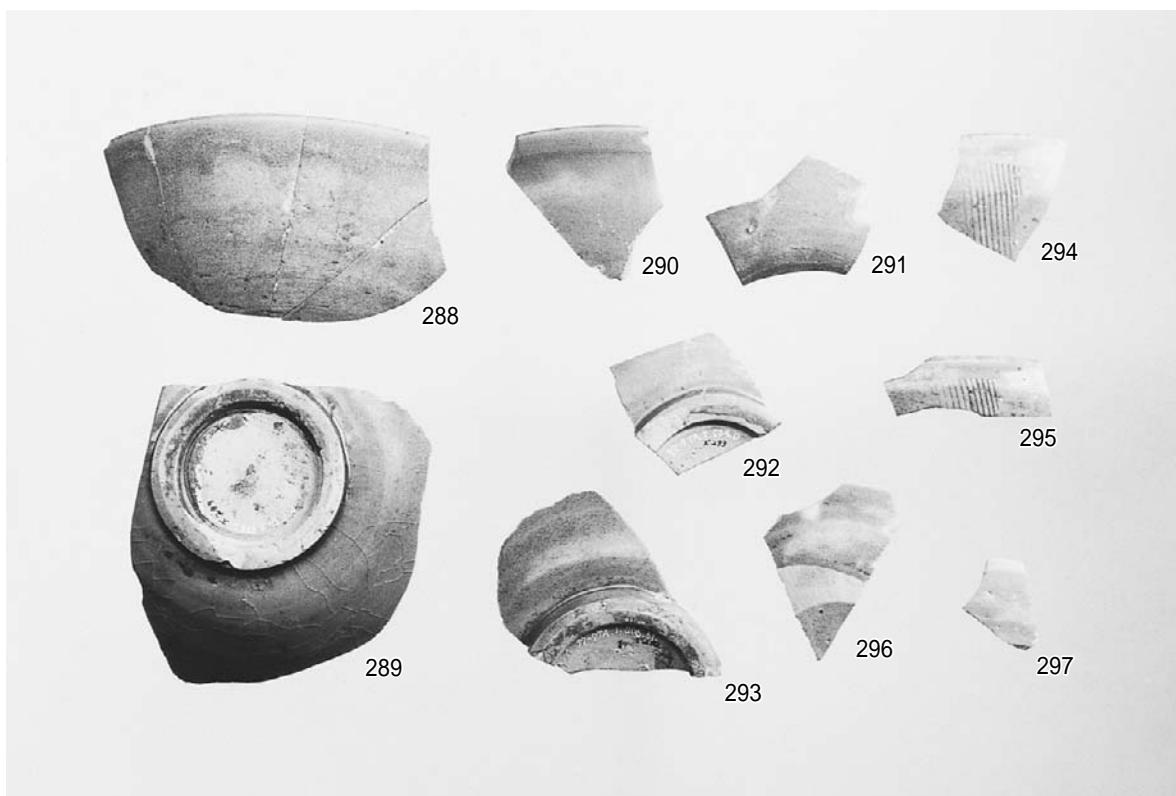
PL-44



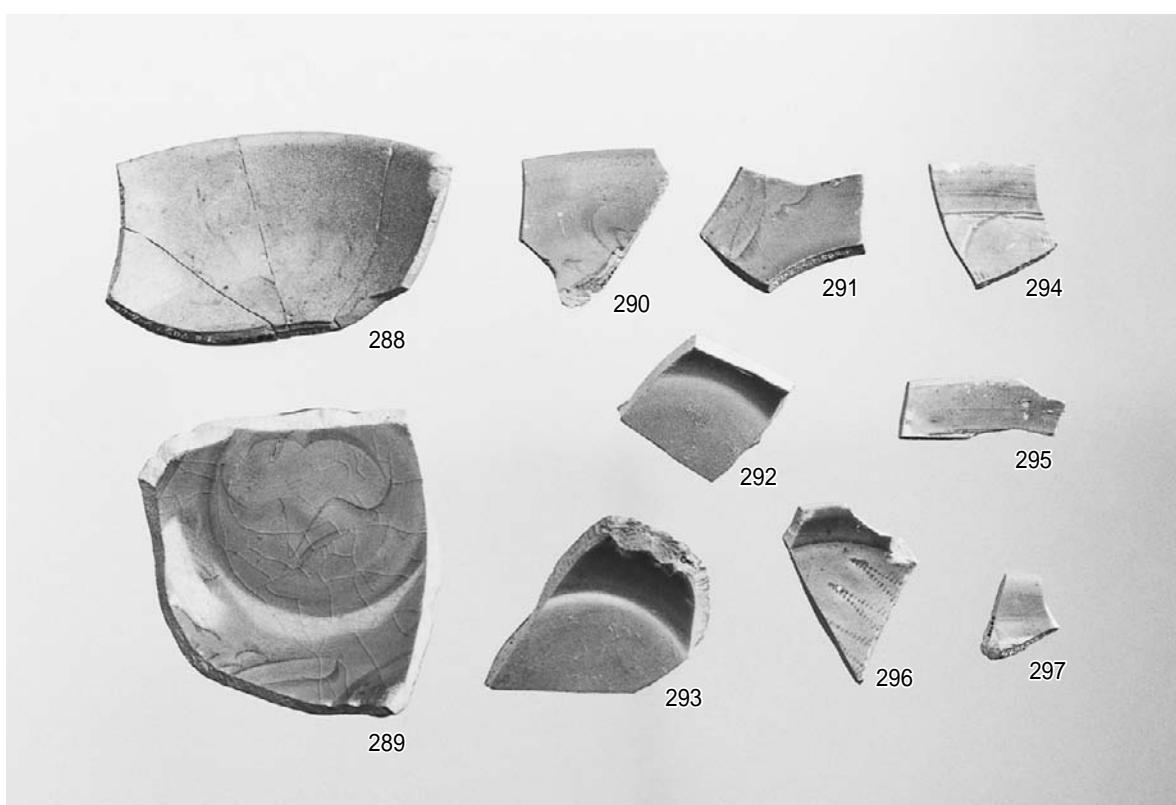
1・2区 出土遺物(白磁) 外面



同上 内面

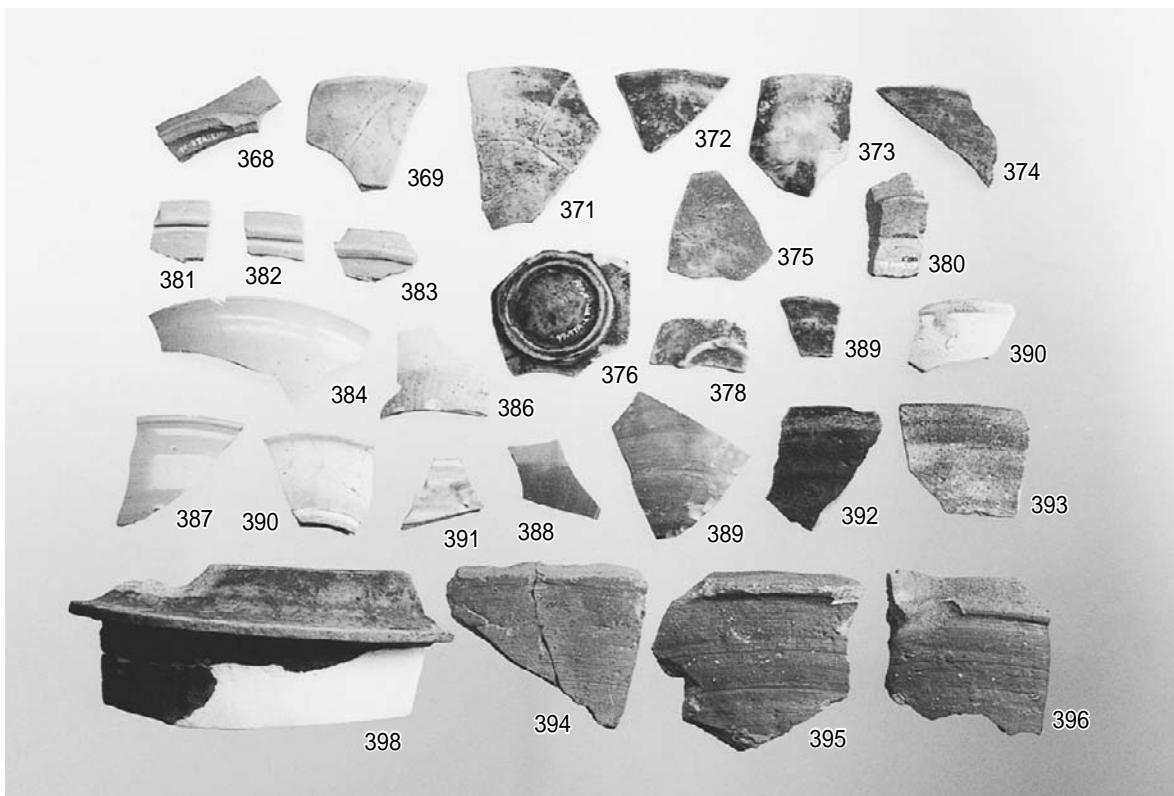


1・2区 出土遺物（青磁）外面

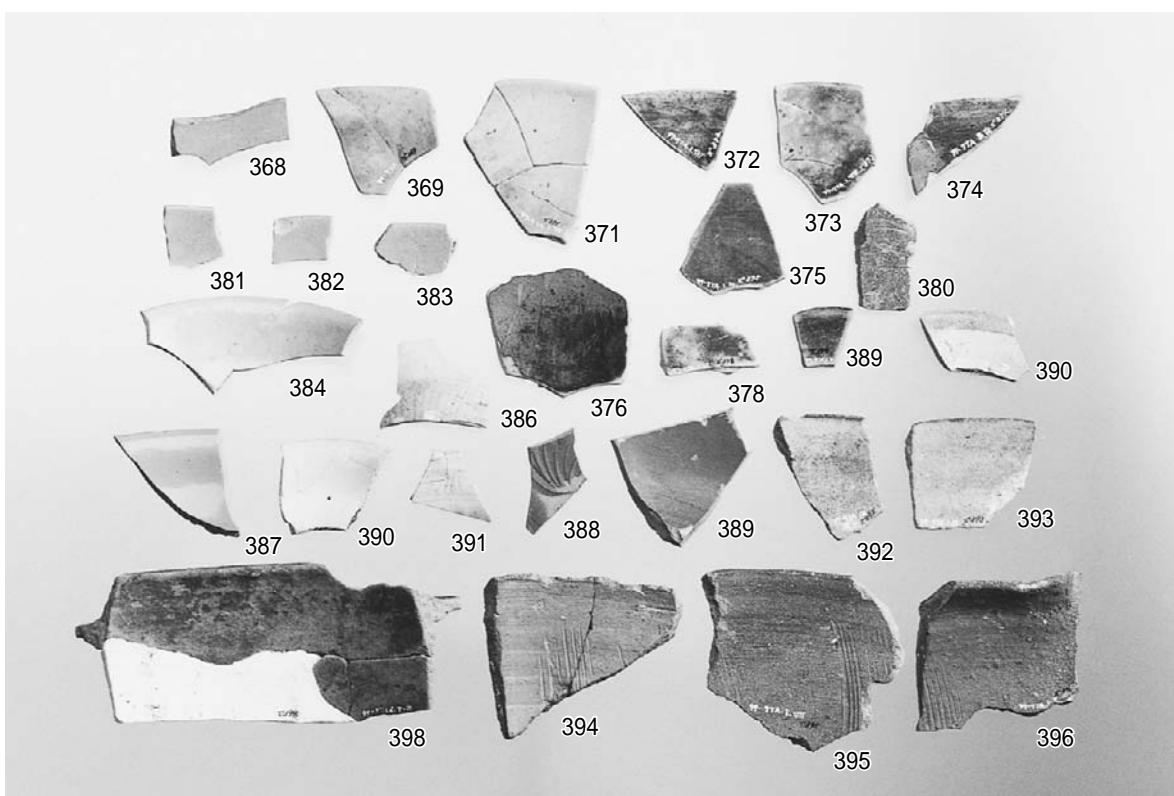


同上 内面

PL-46



1・2区 遺構外出土遺物（須恵器・瓦器・貿易陶磁器・瓦質土器・備前擂鉢）外面



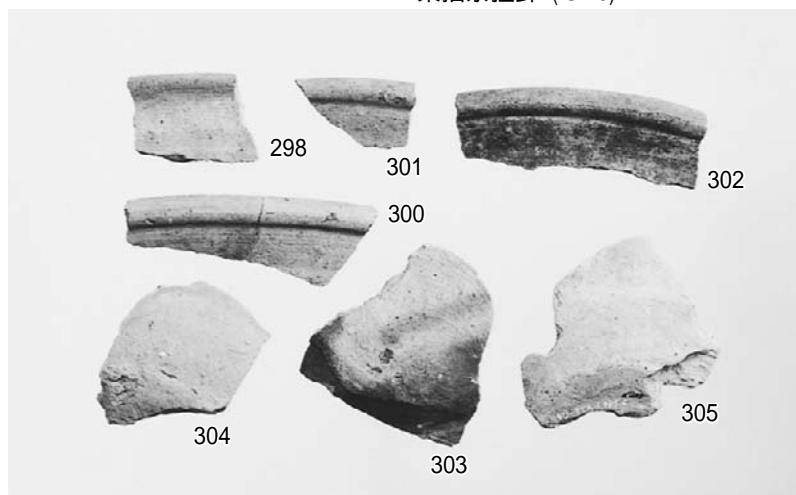
同上 内面



備前壺 (SD5)



東播系捏鉢 (SD6)



東播系捏鉢 (外面)

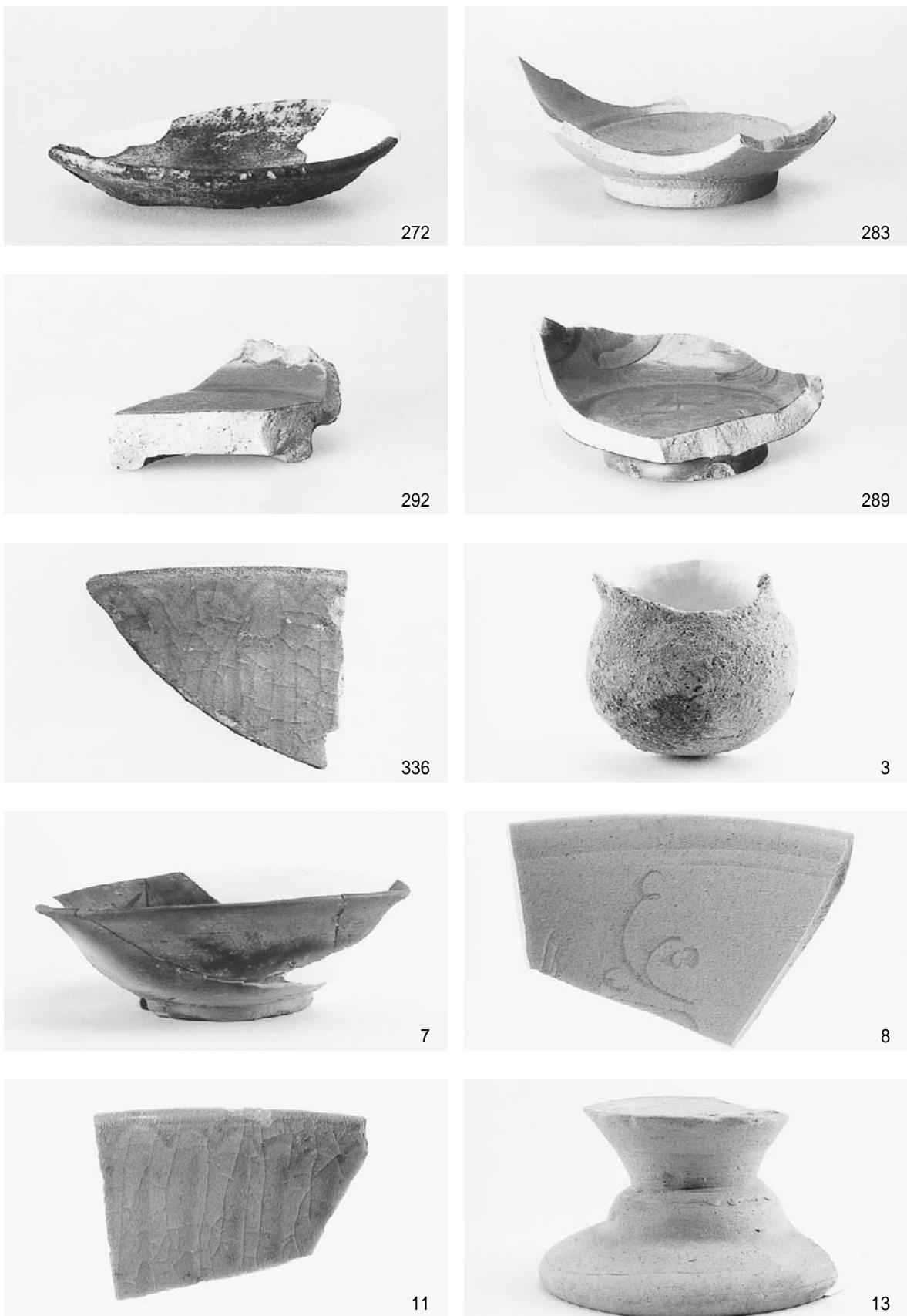


同上 (内面)

PL-48

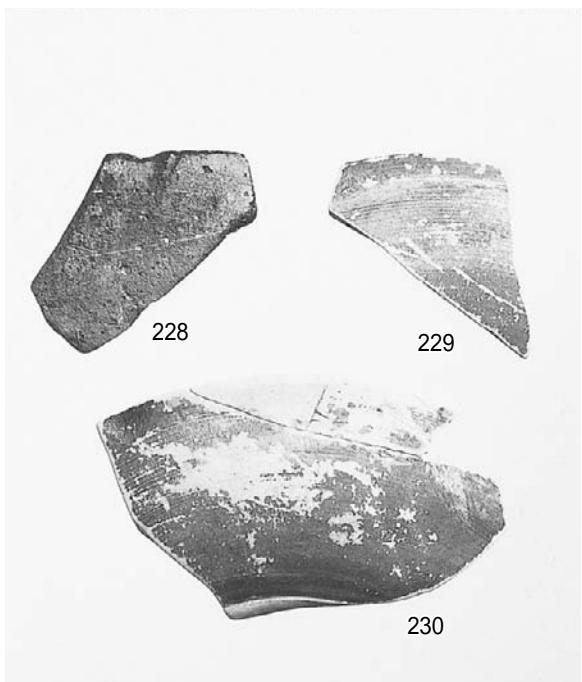


1・2区 出土遺物（須恵器・瓦器）

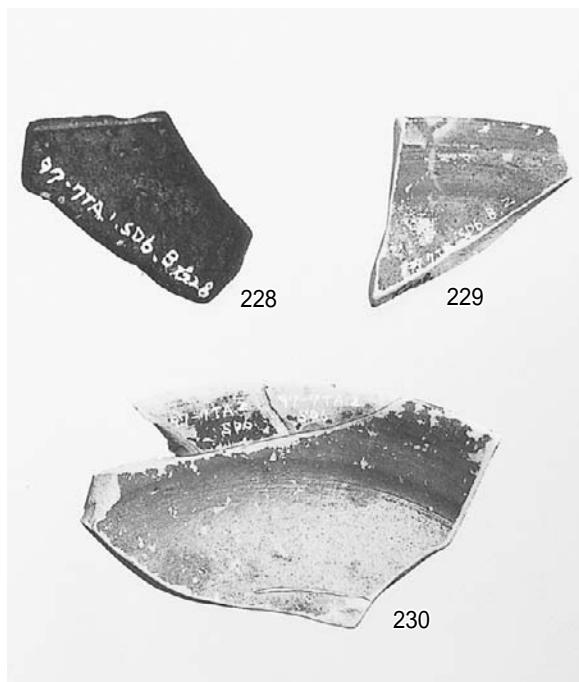


1・2区 出土遺物（瓦器・貿易陶磁器）及び試掘調査出土遺物（3・7・8・11・13）

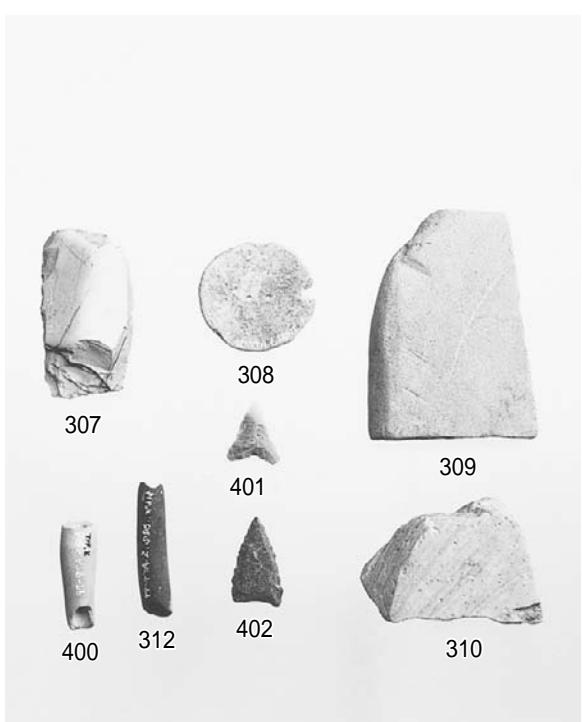
PL-50



1・2区出土（縁袖陶器）外面



1・2区出土（縁袖陶器）内面



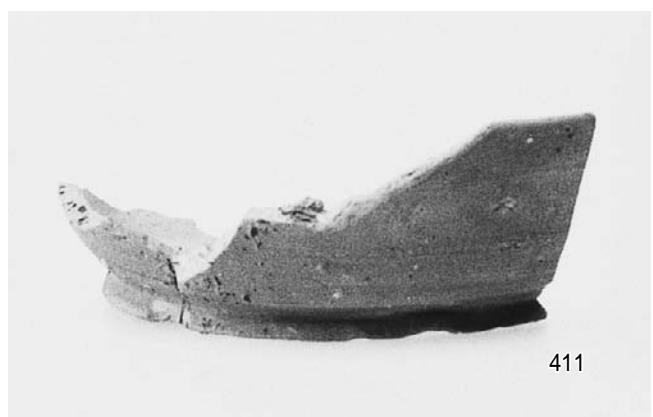
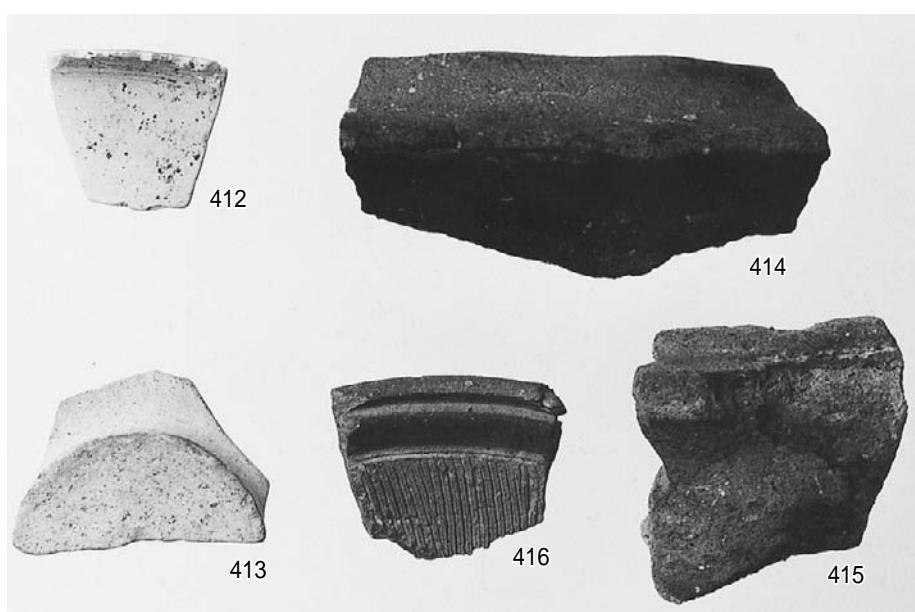
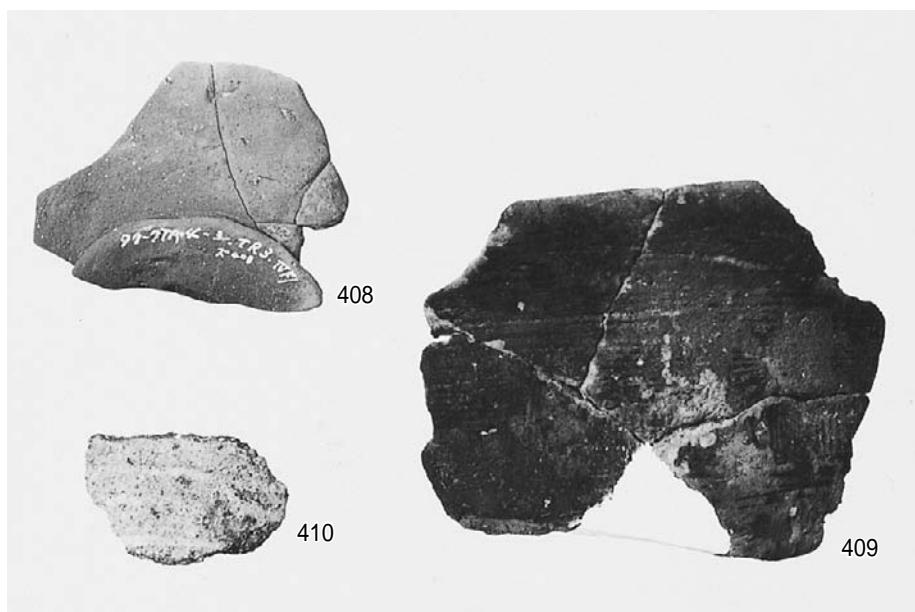
1・2区出土（石器・土錘）



木製卒塔婆 梵字1



木製卒塔婆 梵字2



4区 出土遺物(1)

PL-52



417表



417裏



420



419



424



427

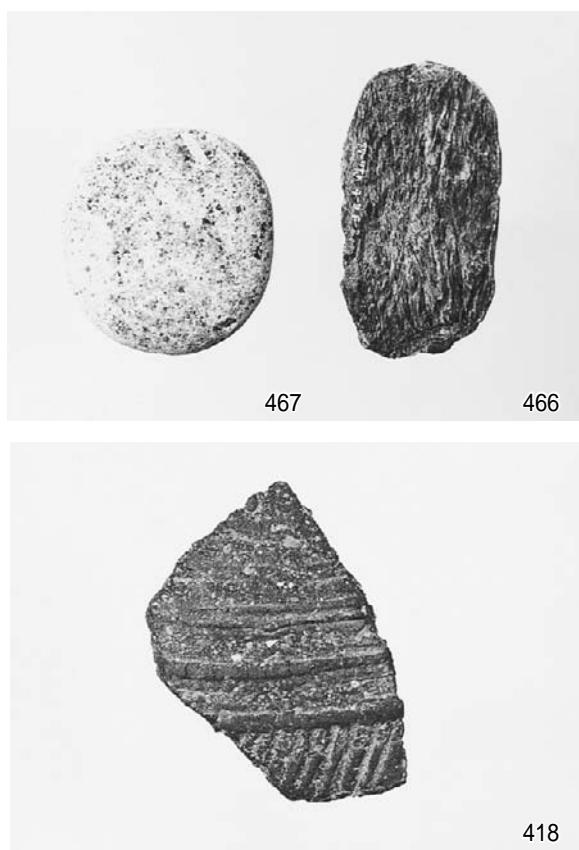
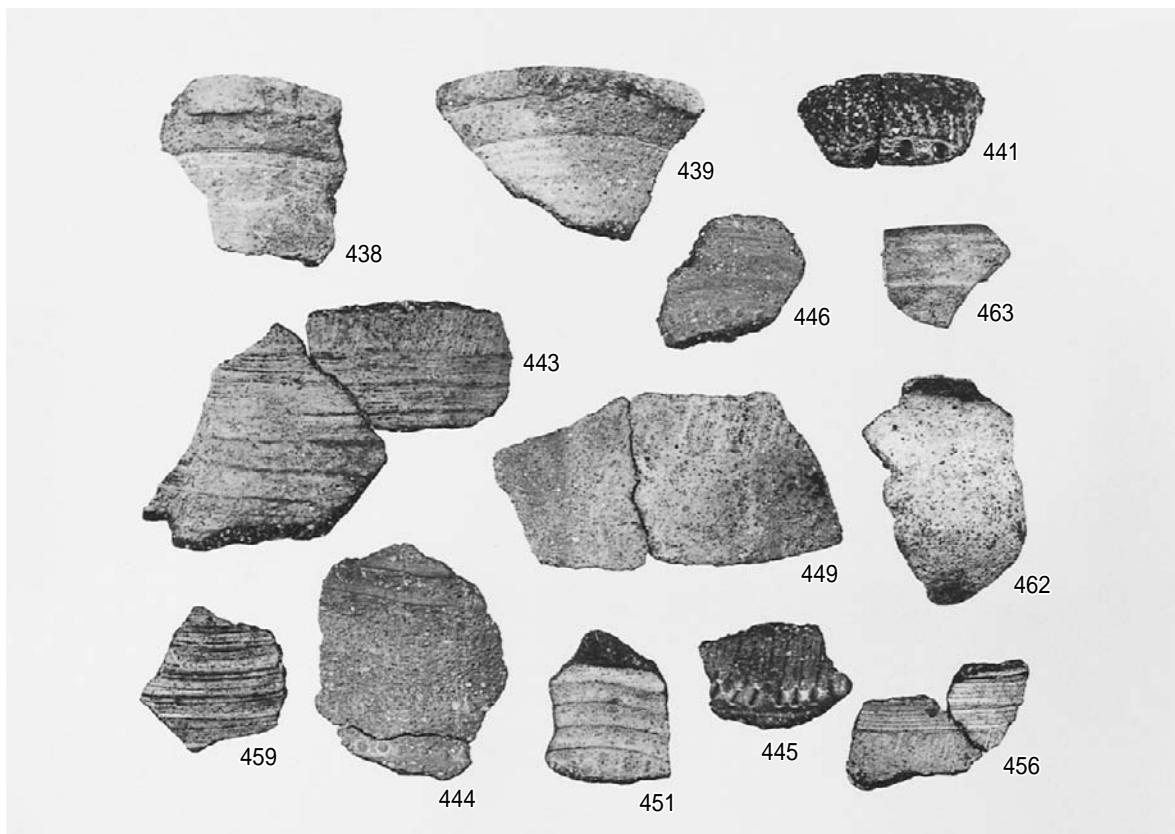


423表



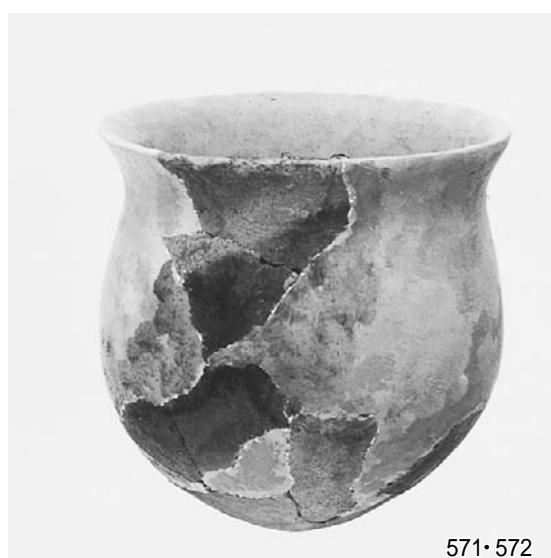
423裏

4区 出土遺物(2)



4区 出土遺物(3)

PL-54



5-1拡張区 及び 5-2区 SR1出土遺物



579



580



581



582



583



584



585



586

5-1東擴張區 SF-1出土遺物 (高杯)

PL-56



587



588



589



590



573



577



592



599

5-1東擴張区 SF-1出土遺物

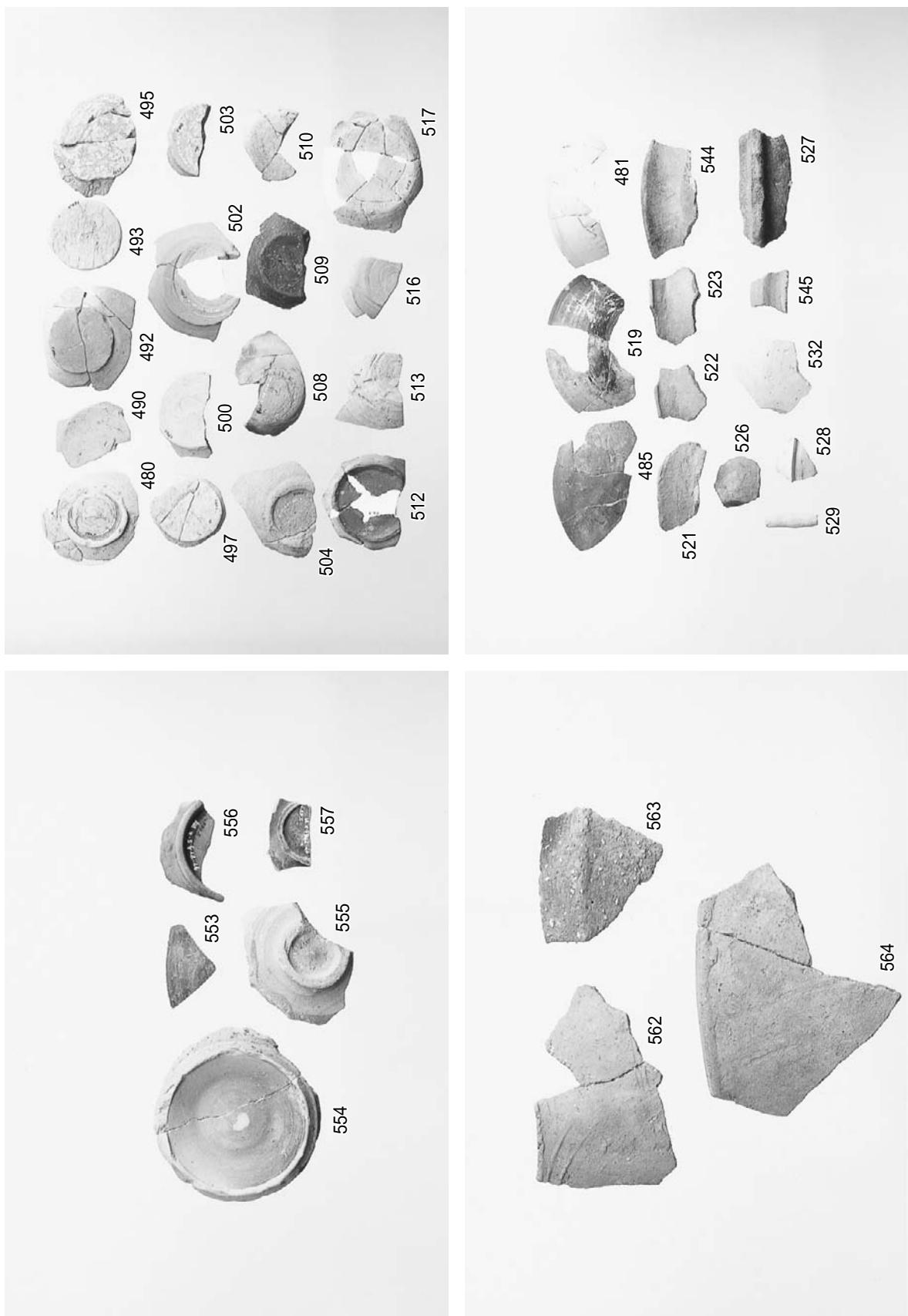


5区 出土遺物(1)

PL-58

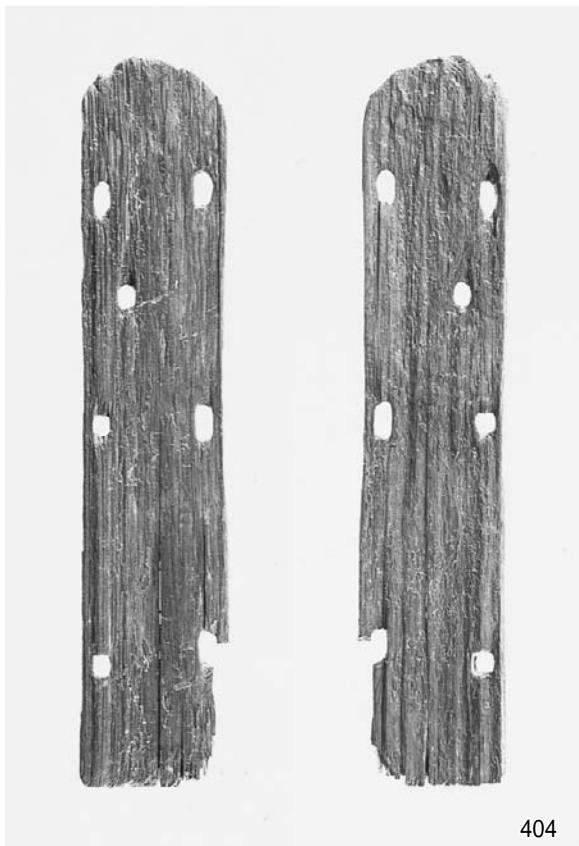


5区 出土遺物(2)

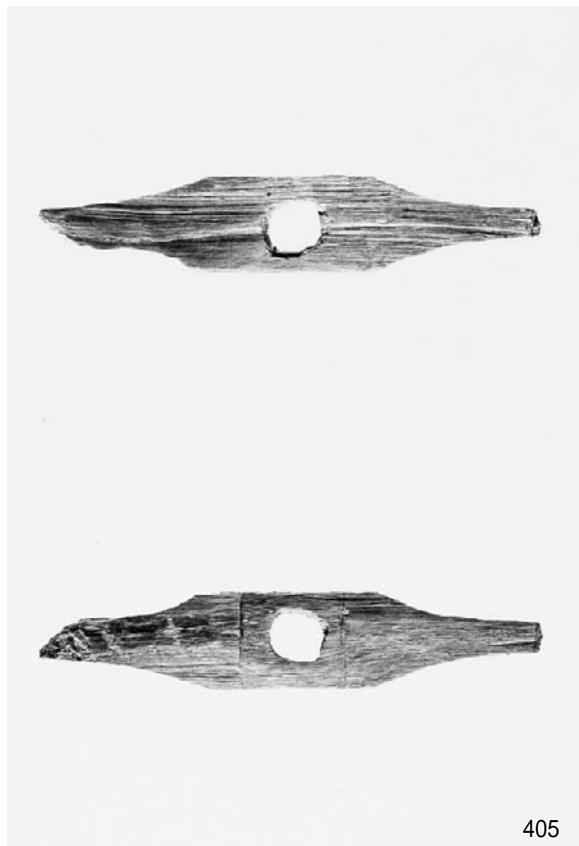


5区 出土遺物(3)

PL-60



404



405



314



315

1・2区出土（木製品）



575



576



574

5区出土遺物（木製品）

報告書抄録

ふりがな	あまざき いせき							
書名	天崎遺跡							
副書名	四国横断自動車道(伊野~須崎間)建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第39集							
編著者名	山本哲也、田坂京子、下村裕、山本雄介、松村信博、久家隆芳							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒780-0006高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL. 0888-64-0671							
発行年月日	西暦 1999年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。	東経 。	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
あまざき いせき 天崎遺跡	〒781-1102 こう ちけんと さし 高知県土佐市 たかおかおり 高岡乙	050074	40171	33° 30 32	133° 25 40	平成9年 5月26日 平成10年 3月26日	(1~5区) 800m ²	四国横断 自動車道 路建設に 伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
天崎遺跡	集落跡 祭祀	弥生 古墳 古代 中世	竪穴住居 溝 土坑	銅矛 土師器 須恵器 瓦器 備前焼 貿易陶磁器 木製品	古墳前期祭祀 遺構 中世溝 銅矛埋納土坑			

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第39集

天崎遺跡

四国横断自動車道(伊野~須崎間)建設に伴う発掘調査報告書

1999年3月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel 0888-64-0671

印刷 川北印刷株式会社